

# 千年前戦争アイギス 占星術師の昔話

青き男

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

星を詠む者ソラス。

千年前の千年戦争を知る者であり。英雄王の仲間、英傑と謳われた生きる伝説だ。

星が良く見える日、俺は彼女の部屋に訪れ。英雄王、その生涯を問う。

すると、ああついに聞いちやいますか。と、彼女は困りながらそう言う。

艶やかな唇を開き、俺に告げた。

面白くない話ですよ。

こくりと頷くと、彼女は語りだす。

偉大なる英雄王、その生涯。

絶望が広がりつつあった世界。英雄王に出会う英傑達。

地獄から消えていく国々、魔の前に嘆く弱き人々を背負い、立ち上がった希望、反撃の王国。

魔王の消滅に失敗し、来るべき未来を見据え、戦い続けた。

物質界の英雄王の話。

輝かしき光の虚栄に隠され、歴史に消された。

英雄王に、なるしかなかった男の苦悩の話。

それに付き添い続けた、占星術師の話。

# 目次

エピソード1 プロローグ | 1

エピソード2 始まりの英傑ソラス

7

エピソード2-2 始まりの英傑ソラス

18

エピソード2-3 始まりの英傑ソラス

40

エピソード3 二年後

52

エピソード4 紫竜駆る英傑アトナテス

59

エピソード5 撤退戦

77

エピソード6 大地を紡ぎし英傑サナラ

エピソード7 それは後の王国 |

104

エピソード8 謁見 |

150

エピソード9 見えない悪意と恐れ

165

E10 影を受け継ぐ英傑の蕾ユージェ

ン | 178

E10-2 影を受け継ぐ英傑の蕾ユ

ージェン | 199

E10-3 影を受け継ぐ英傑の蕾ユ

ージェン | 213

E10-4 影を受け継ぐ英傑の蕾ユ

ージェン | 236





## エピソード1 プロローグ

先日のアトナテスの助言に従い。

俺は訳知り顔の占星術師こと、ソラスの部屋に訪れた。

すると、待っていましたとでも言わんばかりに、彼女はソファに腰掛け。湯気の立つ紅茶を啜っていた。

すで見知った仲で、立場は俺の方が上であるかもしれないが。

彼女は、俺の先祖たる英雄王と共に。物質界をガリウスから守った、偉大なる先人だ。礼儀は払うべきだ。

ソラスに催促されてから、俺はソファに座り。目の前にある用意されていた紅茶に、俺も一口啜る。

星の導きで、来ることが分かったのか。

俺がそう尋ねると、ソラスはええとだけ返し。

「何の用事ですか、王子君」

にこりと微笑む彼女に、俺は単刀直入に聞く。

英雄王、その生涯。全てを知りたい、と。

「全て、ですか。千年戦争の魔王との戦い辺りの、わくわくでドキドキな、ハチャメチャ物語ではなく？」

全てと、俺は改めて答える。

英雄王。

魔物が溢れかえり、誰もが諦観の中で、絶望が支配した世界。

その世界で立ち上がり、剣を取り。女神アイギスの加護を受け、魔王を討ち滅ぼした存在。

ということとは誰もが知っている、かつてあった歴史だ。物質界ならどこへ行っても、多くの者が知っている。

俺も、書庫にある英雄王の物語は何度も、何度も擦り切れる程読んだ。

だが、昔から疑問があった。

英雄王の物語は、大まかにはこうだ。

悪い魔王が世界を支配しようとした。

そこに神が選んだ英雄が、国を立ち上げ、英傑という仲間達と一緒に魔王を倒した。

そして女神様が魔王を封印し、世界に平和が訪れ。

英雄王は立派な王様として、生涯を終えました。

めでたしめでたし。



そう、物語は決まって、千年戦争終結後となると、途端に話の内容が薄くなる。

英雄王の晩節の話に至っては、全く残されていないのだ。

魔王討伐までの話が英傑達の活躍含めて、色濃く残されているにも関わらずだ。

いつか聞こう、いつか聞こうを繰り返していく内に随分と時間が経ち。英傑の塔、最近事実が発覚した悪霊もとい、王国大迷宮の事実。そして管理者の少女との交流の後、再度読み直した英雄王の物語。最後に、アトナテスの、俺と皇帝に持つ。英雄王になく、俺達にある力という話を聞き。

今一度。いや今だからこそ、英雄王の全てを知らなくては、そう思い。

アトナテスが、英雄王の全てを知っていると推した。

ソラスという、生き証人に聞こうとなった訳だ。

んー。と、人差し指を頬に当ててソラスは考えている。

今までソラスと、英雄王を話題として話をしたことは幾度かあったが、その晩節まで聞いたのは初めてだった。

何か話したくなくないことでも、あるのだろうか。日を改めるべきかと顎を少し落とす。

「……仕方ないですね。王子君の頼みですから」

ソラスはそう言い、また一口紅茶を啜る。

そして。

「面白くない、話ですよ」

釘を射す様に、ソラスは言う。

その顔は、普段見せている愉快で、柔らかい顔ではなく。

商人たちが商談の時に見せるような、冷たさに似た物を感じた。

彼女が、このような顔をするとは。余程のことだろうと、俺は改めて姿勢を正した。

「王子君問題です。英雄王。その名は、何というでしょう」

ソラスの問題に、俺は困惑した。

難しいのではない。簡単すぎるのだ。こんな問題は、幼子でも分かる。

アルトリウス。

それが、かの英雄王の名前だ。

俺の名前も、父王もそれに、ある程度あやかった名前をしている。

だが、アルトリウスの名だけは、誰であつても名乗ることは許されていない。

名乗る事すら、恐れ多いとされている程だ。

「いいえ、違います。英雄王の名は、そんな長い名前をしていません」

だが、ソラスは否定した。

馬鹿な。英雄王から続く、千年を否定された気がした俺は、シヨックのあまり、思わ

ず立ち上がりかけるが。

胸に両手を合わせ、祈る様に瞳を閉じるソラスに、俺は静かに腰を下ろし直す。

「王子君いいですか。私は一度だけ。大切に、とても大切に、心を込めて彼。英雄王の真名を告げます」

しんと部屋が静まり、ソラスと俺の鼓動の音だけが、部屋を満たす。

だが、ソラスが再び口を開いた時、全ての音が英雄王の真名に音を譲った。

「アルト」

ソラスが言ったことと言えば、ただの名だ。

だが、その名は、俺が一人受け止めるには、余りにも重すぎた。

その名を持つ、大きなナニかに、俺は気圧され。

千年の重み。万感の思いとはかく言うのかと、俺に確信させた。

「……では、お話ししましょう。英雄王がまだ、無名の剣士で、小さな一団を率いていた頃の話。星を詠む者ソラスとの出会い。英傑達の出会い。魔王との決戦。続く再生の日々、そして……晩節を」

これは、英雄王の死までの物語。

そして同時に、ソラスが見てきた千年前の千年戦争の話。

ソラスが付き添ってきた、一人の男の話。



## エピソード2 始まりの英傑ソラス

怪しく光る、不吉な星が見えた。

そんな夜。

「嗚呼、なんとということ。大いなる魔の星が世界に」

お母様が嘆き、私に抱き着く。

嗅ぎ慣れた安心する香りに。私はどうしたのお母様と、腕を背に回して尋ねる。するとお母様がギョツと抱き締め返す。普段よりも少し痛い。けど怖くはない。大切にされている、愛されている。そんな気持ちに伝わっているから。

「ソラス。よくお聞き」

はい。私はそう頷くと、お母様は、いつになく真剣な顔をしていた。

これは、怖い。何か嫌な予感がする。

「貴方は、私達が受け継いできた星詠みの力で、二つの巨星を導くことになるでしょう。一つは、近くにいます。七度夜を越した朝、巨星に会いに旅立ちなさい」

お母様は、お父様は、それに他の皆は。

どうして、私だけ。

湧いた疑問をお母様に聞いてみるが、お母様は首を振り。

「大丈夫です。貴方を守ってくれるよう、お守りを作りましょう」

答えになっていない、答えを返し。

私は寝かさされる。眠れなかった。

不安が胸の中で、グルグルしている。しているまま、眠る。

翌日、いつも通りの朝、昼、夜が流れた。

だから、私はいつも通り。星を詠む力の鍛練をする。

朝でも、昼でも、夜でも。星は常に天にある。

だから私は、星を見て。天気を読み、少し先を読み。魔術による詠唱をすれば、狙い

定めて星を落とす。

些細なことを含めれば、星詠みが上手くないことはある。

ただ星が奇麗だなー、なんて思いながら見上げることもある。

占星術師としては、私もまだまだだ。

そしてそのまま一日が終わる。

明後日、いつも通りの、朝、昼、夜が流れる。

お母様がお守りを作っている。あれが出来たら、私は何故か、巨星を導く為に、旅立たないといけないらしい。

青やら銀色やら、色々と綺麗な色を使ったお守り。きっと綺麗なお守りが出来るだろうな。

でも、出来なければいいな。そしたら、お母様やお父様達と一緒に居られる。

そう思いながら、また鍛練をして一日が終わり。

明々後日、いつも通りの、朝、昼が流れ。

いつも通りじゃない夜が来た。

ゴロゴロガタガタと、何だか騒がしい音がした。

何か起きただろうか。

眠る前のぼやけた意識の中で、私は音の方へと向かい。

家の中にいる異質な存在に、啞然とした。

デーモン。

物質界とは違う、魔界の住人。

人を襲う悪魔。

「そんなん!? 早すぎる!」

占星術師として、常に落ち着いているお母様が動揺している。

そんなお母様を見て、お父様が決死の表情で、デーモンに素手で立ち向かう。

けど、お父様がデーモンに触れる前に、デーモンが持つ鎌が振り下ろされ、お父様が

二つに分かれる。

赤い。血が広がる。とても嫌な臭いが充満する。

何で。

「ソラス逃げて！」

突き飛ばされた。そう気が付いた次の瞬間。

悲鳴が私の耳に鳴り響き、赤い血がさらに広がり、いくつかは私の頬に辺り。

微かな温もりを持つ血が、ぬるりと肌を舐める。

「……あ、うあ」

死。それが具現化したような存在を前に、私は畏縮していた。

手が足が、動かせない。

逃げなければ死ぬ。そう頭が思っているも、体が言うことを聞かず、震えている。

ギシギシと床を歩く音を立てながら、歩くデーモン。そんな中私はふと、お母様の手に握られている物に気が付く。

作りかけのお守りだ。

青と銀色の、綺麗な。

私は作りかけのお守りに、手を伸ばす。

それを手にして、何か変わるわけでもないのに。



だけど、それは私の物だ。私に残された唯一の。

しかし、その思いを嘲るように、デーモンはお守りを踏みにじった。

「うわああああああ！」

その行動で。私は突き動かされる。

デーモンに挑む、ではなく逃げた。

家の出入り口にデーモンがいるから、逃げ場は窓しかない。

無我夢中で、窓を突き破る。

パリンと音鳴り、割れた窓ガラスがあちこち体が切れて、すごく痛い。

裸足で外を歩く、なんてことを一度もしてなかった。一步一步と足を動かすたびに、

砂利や小石が足裏に刺さり痛い。

とても痛い、全身が痛い、心が痛い。

「だ、誰か！」

助けを求めてみるが、すぐに無駄だと悟らざる負えなかった。

右も左も、私と同じだ。

家屋にデーモンや魔物が侵入し、大人を殺す。

そして、私のように逃げられなかった子供の末路は、大人と同じ死だ。

頭が白くなる。

何で、何で。

数日前までは、数時間前までは、いつもの日々が流れていたのに。どうしてこうなった。

星に問いかけるが、何も答えは返ってこない。私がちゃんと星を見てないからだろう。

とにかく村の外へ。

そうすれば、生き残れる。

誰がそう保証した訳ではないが、私は走り続ける。

助けてくれ、という声が聞こえた。

お母さん、お母さん。という声が聞こえた。

神様、という声が聞こえた。

私は全て、無視した。

私では、無力な私では、彼らを救うことなんてできはしない。

私は何度も躓きそうになりながら、吐き出しそうになりながらも走り続け。

そして、絶望した。

家屋にデーモンが入ってきてる時点で、気が付くべきだった。

とうの昔に、魔物に包囲されていることに。

出入口である門の周囲には、多数の魔物が待ち構えていた。

ギヤツギヤツと声を上げるゴブリンに、残念だったなと言いたげな、下卑た笑みを浮かべるデーモン。

他に逃げ道はない、突破するのは不可能だ。

全身から力が抜け、座り込んでしまう。

「やつ、いやあ……」

近づいてくる魔物達に、私は無様に後ずさりする。

怖い、死にたくない。

涙が止まらない。

デーモンが鎌を振り上げる。

お父様にそうしたように、お母様にそうしたように、私を殺すのか。

私は目をギュツと瞑る。受け入れたのではなく、ただ怖かったからだ。

(もつと色んなことをしたかったな)

占星術師として活躍したり、美味しい物を食べたり、恋したり。

なんてことを考えながら、私は最期を待った。

もう死んだのか。

思いの外、死の瞬間は痛くないのか。

待っても待っても、最後らしい衝撃はやってこない。

肌に纏わりつく気配が、生を実感させる。

恐る恐る目を開け。私は、私が見たその光景を疑った。

少年がいた。髪が黒く、前髪がやや長い。年は私より一つ、二つ上程度。

必要最低限の防具と、俺はここにいると主張するような、目立つ裏地が白の赤いマン

ト

まだ、少年が子供であると証明するかのような。

少年の左手にはやや大きい、無骨な剣を握っている。

だが、少年は大人を軽々と裂くデーモンの鎌に、拮抗していた。

そして、その見た目にどこにしまい込んでいるのかと、不思議に思うほどの、純粹な

力でデーモンを押し返すと。

そのままデーモンの心臓を剣で一突きして、苦悶の声を上げながら、デーモンが塵と  
なった。

突然の来訪者に、魔物達が混乱しているが、すぐに冷静さを取り戻したゴブリン達が、  
少年を襲う。

ゴブリン一体一体の力は、そこまで高くはないが、数が多い。数の利をいかそうと、密

集しながら接近するゴブリン達。

しかし、ゴブリンが少年に触れることはなかった。少年の手に、熱を感じる。魔力を収束していることが、占星術を通して、そこそ魔法を嗜む私には分かった。

そして、少年は手に集められた火のエネルギー、魔法によって生み出された火球を放ち、着弾と同時に起きた爆発によってゴブリン達が、断末魔を上げて崩れ落ちる。

次に動いたのはデーモンで。そのデーモンと、視線が合う。

狙われている。そう気が付き、背筋が凍った気分になったが、実際に凍ったのはデーモンだった。

少年はデーモンの狙いが、私だと気が付くと、水の魔法をデーモンの足元に放ち、着弾した氷柱がデーモンの足の自由を奪う。

そして少年は、剣を振るうと、その剣は飛ぶ斬撃となり、デーモンを切り裂く。

ゴブリンとデーモンを一通り倒した少年の前に、ガチャガチャと音を立てて鎧が出現する。

中身は当然ない。それはリビンググアーマーと呼ばれる魔物で、見た目通り鎧を纏っているだけで、物理的な攻撃には強い。

少年は再び火か、氷の魔法を使うのかと思つたが、少年は剣のツバに手をかざすと、そのまま剣を振るう。

飛ぶ斬撃かと、思ったが明らかに先ほどのモノとは別物の、魔法の力が宿っていた。魔法の力が宿った飛ぶ斬撃は、リビングアーマーの堅い鎧を、軽々と両断し。残された魔物の群れは、少年一人の手により消え去った。夢か現か。

もう死しか待ってないと思っていた私は、そんな気分だった。

少年が近づいてくる。やはり、まだ小さい。私とそう大差ない身長差だった。

しかし、私よりも強い。魔物を前にして、振るえているしかなかった私と違い。少年は魔物とたった一人で戦った。

「大丈夫かい？」

そう、手を伸ばしながら。声をかける少年の声は優しく。

私は継ぎょうに、その手を握ると、涙が出そうになるほど暖かい。

「回復魔法をかけるよ。じつとして」

少年が私に手をかざすと、少年の魔力が私に伝わり。窓ガラスで傷付いた体を治していく。

「俺はアルト。君達を助けに来た」

物魔の切り替えが可能な、斬撃を飛ばす程の剣技を持ちながら、火と氷と治癒の魔術

を扱う使う少年。

後に、物質界の王、英雄王となる。

今は少年。

微笑む、その少年に、私は巨星を見た。

## エピソード2—2 始まりの英傑ソラス

「まだ、魔物がいる。もう少ししたら団員が来るはずだ。安心して休んでてくれ」  
アルト。

そう名乗った彼は、ふたたびザツと走り出すと、そのまま私が逃げてきた方へ。

魔物を一人で倒しきるつもりなのだろうか。私が止める間もなく、私は見送るしかなかった。

そして、彼が言った通り。武装した人々がやってきた。

「生存者か!? 団長の直感はいつもながら恐ろしいな。君大丈夫か」

大人もいれば、子供もいる。男性がいれば女性も、ただ皆一緒だったのは、彼を必死になつて追つたのか息を切らしている。

私は未だに現状把握が出来ていないまま、はい。と返すと。

あれよあれよと保護され、そのまま蹲った。脳裏に何度も、両親が殺されるその瞬間。

お母様の作りかけのお守りを、踏みにじるデーモンの姿が思い浮かべてしまう。

何も、考えたくなかった。空気と一緒に消えてしまいたかった。

数時間後、魔物の振り返り血に濡れた彼が、何人かの生存者を連れて帰ってきた。



見知った顔がいたが、全員目が死んでいた。

私はどんな目をしていているだろうか。きつと、目の周りは腫れているのは間違いない。

「すまない。彼らしか助けることが出来なかった」

「どうしてもつと早く来てくれなかった!？」

理不尽な言葉をぶつけられながらも、怒ることなく項垂れる彼の手は、硬く握られていた。

本当に、心の底から悔しさと、悲しさを。縁もゆかりもない私達に、不思議なまでに、感じてくれていることが何となく分かった。

そう思うと、ただ言う気力がなただけだったかもしれないが、彼を責め立てようなんて私は思わなかった。

ただやり場のない悲しみを、涙として流すことしかできなかった。

そしてその日の内に、犠牲となった者達を一つに纏めると、洗い埋める。

その中に、私の両親を見かけ、私はまたわんわんと泣いた。

同情の視線と、埋める土の重さが。

私は一人になってしまったことを、嫌というほど突き付けた。

「君達に二つ選択肢がある」

翌日、生き残った者達に彼はそう言い。私はずっと縮こまっていたが、顔を上げると。

その彼が言う君達の中に、私も含まれているからだ。

「二つは、中央の強国の難民となること」

世界は今、大体五つの大国と、雑多な小国とで、争ったり争わなかったりしている中ではあるが。

その中で、もっとも平和とされているのが『中央の強国』だ。

そこでは三か月から突如湧いた。魔物達の脅威を重く見た王により、国を問わず。私達のように魔物を襲われ、故郷を失った者を保護しているらしく。そこで、難民として過ごす。最低限の生活しか保証はされないが、強国と呼ばれるだけの軍事力によって、守られるらしい。

今までと同じようにとはいかないが、生きてはいける。らしい。

全部らしいなのは、ここにいる生き残った私達以外は、もう一つの選択をした人達しかいないからだ。

そしてもう一つとは。

「俺達。『赤の団』と一緒にこないか？」

赤の団。その行動理念は一つ。

魔物という脅威に対して、ありとあらゆる人達に、区別なく手を差し伸べ救済する事。それだけだ。私達を助けたのも、魔物に襲われていたからだ。

ただ、それだけだ。

まるで、正義の味方団だ。どんなお人好し団だ。

私以外の生き残った者達は、そんな感想を抱いたのだろうか、生気を失っている顔に付いた目は冷たい。

彼の言う救済には、決して魔物との戦いとは切り離せない。再び戦いに身を投じるのが、皆怖いのだろう。

私も、怖い。

今再び、魔物に囲まれたらきつと、私は何もできない。

また無様に、恐怖で震えたまま。今度こそ、殺されるだけだろう。

けれど私には、真剣に皆救って見せると、語る彼の。その、巨星のような輝きに惹かれた。

怖さはある。戦う術なんて私にはない。

けど、彼に付いていきたい。彼のように、誰かを助けたい。

私は、お母様の遺言でもなく、星が導いたのではなく、私の心のままに叫ぶ。

「付いていきます。私は赤の団になります!」

そう言った私に、彼はこくりと頷く。

「名前は?」

「ソラスです」

「ソラス。今から君は赤の団だ」

そして、その日。私は、赤の団団員ソラスになった。

赤の団に、非戦闘員なるものは存在しない。

魔物は突然湧いて出てくる。魔物は降伏をしない。そして魔物に慈悲はない。

いざという時に、もとはただの主婦だった女性も、剣を持つ。私よりも小さい子供でも、弓を持つ。

そして私は剣を持った。

駄目だった。剣の才は私にはなかった。ぶんぶんと振っただけで、ぜえぜえと荒い息を吐く。ダガーのような小さい短剣を使ってみたが、これでは倒せてせいぜいゴブリン、デーモンを倒すなんて夢のまた夢だ。

そして私は弓を持った。

駄目だった。弓の才は私にはなかった。狙った所に当たらない。何度か矢を放つだ

けで、手がプルプルと震える。

彼、赤の団団長であるアルト君は、弓の才までもあるようで、矢に魔法を纏わせることも、一流の弓手がようやく可能とする、三連射すらもやってのけた。ただ剣の方が圧倒的に強いというだけで、剣を握ってるだけのようだ。

そして、その剣を握り始めたのは、魔物が出現してから。

つまりたつた三か月で、デーモンを屠るだけの剣技を身に着けたということになる。たつた三か月で魔術を覚え、戦う術を身に着けたという。

まさに、天才だ。

……ますます自信を無くす。

剣も弓も使えない私に、他の団員達の目は、冷たくはないが、暗に大丈夫か、と言っている。

私が戦場に出た所で、役に立たないとも、すぐに死ぬとも伝えている。

大丈夫お姉ちゃん、落ち込む私に小さな子供が声をかけてきた。

その背あるのは弓。

そうか、私よりも小さな子供が、その弓で魔物と戦えるのか。

私とは違って。

心が折れそうだ。

朝から晩まで、魔物が出たという村への移動中、その合間の時間全てを使って、私は必死にダガーを振る。

けど、一晩振り続けてみても、上達しているような気配はしない。

私自身が、私の居場所赤の団はここじゃないと言っているみたいだ。

目に涙が浮かぶ。こういつた時、決まってお父様やお母様が、慰めてくれた。

けどもう、そのお父様もお母様もない。

涙が落ちた。悔しかった。悲しかったし、情けなかった。

うじうじしても、泣いても何も変わらないのは分ってるけど、涙が止まらない。

どうしたらいいか、分からなかった。

「どうしたんだい?」

人を安心させるような、魔法でもあるかと思うような声に、私は顔を上げる。

案の定、団長がいた。思えば、私は団長には、泣いた顔しか見られてないように思える。

ぐしぐしと袖で顔を拭ってみるが、涙は止まらなかった。

情けなさや恥ずかしさやらで、膝を抱いて蹲る私の隣に、団長はそつと隣に腰掛ける。

僅か数時間で分かったことだが、赤の団は団長ありきだ。

こと戦闘において、団長と比類する者がなく、団を維持する上での、事務的なことま

で団長一人がほぼ処理して。

赤の団が救助した魔物の被害者を、中央の強国の難民として、受け入れさせる話を取り付けたのも。

団長が王に、直談判もとい殴り込みをかけ、その気概を王が気に入った結果という。団長は多忙で、一番休める時に、休みを取らないといけない立場である。

そんな団長が、新参で無才な私に、気に掛ける暇はないはずだ。

けれども、団長は私の言葉を静かに待っていてくれた。

優しいなあ。あまりにも優しすぎて、やはり涙が落ちる。

だから、落ちる涙に私は心中を乗せる。

「私には剣と弓の才能がありません。そんな私がここにいてもいいんでしょうか？」

「まだ剣を握って二日じゃないか。焦る必要はないんじゃないかな」

微笑む団長を見ると、心がキュツと締め付けられる。

何故か父性を感じさせるその佇まいに甘え。

「でも、私がいたら、きつと戦場では足手まといになります！」

つい、顔を上げて、声を荒げてしまった。

嫌われたらどうか。

そして、足手まといと分かっているならば、さっさと中央の強国に向かえばいいのに。

引き留めてほしいと、身勝手な思いを抱いてしまう。

「……………」

団長は静かに、一人の女性に指差す。

私もそれに釣られて視線を向けると、給仕をしている女性がいた。

その腰にあるのは剣。

「彼女。フリーアというが、剣の腕は他の皆より少し劣る。でも作ってくれるご飯は美味しい」

続いて団長は別の子供に、指を指す。

その子は見覚えがあった。私に声をかけた子供だ。

名前は……聞いていなかったな。そんな余裕すらなかった。

「あの子。リルは弓を持つているが、的に当たったことは実はないんだ。でも、魔物のせいで両親を亡くしたのに、あの子はよく笑い。皆を気遣ってくれている。とても強い子だ」

あの子も、両親を亡くしたのか。私のように魔物のせいだ。

でも、団長の言った通り。リルは笑みを絶やさず、他の団員と会話をしている。

無茶をしているという感じもなく、周囲もそんなリルを可愛がっている。

ムードメーカーというものだろう。



「ここに居る皆が、剣や弓が上手という訳ではない。全員が戦えるという訳ではない。けど、皆にいい所がある」

誇らしく語る団長に、私は困惑する。

団長は本当に、私より一つ二つ年が上の少年なのだろうか。

仮に私が、一つ二つ年を重ねても、その領域には、何年経つてもたどり着けない気がする。

「ソラス。君も、君に出来る事を見つけて、それをやっていけばいい。大丈夫、俺は決して君を見捨てたりはしない」

微笑み浮かべ立ち去る団長。その後ろ姿を見ながら、また私の心がキュツと締め付けられる。

けど、この心の痛みは決して嫌なものではない。

たぶん、尊敬。だろうか。

この人の役に立ちたい。うん、そんな感情が広がる。

私は空を見上げる。そこには輝く星々が私を見下ろしている。

思えば、空を見たのは数日ぶりだ。両親が死んでから、ずっと下を向いてばかりだった気がする。

スツと流れる星を見て。

「あ」

我ながらとことん呆けた声が出た。

この数日、一体何をしていたんだ、私は。

私は占星術師だ。少し先のこと分かるし、やろうと思えば魔物に星を落とせる。

赤の団には、私のような占星術師は他にいない。

私には、私の出来ることがあつたんだ。

私は普段以上に真剣に、全ての神経を注いで星を詠む。

ここがきつと、私の分岐点に違いない。

星よ、どうか私を導いて。

星の流れが変わる。

『巨星、岐路に立つ。右に向かうな。先はない。左へ行け』

いつ、どこで、みたいな詳しいことは分からない。

でも私の声、祈りが星に通じた。

星がそう、私を導く。

巨星が意味する者は、今の私にはそれは一つしかない。

……ところで、お母様が言った巨星はもう一つあるはずだが、それ誰だろうか。

翌日、魔物が出たという村の近くに来た赤の団。

皆、顔に戦闘前による緊張が走っていた。

私も緊張で、頭が白くなりそうだったが、昨日の星の導きは忘れていなかった。

順調な行軍だった赤の団、そこに岐路が待ち構える。

どちらも、目的地には繋がっているとは事前の説明で聞いた。

右は山道で、足場が悪いが近道だ。そして、左は森がある迂回路というだけだ。

ただ、魔物が出た村を助けに行く。その点を考えれば、やはり近道を通るべきだろう。

魔物は待つてくれないのだから。

だが、私は確証していた。

ここが、星の導きで示した岐路に違いないと。

団長が右へ、山道へ行こうとするの見て。

「団長！左へ！左の道から行きましょう！右の道はダメです！」

その声を上げた途端、周囲の視線が刺さる。

突然何言つてんだこいつ。そんな声が聞こえた気がした。

怖い。

何でもない、言つてごかしてしまいたくなる。

「山道で、足場が悪いがそっちの方が近道だ。もたもたしてると、魔物が村を滅ぼして

しまう」

私にそう言った男性、ケリーの言うのはもつともな意見だ。だから最初から右の道へ行こうとしていた。

道を決めた団長は、何も間違えていない、賛同した団員達も間違えていない。

「それとも、何か駄目な理由があるのか？この辺の土地に明るいのか？」  
明るい訳がない、故郷から出たのは魔物が出たあの日が初めてだ。

「私は占星術師です。私には星の導きが聞こえます。星は告げました、岐路を右へ行かず。左へ行け、と。それが理由です」

「……話にならねえな」

占星術は理解を得にくい。お母様がよく言っていた。

そして、事の次第によっては、害に思われ。排される事もあると。

けど、挫ける訳にはいかない。

占星術は、剣を持って、弓を持って駄目。

料理も、ムードメーカーにもなれない私が、私が、赤の団にいられる唯一の武器だ。

ここで引いたら、今度こそ私は無才の、何も役に立たない少女になる。

さっさと行こうぜ、そんな空気が場を支配するが。誰も足を動かさない。

何故なら、団長の足が止まっているからだ。

赤の団の全てを決定する者、それが団長だ。

どれだけ多数が、私に賛同しなくても、団長が私を賛同すれば、それは赤の団の決定になる。

私は、団長の前に立つ。背丈はそう変わらないのに、何故か遥か高く、団長を見上げてるような気分になる。

団長が持つ気迫が、そんな気分させるのだろう。

そして、私は小人。小人らしい小さな声で、でもはつきりと巨人に主張する。

「信じて……ください」

巨人。団長は私を、前髪で隠れている目で、じつと見つめてくる。

優しい目を持つ団長が放つ。無言の圧力に、じわりと涙が零れそうになる。

けど泣かない。

ここで泣いてしまえば、それは卑しい泣き落としだ。

無様に泣いて、信じてなんて叫ぶような占星術師を、誰が信じられるというのか。

堂々としろ、胸を張れ。

私は詐欺師じゃない、占星術師。

占星術師として、役に立って見せるんだ。

永遠と思えるような沈黙。

私は団長を、団長は私を見続け。

やがて、団長の顔が、こくりと頷くように動いた。

「……ソラスを信じよう。皆左の道を行くぞ！」

団長の声に周囲が騒めく。

信じるんですかと、信じられないと声がいくつも上がる。

私も、信じられて嬉しいと思うと同時に、信じられるとは、なんて気持ちが悪かかった。

つい先ほど、占星術を信じられないと否定されたばかりだからだ。

けれども団長は、そんな人たちに呆気らかに言つてのける。

「じゃ、右行つても、変わらない速さでたどり着けばいいんだな。行こう！」

そして団長は走り出す。もはや誰が待つたと言つても遅い。

団長は力が強ければ、足も速いようだ。

私達は必死で走り、団長を追いかける。

どうにもこれ以前から、団長が先を行く。みんな追いかける。たどり着いた時には皆で息を切らす。という図式が出来上がっていたようだ。

ただ、団長は決して最後尾の人が、はぐれない程度の配慮は常にしていた。

道中何事もなく、山道を通った道の予定時間よりも、少々遅れて村に到着した。魔物はいた。

村に侵入しようとした魔物見ると即座に、団長が魔物に剣を振るう、その度に魔物が倒れ伏す。

私達、いけないじゃないのか。そう思う程の激しく、雄々しい戦いぶりだった。けど、それは私が戦わない理由にはならない。

これが私の初陣、剣も弓も私は持たない。

代わりに持つ武器は、占星術だ。

「星よ、我が声に耳を傾けたまえー!」

詠唱と共に、昨夜の内に作っておいた、簡素な杖に魔力を込める。

星天召喚の儀。

時間をかければかける程、本来は威力と攻撃対象が増すが。

今の私では、せいぜい一体に、星を一度振らせるくらいしかできない。

そして、その間私は無防備だ。

標的にしたゴブリンが来る。手に持つ棍棒で、私を殴ろうとしてくる。

殴られた時のイメージをすると、怖い。

頭が白くなっていく。杖に魔力を込めないといけないのに、うまくいかない。

呼吸すらも、うまくできない。ああ魔物だ。両親を殺された時の情景が思い出してしまふ。

怖い、怖い。

「ッー」

思わず、私は両手で頭を庇うが。

棍棒は、私に届かない。

ゴブリンの両足に、いつだかのように氷柱が生えていた。

「うおおおおー」

その氷柱を出した人物、団長はサイクロプス二体を、同時に相手をしながら戦っていた。

二体のサイクロプスが繰り出す、槌の猛攻を寸での所で躲し、あるいは剣で受け流すと、次々と剣でサイクロプスの堅い皮膚を斬り裂いていく。

だと言うのに、私だけでなく周囲の団員達に時折、魔法を飛ばして援護している。傷付いた者がいれば、即座に回復魔法をかけている。

一人で普通の軍隊の何人分の役割を、団長は熟しているのだろうか。思わず、その凄まじさに身震いして、力が抜けてしまう感覚がした。

けど、もう震えるだけなのは嫌。



無力なままにいるのも。

誰かが魔物で傷付くのも。

全部嫌だ。

私だって、戦いたい。

「星よ、その力を見せつけよ！アストロノヴァー！」

私の魔力に呼応して、空から力が下りてくるのを感じる。

それは、地上に近づくとに連れて、加速し、燃える砲丸となり。

ゴブリンの脳天にぶつかると、小さな爆発が起き、断末魔を上げたゴブリンは崩れ落ち、塵となる。

「や、やったー！」

初めて、魔物を。あの魔物を倒した。

そう思うと、達成感と高揚感が私の体を包む。

次だ。私は杖に魔力を込めて、星天召喚の儀を行おうとするが。

「もう大丈夫だ。俺達の勝利だ」

いつの間にやら、魔物を全滅させていたようだ。

返り血で濡れた団長は、勝利宣言していた。

「もう魔物はいないんですか？」

「ああ、いないよ」

魔物がどこから出てきて、何体いるかなんて、すぐに分かるものなのか。

キョロキョロと視線を動かすが、団長の言った通り。

魔物はいなかった。

勝つたという実感は、たかだか魔物一体しか倒せなかった私が嘔みしめるには、まだ

早い気がするが。

高ぶる気持ちはずっと、体に残り続けた。

魔物に襲われた村は、想像以上に被害は少なかったようだ。

私のように、気が付いた時には何から何まで手遅れではなく、ほとんどの住人は村の教会に避難して。

村に駐屯していた兵士と、幾人かの大人達が奮戦し、命を賭して、魔物を食い止めていたらしい。

殴殺されたのか、痣だらけの死体。体半ば食われ絶命した死体、斬り裂かれた死体。

団長は、見るも無残な遺体を前に、悲しみの表情を浮かべていた。

助けることが出来なかった。

半開きのままだった兵士の目を、閉じさせながら団長はそう言う。

村の被害は、軽微と言っている。一応赤の団の後詰めとして、中央の強国軍がいて、彼らも村を守る為に移動していたが、私達が間に合わなかったら、今よりもっと酷い惨状の村と対面していたことだろう。

団長は黙祷し、魔物によって失われた命、一人一人に対して、慈しみをもって洗い。村の住人達と共に、埋葬していく。

私もそれに手伝っていると。

「山道を通っていれば、もっと被害が少なくできたのでは。団長」

「こいつが余計なことを言わなければ、彼らは生きていたかもしれないぞー！」  
ケリーを始め、幾人からそんな声が聞こえ。同時に、周囲の村人から、特にこの戦いによって犠牲になった者の親族から、憎悪に似た視線が突き刺さる。途端に、手に持つスコップの土の重さが増した気がした。

けど、私には今それらを気にする余裕はなかった。

土の重さが私に訴える。この人達の死は、私が起こした行動の結果と。

私は、私が赤の団に居続ける為に、占星術を使い。団長に進言した。

そして、進言を受け入れた団長の選択によって、もし右の山道へ行つた場合、助かったかもしれない人達を。

私が、見捨てたのか。

「お前のせいだ」

そんな声が、地中から聞こえた気がした。

氷のように冷たい手で、足首を掴まれ、引きずりこまれそうになり。

先ほど見た死体達の目が見開かれ、視線が合う。

幻覚であり、幻聴だ。

気にはしてはいけない。気にしたら、もう二度と私は口が開かない。

何一つ、言葉を話すことが出来ない。

確信すら抱く、棘だらけの罪悪感が心に深く突き刺さる。

「止めろ」

けれどその声に、私は再び救われる。

「ソラスを信じたのは俺だ。進路を決めたのも俺だ。責任があるのならば、それは俺

だ。彼女に非はない」

悪くない。そう言われただけで、罪悪感が残るものの、棘は幾分か丸くなる。

見捨てはしないといい、それを実現し続ける団長に、崇拜にも似た感情が、私に沸き

上がるのを自覚した。

心がトクンと、音を鳴らした。

この時から、私の忠心は赤の団ではなく、団長。

やがて英雄王になる男にのみ、忠誠を誓い続けることになったと思います。  
その男の死後、そして千年後の巨星を見出すまで。

## エピソード2-3 始まりの英傑ソラス

後詰めである中央の強国が村に到着するまで、赤の団は村に留まることになった。

団長はもう魔物が出ないと言ったが、後詰めに村を託すまでが、今回の目的らしい。私達のすぐ後ろを行軍中の強国軍は、予定通りなら日没までには到着ようだったが、日没になっても来なかった。

そして、そのまま二日、私達は村に滞在することになった。

その二日間私は、はつきり言って浮いていた。

団長が私を庇ってくれたことで、表立って非難を上げる声がなくなったが。

だからといって、私と私の占星術の信用が回復する訳でない。

そして、私自身。もう開き直って。

団長のように堂々として、それでいて、さりげなく団長を占星術を使い助ける。

そんなクールなキャラで、赤の団で生きていくことにした。

占星術は私の武器。私ができる事。それを心の支えにして。

まあ結局。どれだけ気丈にしても、夜な夜な寂しくて一人、蹲ってばかりいたが。

団長は、私の気持ちを察してか、よく気にかけてくれていた。

村の戦闘が終わって二日経った夜。

私と団長は、星を見上げていた。

どういった経緯かと言えば、ただ単に団長に、星を見ないかと誘われたからだ。

年若き男女が、二人で静かに星を眺めるなんて、なんとロマンチックと考えはしたが、不思議とそんな雰囲気にはならなかった。

「占星術というのはどういったものなんだ」

あ、これは説教か何かか。恐る恐る私は、私を知る占星術の知識を全て伝えてみる。

団長は星を眺めたまま、こくこくと頷いて聞いてくれた。

けど、理解してくれただろうかと、不安になる。

先を知らさせることは返って、不興を招くとお母様が言っていた。

「あの星を繋げると蟹みたいに見えるな」

「聞いていたんですか!？」

けど、子供のように。

いや、実際私も団長も、子供と言われるような年齢であるけど。

団長から、そんな言葉が返ってくると思わず、おいおいと突っ込みたくなる。

「ああ聞いていたよ。先を読み、星を落とすか凄いなあ」

そう言って褒めてくれた団長は空を見続ける。

私の話を聞き、星を読んでいる。というようには見えない。

本当にただ、星を眺めている。その横顔は、数日で嫌という程理解した団長の力と比較すると、なんだか、とても無邪気だ。

こんな一面もあるんだと、素直に思ってしまった。

「どうして、あの時私を信用してくれたのですか」

ポツリと零した私の言葉に、団長は星を見るのを止めて、私をじつと見る。

その目は止めてほしい。何だかむず痒くなる。

「君が嘘をついているようには、見えなかったからさ」

「それだけですか？」

こくりと団長は頷く。

目を見て、嘘をついてないから信用する。

それだけで、人を信用出来るんで。

「……お人好しですね、団長は」

「よく言われる。最初に団にいた人達は、それが原因で離れてしまったけどな」

そして、団長は赤の団が生まれる経緯を語りだした。

団長も、私と同じだった。

三ヶ月前に湧いた魔物に、両親を殺されたようだ。



嘆き、悲しみ、怒りのままに父が持っていた剣を振るい。

魔物を倒し続け、自分と同じ悲しみを生み出さないように、魔物に襲われた地を知ると、そこへ向かい戦った。

そんな日々を一月していると、団長に近づいて来る者達がいた。

団長が魔物を助け続けたことを聞きつけ、協力をしようとした賛同者、ではない。

その時から、魔物と一人で戦い、勝利する。そんな、団長の持つ力を利用して、自らの益にしようとした人達だ。

一人で戦うよりも、団として活動した方がより多く、人を助けられる。

そんな言葉から始まり、なるほどと団長が思い発足したのが、赤の団だ。

赤の団。当初は、魔物に襲われた村々や都市を助け、団長の許可なく、人助け料なるものを。

まあ、はつきり言って一方的な用心棒代を、せびろうとした人々がいたが。

団長の足は速い。

彼らが、人々に金品を受け取る話が決着する前に、団長は数日分のパンと水のみ貰い受ける。

さつさと次の地へ動き始めるので、そんなことしてる暇がない。

団長がそんなことを繰り返していると、利用しようとした人達は、団長を切り捨てよ

うとした。

人を助けるなら、中央の強国の王の協力を得た方がいい。

無論。いかに目的が崇高でも、血筋も実績もない人が、王に謁見など叶う訳がない。

団長を王の元へ向かわせ、無駄死にさせるつもりだったのだろう。

だが、そうはならなかった。

団長は単身で、誰一人死傷者を出さず、王の前へ立ち。

語る言葉の熱意で、強国の王の信を得た。

こうして、赤の団は中央の強国の後ろ盾を得て。

団長と同じく、魔物から人々を助ける。そんな志を同じくする者達が、集う場になった。

同時に、団長を利用とした者は去った。

彼等は悟ったのだ、団長が手に負える人物ではないと。

それからというもの、団長としては魔物から人を助けるを、変わらず実行してるようだが。

本当の意味での団長の賛同者が増え、団長率いる赤の団の力が広まるにつれて。

人と戦っているわけでもないのに、傭兵団が同業者潰しに来たり。

小国が勢いがある団長に目をつけ、赤の団を取り込もうと、拉致しようとしたみたい

だが。

団長は全て返り討ちにし。

傭兵団が魔物に襲われていると聞けば、襲われたことを気にせず助け。

拉致しようとした小国の、僻地にある村が。魔物に襲われていると聞けば、彼らを手助けに行った。

魔物から人々を救済し続け、ふと魔物の気配を感じた団長は、私の故郷へとたどり着いた。

それが、私が赤の団に合流するまでの経緯だった。

「凄いですね」

「そうかな」

彼は嬉しそうに微笑むが、スツと険しい表情に変わり。

団長の父が持っていたという、形見の剣を握り締めていた。

「でも、魔物に襲われるなんてことは、あっちゃいけないんだ。あれは……人の死に方じゃない」

団長の言葉に、もう幾度目かになる光景が脳裏に蘇ってしまう。

まだ、しばらく。あの光景に苦しめられるだろうな。

そう思ったが、震えだしそうになった肩に、ポンと温かい手が置かれた。

途端に震えが止まる。

「ソラス。これからも君の力を頼りにさせてもらおう」

そう言った団長に、私は。

「ええ！占星術師のソラスに、ドドンとお任せください！」

なんて、気の利いた返事何て出来ず。

ただ、小さく、いつの間にもやら俯いたまま。

「……はい」

としか答える事が出来なかった。

「蟹の星が言っていた。明日はよく晴れそうだ」

団長はそう言いながら去っていく。

星から明日の天気を読んでみる。

快晴とでた。まっさかー。

村の戦いから三日目の朝、快晴。ようやく後詰めの中央の強国軍は来た。

殺気だっていたので、団長が彼らの前に出て、あれこれと説明して。

そして村の現状と、赤の団を見て、彼らは驚きの声上がる。

何かあったのだろうか。

「村の被害はこれだけか？」

「何があつたんですか？」

団長がそう尋ねると、軍を率いていた人が言う。

強国軍は、例の岐路を右の山道を通る道を選び行軍した。けれども、待ち受けていたのは魔物だった。

強国軍はこの時点で、赤の団は全滅した物だと思つていたらしい。

魔物の撃退に成功したが、山道を通つた先にあつたのは、魔物のせいか土砂崩れで崩壊した道だ。

撤去することも出来るが、そんなことしている内に村が滅びる。

急いで岐路まで戻るの一日、そして今度は私達を通つた道を通り、万が一魔物によつて村が占領されていた場合。

夜間での戦闘を避ける為に、村付近で待機して一日。そして、戦闘準備を終え、さあ戦いだつて所で、団長を見たという。

話が進むにつれて、私に視線が集まってくるのが分かる。

これは疑いでも、怒りでもない、驚きだ。

「どうして、山道を通らなかつたのだ、赤の団よ」

「赤の団の占星術師ソラスの、星の導きの賜物です。彼女のおかげで、村の者達を助け

ることが出来ました」

団長の紹介にされ、団員達だけでなく、軍の人達からも視線が集まる。

これは、照れちやいますね。

頬が少しずつ、上がっていくのが自覚できてしまう。

いけないわソラス。私はクールキャラで生きていくと、決めたじゃない。

頬の力を全力で動かし、口を閉ざしてみるが。

「素晴らしいなソラス殿。貴方の占星術で、これだけの人々を助けることが出来た！

我々も改めて礼を言いたい」

その声は大きく、村中に響いた。

すると、その声を聴いた村人達も、昨日のあれこれを忘れて巻き込んだの、てんやわんやだ。

強国軍が、せめてものと、持ち込んでいた食糧が振る舞われ、酒宴が開かれた。

勝利と、犠牲者を引きずらない為の、強国軍の配慮だっただろう。

主役は私だ。

酒はまだ早いから、色々な料理を味わいながら、占星術の簡単な講義をしたりした。

案の定、理解はされてない。けど、私は私なりに、持つ力を使い。根拠があつて、団長に進言したということは理解してもらえ。

考えなしに、酷いことを言っただけで悪かった。そうケリーは謝罪した。

そして、ついでにケリーと少し会話をしていると、彼も団長と同じと分かる。

結局の所、彼も人を助けたいだけだった、一人でも多く魔物の手から。

そう思うと、数日燻り続けた嫌な感情も、途端に霧散していく。

こうなったらもう、自然と私も赤の団に溶け込んでいく。

「恋占いとかも出来ますよー」

そう言ってみたら、女性陣に囲まれ、それはもう大変だった。

団長は強いとは言え、戦地にいる以上死と隣り合わせであり。

男女の距離が近くなると、やれ恋だの、愛だのには色々と尽きないらしい。

特に団長は、まあその。人気だった。

色々と、はつきりさっぱりと言わないように気をつけながら、言っていると。

赤裸々な話がどんどん飛び交い、聞いてる私の方が赤くなってしまう。

何にせよ、結果だけで言えば、星の導きに従い進むことは正解だった。

今回の件で私は、赤の団員ソラスから。

赤の団占星術師ソラスとしての立脚地を得た。

けど、今回の件は団長には、不満足だった。

話疲れて、夜風に当たっていると。周囲から離れた位置。

団長と、強国軍の人との会話を私は聞いた。

「そちらにも、魔物に襲われ犠牲者が出たのでしょうか。村の安全が確保できたのなら、私達は引き返して、合流しておくべきでした。そうすればそちらに、犠牲者が出ることはなかったかもしれません」

「いいや団長よ。それでは私達の面子が立たん。私達は強国の軍隊だ。人との戦いであれ、魔物との戦いであれ、戦う以上は死は避けられん。今回の件もそうだ。占星術師の娘の力で、最善の結果は出せた。それで満足しておくべきだ」

「しかしー」

「あまり背負い過ぎるな団長。そのままではいつか押しつぶされ、潰れるぞ」

「……………」

どうやら団長は可能ならば、村からの犠牲者をなくしたかった。

後詰めである強国軍の犠牲すらも、なくしたかった。

団長には決して、最高の結果ではなく、最善の結果だった。

団員達は、誰もがこれで良かったと酒宴を楽しんでいるが。

団長ただ一人は、さらに上を目指していた。

「もつと、強くならないと」

手を強く握りしめ、誓うように。



今でも、十分強く。団員達が信頼を寄せる団長が、こんなことを言うのだ。なら、今回の結果に、私は慢心している場合ではない。もつと強くならなくちや。

誰よりも強いあの人は、誰よりも優しく。

何もかも背負おうとしました。

それはやがて物質界を、そこに住まう人々を全てを、あの人は背負った。

弱みをほとんど見せずに。

ただ一人で背負うには大きすぎる物を背負ったまま、立ち続け。

未来の為に戦い続けました。

## エピソード3 二年後

私が赤の団に入ってから、早くも二年は経ちました。

近頃の赤の団の評判はそれはもう、凄まじいの一言です。

北へ南へ、東へ西へ。

各地を転々としながら、魔物の討伐を繰り返し、勝利を重ねていく赤の団は、様々な場所に知れ渡り。

兵糧やらの補給に立ち寄った、中央の強国の街で。私達の為に、歓迎の宴がされたりすることもありました。

それを率いる団長の強さもまた、二年前よりも研鑽され、各地に広まりました。結果。

「やあやあ我こそは、最強の剣士を目指す——」

といった、団長との腕試しを望む者なんかも出たりしました。

断るかなと思いましたが、団長は戦い自体は、結構好んでいるようで。挑戦にはほとんど断りませんでした。

一部の人達は団長と戦い、団長の考えに賛同した人は、赤の団にそのまま加入する人

も、いたりしました。

男女比で言うのと、何故か女性の方が多いの、少し気になりますが。

赤の団は、規模を拡大していきます。そして、どんどん魔物に困ってる人達を助けに、手を伸ばしました。

さて、私はと言うと。

戦闘面において、三体まで。複数の魔物に、星を当てることが出来るようになり。

時折、団長の相談を受け、占星術を使い。道を示したりしました。

でも、原則団長は相も変わらず一人で決めて、一人で走ることが多かったです。

団長はどうにも、戦闘以外ではここぞ。という時しか、占星術は頼りにしないようにしているみたいです。

もつと、頼ってくれてもいいんですよとは、少し愚痴を零してみたが。団長はこくりと頷くだけで、あれこれとは明言してくれません。でも、団長の判断力と決断力は、星の導きがなくとも信頼できる物でしたし、口出ししなくても、それはそれで良かったかもしれません。

まあそうなると、私も手持ち無沙汰になってしまうので。

それなら団長の負担を軽くしようと、団の事務処理のお手伝いしていると。占星術の力もあって、数少ない団長に相談される存在。副官とか、副団長みたいな、役職らし

い役職はありませんが。団長の隣に私がいても、それを特に不思議に思われない存在にはなりました。

ちよつとは、優越感を感じます。でも、慢心はしてませんとも。

「ソラス」

「ひゃあい!?!」

あれこれ、考えてる内に団長に、声をかけられて変な声が出ちやいました。

団長はそんな私に、優しく微笑むだけだから、何だか余計に恥ずかしい。

二年の歳月を経て、出会った頃の団長と同じくらいの年齢になりましたが。

団長が持つその大人の余裕は、私にはまだ持てそうにないです。

「少し付き合ってくれないか」

そう言つて、団長は簡素な椅子と机と、天幕があるだけの執務室を抜け出し。

私はその後ろをついていく。

「団長!見てください!」

弓を射る鍛練をしている少女は、見事的の真ん中に矢を当てる。それを団長は凄く凄いと褒めちぎる。

「団長!一勝負どうですか!?!」

賽を持った兵士に、団長は腰掛けその相手をして、一度とならず二度、三度と相手を

してお互い笑顔のまま別れ。

「早いー早いー！」

荷車に乗った団員の子供の為に、団長自ら引き、あちらこちらと走り回る。

団長は常に、沈黙の時は知略を巡らせている。みたいな噂話を団員達からよく聞きますが、その実団長は結構お茶目だ。

雪が降り積もったという理由だけで、雪合戦を始めたり。

どこかへいなくなった団長を、私が探して回っていると、子供の団員達と一緒に遊んでいた。

そして、誰かが笑う姿を見て、自分の事のように笑う人だった。

その日は、遠征前の休日。事務を終わらせた団長は、こうして。体を休めることなく、団員達を見て回り。

夜になると、私と団長は星を見上げます。

会話がなくて、沈黙が場を包みますが、決してそれは、苦手な人と一緒にいるときのよくな嫌な沈黙ではなく。

穏やかに頬を撫でる風のような、柔らかな時間が流れていきます。

はっ。

あれ、これは所謂デートなのでは。

休日と分かっていたのだから、もっと小奇麗にしておくべきだったと、今更ながら後悔してしまふ。

さらりと、抜け出して今からでもと思ったが、ポツリと団長は口を開く。

「団員が増えてきた」

「そうですね、二年前よりも」

「どんどん執務の量が増えている。休みなのに、ソラスには何度も手伝ってもらって、すまないと思っている」

「それ、毎日夜更かしして、執務室に籠っている人が、言っているセリフじゃありませんよ。前にも言いましたけど、もっと私を頼りにしてくれたって、いいんですからね」

「とは言っても、俺がやらなくてはならないものもあるからな」

ポリポリと頭を掻きながら、団長は困ったように言う。

けど、スツと真剣な表情に切り替わり、再び。

「団員が増えてきた」

そう言い、私は頷く。

「だが、力不足を感じる。この前の戦いでも死者が出てしまった」

団長が飛び出して、戦うという図式は、二年前から変わりません。

しかし、赤の団が規模を拡大するにつれ、それに比例するかのよう。日々脅威を増

す魔物の軍然に。

圧倒的な強さを持つ団長は無事でも、赤の団に死傷者が出始めました。

団長は常に、団員を見てくれています。並みのヒーラーでは治しきれない傷も、団長の手ならば瞬時に回復できます。

即死さえしなければ、治癒の魔法の力で、人は再び立ち上がることが出来ます。それこそ、文字通り足を失っても。

でも、戦いをしていっていると、どれだけ気を付けても、頑張っても。

死は起きます。気を付けて頑張れば、死なないなら皆そうしています。

私が赤の団に入ってから、二年経ちました。

その二年で何人も、その命を戦場で魔物の手により、散らされました。

魔物から人々を助ける、団長が掲げた旗印の下で。

「戦力を増強しないとな」

星々を背に、決意するように語る団長。

絵画の中にいるかのような、姿にしばらく私は見惚れました。

この一月後、赤の団は大幅な戦力増強が実現されました。

英雄王は、彼と出会います。

忠臣にして、猛将。

そしてそれ以前に友。

紫竜を駆る騎士、真なる友に。



## エピソード4 紫竜駆る英傑アトナテス

それは、移動中の出来事だった。

「敵襲う！敵襲うう！」

斥候に出ていた団員の声が、響き渡る。

敵襲は何も初めてではありません。

ただ、敵襲は二つのパターンに分かれています。

敵襲を知らせるのが、団長かそうでないかです。

団長の場合は、襲撃者は魔物です。

斥候としての能力が長けた人物よりも、早く数も正確に、そしてやってくる方角に至るまで。

団長は魔物の位置を、天性の嗅覚が嗅ぎつけるのか、即座に把握して敵襲に備えます。けど、魔物ではなく人の場合は別です。団長の嗅覚は人には働きません。

少なくなってきましたが、盗賊に襲われたり、未だに商売敵と思われる傭兵団。果ては、中央の強国の軍隊と勘違いした。他国からの軍隊と、私達赤の団は戦ったりします。そして、今回声を張り上げたのは団長ではない。

つまりは、人との戦い。

私は、武器である杖をギュツと握り締める。

人との戦いも、多少は慣れ始めましたが、魔物と違って、人に手をかけるかもしれないと思うとまだ、緊張が上回ります。

極力殺さないように、それが赤の団の規則だった。

極力という、曖昧な表現は。

団長とて、ただの夢想家ではなく。

起こりうる事態と、それによる事と次第によっては、団長が責を負い。矢面に立つ。という意味でもありました。

でも、本質としては赤の団は人と戦う集団ではなく、あくまでも魔物と戦う集団である。

それを違えない為の、私達が赤の団であり続ける為の規則でした。

「数は!?!」

団長の声に、伝令の団員は声を張り上げる。

「二人と、一匹です!」

「うわああああ!!」

襲撃者の人数に私も団長も驚いていると、人が吹っ飛んできました。

文字通り、ポーンと投げ飛ばされかのような感じに。

その衝撃に冷静さを取り戻すのに、少し時間を要した後、やって来た襲撃者に杖と共に視線を向ける。

紫を基調とした鎧に、青い斧槍を持つ銀髪的美丈夫。けれど、爛々とした目と口端を、にやりと上げるその顔には。

美しさの前に自信と、寧猛さを感じさせました。

そして、その美丈夫が騎乗する紫竜の竜もまた、美丈夫と同じような目をしながら。

警戒するように周囲を伺う姿は、確かな知性を感じさせました。

美丈夫の目が、団長を捉える。

得物を見つけたと言わんばかりに、口端をさらに上げる。

「お前が噂に聞く赤の団の団長か」

「そうだ。俺が赤の団団長、アルトだ」

団長が名乗りを上げると、美丈夫はクワツと目を見開き、宣言した。

「勝った！」

ん？

「俺の名はアトナテス！」

はい。

「五文字だ!!」

???

私含めて、団員達は美丈夫、基。アトナテスの唐突な勝利宣言と、名前の長さ勝負の意味を探っていました。

団長は、一瞬。滅多に見せない、虚を突かれたような表情を浮かべたものの。

クククという小さな笑い声から始まり、やがて堪え切れなかったように笑い声を上げます。

微笑むことは多いですが、大笑いをする団長を見たのは初めてでした。

「アトナテスよ、負けたままというのには気に入らない。これで勝負をしよう」  
破顔しながら、団長は剣を鞘から引き抜き。

「何だ。分かっているじゃねえか、面白れえ」

アトナテスもまた斧槍を構え。

「行くぞ!」

「応ッ!」

そして、団長とアトナテスの戦いが始まった。

団長は何人もの人から挑戦を叩きつけられ、勝利してきました。

その戦いの内容は、団長は一度、実力を測る為か相手の攻撃を受け。

反撃で一度剣を振っただけなのに、二度斬撃を繰り出すという、理屈を捻じ曲げるような剣技で倒す。

それが、今までの戦い流れでしたが。

今回は団長から、攻勢を仕掛けました。

今までにはない開幕と、続く展開に団員達に衝撃が走りました。

「つぶねー。剣に魔法の力込めてやがるな」

団長の剣をアトナテスは、斧槍で防ぎました。

攻撃されて防ぐのは当然ですが、団長が一騎打ちして一撃目を防いだのは、アトナテスが初めてでした。

「じゃ、今度はこっちだー」

そして、反撃されたのも初めてでした。

団長もまた剣で、アトナテスの斧槍をいなし。

これまでがただの挨拶と言わんばかりに、一気に戦いは激化しました。

アトナテスが騎乗していた紫竜も、戦いに加わりました。

アトナテスと紫竜が繰り出す、斧槍と爪の息の合った連撃を、団長は氷の魔法をまき散らしながら鈍化を誘い。

振り上げるアトナテスの斧槍を、団長は受け止め。即座に斬撃を繰り出します。



何を思ったのか、紫竜から降り、斧槍を地に突き立て咆哮するアトナテス。

「……………」

それを聞き、静かな笑みを浮かべながら、剣を地に突き立てる団長。

大股で二人は間合いに近づくと、拳をグツと構えたまま後ろへ。

じゃんけんで勝敗を決める。そんな訳がない、この二人は、グーしか出す気はない。

「はあああああ!!」

ゴツと鈍い音を立てながら、二人の拳はお互いの顔を同時に打ち。

二人とも衝撃に、よろりと足がおぼつきましたが、すぐにグツと足を地に踏み込み直す。

「はあああああ!!」

またお互いに、拳を相手の顔面に打ちます。

それがお互いの顔が腫れ、口端からだくとくと血を流し合いながらも、相手が倒れるまで続きます。

格闘家のような、技術を研鑽する為の殴り合いではなく。

もはや我慢比べ、漢比べと呼ぶような領域になりました。

殴り合う二人に、暇を持て余したのか。紫竜はノシノシと、見物者である私達の方へ来ました。

そして、ふと紫竜と目が会いました。

ペコリと紫竜が頭を下げるのを見て、私も反射的に頭を下げる。

あ、初めまして占星術師のソラスです。

そんなやり取りをしている最中でも、殴り合いの音が鳴り続け。

そして、決着がつかしました。

片方が倒れ、片方がグツと拳を掲げます。

掲げていたのは、団長でした。

「俺の勝ちだ」

最初にアトナテスに襲撃されて吹っ飛ばされ、怪我をした団員。決闘している際に、幾度も団長の斬撃を受けた紫竜。

「ああ、クソ。負けたあ！」

そう声を上げるアトナテスに、治癒魔法をかけ。

最後に自身に治癒魔法を団長はかけると、アトナテスに手を伸ばし。

アトナテスはばつが悪そうな顔をしながらも、団長の手を握り返します。

「治癒魔法も使えるのかよ、お前手抜きしやがったのか」

「使う暇がなかったただけだ。いい戦いだったよ」

ケツと悪態をつきましたが、全力で戦ったアトナテス顔は、力の限り走った後のよう



な、晴れやかな顔でした。

団長も、なんだか普段にはない。清々しい顔をしていました。

「そろそろ日が落ちる。どうだ、酒でも飲まないか？」

「いいのわ」

こくりと団長は頷くと、そのまま酒宴が始まり。

団長とアトナテスは、今度は飲み比べをしたりしながら、酒宴を楽しみ。

一段落ついた頃、団長はアトナテスを赤の団に誘いました。

普段よりも、どこか熱意を込めながら。

私は、それを二人の声が聞こえる位置に移動して聞きました。

ちよつと妬きました。

団長が赤の団に誘った時、アトナテスのような熱意は、たぶんなかったですから。

何にせよ、アトナテスは団長の話を、グラスを傾けたまま聞きます。

赤の団、そして団長の行動理念。

魔物から人々を救う。それを聞いたアトナテスの反応は、最初はへえくらいの態度で

聞いていました。

団長が真剣な目をしているのを見た為か、マジかよと言いたげに表情に変わり。

顎に手を当てて、考えた末に、アトナテスはようやく口を開きます。

「魔物から人々を救うねえ。出来ると思ってたのか？」

「ああ」

間髪入れずに団長が返すので、アトナテスは困惑をごまかす様にガリガリと頭を掻き。

「いやあ噂でな。赤の団はあちこちで、魔物を退治しまくってるとは聞いていたが。俺はてつきり、金品目当てだと思ってたんだ。何しろ、魔物が出始めてから、人との戦いつてのは減りつつある。何せ、そんなじよそこらの傭兵団、小国のちんけな軍じゃ、あつという間に魔物にやられちまうからな。魔物は一匹になろうが最後まで抵抗しやがるし、人にはある約束事が一切通用しねえ。魔物と戦い。勝てる奴らには、価値がある。大国の軍隊に匹敵する程にな」

魔物が出始め、一年は過ぎた頃から。国同士の戦争の規模は減少しつつありました。理由は、魔物と戦う為に手を取り合い、魔物に抵抗する。

なんてことはなく。魔物の脅威に戦ってる場合ではなくなりつつある。というのが正しいです。

そして、魔物と戦っている内に、無尽蔵かつ出現位置がまるで分からない。それに加え、人とは違い降伏もせず。最後の一匹になっても、戦い続ける魔物に。国々は魔物という存在に、ようやく脅威として、認識し始めました。傭兵団や軍隊が、魔物に対抗す

べく戦いましたが、戦況はどこも芳しくはありません。単純に戦力が劣るせいで、全滅してしまうから、勝てないのではなく、戦い勝利したと思ったら、どこかしらに潜伏した魔物のせいで、本陣を襲われ、何かしらの被害を被り、勝ち切れていないというのが、続いているようです。

そんな中で、魔物に対し唯一戦いに完勝しているのが赤の団です。名声と噂が広がるのは自明の理ですね。

鼻が高くなっちゃいます。

「で、それだけ価値がある赤の団団長様は、あくまでもその力を人を守る為に使うってか？」

「そうだ。俺達はその為に戦っている」

「……勿体ねえとは思わないのか？どこもかしくも魔物魔物の戦乱だ。お前程の剣の腕があれば望めば、一城。いや上手くやれば一国の主つてのもいけるぜ」

アトナテスの言葉は、的を射ているでしょう。

戦乱での勝利は武勲を得て、栄達を手繰り寄せ。それを繰り返せば、ゆくゆくは然るべき頂を、掴み取ることは、決して夢物語ではないでしょう。私も団長の才覚は、それに届く。なんて思ったりもしていますし。

「それよりも、俺は皆が笑顔で暮らせる世界が欲しい」

でも、団長は拳を堅く握りながら、そう言つてのけます。

そんな団長だからこそ、私は団長を信じられますし、誇らしいと思います。

「世界ねえ……」

アトナテスはまた、困惑をごまかす様にガリガリと頭を搔きます。

「はつきり言つて、俺も魔物は気に入らねえ。あいつらには品がねえ、礼儀もねえ。芸もな。だから嫌いだ。だが、人を救うつてもまだ俺にはピンとこねえな。相棒と一緒に喧嘩して、酒飲めればそれで満足だ」

団長はアトナテスを、団員に加えたそうでしたが。これはたぶん断るパターンかなと、私は思いました。

現状で満足している人は、それで完結して変えようとはしません。

団長が誘つても、団員にならない人達は、常そんな人達でした。

でも、アトナテスは違いました。満足なら、それ以上を求める人でした。

「けど、城よりも国よりも、世界つて言うお前についていくのは、面白そうなのは間違いないな」

アトナテスはスツと、紫竜の下顎を撫でます。

知性があるとは思っていましたが、アトナテスに返事をするように紫竜が鳴くと、アトナテスはニツと笑い。

「俺達も入るぜ、お前の団に」

握る拳を胸に当てて、直立してアトナテスはそう言い。

団長はこくりと頷き、アトナテスは団員に。

続いて、団長が差し出したグラスに、アトナテスが軽くぶつけて乾杯し。

アトナテスは、団長の友になりました。

アトナテスの加入は、赤の団にとって大きな意味を持ちました。

「おらあ！腰が引けてるぞ！目を逸らすな！ちゃんと相手を見て剣を振れ！」

口調や態度は乱暴な印象を見受けられますが、理不尽に殴る等の卑なことを嫌い。

団に入った次の日には、それが当然のことのように、団員達を稽古しているアトナテ

スに、団員達は気合を入れて訓練に励みます。

アトナテスは、団長に負けはしましたが、団長と互角の腕前と言っても、過言ではな

い実力者ということもあって、指導するアトナテスに、特に反発無く歓迎されました。

そして、理を捻じ曲げる攻撃をする団長の剣術とは違い。

アトナテスは、極めて熟達された技であることを、誰もが理解できる斧槍術の使い手

であり。数々の戦いの中で培われたのか、斧槍だけに限らない。まさに、武芸にも秀で

たと表すべきアトナテスが、赤の団の教官を務めることで、赤の団全体の戦闘力向上

に繋がりました。

また、今までの兵の指揮は、団長頼り所か、指揮官は団長のみという状態でした。根本的な問題として、中堅指揮官がいなかったのです。私は、占星術師で専ら後方でアストロノヴァを、ドーンとする役目でしたので、指揮なんて出来ませんでした。アトナテスが、中間指揮官としての役割を補いました。それによつて戦いながらあれこれ指揮を飛ばさないといけなかった団長の負担は、大きく減ることになり。訓練を経て強くなったこともあつて、団員からの死傷者はグツと減りました。

戦力を増強したいと言つた団長の望みは叶いました。

問題があるとしたら、アトナテスが問題児ということでした。

そして悪い子に影響されてか、日々の執務と戦場だとちやんとしている団長ですが、お茶目度が増しました。

「団長！アトナテスウ！何をしていますか！」

叫ぶ私の声に、団員達はまたか見たいな、微笑ましい顔をしています。

誰かあの二人を止めてください。あの二人、止めないといつまでも遊びます。

聞いた所によると、二人で訓練をしていると思つたら、何を思つたのか唐突に樽乗りを始め、そのまま野営地を二人は、縦横無尽に走り始めたようです。

訓練で使つていた、剣と斧槍を振り回しながら。凄く危ないはずなのに、団員達が焦っていないのは、万が一が起こらないと信じているからでしょうが。それこれとは話

は別です。

「やっべソラスに見つかった!」

「逃げるぞアトナテス!」

「おう!」

そして、二人は私が追いかけて始めると、揃って逃げ出します。

樽に、乗りながら。

「ああもう!」

樽に乗ったままなのに、なんで私が全速力で走っても、追いつけないんでしょうか。そりや団長もアトナテスも、生粋の戦士で体力あるのは分りますが、不安定な樽に乗ってるんですよ。

少し走り込みして、体力をつけた方がいいかもしれません。少なくとも、団長を捕まえられるくらいにはならないと。

そして、私が走り疲れた頃に、団長は私に近づきます。樽に乗りながら……。

「ソラス、一緒に飲まないか?」

「……ごまかされませんよ」

ムツとしながら言ってみると、団長は頬を掻きます。樽に乗りながら、いい加減降りてください。

「よつと」

視線に気が付いたのか団長は樽から降り、私の手を握ります。

その手の暖かさは、二年前から変わらず。

大きくなって、ゴツゴツとして、男らしさを感じてしまいます。

ああもうこんなのでドキドキしちゃいますし、先ほどのことも、許しちゃいそうになつてしまいます。

「行こう」

そして、極めつけは端麗な顔に伶俐な笑みです。

優しくてカツコよくて強いのに、子供みたいにはしゃぐ癖して、誰もが信頼させるような器を見せる人なんて卑怯ですよ。

気になるに、決まつてるじゃないですか。団長に好意を持つてる団員が、何人いると思つているんですか。

彼女達から、どれだけ恋占いをしてくれと頼まれ。星からの導きの結果に、何度ほつとしたことやら。

はあ。

「仕方ないですね……」

まあ、私と団長と二人きりで飲む。なんてことはなかつたんですけどね。



火を囲んで、グラスが回り。アトナテスが団長と肩を組ながら、グビグビと飲みますし。

酒に強い二人の熱気に当てられたかのように、私もお酒を少しだけ飲みます。

団員達もお酒を飲みます。飲み慣れていないお酒に、私の頭がふわふわして、でも陽気なこの感じは楽しいです。

ドンドンと騒いで、ガヤガヤして。ちよつと団長に、寄りかかったりなんてして。とつても、とつてもドキドキして、楽しいです。

あれから、二年。

喪失から始まった私の生活は、どこを切り取つても戦いに満ちているでしょう。

ですが、赤の団の日々は。

私に様々な成長と、確かな充実感を齎してくれました。

こんな調子で、赤の団にアトナテスが加わり、魔物に勝利を重ね。

団長とアトナテスがふざけて、私が叱り。酒宴を開いて皆で楽しみ。

たくさんの剣士、中には見た目は人に近い。けれど力は魔神と名乗るに相応しい女性までもが、団長に挑戦したりなんかして、混乱を招いたりもしましたが。

団長はそれらにも勝利し、順調に名声を重ねて、その名を物質界に轟かせました。

そして、赤の団に居て、毎日が戦いだらけでも、楽しい。

そんな思いだけで済んでいたのは、この頃まででした。  
アトナテスが団員となって、二年経とうとした辺りでした。

国が、一つ滅びました。

小国です、でも国です。

何人もの避難民が、助けを求めて隣国に逃げ惑います。

けど、魔物は彼らを逃がしません。草根の根を別けてでも、彼らを追います。  
報を聞いた団長は、一考するまでもなく動き出します。  
彼等を救いに。

決して敗北する訳にはいかない。

赤の団が敗北したその瞬間。

私の過ごした故郷程度では、済まされない程の夥しい死者が出る。

そんな戦いの始まりでした。

本当の意味での、英雄王と英傑達の、私達の千年戦争の始まりでした。

## エピソード5 撤退戦

避難民が次々と、中央の強国へ続く森林の大道を走っていきます。

その道に陣を布き防衛を、私達赤の団は努めます。

背には、避難民の一時避難所。負ければ、彼らが襲われます。

「戦闘開始！アトナテス右翼は任せた」

「ソルジャー！アーチャー付いてこい！他は後から配置に着け！行くぜ相棒！」

「ヘビーアーマー拠点前を守れ、一匹も逃すな。逃せば混乱を生み、さらなる被害が出る。これ以上、魔物に奪わせるな！」

団長は団員達に、指揮を飛ばしながら中央と、左翼の防衛に努めます。

次々と襲撃してくる魔物に、団長は二連斬撃を三体の魔物に飛ばし。火の魔法で焼き払い。逃げ遅れた避難民を、団長は自ら助け起こして、中央の強国へと逃がします。

誰よりも前で、誰よりも多くの敵を倒し、多くの人々を助けていきます。

「ソラス！」

「任せてください！降り注げ星よ、アストロノヴァー！」

そして、戦線から抜け出そうとした魔物を、私のアストロノヴァで狙い打ちします。

ただ、数が少ない内はいいですが、魔物の数が増すと。私のアストロノヴァは、一体にししか攻撃できない以上、対処がどんどん遅れてきます。ヘビーアーマーの役を担う団員達が、全身を覆う厚い鎧と堅い盾で、魔物を体を張って、避難所への侵入を防いでくれます。

ですが、魔物はそれ以上に襲い掛かり、このままじゃ突破されてしまう！

「はあー！」

崩壊しかける寸前の所で、最前線から、本陣付近まで走ってきた団長が、そのまま剣を振るい魔物を斬り払います。

玉のような汗をかきながら、息を切らしながら。それでも団長は、駆けつけてくれました。

「ごめんなさい団長……」

私は突破されてはいけけない、最後の防衛線を任されています。

本当なら、団長が背中を気にしなくてもいいようにしなければいけないのに。

そう思うと、頭を下げるしかなかった。

「気にしなくていい。頭を上げて、前を見るんだ。まだまだ魔物が来る。ソラスの力が必要だ」

ですが、団長は私に怒ることなく。

普段通り、優し気な笑みを浮かべます。

それを見ると、私は活を入れ直し、杖を再び握り締めます。

ただ、反省すべき点はしっかりと心に刻みます。

今の私では、今回みたいな状況の時に、魔物を取りこぼしてしまいます。

もっと、攻撃できる対象数を増やすか、もっと大軍を効率よく倒す手段を編み出さないといと。  
別の技を。

「まだまだ魔物が来る。ヘビーアーマー戦列を乱すな、お前達の不安は、そのまま混乱を生んでしまう。落ち着くんだけ。ヒーラー達は回復を急げ。ソルジャーは撤退し、第二陣に備えろ。ウィッチは後退して、本陣の守護を厚くしてくれ。アトナテス！そろそろ魔物の二陣が来る。迎え撃つぞ。いけるな？」

「当たり前だあ！」

けれど、考える暇は今はありません。魔物の軍勢は、私達の勝手を知らず、どんどん減んだ小国から来ます。

団長が言った通り、一息つく間もなく、次のラッシュがやってきました。

私はすぐさま星天召喚の儀に取り掛かり、アトナテスはダークブレスで先頭の集団を焼き。

団長は最前線へ行き、そこからさらに前進して、魔物の軍勢に真つ向から突つ込み。振るう剣で魔物を倒します。

いつにも増して。その剣戟が激しいのは、国が滅んだということに、少なからず動揺しているからでしょうか。

それとも、背にいる助けなければいけない避難民がいるからでしょうか。

魔物の返り血を浴び、指揮を飛ばし、魔法を使い、剣を振るう。

いつも通りなはずの団長の姿に私は、少し痺れる感覚がしました。

そして普段よりも、星の力が弱まっているような……いえ、やはり考えるのは後です。それからというものの、何度も星天召喚の儀とアストロノヴァを繰り返していると、魔力が切れてしまい。

星天召喚の儀が、上手いかず。撤退をして、休息して再び出撃してを、私は何度か繰り返し。

アトナテスと紫竜も、全身に傷を負い。

自らと、魔物の返り血に濡れた体から、熱気の籠った荒い息を出しながら撤退し、傷付いた体に治癒を受け。一口水を飲んで、すぐさま団長の手助けに、出撃をして行く中で。

団長だけは、最前線で一人になっても。剣を振るい、傷付いたとしても、自らの癒し

の力で立ち上がり。

そのままデーモンを斬り付け、打ち倒し、さらに前進します。

魔物の軍勢を相手に、団長は一度として退く事なく、戦い続けていました。

その背は、どれだけの人々を惹きつけ、勇気づけたのでしょうか。

早く逃げてほしい所ですが、小国からの避難民は時折振り返り、団長の背、裏血が白の赤いマントを見つめ。

誰かがポツリと呟きました。

英雄。

そして、戦い始めて一日は経とうかとする頃。

全身余すことなく、傷を負い。ふらふらとしながらも、団長は本陣にようやく戻ってきました。

「この辺りに魔物はいない」

団長のその言葉に、周囲は安堵の息を零します。

団長が魔物がいらないと言えば、本当にいいのです。それは赤の団では共通認識でした。

ですが、続く団長の言葉に、たぶん幾人かは戦慄したと思います。

「……だが、首都にまだ生き残りがいるかもしれん。そこにはまだ魔物がいるだろう

後は……。いや現地についてから話そう。少数精鋭だ。時間をかけられない。ついてこれる者についてはきてくれ。そうでないものは、避難所の皆を引き連れ。中央の強国軍が到着するまで、避難所を守っていてくれ。無理強いはいしない」

言うべきことは言ったとでも言いたげに、ボロボロなはずの体をくるりと翻し、滅びた小国の王都へ向かう団長。

「二人で行ってどうすんだよ。俺も行くぜ団長」

アトナテスは紫竜と共に、すぐさま団長の背を追い。

私は、疲れ切った体に鞭打ち、団長についていきます。

放っておけないですからね。

団長についてこれたのは、私とアトナテスに、十人にも満たない団員達でした。

荷馬車を引きながら、幾度かの魔物の襲撃を、団長とアトナテスのタッグで迎え撃ち。道中にあつた集落で逃げ遅れた人を探し、いないことに落胆し。

一日かけて滅びた小国の都市に、私達はたどり着きました。

……一瞬、来なければよかつたと思いました。

「ひでえな……」

いつになく悲痛な表情を浮かべるアトナテスが、現状を一言で全て表現しました。

倒壊した家屋に、城を薪に燃え続ける火。あちこちで朽ち果てている人、人、人。



斬られ、喰われ、焼かれ、数多な形の死が、そこには広がっていました。

いつそ何もなかった方が、失ったという感覚を味わわずに済んだかもしれません。

「……………」

団長は黙祷を捧げ、剣を引き抜きます。

「魔物の気配があちこちにある。奇襲に警戒しつつ。逃げ遅れた人を救出。それと、使えそうな物は全部貰っていく」

「いいんですか、それ」

現地についてから話すといったのはこれだろうと、私は分りました。

なるほど、避難民に聞かせられない訳です。それは所謂、火事場泥棒というモノでは。

私と同意見らしく、幾人か頷く団員もいました。

けど団長はふるふると首を振ります。

「避難民の食事を中央の強国に押し付けるには、限度がある。それに、王族達が持つという魔剣やら聖剣の類が、魔物の手に渡るよりはずっといい。政治のない訳なら、あとでいくらでも考える。もつとも、こんな現状じゃ非難された方がマシかもしれない……何にせよ、私欲の為に使わないよ」

文句を言う人がいなければ、何を持って行っても今は問題なし。

団長のそれは、間違いなく言い訳ですが。

反対意見は、誰にも出せませんでした。

出せるはずがありませんでした。

今日だけで何人の避難民が出てきたのでしょうか。

そして彼らの食事だけで、たった一食でどれだけ必要になる事か。

明日から、どうなる事やら。

食べ物もタダじゃありません。

今のように魔物との戦いで国々が疲弊すれば、食べ物が高騰してしまいます。お金で

何とかなるうちはまだいいですが。

どれだけお金があっても、食べ物が無いという状態にでもなったら。

魔物との戦いをしている暇は、なくなりやがて……人同士で。

それに、魔剣聖剣といった類は。国としての威信だとか、権威を象徴するものであり。

それが魔物の手に渡れば、人々は国が無くなったという絶望感を、さらに増すことになるでしょう。

また、剣に秘められた強力な力によって、さらなる被害が出ることは想像に難くありません。

団長が全部貰うというものも、領けません。

団長は夢想家ではありません。戦いの後も見据えています。

「食いもんはいくらかあったな。相棒運んでくれ」

王城で人を探しながら、魔物だらけの城の中を撃滅して、物資をかき集めます。

幸い、魔物は人間の食糧には興味がないので。火の手でいくつかは無駄になりましたが、ある程度は確保できました。

そして、嚴重に封鎖された宝物庫の奥。

団長がその扉を斬り捨てると、宝石貴金属に見向きもせず、奥に鎮座されていた剣を手に入れます。

禍々しいと思ったのが、それはおそらく見た目からして魔剣の類だからでしょうか。

「業物だな。こいつを然るべき担い手が使えば、もう少し国が持ちこたえかもしねえな」

「例え民を犠牲になつたとしても、城に火が付いたとしても、使いたくはなかったのだろう。これには、血を欲する危険な感覚がする……アトナテスこれも運んでくれ。出来る限り丁寧に。理由はなんであれ、この剣は、ここに国があつたという証拠だ。幾人の人達が、この国で生きていたという証だ。分かるな？」

「……ああ。それを魔物共が奪いやがった」

「だが、全てを奪われていない。まだ、俺達にやれることはある。皆、アトナテスを中心に、城内に生存者がいないか引き続き探してくれ。ソラスは俺を手伝ってくれ。いく

つか持ち帰りたい情報がある」

私は頷き、執務室に到着すると。ここでもあったであろう惨劇の痕に、一瞬の黙祷をして。

団長が指示した、そのいくつかを探します。

魔物や神話書が書かれた古文書、小国の周辺地図、小国の機密っぽいあれこれ。

「これでいいんですか」

「それでいい。ありがとうソラス」

何に使うかは分かりませんが、団長は一先ず地図を見つけると睨めっこしてしました。

数分後、地図に筆を団長は走らせ、団長は私に地図を手渡しました。

必要になる。そう言つて。

こうして、主に食糧や、魔剣、いくつかの書類束等を荷馬車に詰め込み。

小国の城を後にして、避難所まで撤退を始めます。

結局、王都にたどり着いた後から今まで、魔物はいたけれど、人は見当たりませんでした。

襲われることを承知の上で、声を張り上げ、生存者を探しましたが見つかりませんでした。

改めて国が滅んだという事実を突きつけられ。

私達に、暗い影を落とします。

「ちよつと待て！」

しかし、あと少して王都を抜け出すという所で。団長はふと、何かに気が付いたのか、周囲をキョロキョロと見まわした後、ダツと一つの瓦礫の山に向かいました。

何があつたのだろうか、私達は思った直後。

団長は瓦礫を力付くで退けると、瓦礫の下に。何らかの意志によつて、瓦礫を支えるように立つ岩柱を壊し、その子を抱き上げました。

「大丈夫か、死ぬんじゃない！」

団長に抱き上げた子は、橙色の髪をして、鎖のついた分銅を固く握る。私よりも年下の子供でした。

そんな子供がたった一人で、魔物が蔓延る王都の瓦礫の下に、居続けたのです。

どれだけ恐ろしく、心細かったことでしょう。城は後回しにして、もつと早く見つけるべきでした。

団長も申し訳なきような顔をしていました。この人が一番、誰かを助けたかつたはずですから。

瓦礫の下にいた少女は、泣き腫らした顔にぐったりとしたまま。死人のような顔色を

して、今にもその命が、尽きようとしていました。

団長は、すぐにその子に治癒魔法をかけますが、顔色はよくなりません。治癒魔法は怪我を直しますが、気力までは回復してくれません。

駄目か。そんな考えが、一瞬過ります。

けど、団長は諦めませんでした。

「生きる、生きるんだー！」

やっと見つけた生存者に、団長は必死に声をかけ。

マントを脱ぎ、その子を包むと温めるように抱き締めます。

治癒魔法をかけながら、何度でも少女に声をかけ続けます。

諦めるな。生きる。

何度でも、何度でも。

そして、団長の声は少女に届きました。

「……………」

小さな、小さな掠れ声。

けど、確かな反応でした。

「水！」

「はいー！」

叫ぶ団長に私は水筒を渡し、団長は包帯に水を濡らして少女の口へ。

少しだけ喉が動いたことを見ると、そのまま水を少女の水に少しづつ流し。

大半は口端から水が零れていきますが、喉が動き続け、ちゃんと飲んでいることは分かりました。

「大丈夫、少しずつ飲むんだ」

優しく声をかけ続ける団長に、少女は微かに目が開き、団長の顔を、たぶん人を見たことで安堵を覚えたのか。

顔色は見つけた時よりも遥かによくなり。スウスウと寝息が聞こえました。

「不幸中の幸いだな」

「ええ、よかったです」

嬉しそうに笑うアトナテスの言葉に、私は思わず涙が零れそうでした。

絶望だけで終わると思っていた所に、一人でも助けられることが出来たと。そう思えたからです。

ただ、そんなことは魔物は関係ありません。

穏やかな表情を浮かべる少女を、団長は荷馬車に下ろすと同時に。

背から、戦士達が言う所の闘気とやらでしょうか。少なくとも、これから戦闘が始まることを、団長は背で語っていました。

私達全員が、戦闘前の緊張感を漂わせませす。

「ソラス」

「はい！」

「この子と物資、団員達を頼む。地図にいくつか、逃げやすそうな道を書いておいた。出来るね？」

さつき地図を見ていたのは、この為でしたか。

団長の先見の明には、いつも驚かされます。

私は先ほどの地図を開き、道を頭に叩き込み直します。

おそらく、走り始めたら見る暇はあんまりないでしょうから。

「出来ます。出来ますが、団長はどうですんですか？」

「残る。殿だ」

「そんな！駄目ですよ！それなら皆で戦った方が」

「駄目だ。強力なデーモンの心配がする。魔物も大量に出てくるだろう。その子や、物資を守りながら戦うのは無理だ。人が足りない。物資も捨てるわけにはいかない」

「物資なら捨てればいいじゃないですか！人命には変えられませんよ！」

「駄目だ。物資も必ず持ち帰るんだ」

強く、命令するような口調に、私は口を閉じてしまいます。



団の団長が残り、殿をする。

団長はそれが一番、皆で生きて帰れると信じているでしょう。

正気の沙汰ではないです。一番生き残らなければいけない人が、一番危険な役を引き受けようとしているんですから。

「必ず戻る。だから、先に行くんだ」

いつものように、穏やかな微笑みを浮かべる団長。

その微笑みに、私はどれだけ安堵を覚えた事か。

でも、団長を残したままにすることは、やはりできません。

私も残ります。

そう口を開きそうになりましたが、バシンと背中を叩かれました。

団長より、一回りは大きな手の持ち主、アトナテスです。

「団長を一人にはしねえよ。俺達も残る。だから、ソラスは団長の指示を成し遂げな」アトナテスは不敵に笑いながら、自らも殿をすると、主張しました。

現状、団長が唯一、背中を預けるに足りうる戦士アトナテス。

きつとアトナテス以外が、殿をすると言っても、団長は聞き入れなかったでしょう。

アトナテスに、団長はこくりと頷き。

「ありがとう」

感謝する団長に、アトナテスはよせやいと言い。

二人は武器、剣と斧槍を構えます。

そして、合わせるように、それは現れました。

ゲート。

物質界と魔界を繋ぐ、まさに門。開かれたらゲートから、魔物が物質界へ出てきます。

ゲートの規模が大きければ大きいほど、消費する魔力を糧として、強力な魔物が物質界を侵略しに現れる。

いつの間にやら情報を仕入れていた団長は、そう言っていました。

そして出てくるはデーモンにして、剣を持つ剣士。

デーモン剣士が二体。

そして、それに付き添うように多数の魔物が。

「走れ!!」

「アトナテス、団長を任せましたよ!」

「ああ任せな!」

「ガアオオオ!!」

抗議するように、アトナテスの紫竜が叫びます。

そうですね。紫竜さんも残って、戦ってくれるんですものね。

「紫竜さんもお願ひします！後で必ず、必ず会いましょう」  
団長と離れ、私達は逃げます。

全速力で走りますが、後ろから魔物が追ってきます。

団長とアトナテスが残ったことで、ほとんどの魔物を引きつけてくれているでしょうが、それでも全部引き受けるのは無理です。

私は杖を持ち、星天召喚の儀を行います。

追ってくる魔物の応戦は、団長に任せられた私の役目です。

走ったままなので、集中できず威力は全然でません。

でも、今は倒すよりも、逃げることを優先させるべき場面です。

威力はまだ出せない。けど多くの魔物を狙い撃つ。

そのことを意識しながら、星天召喚の儀を行い。

魔物へ放つ直前。

足元から何かが、私に力を与えました。

正体は不明。けど、これはまたとないチャンスと思い。

二連射は出来ないけれど、攻撃できる数は多く。

「星よ、数多となり降り注げ！グランドクルス！」

私の声に、魔力に、星は応え大量の星が降り注ぎます。

その威力は私が想定していたよりも強く、倒せないと思っていた魔物達を、次々と倒していきます。

何があつたのだろう。

私は背を振り返ると、荷馬車に乗っている。先ほど助けた少女の、小さな手に握る分銅が、一人でに浮かび上がり。

私を指差す様に、向いているのを見ました。

もしかして、彼女が力を？

そんな疑問が湧きますが、後です後。魔物が来てます。

団長とアトナテスはきつと何とか切り抜けてくれるでしょう。

けど。

「団長、アトナテス。無事でいてくださいよ……！」

私はそう祈りながら走り続け、地図を頼りに、魔物を撒きやすい道を進みながら、避難所にたどり着きました。

たった一人しかいなかったですが、連れ帰った生存者と、国の象徴であつた剣を取り返したことに、私達は感謝されました。

そして、持ちかえつた物資を、余すことなく開放して、皆のお腹を満たします。

これは私達が物資に手を出す前。団長が出した指示でした。

腹が満ちれば、一先ず混乱は起きない。物資、特に食糧は必ず避難民に開放する事。

団長は断言するように、そして珍しく強い口調で命令するように言いました。

そしてそれは有効でした。

私達が物資を届ける前、中央の強国が避難民を受けれてくれると、説明を受けたものの。

確証のない、これからの日々に不安を覚えた避難民が。

若干の恐慌状態に陥りそうだったと、残った団員から聞き。

ゾッと背中に、悪寒が走りました。

すでに大道の戦いでポロポロの状態になった団長が、無理をしても動かなかつたら。

団長がこうなることを見越して、物資の回収をしていなかったら、今頃どうなつていたことやら。

火事場泥棒なんて、物資が人命になんて言ってる暇じゃない。

明後日、明日じゃない。今必要だったから、団長はすぐ行動をしたのです。

あの時、団長が私に冷笑一つ浮かべなかつたのは、団長が偏に優しいからでしょう。

私は、能天気でした。国が無くなった。そのことを理解していませんでした。

「ソラス、団長はどうしたんだ？」

「アトナテスと一緒に殿を……」

私の言葉に、幾人かの団員は崩れ落ちます。

彼等の言いたいことは、私には痛いほど伝わります。

やはり団長は真つ先に、その命を大切にして、撤退すべきでした。

団長の才覚は、私と逃げ帰った団員達の命を天秤にかけても、到底釣り合いません。

万が一が起きたら。あの場で無理にでも、団長を引きずらなかつた私の無能さに。

気が付けば、両腕で私は、私の体を抱き締めました。

恐ろしかった。

団長が、あの巨星が、万が一失うことになってしまつたら。

何か、取り返しのつかない事、赤の団が消える以上の何かが起きる。

そんな確信がありました。

私達が避難所にたどり着いた数時間後になつても、団長は戻ってきませんでした。

「団長を助けましょう！すぐに編成を」

「中央の強国の援軍がたどり着くまで、この避難所を離れては駄目だ！これは団長の指示だ。今魔物に襲われたら、どれだけ被害がでることか分からんぞ!」

団長を助ける、助けに行けない。

まとめ役がかけ、纏まらない会議に、時間が過ぎていき、焦燥感が募ります。

そして、私達の混乱は、避難民達の混乱を招きます。

団長が言った通りに。

「どうなっているんだ」

「団長はどこへ!？」

「助かるのか私達は!」

赤の団の本営に押しつけてきてる避難民達が、口々にそういった不安を零し。

一度零れた不安は伝染し、避難所に様々な悪感情が渦巻き始めます。

暴動が起きる一歩手前の爆弾になっていました。

「魔物だ!」

「戦闘準備です!」

そして、その悪感情に引き寄せられるように、または爆弾に点火しにきたように魔物の出現が、避難所に出現します。

数は、僅か五体。

団長は魔物がいらないと言いましたが、あれから一日は経っています。どこからかやってきた魔物でしょう。

避難所までは入ってこられたのは、団長の言葉に安心した私達の怠慢でしょう。

すぐに対処を始めます。

団長もアトナテスもいない。私も指揮官には向いていません。指揮官不足です。でも、この数なら私一人で、アストロノヴァを放てば対処できますし、ヘビーアーチャーアーチャーの人達が自ら判断して対処も出来ませぬ。

実際、魔物は早々に倒せました。

でも、魔物が出た。

ただそれだけで、国を失ったばかりの避難民は、ただそれだけで、パニックになりうる理由でした。

散り散りに逃げ出しそうになる避難民達を、赤の団は武器を使いそうになるのを堪え、なんとか抑え込みませぬ。

……結果的に、魔物との戦いには怪我人一人もでなかつたのに、避難民達を抑え込むのに怪我人が出ました。

団長が、避難所に一匹も通すなという訳です。

そして、次なる問題は魔物が出た以上、他にも魔物がいるかもしれない。

もういない。

ただそう言うだけで、そこに立つだけで。私達に安心感を齎す人がいません。

いつ魔物が出てくるか分からないという不安感が、私達を襲い。

いつまたパニックになるか分からない避難民と、見てもいない魔物との間に板挟みと



なり、赤の団は休む暇がまるでなく。

このままではまずい。それは分っているのに、団長を助けにいけず、何もできないでいました。

「伝令！魔物の出現を確認！」

今度は、避難所に到達される前に、魔物を発見することが出来ました。

ただ、魔物が来た。今度は五匹程度は済まされない数が。伝令の声に避難民達が——  
ああ。

いつだかのように、忘れようとしていたのに、脳裏に両親が殺される瞬間が思い浮かびあがりました。

同時に心中、這いずり上がるように沸き上がる感覚に覚えがありました。

その名は、絶望。

「落ち着くんだ、皆」

その声は、人を安心させる魔法があるんでしょね。

その声を聴いただけで、奥底に閉じ込めていた絶望を消し飛ばし。希望が沸き上がるのを心から感じます。

団員達が声を聴いた途端に落ち着きを取り戻し、避難民達もその声を聴き、見て、希望がやってきたことを確信したのでしよう。

「団長！」

傷だらけの紫竜の代わりに、気絶しているアトナテスに肩を貸しながら、団長は帰ってきました。

その体には、回復する魔力すら尽き果て、傷だらけに血まみれ。歩くたびに滴血の道が出来ています。

とつくにポロポロなはずなのに、すでに人にあるだろう、限界は超えているはずなのに。

それでも団長の前髪の内にある瞳は、確かな闘志に燃えていました。

「ソルジャー、アーチャー。西方から魔物くる。すぐに配置に着け。いつも通りだ。慌てる必要はない。ウィッチは待機。メイジは戦闘準備。相手は雑魚だ。君達ならまとめて焼き払える。俺も前が出る。守りきるぞ、戦闘開始だ」

「団長少しは休んでください！最初からずっと、戦い続けてるじゃないですか!」

「ソラス。よかった無事だったか……いや、それも言つてられない。アトナテスが、俺がすぐに必要になると言つて、奮戦してくれたからな」

そう言つて、団長はアトナテスを慈しむような手つきで、眠る頭を撫で。

紫竜にも同じような手つきで顎をさすり、その優しい手で再び剣を握ります。

「行こう。俺達は負けてはいけない。膝を屈してはいけない」

団長が前に出ます。いつものように、誰よりも前へ、怪我だらけの体で疲労に疲労を重ねた体で。

私は、団長の後を追います。団長を支えなければいけない。

その一心で、グランドクルスを放ち続けました。

そして、魔物を殲滅し、団長の存在に安堵した避難民達は、落ち着きを取り戻し、避難所を平定。

アトナテスも少し休んだら、復活し。そのまま、再び起きた魔物の襲撃を一切の被害なく対処し。

中央の強国軍がたどり着いたことで、完全に勝利することができました。

団長は戦いの開始から終わりまで、まさに獅子奮迅の働きを私達団員と、避難民達に見せ。

団長が休んだのは、事後処理を終えて、まっさらになった執務室の机に、突っ伏したその時でした。

私は団長に、そっと毛布を掛けました。

この小国の避難民を真っ先に助けに行き、そして生き残った者達を、戦地となった小国から中央の強国に撤退するまで。

一度として、休むことなく戦い続けた団長は、今回の避難民を中心に、人道の英雄と

して、その名を物質界に轟かせ。

赤の団の団長を知らぬ者は、ほとんどいないと言ってもいい程です。

一方で私もアトナテスも、今回の撤退戦に十分な戦果を挙げたということで、赤の団の占星術師ソラスと、紫竜騎士アトナテスとして。あちこちで、知られ、語られるようになりました。

赤の団の名声は留まることを知りません。

それはいいことなのでしょう。でも当の英雄。団長は自嘲的な笑みを浮かべて言うのです。

「小国を贗として、英雄が生まれたということだな。とんだ英雄だ」

団長は自分の名声を利用する器量はあっても、誰が自分を知っているか、あまり興味を持ちません。

ただ、亡くなった小国の人達に、今もなお魔物に襲われる人々に、団長は心を痛めていました。

団長は何年たつても、そういった所は変わりませんでした。

敗北は英雄を生むもの。

と言ったら、王子君にはちよつと意地悪ですね。

でも、人が英雄を求めるのはきっと、希望が欲しいと思ったからでしょう。私もそうでした。かつての私にとっての希望とは、私達にとっての希望とは、即ち英雄王でした。

## エピソード6 大地を紡ぎし英傑サナラ

撤退戦の後、団長にベツタリと張り付くようになった少女がいます。

いつもの簡素な椅子と机と、天幕があるだけの執務室に入ると、その子はすでに団長が執務している姿を、椅子に座り足をプラプラとさせながら、じっと見つめていました。

「おはようソラス」

「おはようございませぬ。まーた夜更かしして執務していましたね。無理せずちゃんと休んでください！」

目の下に隈を浮かべた団長に、苦言を零しますが、団長は頑張りすぎるのを、止めようとはしません。

困ったように微笑むときは、大体は聞いてはいるが改善する気がない時です。実力行使に出るべきでしょうか。

団長の頭をガツと掴んで、こう膝枕とか……は、難易度高いですね。やってみたくは、ええと思いますが。

「それと、おはようございませぬサナラ」

務めて、優しく穏やかにと意識しながら言ってみましたが。

サナラは私の声に、ビクリと体を震わせると、椅子から立ち上がり。テテテと団長の背に回り、ジトーとした目で私の様子を伺ってきます。

まだ、警戒されているみたいですね。

「サナラ、挨拶はちゃんとしなさいといけないよ」

「……おはようございます。ソラスちゃん」

「ええおはようございます」

団長に促されると、サナラはペコリと頭を下げました。素直でいい子ですね。

私も笑みを浮かべて、もう一度挨拶をすると。サナラは顔を俯かせましたが、顔が赤くなっているのです。まあ可愛らしい反応って奴ですよ。

例の撤退戦、滅びた小国の王都で、ただ一人見つけることができた少女。

サナラという名前が聞けたのは、彼女が目覚めてから三日も時が必要になりました。

「あの人は、あの人はどこですか?! いや、いやあー!」

目が覚めた途端、パニックになり、泣き叫びながら鎖のついた分銅を振り回し、土魔法を乱発するサナラに、私達が慌てふためいていると。

あの人こと、団長が現れると同時に、サナラは団長に飛びつき。そのまま、私達を怯える目で見てきました。

団長は冷静に状況を確認し、サナラの姿を見て一考すると。

「君に悪いことをする魔物も、君を置いていく人もここにはいない。大丈夫、俺が君と一緒にしよう」

そう団長は言い、抱き締め。何度も、小さな背を撫でていると。サナラは泣き止み、パニックも収まりました。

ですが、それからどこへ行くにも、食事をするにも、執務をするにも、眠る直前ですら団長にベツタリとサナラは張り付き。

湯浴みまで一緒に入ってくれとサナラが言うので、私は全力で待ったをかけ。私の監視のもと、服を当然着て背を向いた団長が、サナラの手を握りながら、サナラの湯浴みを行うという。ハプニングが起きたりしつつ。数日が経ち。

避難民達が、赤の団の一員となり共に戦うか。

難民として、中央の強国に留まるかを決める最後の日。どちらも言わずに、ただ周囲に怯え、心を開いている団長に引つ付いたまま、夜になり。団長のベッドに眠るサナラに、団長は優しく頭を撫でながら。

起こさないように静かな声で、間違いが起きないように見守っている私に、話します。

「サナラは魔物の恐ろしさも、人に置いて行かれる恐ろしさ。どちらも心の底から、味わったんだろう」

ああサナラっていうんですかこの子。という反応は、連日振り回している私には、す



ぐには返すことが出来ませんでした。

ですが、心して団長の言葉を待ちます。

「一緒にいてあげないと、酷だ」

「この子を赤の団に入れるんですか。魔法の才は確かにありそうでしたが……」

あれこれ振り回し、団長を独り占めしてるサナラに、一つどころではない文句は言いたくもありません。

ですが、サナラを嫌いになれそうには、なれませんでした。

サナラの気持ちは、少なくとも魔物に対する恐怖は、私には分かります。

両親や、魔物によって生まれ育った地を蹂躪される恐怖を、私は忘れていません。

ですが何もかも絶望して、心までもが生を諦め、死に切る前に。

私の前に団長が現れ、その頼もしい後ろ姿を見て、団長の力になりたいから、私は魔物への恐怖を押さえ戦うことができました。

でも、もし誰も助けに来てくれず。

目の前で何度も何度も、助けてほしいのに、人が目の前で過ぎ去り置いていく姿を見たら。

怖くて、寂して、とても恐ろしかったでしょう。サナラはそんな絶望に身を浸したまま、一人で生き残ったのです。

嫌いになんかなれせんよ。

だから出来る事なら、戦う才があつたとしても。魔物との戦いに身を投じるのは、サナラの為にならないと私は思いました。

ですが、団長の意志は固いようです。

「サナラを入れるべきだ」

「……分かりました。でも、そろそろ団長離れしないと困りますから。そのことは忘れないでくださいよ」

「ああ」

その翌日、赤の団に入ることを、魔物と戦うことを了承したサナラは、少しずつですが、団長離れが出来るようになりました。

そして、団長以外と最初に打ち解けたのは、意外なことにアトナテスでした。

「何だ。ようやく団長から離れやがったかこのガキンちよは」

数日団長を取られたままだったので、若干不貞腐れてるアトナテスに、サナラに口を尖らせ。

サナラはサナラで、頬をプクーと膨らませて反抗します。

「サナラです。子供じゃありません」

「んなことを言ってるうちはまだまだガキだ。団長―鍛練しようぜ」

「団長は執務に忙しいんです。団長を困らせないでくださいー」

「ああ?」

サナラとアトナテスの視線がぶつかり合い、火花が散りますが。

その間にせつせと執務を片付けた団長が、まあまあと声をかけます。

「気分転換になるし、剣が鈍ったら困る。付き合うよアトナテス。サナラも一緒に来るかい?」

「ははっどうだ見たかサナラ。団長は俺を優先させたんだ」

「違いますー! 団長は気分転換の為に私を誘ったんです!」

言い合っていますますが、数日あれこれと世話した私よりも、すでにアトナテスの方が会話量が多いのは、単に私が畏れ多いからでしょうね。こう見えて、赤の団では団長の相談役であり、幹部、副官と周囲の人は認識されていますからね。

認識されてるだけであって、団長から明言されていませんですけどね、ええ悔しくないですとも。

「……ソラスちゃんも行きませんか?」

上目遣いで、不安げな表情を浮かべ、サナラが私を誘ってきます。

ちゃん、ですか。

これはサナラなりに、歩み寄ってくれているということでしょうか。

そう思ったら、悪くないですね。ちゃんと呼ばれるのも、何だか親し気があっていいです。

この頃、私とアトナテスは、団長を除けば。これといって、格差らしい格差を設けていない赤の団ですが、それでも別格扱いされていますからね。尊敬の念を持たれてるというのは、何となく伝わり、それで少し壁が出来てしまい。

壁を持つとうとしない団長の元へ、自然と赴く原因になつたりします。

「分かりました。私も行きましよう」

パツと顔を明るくして、サナラは団長に抱き着きます。

まだ、団長離れは出来なさそうですね。

とりあえず、サナラを団長から引き離してみました。

唸られました。この時からしばらく、私はサナラにとつて、団長と引き剥がそうとする厄介者認識されました。

ええい私だって、団長に抱き着いたりしたいというものに！

そして、それからまた数日経ちました。

訓練場にて、サナラとアトナテスは、一対一で模擬戦が始まろうとしていました。

勝利条件は制限時間までに、サナラが少しでもアトナテスに傷をつけたら勝ち。

条件としてはサナラが圧倒的に優位でしたが、アトナテスが引き受けたということ

は、本人は傷を受けても無傷でいれるという自信があったのでしよう。

サナラは、自身をジオマンサーだと言い。土魔法による攻撃を得意としていましたが。それでも、赤の団にて団長と、唯一戦えるアトナテスに傷つける事なんて出来ない  
と、誰もが思っていました。

団長もそうなのでしょう、アトナテスに程々にと言っていました。

そして、戦いが始まると。

「えーい！とーうー！」

鎖付き分銅をぶんぶんと振り回し、地中から岩を生やす土魔法を放ちますが。アトナテスは、相手の武器を振るう前の挙動だけで攻撃先を予測して、行動を移すことが出来ますので、ステップを踏むように岩を回避します。

「サナラ！動きが読みやすいぞ！相手の動きに気を張れ！常に安全に戦えるとは限らねえんだぞー！」

「分かっています！」

「どんどん来い！」

これ模擬戦ではなく、訓練では。

私が言うまでもなくそんな雰囲気は漂い始め、サナラが疲れ始めた頃。

「まあ一も二も、もうちと威力が欲しい所だな」

アトナテスはサナラの岩を、軽々と斧槍で叩き潰し。

制限時間がそろそろ来るので終わるか、と言いそうになったみたいですが。

「ま、まだですよー！」

グルリと、サナラは頭上に分銅を回すと、サナラの立つ場所が何やら光り始め。

そのまま、アトナテスに土魔法を放ちました。

アトナテスは先ほどと同じく、斧槍で迎え撃とうとしましたが。

「うおー！」

アトナテスの斧槍を押し返し、肩に岩が突き刺さりました。

そして、そこからたらりと血が流れます。当然、アトナテスのです。

「や、やったー！勝ちましたー！」

ぴよんぴよんと飛び跳ねながら、サナラははしやぎますが、私含めてアトナテスが負けるとは思ってはいなかったのです。

周囲は純粹に驚きに包まれました。敗因はアトナテスの油断でしょうか。どちらにしろ、負けは負けです。

「へえ、やるなサナラ」

「ふっふーん。私の実力が分かりましたかアトナテス！」

「馬鹿。負けたのは認めるが、今のままじゃまだ戦力にならねえ。さつき俺が言った

ことを忘れるなよ」

「はー…」

明るく返事をするサナラに、思わず笑みが零れちやいます。これが、きつと本来の彼女なのでしょうね。

暗いよりはずつといいです。

団長もきつと、同じ気分だろう。私はそう思い、団長に目を向け。

サナラを普段の優しい気な眼ではなく、不可思議な物を見るかのような目で、凝視していることに驚きました。

「だ、団長?」

何となく、声が震えてしまいました。

けど、団長はすぐに普段通り顔になり。

「サナラが勝ったから、何か褒美がないとな。何が欲しい?」

「お菓子が食べたいです!」

「じゃ何か甘い物を買ってこよう」

「わあいつ」

その日、勝者であるサナラは色々な砂糖菓子を食べてご満悦でした。

ですがこの次の日から、団長はサナラにジオマンサーの力を見せてくれといい。

あれこれするサナラを、団長がジツと見るということが多くなりました。といつても、何か大掛かりな用意はなく。

ここ数日。団長とアトナテス、サナラは、中央の強国軍の駐屯地にいる子供達と一緒に、泥遊びをしたりしていました。

四角形に形を整えた泥の上に、サナラは手のひらに乗せた砂を落とし始めます。

ああ子供が泥に砂でコーティングする奴ですね、ジオマンサーの力を見せるとは、思っていたら。

団長は泥の上に砂を落とすサナラを、鋭い目つきにじつと見ていました。

その目に私は、見覚えがありました。

私の占星術を使つて星の導きを団長に伝えたあの時の、私の言葉が本当か試すかのような目でした。

「団長は良き出会いがありましたね！」

「ほうそれは誰だろう」

「私です！」

「いや俺だろ」

ふんすと鼻息を出すサナラに、アトナテスは間髪入れずに茶々を入れ、そのまま言い争う二人を見て。



団長は、出会えた皆が俺には良い出会いだったよと、何ともまあさらりと殺し文句を言って微笑みを浮かべると、砂を握り締め。

サナラがそうしていたように、手のひらに零れる砂を眺めます。

ただ、面白半分には紫竜の頭を作ろうとしているアトナテスや、ニコニコとしているサナラ。その他様々な泥を作ったり、投げたりしている子供達と違い、団長の表情は真剣そのものでした。

「土占い、地相術、風水。いや違うな。もっと最奥の力、地に流れる力……地脈？星が関わっているのか？」

何か、聞き慣れない言葉をぶつぶつと言っていますね。

団長は滅びてしまった小国の、書庫にある古びた書物などを。合間の時間を見つけては、読むようになり始めてから。

あの手この手の知識を、貪欲に取り入れるようになっていました。火と氷と治癒を扱う魔法使いなんて、団長しか見た事ないですが、それ以上の魔法を団長は求めているようでした。

転生の魔導士に会う手段はないものか。なんてことも言ったりしています。

転生の魔導士って誰なんでしょう。中央の強国の国王から聞いた、と団長は言っていました。

団長程の人が興味を示す魔導士。長生きした、白髭生やしたお爺さん。だったりし  
すかね。

「ああソラス。ちようどいい来てくれ」

「はい」

「これを見てどう思う?」

泥まみれの団長に言われるがままに、泥の上に広がる団長が落とした砂の模様、と言  
えばいいんでしょうか。

見ろと言われたので、見てます。

最初は、この模様の意味を見出すことが出来ませんでした。ですがふと、砂に混じつ  
た小石が天にある星に見え。

それを元に、占星術師としての観点として、その模様を見てみると、一つの単語が思  
い浮かびあがります。

「この地に力は無し、ですな」

「地に力無しか。なるほど」

私の言葉に、団長はふむと泥に汚れた手で顎を擦ります。

団長が満足する回答だったのでしようか。

遠くを見つめる団長からは、何か私達では想像できない叡智を、見ようとしているよ

うに感じました。

団長とはそれなりに長い付き合いになったとは思いますが、団長はそれでも底知れません。

「天の星、地の星。同じ星なら通じる物があるか……」

団長はあれこれと独り言を言ったのち。

「ソラス、サナラ。仲良くするんだよ」

唐突に、そんなことを言いました。

「団長がそんなことを言わなくても、ソラスちゃんとは仲良くなりたいです……よ？」

「それは私も同じですよ」

「おや、意外とサナラは私に心開いてくれてるようです。」

さりげなく、団長から引き離そうと手を伸ばしてみると、避けられ唸られました。

「いつの日か、土壇場で協力しないといけないって時が来るかもしれないからね」

「私は占星術師で、サナラはジオマンサー？で。全然分野が違うと思いますが」

「まあ団員同士、協力していこうぜって話だな団長」

「そうだな。さて、泥を落とすに湯浴みをしよう」

それからしばらく、占星術はたまにしか使わなくせして、土占いは毎日してる団長とサナラは。

その日も泥遊びのついでに、土占いをしていると思ったら。

子供達が去り、サナラとアトナテス、そして私が場に残った時を見計らったかのように、団長は口を開きました。

「サナラ、君は地脈を操れるのかい？」

「えっ」

笑顔のまま固まるサナラに、団長は追撃します。

「俺もサナラを見て、地脈を読むことは出来るようになったが、操るまでは出来なくてね。地脈を操る術は。たぶんサナラにしか出来ないと思うが違うかい？」

「えーと……な、なんのことか分からないです」

「おうおう、子供は分りやすいな」

嘘だ。サナラは嘘をついている。というよりは、つき慣れていないのか、目が泳いでます。

私ですら分かることが、団長が分からないはずがありません。

普段はすぐに返す、アトナテスの茶々入れすらも聞こえてないようです。

「最初は明日の天気の予測から初めてみて、地に流れる力を読み解き、地の力を使ってみようと思ったけど。俺に才がないのかそれが出来なかった。これがこの数日、サナラを見て思ったジオマンサーの。いや、サナラの力の、俺の予想だ」

少々厚いレポートをサナラに団長は手渡すと、サナラは恐る恐るめくり始め。

読み進めるうちに、顔が青くなっていました。

何が書かれてるんだろうと思いい、覗き込もうとしたら団長が、私を制するように手を伸ばしました。

見ては駄目、ですか。それぐらい、まずい情報なのでしょうか。

しばらく経ち、団長のレポートを読み終えたサナラは顔を青くしたまま、固まっています。

これは相当、追い込むようなことを書いてあるに違いないでしょう。

沈黙が続きましたが、団長はふつと笑みを浮かべ、サナラ頬を掴みます。

まるで、笑ってくれと言わんばかりに。

「言いたくないなら言わなくてもいい。たぶん、書いてあるような、ろくなことにならない使い道が出来るのだろう」

「……………」

こう言った場での沈黙は、肯定を意味するしかありません。

ですが、団長は決して責めるような口調ではなく、宥める様に言い続けました。

「そして、言わなかったとしてもそれを理由に、サナラを赤の団に追放はしたりはしない。もう一度言おう。俺が君と一緒にいよう」

口説き文句が上手い人だ。

サナラは驚愕し、目を見開いたまま団長を見て、決意するように頷きました。

「……分かりました。全部言います私の力を」

そして、サナラは地脈を読むとは別に、地脈を操る力の説明をした。

簡単に言えば、地脈を操り、一部の地に力を募らせ、そこに立つ人に力を与えることが出来る。というものだった。

アトナテスとの模擬戦中、一度は簡単に攻撃を防いだアトナテスに、傷を負わせることが出来たのは。この力のおかげだそうです。

そして、小国の撤退戦の時。何故かグランドクルスの威力が増したのも、サナラの地脈を操る力を、無意識に使ったからと思えば、納得できます。なんだ、便利で良い力ではありませんかと、思いましたが。問題はこの先でした。

人に地脈の力を注ぎ、寿命を延ばす。

何だそりや。が、私の最初に抱いた感想で。

ほおと、軽く答えたのがアトナテス。

そして、それに一番危機感を覚えたのが、それを予想していた団長でした。

「地脈を扱えることを、誰にも知られちゃいけない。そう何度も言い聞かされましたが、団長にはあつさりばれちゃいましたね……」

「確かに、人によつては喉から出る程の強力な力だろうね。例え力付くでも……」  
寿命を延ばす。何年くらいでしょうか。

十年、二十年。なんにせよ、長命ではない人間に、寿命を延ばせる力があると聞けば、なるほど、邪な考えを持った人間がサナラを攫い、利用するということをしでかしません。

知られちゃいけない訳です。団長があつさり見破つてしまいました。この人が色々規格外なだけでしよう。

そして、秘密を知った団長は、サナラの力を利用することを決めたようです。

「けれど、他者に力を分け与える力は、大きな力になる」

あくまでも、自分の為ではなく、誰かの為に。

「サナラ。色々と分かった後だ。君の力を利用するような物言いになってしまふが。だからこそ言わせて欲しい。俺に、サナラの力を貸してくれ。魔物から皆を助ける為に、平和の為に」

サナラは団長の言葉が真意なのか戸惑い。再び目を泳がせます。

けど、サナラには分っているはず。団長はサナラの力を、悪いようには使いはしません。

力があるうが、なかるうが。そこに困っている人がいれば手を伸ばす。

それが赤の団団長です。

例え、サナラがちよつと地脈を操る天才だからという理由で、サナラが困ったときに、団長が手を伸ばさない理由には、ならないのです。信頼していい人なんです、団長は。

「分かりました団長、私の力を使ってください！」

サナラはコクコクと頷き、こくりと頷き返す団長を見て泣き出し、団長に飛びつき。

団長はサナラの背を優しく撫で続けました。

そして、泣きつかれたサナラをアトナテスに預けた団長はふと、私に呟きます。

「ソラス」

「はい」

「君も……いや、なんでもない。そうならないのが一番だ」

団長は何を言おうとしたのでしょうか。

私達を置いて、一人で歩み去っていく姿に、何か不安な物を私は感じました。

本当に、出会いと言うのは不思議な物です。

助けて。生きてくれ。

英雄王のその思いが、サナラを救い、彼女は後の英傑になりました。

大地を紡ぐ者サナラ。



明るく元気な言動に、人々を勇気づけさせ。

地脈操る力を操り、他者に力を与える。

それが、伝記にあるサナラでしょうね。

そうです。

サナラが寿命を、自身以外の寿命を、操ろうと思えば、容易く操れるという記述はありません。

英雄王は生涯、サナラのその力だけは、何があっても口外しませんでした。

知っているのは、後に英傑と呼ばれる私とアトナテス。それに、本人から聞いた王子君ぐらいでしょうね。

後から出会う英傑達は皆すでに長命でしたし。

そして、記憶さえ封じなければ。

私と同じく。英雄王の最期まで付き添い続けたといえる、英傑の一人でした。

## エピソード7 それは後の王国

サナラが赤の団に加入してから、早くも半年は経ちました。

その半年の間に、大国は魔物の攻勢にまだ耐えています。

いくつかの、戦う力のある小国以外は国々はいくつか滅びました。

その度に、赤の団は彼らを助けに向かいます。

そして避難民を抱えて帰ってきます。

けれどその日。ついに、その時が来ました。

「もう、中央の強国が抱えられる難民の限度を超えた」

怒る訳でも悲しむ訳でもなく、ただ粛々と現実を受け入れ、団員に団長は告げました。

中央の強国が抱えるには、避難民達があまりにも増えすぎましたのでしよう。

受け入れ拒否です。

ですが、これは仕方のないことです。魔物が物質界を荒らして回るたびに、少しずつ、

少しずつ。

生きていく為の基盤が壊されています。

彼等を、哀れな被害者として、救う手はもはや、物質界で最も強い、中央の強国とて

容易に伸ばせなくなりました。

ですので、団長は彼らを赤の団に加えました。

彼等を、助けるだけ助けて放置することは、魔物が跋扈する世界に、無責任に放り投げることと変わりません。

端的に言えば、死を要求することと変わりません。

団長が、それを容認するはずがありませんでした。

この頃から、赤の団に非戦闘員は存在せず。という暗黙の規則は形骸化し始めました。

難民達の中にも、戦う意志を持ち、剣や弓、杖を握る者は現れましたが。

全員が全員戦う意志を持たない訳ではありません。生気を失った目をしたまま、ただ死にたくないから赤の団にいる。

そんな、戦うことを諦めた人達もいます。

でもまあ戦わないからという理由で、食事出さない訳にもいかず。

また戦わないのに、無償で食事を提供するにも限度があります。

代わりにといったっては何ですが。

「団長何してるんですか？」

「皿回っ」

「意外と難しいなこれ」

いつだかのように、樽に乗りながら、団長は両手に棒を持ち、その先で木皿を器用に回しています。

アトナテスは紫竜さんに乗っていました。ですが、ポロポロと木皿を落としては紫竜さんが拾い上げてます。

大道芸ですね。はい。

何でこんなことに。

「ソラスちゃんもどうですか」

「あっはい」

サナラから手渡された棒に木皿を乗せて、クルクルつと……あれ、落ちました。

むう、棒先と皿底の位置をじゃなくて！

「だから、何をしているんですか団長!?!」

「色々とやってみようかと思ってるね」

問い詰めてみるが、団長は惚けたような感じを崩しません。

そして、何人か。剣士としても、弓兵としても適性があまり良くなかった元避難民達に、皿回しやら、ジャグリング、ナイフ投げを教え。果ては、ただの村娘だった女の子に、踊り子として育成するとか言って、アトナテスと酒飲みがするような、肩を組み泥

酔ダンスを始めたり。

「とうー！」

「イエー！」

どこかの国にありそうな、ワルツをサナラと踊ります。  
実に楽しく。

まったく。どうせなら私と……いえいえ、流されてはいけませんソラス。

私がすっかりしないと、この三人いつまでも遊び続けます。

「ソラスも一曲いかがかな」

差し出された団長の手に、私は反射的掴んでしまい、足が勝手に動き出します。

もう、一曲だけですからね団長。

こうして、大道芸やら踊りやら、戦いだらけの世界に。魔物の襲撃をもともせず、各地に現れ娯楽を提供する。

赤の団の曲芸団が生まれました。

魔物の影響で、迂闊に世界を回れなくなり、離散した曲芸団の代わりに私達赤の団がその役を奪い、もとい行うことで。

少なからず収益を得て、そのお金で高騰しつつある物資の補給を、赤の団が自前で行いました。

蛇足ですが、興行している内に自信がついたのか。ある道化師やダンサーが戦場に立ち。彼等を見ることで、兵士達にやる気がでた。なんてことがありました。

「団長何してるんですか？」

「鍛冶」

「団長これは、地脈の力が。それはもう、溢れんばかり受けた良い鉄ですよ！角の形にして、アトナテスの紫竜ちゃんに被せて角を増やしましょう！」

「却下だ」

「何ですかー!?アトナテスは紫竜ちゃんにおしやれさせたいと思わないんですか!?」

「あれで最高なんだよ相棒はー」

騒ぐアトナテスとサナラを他所に、カーンカーンと、団長は鉄を叩いていたと思っただら。

唐突に。国を失ったばかりの、鍛冶職人の女性に、そのハンマーで俺に殴りかかって来いと言い。団長は、その鍛冶職人のハンマーを叩いていた鉄の延棒で受け。ふむと頷き。

「悔れないな」

そうポツリと言葉を零すと、頭に疑問符を浮かべている鍛冶職人を他所に、再びカー

ンカーンと鉄を叩き始めました。

ちなみに団長が鍛錬した剣は、初めてとは思えない天才だ。職人氣質が多い鍛冶職人の方が、そう謙遜なく褒める剣が出来上がったそうです。

後日、戦場に鍛冶職人が出撃するようになりました。鍛冶諸君達は生粋の戦士ではありませんでしたが、普段が普段の作業だけに、必要とならばハンマーで魔物を殴り倒し、また破損した武器をたちまち治す鍛冶職人が前線に来てくれると、何かと便利らしく。ソルジャーやヘビーアーマーの人達が喜んでいました。

また、鍛冶職人達の技術を各地の集落や村に、戦い以外の困りごとの対処をさせたりもしていました。

「団長何を——」

団長がいると聞いた部屋に入り、言いかけた言葉を、団長が指を口に当てる手振りに慌てて閉ざします。

団長に対するように座る人物が、身なりのいい、おそらく商人でした。

何か、重要な話をしていると察して、退出しようと思つたら団長に呼び止められたので、団長の隣に立ちます。

直立不動です。はつきり言つて、気の利いた言葉を出せる気はしませんでしたので。出来るかぎり石像でいようと思ひました。

「紹介致します。こちら赤の団の占星術師ソラスと言います。彼女の占星術にはいつも助けられています」

「ああ貴方が、例の撤退戦で名を馳せた、占星術師ソラス殿ですか。美しいお嬢さんですな」

「ええ、彼女は絶世の美女ですよ」

えへへ、絶世の美女ですか。世辞でも悪い気分ではありませんね。

団長。私に世辞だと思われたくないなら、ぜひとも、もつとロマンチックな雰囲気な時にもう一度言ってくださいね。

そしたら、もつと本気になる事間違いないですよ。

まあ頬はにやけてしまってますがね、でえへへ。

何て思っている内に、団長と商人さんの話は終わったようです。

やれ塩や砂糖、武器の仕入れたの、曲芸団を向かわせるだの、色々と話合っていました。

つまるところ、商談です。団長は普段から、中央の強国の国王とは話をしているようでしたが。

最近は商人のようなことも、始めたようです。

団員達の中に元商人がいたらしく、その人の交渉手段を参考にしているみたいです。



そして、お互いに笑顔のまま握手をしていたので、たぶん上手くいったのでしょね。  
「団長話はどうでした？」

タイミングを見計らったように、サナラがやってきました、サナラはどうにも感が良いです。

団長が忙しくなる直前に、サツといなくなったと思つたら、落ち着けるといふタイミングになると、どこからか現れます。

その為か、この頃私は団長と二人きりになったのは、執務室で書類と敵対している時くらいです。

「明日にでも砂糖菓子が手に入る。子供達と分け合おう」

「わあい！」

はしやぎ、飛びつくサナラを団長は優しくその頭を撫でます。

その姿は兄と妹のよう……いえ、サナラは童顔なのに、なかなかどうして強力な物胸を持っていてます。

そしてそれを、惜しげもなく団長に押し付けています。

まさか、あれは計算された所作なのでは。

じつと二人の姿を見ていると。

「団長、ソラスちゃんも頭を撫でてほしいみたいですよ」

「えっ」

思わぬサナラからの狙撃に、私は硬直し。

団長は私をじつと見つめてきます。

やる気ですか。団長、やっちゃうんですか。

え、ええ。いいですとも、私はいつでも構いませよ。

労わる様に、優しく、出来る事ならサナラより丁寧に撫でてくだ――。

「サナラ。ソラスを困らせちゃいけないよ」

「はあい」

団長は微笑みを浮かべ。サナラはサナラで、団長の胸板に、顔をすりすりとしていまして、羨ましいいいいい。

団長の体に触るなんて、私には何か月に一度のイベントだというのにいいいい。

内心沸き上がる感情を私は押さえつけます。

私は赤の団占星術師ソラス。常にクールでミステリアスな女ですとも。

ええ。

もう！。

こうして、団長は赤の団でも難民を受け入れ始めてからというもの。戦い以外に、本当に色々なことをやりました。

何の為。答えは単純です、誰も飢えさせない為です。

中央の強国からの支援自体はまだありますが、それでは私達が抱えることになった難民達。全員の食糧となると足りません。

そうなると、自分達で食糧を確保するしかありません。

土地を持たない私達が農耕。無理です。ならほかの手段しかありません。

遊牧も、団長は視野に入れたみたいですが、家畜を囲うとなると、移動できる道が途端に限られます。

そうなると、神出鬼没の魔物の対処が、攻めるにも守るにも遅れます。

誰かが言った。兵は神速を尊ぶの真逆です。団長はそんな愚を選択はしません。

道化師やらダンサー、鍛冶職人、商人。それらは常に移動しながら営みを送る赤の団が、利益を生み出すのに、最適な仕事でした

一部戦闘で何かと効果を上げたのは確かですが、原則はお金の為、そして食糧を手に入れる為です。

可笑しな話ですよ。

誰よりも、誰かを助けたいと言った団長が。誰かを助けるよりも前に。赤の団を潰さない為に、その才能を様々な方向へ使い潰し。団員達を守る方向へ舵取りを初めています。これでは、魔物と戦っているだけで、利益を追い求める傭兵団と変わりません。

もつとも、それで現状。私達が誰も飢えていない以上。

次から次へと、その才能を使い着実に利を生み出す。

団長と言う大きな存在に、団員皆が寄りかかっていることには違いありません。

私は占星術師。星を見て導き。星を降らせ魔物と戦う。

それは出来ても、それで団員達を飢えさせない為の知略も、才能ありません。

ましてや、組織を運用する力、カリスマなんて。

非難なんて、赤の団にいる人間が言う資格がありません。

誰かが言ったのならば。少なくとも、私含めて三人は苛烈な怒りを持って、対処して  
いたことでしょう。

幸い、そんなことは起きませんでした。そういった団員の感情のコントロールまで  
も、団長は丁寧に行っていました。

何から何まで、団長が一人で。

団長は今でも、魔物を嗅ぎつけては一人で走り出すことがあります。

でも、誰も置いていこうとはしません。

その結果。

団長と言う多くの才持つ、遍く人々に手を差し伸べる巨鳥が。助けた人々という枷に  
より、雁字搦めになろうとしています。

団長が、団長である為に。

皮肉な話ですよ。

団長の足を引っ張りたくないと思っていたのに、気が付けば、ちよつと占星術が使えただけの、足を引っ張る団員達の一人に仲間入りですよ。

情けない話です。

もつと頑張らないと。

具体的には……。

ここで、サツと案が思い浮かばのが、私と団長の決定的違いでしょうね。

「さて、やってみようか」

「おっし狩りだ狩り」

「おいしいキノコをたくさん採りますよー」

弓と罟。今度はレンジャーですか。

森へ行つて狩猟を試みる見たいです。

本当に、団長は多才です。やろうと思えば何でも出来そうです。

本人が望むならば、何でも。

今日も今日とて、悪しき魔物を討伐する赤の団は、魔物が蔓延る陰鬱な世の中ですが。

今日も飢えることなく元気です。

右を見ても、左を見ても。どこを見ても、笑みがあります。

今日の芸は上手くいった、この前の商談が上手くいった。

訓練で良い成果を上げられた、難しい魔法が使えるようになった。

様々な笑みが、零れていました。

「ソラス、星を見ないか」

そう、嬉しい誘いの言葉をかける団長だけは、笑っていませんでした。

その日は珍しく、アトナテスもサナラも団長の側にいませんでした。

何か、用事があるのでしょうか。はたまた、団長は実は撒こうと思えば、いつでも二人を撒けたのでは。

東の方にある大国出身の人から、隠密なる極意を学ぼうとしていたと聞いたので、その効果でしょうか。

美しい夜空が私達を見守り中、私があればこれ考えていますが。

団長はぐしぐしと、手のひらで目元をマッサージュをしています。

疲れているんでしょうね。

戦い、執務して、戦闘員、非戦闘員問わず指導して、何やら勉強をして。

団長は短い睡眠時間以外、一人で静かに落ち着いて。団長と言う肩書を脱いで、呆けてる暇があるんでしょうか。

いえたぶん。ないです。もはや誰にも団長の隣で、執務していることを疑われなくなり。サナラとアトナテスと、多くの団員達と共に、常にあれこれとしている団長を見ている私が断言します。そんな団長を見た事がありません。

だからたぶん、この時間は私が何かしなければ団長が、休むことが出来る特別な時間。……特別？え、もしかしてこれ特別なんですか。特別って言つていいのでしょうか!?

「ソラス」

「はい」

名前を呼ぶ声音で悟りました。

あつ、これシリアスですな。

ふざけたこと言ったら、団長に心底呆れられそうです。

「限界が来てる」

「限界ですか?」

「ああ、赤の団は今までと、全く異なる運営をしないといけない。そういつた時期が来たと言えるね」

限界、異なる運営。

それに私はピンと来ました。なるほど、アレですな。

赤の団は連日。

正規軍となり、一軍の将として国を守らないかといった話を、中央の強国含めた色々な国々に、持ちかけられています。

元を辿れば冷笑されることもある。人助け集団だった赤の団を思えば、破格の待遇です。

ですが当然ですね。団長は巷では、武と知と魔。そして勇と慈を兼ね備えた英雄と呼ばれ。

アトナテスが訓練し、サナラが地脈の力で団員達の力を底上げし、私が魔術の指導した団員達の中にも、名が知られ始める人も出てきて。団長曰く。銀や金の如き輝きを持つ人達が、増えたと言っています。

こと武力だけは、どこの国と戦うことになったとしても、勝てなくても、乗り切れると自信を持って言えます。

そんな私達赤の団が正規軍として、まあ懇意にしている、王様との仲も悪くない中央の強国でしょうね。強国の一員として戦う。

なるほど、いいアイデアでしょう。少なくとも、団長が飢えさせない為にと、あれこれ苦心しなくてもよくなり。

団の皆が魔物との戦いに、集中できるようになるでしょう。

けど、初志貫徹な団長が、中央の強国の正規軍になるのかと思うと、ちよつと意外で



す。

団長がこの手の誘いはもつと前から。それこそ、赤の団発足した時点で、中央の強国の王様から直々に誘いがあったようですが、団長はその度に断りを入れていたようです。

正規軍になるということは、その国の為に戦うことになります。そうになると、気軽に国境を超えて、魔物に襲われる人達を助けに行くことが難しくなります。

団長は、誰かを助けたいのではなく、誰であつても助けたいのです。

そんな赤の団の信念ともいえるものを、団長が変えるのか、と思っちゃいました。

……いえ、だからこそ。団長は限界と表現したのでしょね。

例え信念を変えることになつても、私達赤の団が離散しないように。

私達を思つてと思うと、情けなくもあり、嬉しくもあります。

「ただまあ上手くいくかどうかと思うと、心配でね」

「団長でも心配するんですね」

「当然さ。俺をなんでも出来ると言う人がいるが。そんなことはないさ。俺でも失敗はするよ」

「本当ですかあ?」

「困つたな。俺はいつからソラスに超人扱いされるようになったんだい?」

薄く微笑む団長に、私も笑ってしまいました。

そして、出会った時から、という言葉は飲みました。

それにしても、団長が心配をするなんて。いえ、団長も心配して当然ですよね、団長とて一人の人間ですから。

なら、それを解消して見せるのが、占星術師のソラスの出番ですね。

任せてください団長、ドーンと解決させますよ。

「ですが団長、心配ならそれを解消するいい手がありますよ」

「どんな手だい？」

「空を見よ！」

ズビシッと指先を空に指します。

「……………」

「……………」

沈黙ですか。止めてください恥ずかしいです。

何された訳でも、何言われた訳でもないのに、顔に熱が集っているのを感じます。

もつとこう、決め台詞が似合ういい女にならないと、こういった台詞は言っちゃいけないですね。

学習しました。だから、いい加減何かしら反応してください、本当に恥ずかしいです

!

「空か」

一考してから、団長は空を見上げ。

「星の導きかな」

微笑むその姿に、何か寂しさを私は感じました。

「えっと……」

そうです星の導きが団長を見守っています。

と言うつもりでしたが、その寂しい笑みに、何故か言葉を紡ぐことができずして  
た。

きつと、直感で団長が求めている答えではないと、分かりました。

「あの、そのなんというか。えっと、そのーあれですー」

言うつもりだった言葉が出せないとなり、私は慌てふためきます。

おかしいですよ、言いたい言葉は見つかっているのに。

「うう……」

慌てふためき、落ち込む私を団長は何も言わずに、信頼を感じる目でじつと見守つて  
くれます。

いつものように、いつかのように。

気が付けば、私は団長の暖かな手を取り。

その手を、それなりに膨らんだ胸の下、トクントクンと動く心臓に当てます。自分でも、とんでもないことをやっている自覚はありましたが。

これだけ伝えないといけないと思っていました。

星の導きではなく、私の言葉を、想いを。

「団長ならきつと出来ますよ。私はそう信じています」

団長は、目を見開き。

ゆっくりと前髪の奥にある瞼を閉じ。

頬を少し赤くしながら柔和な笑み、赤の団団長でもない、英雄でもない。

この頃、名乗るまでもなく赤の団団長と知られているので、使われなくなった名。アルトという、一人の青年の笑みを浮かべた。

そう、感じたのは私の驕りでしょうか。

「俺なら出来るか……」

小さな声を共に、団長の瞳が開かれました。

「ありがとうソラス」

そう言った団長には、決意を秘めた表情を浮かべていました。

ああもうどうしてこう、決意を固めた男性は、魅力的に映るのでしょうか。

もう何もかも差し出してしまいたいそうです。

今直接、私の心臓の鼓動を感じている団長には、私の考えが筒抜けでしょうね。顔を真っ赤にしながら、笑うしか私には出来ませんでした。

その後私達は眠る時間を惜しみ、一秒一秒の時を感じながら。

二人で星を眺め続けました。

もし、この時団長が襲っていたら、私は抵抗でき。いえたぶん、しなかつたでしょうね。

お互い、色を知る歳と言われたら否定できませんのに。

団長はそういったことは、ある種合意ならばやりたい放題しても咎められないのに、全然しませんでした。

団長にとつて、赤の団にいる全ての人は、守るべき対象だったからでしょうか。

私とて年頃の女です。そりや男の人を意識したことは、ありますが。

だからといって、誰にでも体を許す気はありませんよ。当然です。

そうなると、許す気のある男性。

……はい、はつきりいって団長ですね。本人はその気はないでしょうが、スキンシップが過剰な、可愛らしいサナラがあまりにもベタバタするものだから。私も焦り。

執務室で二人きりの状況にこれ幸いと思ひ。さりげなく、上着を脱いだりしたり。団

長との距離を詰めたり等、多少アプローチを仕掛けたことがあります。

それでも団長は反応することはありませんでした。

結局の所、私もその他の団員達と同じく、団長には一団員としても、女としても重要視されていないのでしょうか。

そう思ったら……悲しいですね。

翌日。赤の団は進路を変えました。

中央の強国の方へ行くと、私は思っていました。

ですが、団長が行く道は私の予想とは異なり、中央よりも西の方へ。

すでに滅びた小国達が、かつては土地を巡って争っていた。肥沃な森林地帯へ。

ですがそこにはもう、人がいません。

人々が争いを止め、自国の防衛すらままならず滅び、魔物が支配する土地となっています。

わざわざと、団員達が団長の意図が分からず騒ぎ出します。

私達赤の団は、人を助ける為に行動しているので、人がいないと分かり切っている場所を向かう理由がありません。

すたすたと先を行く団長に声をかけ辛いためか、何人かが、私に説明を求めましたが私にも分かりません。

「団長には何か考えがあるんだろ」

アトナテスが能天気と言えば聞こえは悪いですが、そうとしか思えないので、団員達はそれで一応は納得します。

そして、森の奥。少し開けた場所に到着すると、団長はくるりと振り返り。

「皆、聞いてくれ」

そう言ったので老若男女問わず、団員達は団長の声を聞き静まり返ります。

「私」達は魔物達に家族を、故郷を奪われた。そして、それに悲しみを怒りを、皆は抱いたはずだ。例えそうでなくとも、魔物が人々を襲うたびに生まれる悲しみに、心を打たれていない者はいないと、私はそう思っている」

団長の言葉に、アトナテスは頷きました。

彼は何かと経歴不明です。どうにも、過去に恐ろしい師匠がいたとかなんとか言っていましたか。

魔物に襲われ、滅びる集落、村、国々を団長と共に見ていく内に、思う所があったのか。

出会った頃、人を救うと言われても、ピンとこないと言っていましたか。

今では、団長と同じく。魔物が困った人がいると聞けば、団長が指示するまでもなく、率先して戦いに赴くようになりました。

「私達は奪われ続けた。そして、その悲しみは世界中あらゆる場所で起こっている。その規模は大きく。大国すらも魔物によって滅ぼされようとしている。このままではやがて。諦観の内に、魔物と戦い果てるのではなく。人と人が、残り僅かな物資を求めて争い減じる」

団長の言葉に、サナラは頷きました。

お菓子がこの頃、食べられなくなっているみたいです。高価が理由だけではありません。お菓子の原料になる物がないのです。

それだけならまだしも、少しずつ本当に少しずつですが、団長の指示で一食の量が減り始めています。

どこもかしくも、魔物が穀倉地を踏み荒らしていくので。

物質の供給が滞り始め、贅沢品を生み出す余裕がないのです。

贅沢品を生み出せなくなると、それ以上の被害を受けると、今度は必要な物ですら生み出せなくなります。

悪循環にすではまっているのに、魔物がいつまで経っても全滅しないので、抜け出せなくなっています。

「だから私達は私達の手で、食べ物を作り、衣服を作り、住居を作り始めなければいけない。私達が、魔物と戦い。人々を助ける。そんな私達、赤の団であり続ける為にも。



今は、食事をこの豊かな森から恵みを貰おう。そして、森を拓いて、鋤を手にして、大地の実りを手にしよう。衣服は今では買うしかないが、少しずつ糸を紡ぎ布を服にしよう。あとは皆で家を作ろう。最初は、木と泥の家ばかりで頼りないだろう。魔物から守ってくれそうな立派な壁、頑丈な石造りの家なんて夢のまた夢だ。でも、それだけあれば、今の私達なら十分暮していける」

団長の言葉に、皆が頷きました。

すでに、泣いてる人もいます。家族を奪われ、故郷を奪われ、どこもかしくも魔物に奪われる世界で。食べ物を作り、服を作り、家を作る。赤の団に入ってから、色んな事をしている内に。そんなかつてはあった生活、忘れそうになった当たり前を、一緒にやろうと言う人がいるのです。

人の形をした希望が、私達の前に居たのです。

「私達は、私達の手で住むところを作るんだ。だから、ここを赤の団の拠点として。ここから。物質界の人々を助ける手を伸ばそう。私に賛同する者は、私と共にここから、私達の生活を取り戻すんだ！」

団長の声が、私達の心を震わせました。

「団長！団長！」

「うおおおお！俺は団長に付いていくぜ！」

森の中、歓声が上がります。

反対し、赤の団から離れようとする人は誰もいませんでした。

それにしても、団長には毎度驚かされますね。

私はてつきり中央の強国の正規軍になると思っていました。

団長は私の想像を、軽々と上を歩きます。

私達が赤の団でいる為に、赤の団で拠地を構え、赤の団のまま人を救い続ける。

こんなこと、団長以外誰が思いつき、誰が実行できるでしょうか。

本当に、団長は凄いです。

「よし、さっそく行動開始だ！」

団長の指示のもと、赤の団の拠地を作り始めます。

忙しくなる。そんな予感が、何だか嬉しいと思いつつながら、この活気あふれる光景を胸

に刻みました。

こうして、赤の団の、拠点が生まれました。

まだ、国ではないです。拠点です。これ重要です。

ですがまあ歴史と言うのは不思議ですよ。

ただ川があつて、森があつて、平地もあつて、行こうと思えば海もいける。

そんな理由で、英雄王が選んだ土地が、千年経っても続く王国の始まりの地なんですから。

## エピソード8 謁見

赤の団の拠点作りは、順調に進みます。

木を切り倒して、それを薪にしたり家にしたたり。

土地を耕し、種を植える。

成果が出るのはしばらく先ですね。

サナラが地脈の力を操って、土を活性化させます！とか言っていたので、案外すぐかもしれません。

一週間もあれば、そこそこ見れる拠点になり。

魔物も今の赤の団なら、余程大規模でなければ、団長抜きで撃退できます。

軌道に乗ったというのは、まだ早いですね。

さて、今団長は。というより。団長と私、アトナテスの三人は、中央の強国の首都にいました。

正規軍の話を正式に断りを入れることと、赤の団で拠点を作ったということとを、中央の強国の王に告げる見たいです。

中央の強国とは、常に仲良くしてはいたのですが、そうあり続けるとは限りません。

拠点の位置を知らせるのは、何かと不都合が起きるのでは。と、意見は出しておきましたが。

団長としては、これだけは、やっておかないといけない礼儀だそうです。

そして、普段ならば、団長が一人で向かう所ですが。強国の王直々に、私とアトナテスに会ってみたいと言われたらしく。

今回は、三人で強国の王に謁見することになりました。

玉座に入った直後に思ったのは、豪華絢爛でありながら、どこか歴史を感じさせる。

と思ったのが、私と団長が執務してる部屋が、立ててまだ一月も立たず、必要な物以外置いてないので、殺風景過ぎたからでしょうね。

玉座に座る。初めて見た見た強国の王の見た目から抱いた印象は、優し気なお爺ちゃんでしょうか。

ただ、目は団長と似て、何か決意を秘めているかのようなものに見えました。

この人が、赤の団の支援者。

無謀にも、殴り込みをかけた団長の力を認め。その信念を受け入れ、そして支援した王。

ただ者ではないでしょうね。団長が懇意にしてる唯一の国の王様なんですから。

「久しぶりです。強国の王よ」

背を伸ばし、スツと腰を曲げて、左手を胸に当て、団長はお辞儀をします。

ただそれだけの動作ですが、とてもスムーズで様になっています。

私とアトナテスもややぎこちなくですが、アトナテスは団長と同じく。

私はスカートの裾を掴んで、片足を後ろにしてから膝を曲げてお辞儀をしました。  
よ、よし。これであとは石像のように固ま。

「そなたが、赤の団の占星術師ソラスと、魔竜騎士アトナテスか」

王様に話しかけられ、私は固まりそうでしたが。

話しかけられることは事前に、団長から聞いていましたので。

「は、はいー」

返事は出来ましたが、声が完全に上ずっています。

うう恥ずかしいです。

アトナテスは、ああ。と、無作法ですが胆力があるので、私と違って緊張はしていないみたいです。

「ふむ。団長が日頃から、そなたらには特に支えて貰っていると聞いていてな。ぜひ一度会ってみたいと思っていたので」

につこり微笑みながら、嬉しそうに話す王様の声音に、恥ずかしくてちよつと顔を俯かせてしまいます。

アトナテスも、さりげなくそうして。あらあら耳が少し赤いですね。そうですか、団長が私達を。

日頃団長には、感謝の言葉を聞いていましたが、第三者からこういったことを聞けると。

むふふ、何とも心地のよいむず痒さがありますね。

「なるほど。可愛らしいお嬢さんに、頼もしい騎士だ。団長は良き仲間巡り会えたようで、余は嬉しく思う」

「あげませんよ。王よ」

「ああ、分かっている。だが団長ら、赤の団の活躍を聞くと、この老骨の血が滾り。余にもまだ出来ることがあると思えてくる」

「出来ますよ。貴方ほどの王なら、今からでも」

「はっはっ。団長は英雄と呼ばれ始めているが。出会った頃から、謙遜を止めぬな」  
「恐縮です」

王の言葉に、団長は笑みを浮かべました。

なんだ、思ったよりも格式張ることはなく、親し気じやありませんか。

時折、団長は大胆な言葉遣いで王と会話をしています。周囲にいる家臣達も特に咎めることなく。寧ろ、朗らかに。時折団長と王の言葉に混じったりしています。

礼を尽くせば、相手も礼で返してくれる。親しもうとしたら、親しみで返してくれる。そう思ったら、途端に緊張感が抜けていきます。

「ソラスとアトナテス。そなた達も余に話を聞かせてはくれんか？」

王の誘いに、私とアトナテスも、すらすらと話すことが出来ました。

王は私とアトナテスの会話を、よく聞いてくれて、よく反応してくれます。

そうしていると、ああこの人はいい人だ。そんな直感が私に告げます。

団長が、懇意にするはずです。身分関係なく仲良くしたくなる。王はそんな人柄でした。

そして、多少の世間話を終えて、話は本題になりました。

赤の団が拠点を持つという話です。

「赤の団が拠点をもち。そこからこれまでのように、全国各地域に赴き、魔物を討伐。現地の人々が求めるならば、赤の団の拠点に受け入れる所存です」

「ふむ。して、それはいつまで続くのだ？」

「物質界に蔓延る魔物が消え、世界に平和が訪れた時まで」

「ほう、だが魔物は神出鬼没。団長には魔物の出現そのものを、止める手立てはあるのか」

「あります」



えっ。と内心驚きを隠せませんでした。

魔物がいる。魔物がどんな存在で、どんな種類がいる。そういった事は知っていますか。

何故魔物が大量に出現するようになったか。という事に関しては、分っていないはずですが。

団長はそれを、止める手段を考えていたようです。

さすがですとは思いますが、こういった大切な話をもっと早くしてほしいですね。

言われたところで、私に何ができるかは分かりませんが。

「私には数年前より始まった。魔物の増加と、物質界の侵略を、ある者の仕業だと確信しています」

「それは誰か」

「……魔を統べる者、魔の頂点に立つ者。即ち『魔王』。かの者を討つ。さすれば魔物達の増加は止まり。魔の旗印を失った魔物は物質界の侵略を止めるでしょう」

魔王ですか。まるで空想話のような話でしょうが。

いるんでしょうね、団長がそう言うならば。

そう思うと、何だかそれを倒さなければいけない。そして、魔物の脅威がない世界を取り戻さないといけない。

そんな、使命感が湧いてきます。

「魔王か……団長は魔王を討つことが出来るか？」

「やります」

一切の迷いなく。決意を秘めた表情を浮かべる団長に、周囲にいた人達がそろっておおと感嘆の声が上がります。

団長なら、やってのける。私達だけでなく、中央の強国も団長なら出来るに違いないと、そんな期待が込められているように思えます。

王も、団長の言葉にゆっくりと頷きで返しました。

「団長よ余はな。避難民達を受け入れることができなくなったことを、申し訳なく思っている。条約もなく、所詮ただの、王を脅した下賤な男の口約束など、無視せよという家臣の声もあつたな。だが、この約束は余と、余の前に一人で立ち。余の心震わせた団長との、男同士の約束だ。余はそれを破ってしまった。本当に申し訳ない」

「気にしておりません。いずれその時はくる。そのことは最初から分っていました。寧ろ今まで助けるだけ助けて、避難民達の生活を王に託してしまうことを、私は常々無責任と思っていました。一時助けた者よりも、ここで難民と暮していく内に。王の慈悲に感謝する者も多いと聞きます。王は、私のような無作法者の約束を、守っていただきました。感謝の念しかありません。どうか、気に病むことないよう、お願いします」

「……すまぬな団長よ。だが、それでは余の気が済まぬ。ひとまずは団長の言う拠点の設立を、余の国では認めよう」

パツと、団長の顔が晴れたのが見てわかりました。

今回の会談は、この言葉だけでも成功と言えるでしょう。

団長は拠点設立。言つてしまえば土地を持つ事を、やや博打と思つていたようです。

私達が国境を越えて人助けをしていると言えば、聞こえはいいでしょうが。

その国の事情何て、無視してることが多いです。気にしていたら、その内に魔物が、村や地域を滅ぼしてしまいますからね。

ですが、私達はやつてることがやつてることだけに、名声が高まるにつれ。

各国の民衆からの反発を恐れた、王様達は私達を無視しました。

理由は私達は、潰そうと思えばいつでも潰せるからです。

いくら武力があつても、食糧を育てる土地がありません。

土地がないので食糧等は中央の強国を始め、各国からの補給頼りなので、止められでもしたら飢えます。

もし誰かから奪えば、今までの名声は無となり。それこそ野盗と変わらなくなるので、出来ません。する気もないです。

なので、今まで私達はある意味、国からしたら脅威でもなんでもありませんでした。

ですが、土地を持つことで、無視される利点が無くなります。

英雄とも謳われる団長が、土地を持ち、食糧を生み、兵士を集めたら。

あつという間に、国の出来上がりです。

そりや普通の王様なら面白くないでしょうね。

私達の今までの行動は、赤の団国の国民を生み出す為の行動だったと、揶揄されかねません。

だからこそ、団長にとって拠点という表現も、それらを避ける為の物です。

あくまでも、国ではなく。魔物の脅威がなくなるまで、自立して行くための拠点。

屁理屈と一蹴されたら、それまでです。

だからこそ、団長は王の言葉に喜んだのです。

「そして、団長に送りたい物がある」

おや、何でしょうか。

王は執事にアレをと命じ、執事の人は。

本当に持つてきてきてよいのですか。そんなことを言いたげな表情を浮かべていました。

一体何でしょう。ちらりと団長を見てみますと。珍しいことに団長も、王の真意が分かっているのか、困惑の表情を浮かべていました。

数分後、布が被せられた。見た目から鎧立てですかね。そんなものが運ばれました。

布の下を知っているのか、一部の人達がまさか。と小声を出しながら、ざわつき始めました。

それがただ物ではないことは、周囲の反応で分かります。

本当に何なんでしょうか。

周囲の状況を他所に、王は口を開きます。

「……今より千年も前のことだ。そこでも、今のように人と魔の戦いがあり、魔物の襲撃に、様々な悲劇を生んだ。それこそ、人々が家を捨て、土地を捨て、国を捨て。薄暗い洞窟の底で、ただ死を待つのみという話もあったようだ」

昔にも、そんなことが。いえ、そういったことがあったから、私達は魔物を見て、ゴブリンやらデーモンといった区別がつくのです。昔の人達が、悲劇に嘆き。それでも後世に知識という力を託し、今私達はその恩恵を受けています。

「そんな絶望の前で嘆く人々の前に、女神は舞い降り。ある男に贈り物をした」  
王が言うような、戦いの中で生まれた数々の話も神話として残されています。

そして、その証拠であるかのように、世界には数々の神器と呼ばれる物や、神から加護を受けた武器が存在します。

バツと、布が外されると。

白を基調とし、各所に金が散りばめられ高潔なる勇ましさを感じさせる意匠。

守護するように、出現しては消える青い結晶の光に、神々しさを感じる。

それは、素人目でも人の手で作られていないことを、確信させました。

「贈り物の名、それは『アイギスの鎧』。我が国の王族が代々引き継いできた神器だ」  
ここまでくると、さすがの私も何となく、王の意図が伝わってきます。

「団長よ、余は思うのだ。今の物質界には二つの力が求められている」

王は、左手を上げる。

「一つは、魔を討ち滅ぼす強さを持つ、英雄の力」

王は、右手を上げる。

「もう一つは、人々を束ね導く、王の力」

ああこれは王族の証である鎧を送り、王の血縁者と婚約し、血の繋がりを持つことで英雄、つまり団長と。王、つまりは強国の王が互いに手を取り合い、魔王を討伐するって話でしょうか。

団長が、中央の強国のお姫様と婚約ですか。

嫌だ――。

……いえ、とんでもない話になりそうと思つたら。

パン、と王が手と手と合わせ、祈り手になり。

続く王の言葉に場は静まり返りました。

「この二つを兼ね備えた者、それ即ち『英雄王』」

……………え？

その瞬間私の頭が、混乱しました。

英雄にして王。王にして英雄。

英雄王。

物質界において、その称号を名乗るに相応しい人物と言ったら、一人しかいません。この考えに思い至ったのは、どうやら私だけではないようです。

一斉に視線が、団長に集まります。

「どうだ団長。この鎧。受け継いではくれぬか？」

王の言葉に、私は団長が冷や汗をかくということを、初めて知りました。場が沈黙のまま、固まります。

私も、アトナテスも、誰もが息を潜めていました。

この沈黙を破ることを許されているのは、ただ一人しかいません。とても長い一分が経過したくらいでしょうか。

「……………お戯れを」

団長が出たのは、ようやく絞り出せたかのような。そんな声でした。

団長の言葉に王は、怒る事なく。

静かに笑い声を上げ。

「そうか、戯れか。そうか、そうだな団長よ。ボケが入った老骨の戯れで、済まさねばいかんな」

団長に、優しくそう言葉をかけました。

「団長よ。そなたらの赤の団の拠点設立、余は全面的に認め、協力は惜しまぬ。団長よ、そなたの才を、自由に使って行け」

団長は静かに、頭を下げました。

帰路、私達三人は無言で歩いていました。

結果的には会談は成功したというのに、それ以上に王が言った言葉。

英雄王という響きが、私の脳裏から離れませんでした。

無言で歩き続ける団長は、何を考えているのでしょうか。

視線を何度か向けますが、団長の考えが、険しい顔をしたままの団長の表情からは、何も読み取れませんでした。

ただ、団長は王の言葉を拒絶するように、戯れと言ったので。

王になる気は、たぶんないのでしよう。

私は、団長なら立派な王様をできるだけの、器量があるとは思いますが。

団長はどう思っているのでしょうか。



聞くのが、なんとなく怖いです。

色々と考えていると、沈黙に耐えられなかったのか、アトナテスは団長の肩を組みました。

「面白い爺さんだったな団長」

驚く団長を他所に、アトナテスは言葉が続けます。

アトナテスのこういった、思い切りの良さというか、結構気配り上手な所は羨ましく思います。

「けどな、あの爺さんは団長を分かってないな。団長は王様やるよりは、根無し草の風来坊やってる方が似合ってるぜ」

グツと親指を立てるアトナテスに、団長は少し考えるように目を閉じ。

「そうだな。アトナテス。さすがは私の友だ。さあ、せつかくの王都だ。三人で酒を飲みに行くか」

「おうよー！」

ふつと、普段のような優しい気な笑みを浮かべ。

団長もアトナテスの肩を組むと、そのまま酒場へ足へ向けます。

そうですね。

「……ええ行きましょうー！」

飲んで、忘れましょう。

私は二人の後を追いました。

けど、英雄王と言う言葉は、それ以降もずっと、私の頭に残り続けました。

英雄王。

英雄にして王。王にして英雄。

それを意味する物は、物質界の王。

とても、とても重い。

まだ、一人の青年でしかなかった男の生涯を縛り続けた、称号でした。

## エピソード9 見えない悪意と恐れ

中央の強国の王との謁見を終えて二月は経ちました。

各地の国の王の下を団長は巡り。リスク承知で赤の団の拠点の設立を告げて回ります。

そして、その二月の間だけは。赤の団は間違いなく魔物よりも、人と戦った回数が多かったです。

「赤の団の英雄は、王を名乗る気にでもなったか？」

中央の強国の王とは違い、そう冷たく言い放つ王様がいました。

そして、衛兵達に囲まれ、武器を向けられ。

私はようやく、団長が博打と言った理由を身に染みて理解しました。

拠点を作る。たったそれだけで、今まで少なくとも敵対はしてこなかった大国が敵対しました。

団長はあくまでも拠点であり、魔物の脅威がなくなり次第、拠点は放棄する。

王になるつもりはないと、武器を向けられて尚。

穩便に事が運ぶようにしましたが。

猜疑心に囚われた人は、簡単には疑惑の靄から抜け出せません。

「我が国を再び足を踏みしめた時。我が国の機械技術を用いて、貴様らを迎え受けよう」

「事が事なだけ見逃してやったが、貴様が土地を持つのならばもはや看過出来ぬ。メイジ達よ、この思い上がった不屈き者を焼き払え」

そんな挑発的な勧告を受けたり。それだけならまだしも、謁見したその場で攻撃を受けたりしました。

それでも私達赤の団は、届かぬ手を伸ばす為に、敵愾心を抱く王がいる国へ、無理も危険も承知で助けに行き。

主権領域を侵犯していると、魔物から人々を助け終えた直後の背を、その国々の正規軍に問答無用で襲われました。

しかし、私達は赤の団。

物質界にあちこちいる、救いを求める人達に手を差し出す為にも。

魔物が相手でも、人間が相手でも、誰にも負ける訳にはいけません。

日々の戦い培った実力で、大国の正規軍相手でも撃退してみせると。赤の団は、国々を脅かす武装勢力であると吹聴され。

どんな噂話を耳にしたのか。

魔物を打ち払った私達が差し出した手を振り払い。

疑念の目を向け、礼すら言わぬ人達だとしても、団長は何度でも魔物を倒し。

その後、見計らったかのようにやってきた、大国の正規軍を相手に、再び撃退すると。今度は、まだ防衛施設がほとんどない。

僅かな農地があるだけの、集落としか呼べない規模である。私達が作り上げた赤の団の拠点に。

おそらく今なら殲滅できると思ったのか、団長を王扱いしようとしているくせして、宣戦布告もなく攻め込み。

団長、アトナテスを始めとした精鋭達で防衛し、傷付いた者には例え敵だった人達にも関係なく団長は保護して、傷を癒し。

厚顔にも、つい先日赤の団の拠点に攻めてきたにも関わらず。その大国の正規軍では、容易に手に負えない強力な魔物の出現に、赤の団に救援要請を出してきて。

救援する必要なんてない。捨ておくべきだと、一部から声が上がっても、団長は付いてきた者だけは付いてこいと言い。

助けに向かい、そして案の定疲弊した私達をその国は正規軍を差し向け。

赤の団はそれを撃退しました。

日々魔物と戦い続け培った経験と、常に最前線で指揮して戦う団長が率いる赤の団

は、物質界一と言つてもよいほどの精強な軍と言つて良いでしょう。ただ、戦いと言うのは何も真正面で武器を振るうだけではありません。

武力で敵わぬと分かつたら。

戦うのではなく、別の手で各国は赤の団を攻め立ててきました。

この頃、赤の団は偽の情報に振り回されることが多くなりました。

魔物がいるから助けてくれ。

そんな情報を聞いて、拠点からその地へ向かいます。

例え、それが幾度も襲い掛かって国であつたとしても、向かいます。

偽情報かもしれない。でも、もしかしたら、本当に襲われてるかもしれないからと、団

長は向かいます。

そして、偽情報であると分かつたら落胆して、拠点に帰り。

私達が帰還した直後、本当に魔物に襲われて急を要する救援情報が、偽情報の地へ出

発した後が届き。

急いで駆けつけると、魔物達の手により荒廃とした村や集落を前に、たった一つの情

報のせい。

急成長し続ける赤の団を疎ましく思った、下らない人達の嫌がらせのせい。

どれだけの人命が奪われたことかと、何度怒り、くじけそうになつたことか分かりま

せん。

「あいつら、自分達の国は滅びないとも思ってたのか!?

こんな事してる場合かってんだ!

こうやって土地と人が死に消えたら、自分達の首を締めてるだけと、まだ分かんねえのか!」

魔物の手により滅びた村を前に、苛立ちを隠そうともせず、アトナテスが吐き捨てます。

「人と人の戦いは、魔物の出現でなくなったと思つたのに。どうして……」

いつも明るいサナラもさすがに、こんな。

悪意しかない出来事が続いているせいか、落ち込んでいました。

「その魔物が出現が終わった後の、人同士の戦いを見据えて。勢いのある私達を潰しておきたいんだ。

彼の王達の立場からすれば、これらの行いは。決して正しくはないかもしれないが、間違っている行いとも私は思わないよ。

ただ、忘れないでいてほしいアトナテス、サナラ。

人は争いながらも、平和の為ならば、手を取り合える。

私達や各国の王、この世界に生きる皆が協力する。そんな未来がいつかくる」

怒るアトナテスを宥め、落ち込んでいるサナラを慰めながら。

襲われている団の団長が、彼らの行いに大してまったく怒ることなく。

こんなことを言ってしまうので、私は怒るにも怒り切れず。

ただ、言いようのない悲しさと虚しさに。

「団長は本当に、そんな未来が来ると思えますか？」

思わずこんなネガティブなことを言ってしまうました。

ですが。

「私はそう信じているよ」

私の問い掛けに、一切の迷いなく。前髪に隠れた目の奥に、確かな輝きを灯しながら、

団長は断言しました。

団長は凄いですね。

どんな目にあっても、この人が前を見て歩き、私達を導き、勇気づけてくれる。

普通なら不可能と思えることを、可能にしてくれる。

そんな確信を抱かせるほどの、本人はなる気はないといった王様のような、懐の広さ

を見て。

多少の困難で、人そのものに絶望するには、まだまだ早いぞと、私に思わせてくれま

す。



悪意によって失われた命達に、祈りをささげた後。

私は気持ち切り替え。

まだいるであろう、助けを求める誰かの為に、明日を見続けると改めて誓いました。

赤の団が、今まで連日、確実に魔物と出会い戦い続けられたのは。移動先移動先で、団長が魔物の気配を察すること出来たことと、悪意による情報の錯綜もなかったことが大きいです。

なので、団長が居を構える赤の団拠点については、魔物を察すると言っても周辺の地に限り。

そして魔物の出現はどこかからの、報告頼りです。

団長が魔物を気配を察知して、次から次へと魔物達と戦う。

情報を仕入れて、討伐に向かう。

そんな、赤の団の従来の戦い方が通用しなくなつたのです。

私達は変わるべきでしょう。

各地に斥候を送ってみてはと、団長に意見してみました。

魔物と、その国の正規軍の板挟みにされては、並みの人では、情報収集は難しいだろうと却下されました。

この問題は、まだまだ先送りになりそうです。

ですが、いいこともありました。

「団長！」

その声をかける人々に色々な違いがあります。

魔の混血とされる獣耳だったり、長い寿命を持つ長耳だったり、人間ですが敵対した国の元軍人だったり、です。

生まれも立場も、まったく気にせず助ける団長を見て。

魔物によつて故郷を無くし、住む場所がない。

しかし、普通の人里では他種族相手に、何をしてくるか分かったものじゃないから怖い。

でも、以前魔物から助けてくれた団長の元でなら、暮らしていけそうだ。

そう考えた。以前赤の団が助けた人々が、団長が拠点を持ったと聞きつけて。

魔物と戦うために武器を。開拓して農地を増やす為に鋤を手に持ち。

一緒に助け合ってくれています。

元々敵だった国の軍人さん達も、団長と協力する人々に感銘を受け。

国を離反し、赤の団に合流する人もちらほらと出てきました。

そして、同じ釜の飯を食べたら、と言うのでしょうか。

種族間にある、わだかまりが解消され。

右を見たらエルフとダークエルフが一緒に弓の鍛練をして、左を見たらドワーフと獣人が一緒に道具を整備したりしています。

全体で見れば人間が中心ですが、それでも三割を超す人間以外の種族を抱える組織は、団長と共に各大国を巡りましたが。

ここ赤の団くらいでしょう。そしてそれを可能にしているのは、団長のカリスマでしょうね。

ただ、重大な問題がありました。

種族間がどうこうといった話ではありません。

相も変わらず。唐突に団長を巻き込んで遊び始める。アトナテスとサナラの問題児っぷりといった話でもありません。

団長が戦場に立つと起きる話です。

団長は常に全ての戦場に出陣して、陣頭どころか先陣を切って戦うのは、いつものことですが。

「何だか、戦場に立っていると体が痺れて、普段よりも力が出ない」

そんな声はどこからか始め。一人二人なら、戦場に立つことで緊張しているだろう、といった軽い話で済むところですが。

戦場に立っている団員のほとんどが、多かれ少なかれそんな不可思議な事象を自覚し

た事があるようです。

何が原因でしょうか。

幾人か親しい団員に聞いてみた所、身に覚えがあると言ったと思つたら。

常に団長と行動を共にしているアトナテスとサナラは、そんなこと一度もないと言いました。

うーむと、戦闘中の事を振り返つてみると。

ふと団長が戦つてゐる姿を見て、体が痺れるような感覚と、星の力が落ちたことがあつたことを思い出しました。

ということは、団長が戦場に立つことで、全体の力を抑制させるような何か働いてゐる。

その何かによつて、私含めて団員のほとんどは痺れを感じているという事が連想出来ます。

そして、戦場におけるその痺れとは。

士気が高まるような高揚ではなく。

対極に位置するもの、即ち恐れ。

団長が戦場に立ち、戦う姿を見て、私達は心のどこかで。

私は彼を、恐れて――。

だ、駄目です！

頷いてしまったら、そのまま確信してしまいそうな結論を、私は頭から追い出しました。

それを認めてしまったら、もう団長の傍にすることを、私自身が許せそうにありません。

誰もよりも頑張り、誰もよりも傷付き、誰よりも前を進む団長を。

大好きな団長を。

あろうことか、恐れるなどと。

絶対に認めてはいけません。何かの間違いです。

間違があるとしたら、そんなことを思い浮かんだ、私の未熟さに違いありません。

……ただ、戦力が低下しているのは、避けようのない事実なので。私はこの件を、特

に任命はされていないですが、赤の団の教官役をしているアトナテスに任せました。

普段よりも力が出ないなら、それが問題にならないくらい、さらに力をつければいい。

赤の団皆が鍛錬して、皆で強くなればいい。

もちろん、私もです。

戦況にに応じて、アストロノヴァとグランドクロスを切り替えていましたが。

それ以上に来ることを、増やしていくべきでしょう。

もつと、頑張らないと。

ただ、この件を知ってか知らずか。

ほとんど同時期に、団長はさらに剣技に磨きがかかり。

剣を振るえば、あらゆる堅い鎧も、魔法の守りも無視して貫き。

一振り度二度攻撃しても倒せぬならば、一振り度三度も攻撃する斬撃で敵を倒し。

数多の敵がいるのならば、一振り度四体の敵を同時に斬り裂く剣を身に着けました。

それが何だか。己以外の人が戦えないなら、自分が強くなればいい。

団長が示した解に見えて、私は寂しさを覚えました。

英雄王は、誰にでも手を伸ばせる人でした。

同じ人であれ、他種族であれ、敵であれ。

そう、王子君のように。

でも、戦い方は王子君とは対極の存在と言えました。

王子君が皆と手を取り合い。

協力して敵に立ち向かい勝利する戦い方とするならば。

英雄王は逆。

ただ一人で、後に英傑と呼ばれる私達でも追隨を許さないまでに、強くなり。

たった一人で、どんな強敵であつても立ち向かい、勝利する。  
そんな戦いをする人でした。

## E10 影を受け継ぐ英傑の蕾ユーージェン

偽情報に踊らされながらも、それでも人々の為戦い続けていた赤の団ですが。

団長がその現状に、ただ手をこまねている訳がありませんでした。

「ソラス。占星術を頼みたい」

「はいー」

団長が、私に占星術を頼む時は、団長でも迷うような案件。

つまりは、ここぞという時です。

占星術師としてちゃんと頼られるているのが分かると、嬉しくて、私も気合を入れ。

お母様が持っていた天球儀を真似て、拠点近くで取れた鉱石に私の魔力を込めて作った、天球儀を空に掲げました。

「人を探している。その人がいる土地は知っているが、正確な場所までは分からないんだ。場所を示してほしい」

「分かりました。任せてくださいー」

地図を広げながら問う団長に、私は星の導きを受け、その土地に地図で印を受けます。

その地図が示した場所は、拠点から半日と経たずに歩いて行ける場所にある。



鬱蒼とした森が広がる。

長命で耳が長い種族。

エルフが住む、妖精郷でした。

「それでその人を、どうするんですか団長？」

「勧誘だ」

数日後。

団長、私、アトナテス、サナラの四人。そして、紫竜さんの一匹で森を歩いていました。

少人数なのは、エルフというのは、他種族に排他的で、あまり多人数で詰めかけると、エルフ狩りか何かと勘違いされ、魔物を撃退する高い弓術、魔法を持つエルフ相手に、一戦交えるのを避ける為だそうです。

人選に関しては、団長は本来なら私と二人で向かうみたいでしたが、出かける話を聞いたアトナテスとサナラが、付いてきたからです。今からでも、帰ってくれませんかね。行きたい行きたいとごねるアトナテスとサナラに、優しい団長が無下にすることなく、二人は同行することになりました。

本当に、今からでも帰って。嫌ですか、そうですか。はあ……。

さて、森を歩いていると、唐突になんとなくですが違和感を感じました。

それが何かは分かりませんでした。

「何か変な感じがしますね！」

サナラも似たような感覚を覚えたのか、私とまったく同じ考えを声にしてあげました。

「何のことだ？」

一方で、アトナテスは首を傾げていました。

そうなる、私達はごく自然に団長の方へ視線を向け。

団長は、私達の期待がすでに分かっていたかのように、空に向かって手を伸ばしていました。

「人払いをするエルフの結界かな。へえ。こんな魔法の使い方もあるのか。興味深い」

そして、手を握りしめて、空間を破るように振るうと。周囲から感じた違和感が消えました。

あれ、これ所謂。結界を破って、エルフ達の領域に土足で踏み込んだことになるのでしょうか。

……何事もなかったかのように、歩みを進める団長に信じましょう。

きつと問題ないはずです。

「……追われてるな」

歩き続けていると、今度はアトナテスが声を出しました。

さすがは、生粋の戦士であるアトナテスですね。

この手の敵の気配を、アトナテスは感付き、紫竜さんと共に、周囲を警戒するように  
呟きます。

どうするんでしょうか。再び、団長に視線が集まります。

「じゃあ作戦開始だ」

こうして、団長が事前に考えていた作戦が始まりました。

といつても、大げさな事は何もしてません。

机を用意します。椅子も用意します。

それだけでは寂しいので、甘い果汁を絞った飲み物と、お菓子を用意します。

そして、物陰で隠れます。

「……団長これで大丈夫なんでしょうか？」

「古典的だけど、有効な手だよ」

餌で獲物の釣る。なるほど、さすがは団長ですね！

いやいやいやそれでエルフが釣れるなら、今頃物質界のあちこちでエルフを見る機会  
があつたでしょ——

「団長！エルフさんが来ましたよ！」

サナラが興奮しながらにそう告げるので、口を閉ざすしかありませんでした。

私達が用意した飲み物とお菓子を、訝し気に眺めています。

くんくんと臭いを嗅ぎ。お菓子から漂う甘い芳香に興味深々らしく、手を出すかと悩んでいるようでした。

それにしても、あのエルフは。

「子供ですよ。それに、エルフじゃなくて」

「ダークエルフだね。妖精郷にはダークエルフは住んでいないと聞いていたけど。離れで暮っていたのかな」

長い耳に、褐色の肌と、灰色の髪、紫水晶の眼を持つ、ダークエルフの女の子。

エルフは見た目が子供でも、実年齢は私達人間と比べたら、とんでもなく年上である方の可能性が高いですが。

何にせよ、お菓子に興味津々な姿はどこからみても、子供です。

「くんには」

気が付いたら団長は、ダークエルフの子供に、そう挨拶していました。

その瞬間、私の視界からその子供が消えました。

どいへ。

私が悠長にそんなことを考えている間に、事は終わったみたいです。

「は、放せ！」

「いきなり大将首を取らせねえよ」

背に有った弓に、矢をつがえ、絞り、放つ。

この動作を瞬時に行ったダークエルフの子供を、アトナテスは手刀で矢を叩き落とし。空中に居たその子の手首を掴むと、そのまま宙吊りにしたようです。

なおも反撃を試みようとして、拳を振るいましたが。姿勢も何も安定してない拳に勢いなくてなく。アトナテスをポカポカと叩くだけでした。

「どうするよ団長」

「放してやれ」

「あいよ」

そして、団長の指示でアトナテスが手を放そうとしたその時。

ちよつとした、気のゆるみが生じたその瞬間。

矢が三本連続に飛来しました。

気が付いたアトナテスが子供を庇うように、身を盾にし。

団長はアトナテスと子供を守る為に、剣を引き抜き。矢を叩き落とし。

「てめえ！ガキまで狙うとはどういう了見——」

アトナテスの喉を狙った四本目の矢までも、团长は剣で弾きました。

「……何年ぶりでしょうか。こちらの矢までいなす人を見たのは」

物静かな声と共に、その人は現れました。

長い耳、白い肌、金髪に、翡翠の眼を持つ女性。容姿としてはエルフらしいエルフですが。

武器としている弓の黒に合わせたのか、全体的に黒を基調とした装いをしているので。想像上では緑緑している。エルフらしくないエルフとも思えました。

あと、そのエルフの特徴を上げるとしたら。

すでに金髪には白髪が混じり、所々小皺がありました。要するに、年を取ったエルフです。

ですが、決して侮ってはいけません。

老いたエルフというのは、叡智と実力の兼ね備えたエルフの中でも、生まれなど関係なく、尊敬される存在と聞きます。

そしてその話が事実である事を、証明するかのようには。

構えていないにも関わらず。そこに立っているだけなのに。

すでにその黒い弓で、心臓を狙っているかのような。そんな圧迫感を私に感じさせました。

少なくとも、迂闊には動いたらその瞬間矢で貫かれる。そんな確信さえ持てしまいません。

「技を見て確信した。あなたが影の射手」

「そういうあなたは、赤の団団長ですね」

どちらも微笑みを浮かべていますが、団長は団長で剣を握ったまま。

影の射手と呼ばれたエルフさんも、黒い弓を握ったまま。

一触即発の雰囲気を漂わせていました。

すでに険悪な雰囲気なのですが大丈夫なんでしょうか、これ。

勧誘すると団長は言っていました。このエルフさんが団長が勧誘したいと言った

人でしょうか。

「そして赤の団占星術師ソラス、大地を紡ぐ者サナラ。未熟な私の娘を抱いているのは、魔竜騎士アトナテス。ですね」

ひえ。

ある程度私の名前も通り始めていますけど。

全員の名前を間違えることなく、視線と共に射貫くように言い当てられると、さすがに怖くなります。

ですが、これは情報収集に長けていることの証明です。

情報に振り回され始めている赤の団に、欲しい人材。

団長が勧誘しようとしたのは、このエルフと見て間違いないでしょう。

「いい加減放せ！」

会話が終わるまで沈黙していた。

アトナテスに抱き締められていた、影の射手の娘から抗議の声が上がりました。

「アトナテス。放してやれ」

「いいのかよ？」

「どれだけお題目を並べた所で。今の私達は、彼女から見たら、娘を人質に取っているようなものだ。私達は戦いに来たわけではない」

「娘と呼ぶガキに矢を打つ様な奴だぞ。それにあいつはエルフ。こいつはダークエルフだ。人質の意味があるか、分かったもんじゃねえ。危険だぜ」

「噂に違わぬ優しさを持っていますね。アトナテスさん」

「ああ!？」

紫竜さんのような鋭い目で、アトナテスは影の射手を睨みますが。影の射手は、相も変わらず笑みを浮かべているだけでした。

捉えどころのなさに、不気味さを感じさせます。

「アトナテス。放すんだ」



団長はもう一度。強くアトナテスにそう言いました。

団長にそう言われては、アトナテスは口をへの字にしながらも、娘さんを放し。娘さんはそのまま影の射手の背に隠れました。

これで、状況は元通り。とはなりませんでした。

「お子さんの名前は何と？」

アトナテスが娘さんを放したと同時に、団長は剣を鞘に納めて。

用意した椅子に座ってました。

「ご挨拶なさい」

そして、いつの間にやら影の射手も弓を下げて、椅子に座ってました。

あれ。

「えっと、母さま？何をしていますのですか？」

「ご挨拶」

「……ユーージェンです」

しぶしぶと言った感じに、ペコリと頭を下げる影の射手の娘さんの名前は、ユーージェンちゃんと言うそうです。

あれれ。

「あ、あの団長！色々と追いつけないんですが！」

サナラが団長と影の射手以外の人が抱いたであろう、気持ちを代弁してくれましたが。

「まあ皆も座ろう」

「おいおいおい、さつきまでの戦うぜって感じの雰囲気はどこ行ったよ団長」

「無くなつたね」

「なんですかそれは。」

「私達は三人同時にガクツと頭が落ちましたが、着席しました。」

「椅子が人数びつたりで良かったです。」

「信頼されていますね。赤の団の英雄は」

「そういうあなたも、随分と娘さん。ユージエンを信頼していますね。血の繋がりはないのでしょよう」

「私はエルフ。ユージエンはダークエルフ。確かに種族での諍いがあり、血の繋がりもありませんが、娘は娘。例え私の矢を二本三本受けても、ユージエンは物ともしませんよ」

影の射手は、そう自慢気に言います。

ユージエンも、凄いだろうと言わんばかりに胸を逸らしています。

うーむ。人とエルフの感性の違いでしょうか。普通は親は子供に、矢を受けさせない

ようにするのが普通だと思いますが。

あれですか。エルフは我が子を千尋の谷に落とす風習でもあるんでしょうか。色々と考えていると、アトナテスが両手をデコの上で組んでいました。

そのまま、おお神よとても嘆きだしそうです。

「どうしたんですかアトナテス？」

団長と影の射手との会話を妨げないように、小声で話すと。

「……あのエルフを見ると反発心が湧いてくる理由が分かった気がする」

「何ですか？」

「……俺の師匠に似ている」

アトナテスの言う師匠さんは誰かは知りませんが。

ユーゼンを見るアトナテスの目が、とても同情溢れるというべきでしょうか。とにかく今まで見たことないほど優しい気で。あつて十分も経ってないというのに。さながら、ユーゼンの叔父のような雰囲気を感じていました。

本人に言ったらたぶん、怒られるので言いませんが。

「ユーゼン。菓子を食べるか？遠慮するな。菓子も、サナラよりもお前に食べてもらった方が喜ぶ」

「何ですか！」

「ああ毒なら入ってないぜ。ほら、放っておいたらサナラが全部食っちゃうぜ？」  
「そんなことしませんよ!？」

「……………」

ガヤガヤと言いつつアトナテスとサナラを、ユーージェンは不思議そうに眺めていたが。

敵意も悪意も何もなく。楽しそうに言いつつ二人の光景を見て、ユーージェンが恐る恐る。

私達が持ってきたお菓子を手を伸ばします。その光景をアトナテスとサナラは、言いつつ合おうのを止め。

「はむっ」

ユーージェンがパクリとお菓子を頬張り。

その直後、頬を緩ませるユーージェンの姿を見たアトナテスとサナラが、同時に親指を突き立て、にやりと笑います。

一度手を出してしまえば、あとは毒を食らわば皿まで。でしようか。

「うまい。これもー」

ユーージェンは用意したお菓子をどんどん食べ進めます。

見てると、私までお腹が空きました。せっかくですし、お菓子を一つ頂きますか。

「ふふっ、おいしいですね。ユーージェンちゃん」

「……………うん」

弓を構える姿は、見た目とは違って勇ましく感じましたが。

こうして素直に頷く姿は、見た目相応に無邪気な子供と言う感じがして、とても微笑ましいですね。

ユーージェンとは仲良くできそうです。

さてと。

思った以上に、私達四人の方がすぐに和気藹々としちやつたので。

飲み物とお菓子を進める手を止めずに、団長と影の射手の話に耳を傾けます。

「魔王ですか……………荒唐無稽ですね」

「いや魔王はいる。多くの戦いを繰り返していく中で、私はその存在を確信している。

そうでなければ、組織としての、最低限の協調性を持ち合わせているかも怪しい魔物達だ、容易く国々を落とせる道理がない。

魔物が増加した理由も、物質界と魔界は繋がっていて、決して別離することはないと聞いているが。

それでも魔物が物質界に入る。ゲートの規模と数には、限りがあつたはずだ。そして、それを破壊した者がいる」

「ゆえに、魔王がいると」

「ああ、そして魔王がいることを確信している者は。私だけではない。あなたも確信しているはずだ。」

影の射手よ。女神アイギスの加護を受けた黒弓を持つあなたなら」

女神アイギス。

最近聞いた女神様の名前なので、憶えていますし、調べました。

端的に言えば、物質界の守護神。でしょうか。

人や武具に加護を与え、物質界を脅かす魔を打ち払う者を、導く女神様です。

さて、どんな女神様でしょうか。

影の射手が持つ黒弓が本物かどうかは分かりませんが、中央の強国が持つアイギスの鎧という実物がある以上、実在する女神様なのでしょうが。

神様にも、そりや都合があるかもしれません。

もし神様がいるのなら。今すぐに、魔物を打ち払ってくれませんかとは思っちゃいますね。

ただ、そう思ったのは、私が信じているのは、団長と、赤の団だけの不心得者だからでしょう。

迫りくる魔物に、お尻に火が付いても神に祈り続け。

そのまま滅びた地が、少なからず存在してしまっているのを、私は知っているからでしよう。

「……………」

影の射手は、団長の言葉に肯定も否定もせず。

黒弓を大切そうに撫で。

「…………惜しいですね。あなたがエルフなら、私はあなたに、ユーゼンと同じく弓を教えていたでしょう」

唐突に、そう言葉を零しました。

「私達エルフも、魔物の被害を受けています。無論、その度に追いつ返していますが。相手は無尽蔵かつ神出鬼没。

弓術魔法に長けたエルフと言っても。

無限の敵に抵抗するには、エルフは決定的に前衛を得意とする人も、そもその人数も不足しています。

私がどれだけ、妖精郷各地にあるエルフの里に人を受け入れ。来るべき魔を率いる者、魔王との戦いに備え。他種族と共同戦線を張るべきと主張しましたが。……残念ながら無下にされました」

戦うなら数が多い方がいいのに、どうして。

私が抱いた疑問を、団長は鋭く突きます。

「ユーージェンがいるからですか」

団長の言葉に、お菓子に夢中になっていますが、しっかりと話は聞いてらしいユーージェンが俯き、暗い表情を浮かべました。

それだけで、団長の言葉が正しいと察することが出来ます。

「エルフとダークエルフは、昔からの遺恨がありますからね」

遠くを見つめる影の射手の目には、はたして何年前のことを思い出しているのでしょうか。

私がお祖母ちゃんになるまでの年月の、何十倍もするのでしょうか。

それは、分かりません。

ですが何にせよ、影の射手が言う遺恨というのは、とても根深いものなのは違いありません。

「……下らない」

ですが、団長はそう一蹴してのけ。

ピクリと、影の射手とユーージェンの長い耳が動きました。

怒らせたのではないのでしょうか。

緊張が走りますが、団長は前言を撤回しませんでした。



「影の射手。弓の名手にして、情報の重さを知る者よ。今の私には。正しき情報を判別する力も、悪意ある情報から身を守る術も不足している。あなたの力が必要だ。だから……本当はあなただけを、赤の団に勧誘する気でいた」

そして、そんな中で団長はそう言葉を続けます。

「だが私の理想は、魔物に脅かされることのない平和な世界だ。そこに、人もエルフも関係ない。」

影の射手よ。私はエルフの王と会談し、人とエルフの協力体制を築く。

それが叶ったなら、赤の団に加わっていただきたい」

えっ。エルフの王様と。えっ。私そんな話聞いてないです。

アトナテスも、サナラも聞いてないみたいです。

ぼかんと口を開いたまま、固まっています。

つまり、たった今、団長は決めたようです。

まったく、団長は相談なく決めるのは、悪い癖ですが。

ふふっ、この人は本当に面白い人です。

「随分と、大言を言う方ですね」

影の射手は、団長の言葉を大言と言いましたが。

「大言ではありませんよ。影の射手さん。団長はやるって言ったらやつちやう人なん

です」

アトナテスとサナラも、私と気持ちは同じです。

ああ、そうだとアトナテスは頷き。

やつちやう人なんですよと、サナラが推します。

団長なら、きつとやれる。

普通は不可能だと思うようなことを、どんなことをして可能にするのか。

寧ろワクワクしてきました。

「……分かりました。女王とその協力体制に同意したら、赤の団に加わりましょう。ですが、条件があります。

あなたは先ほど、私達エルフとダークエルフの遺恨を下らないと一蹴しましたね」

「ああ」

影の射手に、団長は即座に答えます。

やはり、影の射手がどう思おうとも、団長には先ほどの言葉を撤回する気はないみたいですよ。

「ならば、女王の元にユーージェンを連れ、その協力体制を結んでみせてください。それが条件です」

エルフとダークエルフには遺恨がある。

そんな中で、ダークエルフであるユーージェンを連れて行くのは、きつと不利になるでしょう。

けれど団長は力強く、こくりと頷きました。

影の射手。

英雄王の背に影の射手ありと謳われた、ユーージェンちゃんの母たるエルフを指す名でした。

彼女は弓術を極めた者でありましたが、同時に情報戦の玄人でもありました。

当時、目に見えない悪意に翻弄されていた、まだ英雄王ではなかったあの人を、まさに影から支え続けた。

本人が言うには、すでに古い切ったエルフでした。

そして、ユーージェンちゃん。

開花を待つ蕾。

千年前の魔王との決戦にはいませんでしたが。

あの人、英雄王を名乗り始める頃までは、一緒に戦ってくれていました。

あの子は、千年前の決戦の時に、英雄王の下にいなかったことを気にしていました。

あの子も私達と同じ英傑です。

何と言つても、英雄王の口から、ちゃんと英傑と認められていましたからね。

## E10-2 影を受け継ぐ英傑の蕾ユーゼン

エルフと遺恨があるダークエルフのユーゼンを、エルフの王様改め、女王様の下に連れた上で協力体制を築く。

そしたら影の射手は、赤の団に加わる。

やることは至って単純です。

エルフとダークエルフが手を取り合い戦えるということ、赤の団では出来ているので。

協力体制は不可能ではないでしょう。

ですが、同じエルフである影の射手が、提案しても断られたことを考慮すると、捻りは必要でしょう。

影の射手が、まさに影と同化するかのようにはスツと消えた後。

どうやってエルフ達と協力体制を築くか。

団長任せにし過ぎないようにと、私達は議論を始めました。

「妖精郷を中心に、魔物からエルフを助けて地道に評判を上げてみてはいかが」

「団長が以前やったみたい、殴り込みにいこうぜ」

「まずはエルフさんとお友達になりましょう！」

三人で意見を出してみると団長はへえ、ほうと薄い反応をしていますが。団長の口からは、特にあれこれと意見は出してくれません。なんというか。

私達の議論する姿を見て、楽しんでいるようだけな気がしました。

「ユーージェンよ。お前ならどうする？」

アトナテスがユーージェンにそう話を振ると。

私達から離れ、膝を抱えたまま、じつと話を聞いていたユーージェンは。

……敵愾心を剥き出しのまま、団長を睨んでいました。

先ほどまで、一緒にお菓子を食べた時は、ユーージェンは笑顔を見せていたのに。

「……私が話に加わると思っているのか？」

影の射手が消えてから、ユーージェンはずっと団長を睨んでいます。

団長とユーージェンは、会話をしていませんので、仲良くなつたとはいえないでしょうが。

影の射手が条件付きとはいえ、赤の団に加入してもいいと言ったので。

影の射手とは敵対していないはずですが。

なので、ユーージェンに敵意持たれるようなことは、団長はしていないはずなのですが。

どうして。

「さつきからどうしたユーゼン。菓子ならまだあるぜ?」

「そうじゃない!」

ユーゼンの態度に我慢できず。

アトナテスが機嫌を伺うのもかねてお菓子を差し出しましたが、ユーゼンは声を荒げて叫びます。

ただそういつた荒い言い方には、ユーゼンは慣れていないのでしょう。

困り顔浮かべるアトナテスに、ユーゼンはバツの悪そうな顔を浮かべました。

それでも、ユーゼンは敵視。私達ではなく、団長だけ敵視を止めません。

そうなると、険悪な雰囲気がかんぱん溢れ出てきます。

「団長。ユーゼンに何かしたんですか?」

「……ユーゼンに恨まれるだけのことは、私はしたつもりだよ」

小声で、団長にそう問いかけてみて。

断言するように返ってきた言葉に、私は言葉を無くしました。

単純に、団長何かやったかな。という疑問です。

皆が皆そうである。という訳ではありませんが、エルフは長命であり、誇り高く、外の種族には厳しいと聞きます。

だから、自慢の弓術による攻撃を止めたことを、ユージエンは恨んでいるのか。

ああでも、ユージエンちゃんの矢は、アトナテスが止めましたね。

だから怒った、ならアトナテスを恨んでいるでしょうし。

ならば、母たる影の射手を矢を止めたから。

いいえ、これなら矢を止められた張本人である影の射手との会話が、もつと拗れているはずです。

あとは、団長がエルフとダークエルフの遺恨を下らないといったことです。

ただ、これが原因とは私には思えません。

あの時、確かに影の射手もユージエンも、長い耳をピクリと動かして反応させていたが。

それに心底怒っているという風には、私には感じませんでしたし、やはりそれが原因なら。まず先に、影の射手が怒っているでしょう。

やつぱり、私達と団長の違いといえば、ユージエンと一緒に菓子食べたくらいです。

なのに、こうも対応が違うことあるんでしょうか。

人が気にならず、エルフが気にするようなことが。

……団長は、よく気が付きますね。私が考えれば考える程、疑問が増えていくばかり



だと言うのに。

団長は、ユーゼンが恨む理由をすぐさま気がついてしまうなんて。

「もし、私を女王様の前に連れて行ってみろ！その場で暴れて会談を無茶苦茶にしてやる！ただでさえ、エルフは外の種族には厳しいんだ。一度でも関係が崩れれば二度と会談など出来まい！困るだろう!？」

ユーゼンのこの発言には、さすがの私達も、どうにかしてほしいという意味を込めた視線を団長へ向けます。

「ああ、とつても困るね。やめてくれると嬉しいな」

とは言うものの、団長は余裕のあるという態度を、崩そうとはしませんでした。

これでは、ユーゼンじゃなくても反感が持たれるでしょう。

「お前一体何なんだ!」

叫ぶユーゼンに団長は。

「私は何か。か……」

ポツリとそう呟き、言葉を紡ぎました。

「私は故郷と両親を魔物に奪われた。私は私の居場所を失った。そして、同じように魔物に奪われる人達を見て……私は見捨てられなかった」

これは、以前聞きましたね。

団長が赤の団を創設する経緯。

見捨てられなかった。それだけで、色んな人を、私を救った話。

けれども、団長は珍しく言葉が詰まり。

言葉を考えているのか、整理しているのか。

多少の時間を要したあと、口を開きました。

そしてその言葉は、強さと勇ましたと優しさを兼ね備える。赤の団団長の口から出た言葉とは、ちよつと思えませんでした。

「けど、一番の理由は……私は寂しかったんだ」

「さ、寂しかった？」

困惑しているユージェンが聞き返すと、団長は子供のように。

とても素直に、うんと返しました。

ただそんな若返りも一瞬で、すぐに普段のような、頼れる優しい青年の笑みを浮かべました。

「でも今ではソラスがいて。アトナテスがいて、サナラがいる。私の居場所があつて、一人じゃない」

確かめるように、団長の目線がアトナテス、サナラと動き。私で止まります。

優しさの中に、決意を秘めた目。

見つめ続けると、鼓動が早くなってしまふ、そんな目。

私は神話に出るゴルゴーンに見られた訳でもないのに、ポーと頭が熱くなって固まりました。

そのまま、たぶん私と団長は数秒は見つめ合つたと思います。

あともう数秒あれば、何か変な雰囲気が出そうでしたが、その前に団長は目を閉じ、申し訳ない。そんな感情が読み取れる表情を浮かべ。

「でもそんな私が、人とエルフの協力体制を結んだなら。私は君の母親を取つてしまふことになる。君の居場所を奪つてしまふ。一人にさせてしまふ」

ああ。

「私に弁解の余地はない」

ああ、ああなるほど。ユーゼンが怒るわけです。

本当の母親でもないのに、エルフとダークエルフで遺恨があるのに、母親として受け入れた影の射手を、ユーゼンの居場所を団長が取ろうとしている。

まあ普通、常識的に親である影の射手が赤の団に入れば、娘であるユーゼンも自然と、赤の団の拠点に来てもらうことになるでしょう。ですが、団長が言った通り。

影の射手はきつと各地の情報収集の為に、その力を振るつて貰う訳ですから。

ユーゼンが思うような、今まで通りの生活はきつと出来ないでしょう。

妖精郷ではダークエルフだからと一人になり。

赤の団では団員ではないから一人になる。

一人ぼっちになる。

そう考えれば、ユーージェンが団長を恨むのも納得できます。

人とエルフの感覚の違いなんて、母と子の関係の前には些細な問題です。

ちよつと赤の団に、他の種族の方が入ったからと言つて。私は種族気にせず何でも受けれる。何て、とても言えた物じゃないですね。本当の意味で種族を気にしていないのは、団長のような考えを出来る人なのでしよう。

「……分かつているなら、母様を諦めてくれ」

ユーージェンの怒りと敵意の薄れた言葉は、団長がユーージェンが敵意を持つ理由を、完全に理解していることを。私に改めて伝えてくれました。

けれども、団長はユーージェンの願いに、首を横に振るいます。

「それはできない。私には、赤の団には、影の射手の力が必要だ。より多くの人々を魔物から助ける為に」

魔物から人々を救う。

それが、団長。ひいては赤の団の大義であり、絶対に変えてはいけない信念です。

「それなら、母様を盗ろうとするお前は、私は助けてくれないのか？」

「……………」

しかし、その為にユージェンを犠牲にするようなことは……。

多くの人の為に、一人を泣かせるようなことは間違っていると私は思います。

団長には影の射手を諦めて貰う様に説得しましょう。

情報収集だって、私達が頑張つて、誤情報を看破してみせればいいんですから。

「団長。ユージェンちゃんの為に、今回は……」

「そうだね……」

すんなりと同意してもらえてほっとしましたが、団長も同じ考えをしていて何よりです。

二人救うために、一人を犠牲にするなんてやり方をしていたら。

いつか、私達が掲げる大義が、無視できない歪みによって、崩れるでしょう。

影の射手は諦める、それが最善です。

「影の射手も諦めない。ユージェンも泣かせたりはしない」

「えっ？」

「すまないソラス。君が言いたいことは分かるが。ユージェンを見ていたら、私は気が変わってしまったよ」

団長はそう言つて、微笑みを浮かべると。

ユーージェンをジツと見つめ。

「これは君にも、影の射手にも不義理だと思っていたから、止めようと思っていたが、ユーージェン。母親よりも先になるが、赤の団に入らないか？」

えつ。と小さな声がユーージェンから零れました。

私は私で、団長の考えが一致せずに、思わずずっこけてしまいそうでしたが。

感情面では喜びに溢れます。団長は皆が笑顔になれそうな考えを、いつも示してくれます。

それが、とても嬉しいのです。

「不義理って、どういうこと何ですか団長？」

「さつき、アトナテスがユーージェンを抱え込んだ状況と一緒にだよサナラ。

将を射んと欲すればまず馬を、というが。

娘を囲うような真似をして。交渉材料……いや、場合によっては人質に出来るような状況にして。影の射手がまったく、ユーージェンに関心を示さない為人なら。あの時私は剣を抜いていない」

団長が嫌がったのは、ユーージェンを赤の団に入れることで、影の射手が娘大事に、赤の団に不本意に入るそんな状況。

普通なら利用しようとか考える所を、公平でないから嫌。なんとも、団長らしい言い

分です。

甘いとか言われそうですが、甘くていいんです。こんな団長が好きで、私達は付いていきたくなるのですから。

「……私が赤に団に入ると思うのか？」

「入る」

「どうしてそう断言できるんだ？」

「……毛色は違うと思うが。君も私と同じで、寂しさを知っている。そう思ったからだよユーゼン」

理解できないと言いたげなユーゼンですが、団長の言葉は的確に、ユーゼンの心を揺さぶっているようです。

ユーゼンの目が明らかに泳いでいます。

「でも私が赤の団に入ったら……ダークエルフがいるような組織には、女王様は会ってほしくないだろう」

「なんとかするさ」

「母様ですら、私を連れてくる時には、女王との謁見は出来なかったんだぞ！」

「なんとかしてみせる」

「っ！話だつて聞いてはくれないだろう……」

「否応でも話を聞いてもらおうさ」

「……私は、同じダークエルフの部族でも、孤立して捨てられるような性格で……母様以外私を受け入れることはきつと……」

「ソラスや、サナラ。アトナテスがユージエンを受け入れない。そんな素振りを、君に少しでも見せたかな？」

「……………」

ユージエンはその後も、いくつか言い訳をしていましたが。

その度に、団長はユージエンの言い訳を打ち砕き。

「ユージエンよ。理由をどれだけ並べようが結構だが、赤の団に入るのはユージエンの意志だけ。団長は入ってくれと誘いはするが、無理強いをした所は俺は見たことがねえ。入る入らねえはお前が決めるんだ」

「むうう……………」

アトナテスの追撃に、ついにユージエンは頬を、可愛らしく膨らませるだけになりました。

「ユージエンちゃん。事情や理由はどうであれ、私達は赤の団の在り方が気に入っています。種族も立場も気にしない団長の在り方が私は好きです。もしそれがユージエンちゃんに合っていて。居場所になれるなら、私達はとても嬉しいです」



「大歓迎しますよー！」

「……………」

そしてユージェンは沈黙し。

「た、体験入団だっ！」

ユージェンの唐突な宣言に、私達はつい噴き出してしまい。

そんな反応を見たユージェンは、ダークエルフの褐色肌であつても分かるくらいに顔を赤くしちやいました。

一応、ペこりと頭を下げます。ユージェンなりに、頑張つて落としどころを考え末にだした、結論なのでしようから。

「体験入団だから、私は赤の団になつた訳じゃない！仲間になつた訳じゃない！それならいいー！」

ある意味勝手ではありませんが、団長はユージェンにこくりと頷き。

握手を求める様に、手を伸ばします。

「歓迎するよユージェン」

「…………仲間になつたわけじゃないからな」

そう言いながらも、ユージェンは団長の手を握り返し。

「いいや、君はもう私達の仲間だよ」

そう言つて笑みを浮かべる団長に、ユーージェンは否定の声は出したりはしませんでした。

こうして、ユーージェンは赤の団に体験入団しました。

あの頃のユーージェンちゃんは私よりも小さくて。

ツンツンしてても可愛かったですね。

あ、でもこのことユーージェンちゃんに言つては駄目ですよ。

本人は昔からクールでカッコいい系の、大人な女性のつもりみたいですから。

## E10-3 影を受け継ぐ英傑の蕾ユーージェン

ユーージェンが赤の団に体験入団したところで議論は一旦止まり。

まだ日も落ちていませんが、今日はこのまま妖精郷の片隅で、一晚を過ごします。

野営設営も、もうお手の物です。

まあ料理は団長がテキパキと動いて用意してくれますので、私含めて皆出番ありませんでした。

そして、アトナテスが紫竜さんに持たせていた酒樽が開けられると。

団長もアトナテスもお酒が好きなので、そのまま酒宴の始まりです。

飲み比べしてる訳でもないのに、団長とアトナテスはグビグビと、ハイペースで飲んでるのを見ながら。

私も悪酔いしない程度に飲み、サナラはまだお酒が得意ではないので、ちびちびと呑んでは眉を顰め。

ダークエルフなので実年齢はたぶん、私よりも上だと思いうージェンは。

母様がお酒を飲むのは大人になってから。と言われたらしいので飲みません。

興味津々に、チラチラとお酒を飲む姿を見られると、いけない気持ちが沸いてきます

が、自重しました。

ただ、アトナテスはこの時。珍しく悪酔いしたのか、昼間から妙に気に入ってるユーージェンに絡んでいました。

やれ今までどうやって生きてきただの、影の射手にどんな訓練を受けてきただの、ユーージェンにどんだん質問を飛ばして。

ダークエルフの部族に捨てられ、影の射手に拾われ。

矢を身に受けて覚えると言わんばかりに、数多の矢を受けながらも弓術を叩きこまれ。

身のこなしを軽やかにするという理由で谷に落とされたり。

隠密を身に着けさせるために、音を立てた瞬間矢で射ぬかれたりと。

色々なぼうりよ……いえ教育……。うーむ……教育を受けたみたいです。

それが琴線に触れたのか、今まで泣いたことがない男が、涙を流しながら。

「偉い、偉いぞユーージェン！お前は凄い奴だ！名前も同じ五文字だし運命を感じるな！」

ユーージェンを抱きかかえ、頭を撫でて全力で褒めていました。

馴れ馴れしいのは嫌いだと、ユーージェンは最初の方は抵抗していましたが、アトナテスの腕力には勝てず。

酔っぱらいのされるがままになりました。

ただ、褒められること自体は嫌いじゃないみたいです。

あんまりにも褒め続けるアトナテスに、多少は譲渡する気になったようで、アトナテスの膝上でユーージェンはふくれ面ながらも、大人しく収まっていました。

「分かる。分かるぜユーージェン。俺もな、師匠みてえな奴がいるが。人が寝てる所襲ってくるわ。魔物の集団の中に投げ込むわ。ロクな奴じゃなかったんだ。我ながらよく生きてるなとシミジミ思うぜ」

「……その割には、楽しそうに話しますねアトナテスさん」

「楽しくねえよ!」

ユーージェンの指摘に、怒鳴り声を上げるアトナテスですが。

まあ心底その師匠さんが嫌いではないことは、ユーージェンの言う通り。良くも悪くも、楽しそうに過去話をするアトナテスの雰囲気から見て察することが出来ました。

まあなんにせよ、アトナテスは過去の自身と、ユーージェンの境遇を重ね合わせた結果。ユーージェンを全力で可愛がることにしたようです。

「ていうかな。なんだユーージェンよ。アトナテスさんって。他人行儀みてえだな」

「みたいじゃなくて、まだ他人みたいなものじゃないですか」

「お前はもう赤の団に入ったんだから他人じゃねえよ、仲間だ仲間」

「体験入団だっ！」

「細かいことは気にするな。ほら、俺を好きに呼んでみな」

アトナテスの言葉に、ユージエンはむうと考えた後。

いたずらを思いついたかのように、にやつと口の端を上げました。

「アトナテスおじさま」

ユージエンが、アトナテスをおじさまと呼んだその瞬間。

私とサナラは堪え切らずに、吹き出すように笑ってしまい。

団長も吹き出すのをこらえる様に、歯を噛みながらも笑っていました。

酔ってるとはいえ、さすがに怒るでしょうか。

面食らったような顔をしたアトナテスの反応を、私達は待っている。

「ユージエンみたいな姪が出来るなら、おじさまって呼ばれるのも悪くねえな。そう

呼びな」

頬が赤いので、酔った勢い感が強いのですが、その呼び方をアトナテスは気に入ったみたいです。

いつになく穏やかに、優しい気な笑みを浮かべるアトナテスに、ユージエンの中で、何が吹っ切れたのか。

ふくれ面がなくなり、頭をアトナテスに預けリラックスし始めました。

「おじさまおじさま。アトナテスおじさま」

「おうおう何だユージェン。おじさまに何か用か？」

ノリノリでおじさま呼びを受け入れるアトナテスに、私達はしばらく笑いを抑えることができませんでした。

「それじゃ私達の呼び方も変えてみましょう！」

サナラがそう提案し。

「……サナラ姉さま」

「ねっ——！」

可愛がられることが多いサナラには、姉と言うフレーズが気に入ったみたいで、それを聞いただけで固まりました。

まあ私もソラス姉さまと言われた時。一人っ子でしたので、妹がいたらユージェン見たいな子がいいなと思っちゃいました。

そして団長は、組織の長だからと、他の人と同じく団長とユージェンは呼びました。

私は変えてくれないのかと団長は、ちよつといじけたような顔を浮かべ。

アトナテスがいじけるから、もし呼び方を変える気になったら。私もおじさまと呼んでくれと言っていました。

それから数時間後。本来酒に強いはずのアトナテスが案の定ダウンして。

サナラ飲み慣れないお酒で眠気が来たのか、団長を膝枕にしているサナラをテントへと収納し。

さて、私と団長。そしてユーージェン。まっとうに会話できる状態となった三人になった所で。

先ほどの作戦の話の続きをすることにしました。

「それで団長。エルフの女王とはどうするつもりなんですか？」

「ん？ああそうだね。手は考えておいたよ。ユーージェンが体験入団を決めた後にね」  
さすがは団長。と言いたいところですが。

「やっぱり。私達が議論している間、何も考えてなかったんですね。もう」

「ユーージェンの事を思うと、どうにも気が引けてね。けど、私抜きでも色々と考えてくれるソラス達を見てたら、頼もしい仲間を持ったなと、改めて嬉しく思ったよ」

笑みを浮かべて言う団長に、私は直視できずに俯いちゃいます。

この人は本当に、口説き文句が上手いです。

人の鼓動を速めるが趣味なんでしょうか。

「……それで、どうするんですか団長？」

改めて私が問い掛けてみると、団長はサラサラと紙にペンを走らせ、封をします。

手紙ですね。エルフの女王に渡す為の物でしょうか。



そうになると、何が起きるか分からないので、使者は私かアトナテスになると思い  
ます。  
が。

「ユージェン」

そう思っていたら、団長はユージェンに声をかけ、その手紙を渡しました。

エルフとダークエルフの遺恨があるから、使者としてはちよつと、と思つたら。

またも予想とは違いました。

「これを持って、赤の団の拠点に向かつてくれ。そしたら、女王との件は全部上手く  
い  
く」

「これを持っていくだけ？ 本当に？ 手紙に何を書いたのだ」

「内緒だ。知らない方が、面白そうだからね」

微笑む団長にユージェンは、訝し気な表情を隠すことなくジツと団長を見つめます。

言わんとすることはわかります。団長でなければ、私もユージェンとまったく同じよ  
うな顔をしていたでしょう。

「不安かな？」

「それは……当然だ」

「そうか。じゃ魔法をかけてあげよう」

言うと団長は指先がキラキラと光つたかと思えば、空中で何かの文字を描き、手紙に

向けて指先を振り下ろすと。

ピカツと光つたと同時に、普通の手紙の見た目が変わっていました。

何というべきでしょうか。白い手紙が黒く染まり、そこに髑髏やら、よく分からないぐねぐねとした線がある、やたら凝った。

その……あれです。とても格好が良いデザインへと様変わりしました。

「おおお……！」

……ユージエンはそのデザインが、とても気に入ったようです。

表面をじっくり見て、裏面をじっくり見てと、興奮しているのがはつきりと分かりました。

「これはもはや手紙ではない。重要な指令書となった。これを最短最速で今日中に赤の団に届けられるのは、影の射手の愛娘にして、その技術を継ぐユージエンにしか出来ないだろう。いけるね？」

「ま、任せろ！」

「道中気を付けていくんだよ。ユージエン」

「分かった！」

そして、ユージエンは地図と弓を手にすると、タツと駆け出し。

一瞬にして夜の帳に紛れ、消えてしまいました。

「一人で大丈夫なんでしょうか？魔物とかいたら……」

「ユーゼンなら、魔物がいても一人で切り抜けられるよ。何も出会い頭に殲滅するだけが、戦いというものではないからね」

なるほど。そう言えば私達は基本、敵は全て漏れなく倒すが前提になっているせいか、適度にやり過ぎずと言う考えが抜けていましたね。確かにユーゼンの身のこなしの軽さと、正確に討つ弓の技術があれば心配無用ですね。

ああ、あと聞かないといけないことがありましたね。

「あの手紙には何を書いたんですか？」

「ユーゼンに内緒にしたから、ソラスにも内緒だよ」

にやりと笑う団長の姿は、悪戯を隠す子供のような無邪気さを持っていました。

教えてくださいいよと、私もつい子供ののように。団長の胸を何度かポカポカと叩いてみました。それでも団長はいたいたと笑うだけで、口を割ってはくれませんでした。まあ主目的は団長とイチャイチャしたいだけなので、それは達成しましたけどね。

はっ……今なら私と団長は実質二人きりです。

さあ団長！もつと私とイチャイチャしましょうじゃありませんか！

まずは肩をグツと寄せ合って……。

「明日の朝になったらすぐに分かるさ。ソラスは先に休んでいてくれ」

「……はい」

火の面倒まで団長は引き受けると言い、申し訳なさを感じましたが。

断固として休めと言う団長に逆らえず、私はサナラを毛布代わりにして、体を休めることにしました。

すぐに訪れた眠気で、視界がぼやける中。

妙に影が濃くなっている団長は、お酒を注いだコップを二つ。一つは手に、もう一つは誰もいない椅子の前に置くと。

静かにお酒を飲み始めたのを見て、アトナテスが復活したのかな。

そんな感想を抱きつつ、私は眠気に意識を委ねました。

翌日。

妖精郷は、あちこちで大慌てになったことでしょう。

侵入者発見と警告の鐘が鳴らされ、戦闘準備して向かってみれば。

そこに居たのは、ある意味普段通りな魔物ではなく。

人であったり、同族であるエルフであったり、遺恨のあるダークエルフ、はたまた魔が入ってる獣人だったりと。

様々な種族がいる混成部隊が各地で一斉に、妖精郷の結界を破り。

妖精郷の都市へ、女王がいる場へ向かい。武装はしつつも、歩みの邪魔さえしなければ

ばその武器を振るわず、ただまっすぐに歩を進めます。

その混成部隊の長、最前を歩くのは当然。

私の英雄。赤の団団長。

「と、止まれ！」

都市の防衛を務めている衛兵が、焦りながらも自らの役目を果たすべく、その声を張り上げますが。

団長はその声を意図して無視して歩き続けます。

申し訳ありませんが、団長が足を止めない限りは、私達は足を止めることはありません。

そして、衛兵が数人で私達を止めようとしても、無理でしょう。

何せ、赤の団の戦える人。拠点が問題なく防衛出来る程度の戦力以外は、今全てこの妖精郷に集っていますから。

グングンと団長は無言のまま歩を続け、その足が止まったのは。

ダークエルフを拒むエルフの女王。影の射手と同じく。すでに老いが見える。けれども影の射手が黒ならば女王は白。

高潔さを思わせる白を基調とした装いをしたエルフの女王が、団長をしつかりとその目で捉えた時でした。

「まずはこのような形での謁見となったことと、魔物が跋扈する時分に民心を惑わせたことを謝罪します」

謝罪しますと団長は言っていますが、本心でないことは明確です。何せ全部、団長が仕組んだことなんですから。

「影の射手より、人が四人。結界を破って来たと聞いたが、最初の四人は偵察だったのか？妖精郷を襲う為に、事前に用意していたのか？」

「とんでもない。私と他三名以外は皆今朝集まってくれたのですよ」  
「それを示すものがあるのか？」

厳しい視線を送るエルフの女王ですが、団長は涼しい顔をしています。

ですので、その少し後ろに立つ私も、アトナテスとサナラも、皆で一致団結して涼しい顔をして見せます。

実のところ、今回の作戦は、はっきり言って作戦と言えるほど計画していません。私知知っているのはせいぜい、昨日知らされた手紙の内容と。

当日集まった団員に対して、団長が付いてきてくれと言っただけ。

それだけが、今団長の背に居る団員達が共有している、今回の作戦内容です。

「ユーージェン、あれを女王に」

団長の隣で、女王を目の前にして顔を青くしているユーージェンに。

団長は膝を曲げて背を合わせて、震えるユーゼンの両肩に手を置いて、安心させるように優しく囁きます。

「心配するな。いざとなったら俺達が動く」

「アトナテスおじさま……」

「……おじさまと呼ぶな」

再開時にユーゼンにおじさま呼ばわりされ、アトナテスは何でだよ！と叫んでいたが。

私含めて、三人もその呼び方を本人が了承したことを証言できますので、ユーゼンの中では、アトナテスはおじさままで決まりました。よかったですねアトナテス。

「サナラお姉ちゃんも付いていますよー」

「ユーゼンちゃん。頑張って」

私もサナラも声援を送り、ユーゼンは恐る恐ると女王に近づき。  
あれ。

昨日、団長がユーゼンに託した手紙を女王へと手渡しました。

女王はダークエルフであるユーゼンに一睨しますが、無下にはしませんでした。  
血は繋がっていないなくても、ユーゼンは影の射手の娘ですし、なにより。

団長はきつと、女王がユーゼンに手を上げようものなら。何もかもが台無しになっ

てでも、本気で斬りかかるつもりらしく。

少しばかり前のめりに、ユーージェンを庇いかつ、剣を振るえるような姿勢をしていた。  
した。

「まったく影の射手にも困ったものだ。その娘もな」

重い溜息を吐いた女王ですが、ユーージェンから手紙を受け取り。

その内容を見て、目を見開きました。

赤の団、妖精郷に集え。

手紙の内容は、たったこれだけです。

これだけで。たった一晩のうちに、団長の下に赤の団団員のほとんどが、団長の使い。

ユーージェンを信じて、団長の指示を信じて、団長の下に集いました。

その中には人もいれば、人じゃない種族もいます。

ですが、それでも団員達は集まってくれました。

種族の壁を超え。団長が団員を、団員が団長を信頼してないと出来ない作戦です。

集まった団員達を女王は眺め、団長を再度射止めた時団長は説明を始めました。

「私達が一夜で集結できたことは、ユーージェンがその手紙を持ってきたことで、証明できるところでしょう。」

結界を破り入ってきた人数は四人、出て行ったのは一人です。



そして、その一人。ユーゼンでなければ、赤の団の拠点に一夜でたどり着き。その手紙の内容を団員達に知らせるのは不可能だったでしょう。例えダークエルフであっても、ユーゼンは妖精郷の森と道を知る者ですからね。

もし、私達が侵略の為に、団員達と動かしたと考えているのなら、影の射手という優秀なエルフを持つあなたが、その動向を今の今まで知らなかった理由をお聞かせ願いたいですね」

まくしたてる団長に、エルフの女王は沈黙で答えます。

当然です。エルフの女王が、団員達の動向を知っている訳がありません。

だって、本当に昨夜の夜中あたりに手紙が届き、そのまま拠点に居た人達が団長の命ならばと出兵したのですから。

捏造でもしていない限りは、情報は入ってこないです。

「では改め宣言しましょう。この場にいる。私達赤の団は、妖精郷と交戦する意志はありません。」

私と、私が指名した使者ユーゼンを信じたからこそ、ただ妖精郷に集っただけです。

ご理解いただけましたでしょうか？」

語り終えた団長に対して、女王から重い溜息を吐きましたが。

そこから、敵意は感じられませんでした。

「……して、赤の団団長は何を求めて、このような騒動を起こしたのだ」  
これは、交渉の余地ありでしょうね。

団長は姿勢を正します。ですが、膝を屈するようなことは団長はしません。

共同戦線である以上、一方的な庇護下に置くつもりも、置かれるつもりもないのですから。

「女王よ。あなたが望むならば、私達赤の団と妖精郷との、対魔王を想定した共同戦線を。望まないのであれば……」

一瞬、場に緊張が走ります。

要求次第によつては戦いに。なんてことになりそうですが、まあ起きないでしょう。

ニツと笑みを浮かべた団長が、私にはとつても眩しく映ります。

「何もしません。団員全員を引き連れ、すぐにでも私達の拠点に帰ります」

これには女王もぼかんと口を開けて、驚いていました。

「影の射手より話は聞いている。お前達は賭けをしているのだろうか？」

「ええ、共同戦線を約束していただければ、影の射手は赤の団には入ってくれませんか」

「ならばなぜ帰るなどと、お前は言えるのだ」

「私個人が下らないと思うような理由であれ、私は相手に無理強いをさせるつもりは

ないのです。だから、断るといふならば引き下がります」

「ほう、ならば。怨敵であるダークエルフなどを抱える団の願いなど、断りを入れてやろう。構わぬな？」

「構いません」

「本気か？」

「はい」

怪しくなりつつある雲行きに、すまし顔の仮面がはがれそうになりますが、団長の余裕な顔を見て、私は仮面を張り直します。

「そもそも、共同戦線など私達赤の団には何も意味を持ちません。何故なら」

団長がバツと両手を広げると、妖精郷に入った時に感じた違和感が肌を感じ。

パンと団長が両手を叩くと、その違和感が消えました。

ほんの少し見て触れただけで、団長はエルフの結界を張る術と、壊す術をマスターしたみたいです。

本当にこの人なんでもできますね。

「私達は赤の団。魔物に襲われていているのならば、私達は助けに動いてしまうのです。す。

それが人であれ、エルフであれ、相手が助けを求めていなくても、拒絶しても、例え

結界を張ったとしても。

それを壊し助け、張り直してでも私達はあなた達を助けます。その後襲われるとしてもです。

だから、共同戦線の約束なんて、私にはどうでもいいのです。影の射手との約束だから、結んでくれと言ってはみまずけどね」

どうだまいったかと言わんばかりに、自身に溢れる顔を浮かべる団長に、私も誇らしく感じて、つい笑みを浮かべてしまいます。

そうです。赤の団は誰であつても助けるのです。共同戦線を張つてくれなくても、私達は助けてしまうのです。

この在り方が私達赤の団なのです。

「では赤の団団長に問おう。共同戦線は結ばぬ、結ばぬとして、影の射手はどうするのだ？ 諦めるのか？」

「諦めません。彼女には赤の団に入って貰う。その為に……」

「その為にどうする気だ？」

「何度でも、彼女を口説いてみせますよ」

口説く。

そう聞いた女王は、その長い耳で聞いた言葉が聞き間違いでないか、考えるように顎

に手を当て。

団長を見て、手をそのまま目で覆うと。

様になる高笑いを、女王は上げました。

そしてそれが、数分も続いた後、ようやく女王は口を開きました。

「たかだか百年も生きられぬ人が、エルフを何度でも口説くと。ふはは、赤の団の団長は、いくつかある人とエルフの伝え話を知らぬようだな」

言つて、さらに女王は少しばかり笑い。

それがようやく落ち着いた頃、深く頷くと。

「分かった。赤の団と共同戦線結んでやろう。同胞であるエルフ、怨敵であるダークエルフを抱え込み。

私にダークエルフの使いを寄越す。尊大なお前の器を気に入った。それに、直すと  
言っているが、そう何度も我らエルフの結界を壊されるては、エルフの誇りに傷がつく。  
仔細は後々決めるとしよう」

「分かりました」

そう、話が纏まりました。

さすがは団長ですね。ユーゼンを連れて会ってくれないなら、それをうやむやにするくらい  
の人数で押しかけ。

誇り高いエルフ達の為に結界という、落とし所を用意して、話を纏める。

きつと全部、団長には予想通りなのでしょう。そう言われても私は納得しそうです。

さあ、このまま影の射手を探しに行きましようと思つたら。

女王が口を開きました。

「だが、忘れるな。赤の団団長よ。お前が数多の種族を抱える大きな器を持つとうが、この盟約は一時のものでしかない。

共通の敵に一時協力することもあろう。だが、種が違う以上、すれ違いは起き。やがて崩壊するだろう。

お前達赤の団のような、寿命が異なる種族を抱える組織は、确实にな」

これを聞いた瞬間。

私は何も話す気はなかったのですが。

赤の団の、種族を超えて協力する私達の在り方を、女王は否定しているかのように聞こえ。

思わず言葉が飛び出しました。

「そんなことありません！種族を超えて、皆が魔王の討伐に協力し。その後の平和を、すれ違うことなく、崩壊することなく、団結したまま維持することは出来ます！赤の団は、今そうして皆一致団結して戦うことが出来ているんですから！」

「そうですね！私達赤の団の団結は、種族が違う程度じゃー！どうにもなりませんよー！」  
私がか呼び、サナラも呼び。他の団員達も、幾人か同意するように声を上げて抗議してくれました。

こういった場で、発言権がない人が許可なく話すのは、とても失礼な行為であることは理解してました。

そのことで女王や団長から叱りを受けることは覚悟します。

けど、これは譲れません。

女王と視線が合い、言葉を待ってみると。

「ほう、それは楽しみだ。同じ時を歩む人同士ですら、団結を維持し続けるなど不可能だと言うのにな」

女王は冷たく言い放つと、興味ないとしても言いたげに、私から視線が外れました。

「……………」

一方で、静かに私達のやりとりを聞いていた団長に対しては、女王は値踏みをするかのように団長を見た後。

以降は団長に対し、女王は明確に好意的な視線を送っていました。

このままもう少し沈黙が続いたら、口が再び開きそうになりましたが。

「ところで女王。さっそくお願いがあるのですが」

「何だ団長よ？」

「せっかく武器を携え来たのです。」

お互いの実力を理解する為にも、どうです？妖精郷の戦士と、赤の団で一戦交えてみませんか。今後共に戦う上でも、何かと参考になると思いますが」

「よからう。エルフの技。存分に味わうといい。皆戦の準備をせよ」

団長の模擬戦の提案に、女王はすんなりと応じ。

「俺達も準備をするぞ。ほら動け」

アトナテスが、困惑している人達に対してあれこれと指示を始めました。

「団長、何も言い返さないのでですか？」

ですが、私は納得できず。団長にそう言うてはみましたが。

団長はただ、フルフルと首を振り。

「さあ模擬戦だ。皆、頑張ろう」

無理にでも話を切り替えるように、団長はそう声を張り上げました。

あの人は、きっとあの時から分かっていたんでしょね。

種族を超えて、一時の協力は出来る。

けれど、恒久的な協力は不可能だと。



いつか必ず。

どこからか綻びが生まれ、本当に些細な理由で崩壊してしまうと。

多様な種族を抱えた国の行く末何て、決まっているのですよ。

……怖い顔をしている王子君。

勘違いしないでください。

崩壊というのは、ただ起きるのを待つばかりではなく。

崩壊のさせ方を選び、あえて起こす事も出来るのですよ。

まあ随分先の話になるのですが。

## E10-4 影を受け継ぐ英傑の蕾ユージエン

首をフルフルと振るっただけの団長の意図を考え。

考え、考え、思い浮かばず。

若干の鬱憤晴らしを兼ねて、グランドクルスを放ちます。

星が降ってきたと驚き慌てふためき、撤退するエルフ達を見て。

どんなもんですかと、キメ顔一つ浮かべたくありませんが。

お返しとばかりに降り注ぐ矢と魔法の雨に、被弾する前に撤退します。

ちよつと前に出過ぎたみたいです。

「弓の精度と魔法の苛烈さは、さすがはエルフってえ感じだな」

「少しずつ、数を減らしていくしかないね。けどその前に……」

本陣に帰還すると、サナラがよく使う土魔法がドーンと立っていました。

視線をそちらへ向けると、前線で一通り暴れまわった後の団長とアトナテスが、戦場を俯瞰しながら、作戦を考えているようです。この二人が揃って前に出ると、それだけでエルフ側の前線を蹴散らして、後衛の部隊まで喰らう勢いだったので、団全体の戦闘力を見るという建前と。そして例の……事象も起きてしまうので、一時撤退し、団長は

指揮に専念することにしたようです。

ただそうになると、飛び道具持つ相手にも、問答無用で攻撃を飛ばすだけの力ある団長と、アトナテスが抜けたことで戦況が変わり。

ソルジャー達は弓で射られ、ヘビーアーマー達は魔法で焼かれ。

反撃しようとするアーチャー、ウィッチ、メイジ達の射程が相手に及ばず、一方的にやられています。

ヒーラー達の頑張りで、なんとか持ちこたえています。このままでは負けてしまうでしょう。

模擬戦ですので、負けた所で問題はないですが。先ほどの件もあって、模擬戦くらいは勝ちたいという気持ちですが、私の中で渦巻いています。

「団長、もう一度私が出ます」

「駄目だソラス。私の隣に来てくれ」

「はいっ！」

団長に隣に来てくれと言われたら、行くしかないでしょう。

団長の手を借りて、土魔法の高台に登り。

高い所から戦場を見回し、あっと声が漏れてしまいます。

「団長、このままでは！」

「負けるね」

「どうするんですか団長？」

今回の模擬戦の勝敗は相手の全滅か、二つある本陣に一定数の侵入を許したら敗北です。

だと言うのに、片方の陣を守ることに集中しすぎて、もう片方の陣に侵入しようとするエルフ兵に、団員は気付いていません。

この戦況を打開できそうなのは、団長とアトナテスくらいです。

せめてもう一人。兵士を指揮できるだけのカリスマと、屈強な戦士がいたら心強いのですが。

いない以上は手の内で、なんとかするしかありません。

ですが、そうなるとサナラが土魔法で遅延するくらいしか方法が。

と思っていたら、特に被弾した訳でもなさそうですが、サナラが帰還しました。

ああ詰んだ。

「団長！指示した場所に地脈パワーを全開にしましたよ！」

「ありがとうサナラ」

しかし、団長は余裕のある笑みを浮かべたまま。優しい手つきでよしよしとサナラの頭を撫で。

この戦況を打開できると確信しているかのような、強い声音で名を呼びました。

「ユーゼン」

「な、何だ？」

「出撃だ。準備してくれ」

「うう……じゅ準備と言ってもな……」

困惑というよりも、どちらかと言えばこれは……。

戦闘前の緊張によって声の上擦っていました。ああこんな時期が私にもありましたねと、懐かしさを覚えます。

「魔法で狙ってほしい相手に目印をつけるから、その相手を弓で射てほしい。できるかい？」

「いや、でも、私はその……体験入団しただけだから……」

また何やら言い訳を並び立てそうなユーゼンに、団長は遮るように。

小さなユーゼンの両肩に手を置き。

「体験入団であつてもだ。ユーゼン。君は私達の仲間だ。私達が全力で君を守るように。君も君の力で、私達を皆を守る為に、その弓を使ってほしい」

「私が、皆を守る？」

「ああ。だからまずは、私達の本陣を守ってほしい」

こくりと頷く団長に、ユーージェンは手に持った弓をギュツと握り締めます。まるで、その弓が何のためにあるのかを問いただすように。

「……母様のように、矢を連射することも、複数に射ることも、弱点を射貫き続けることは出来ない。だが、狙った相手に矢は外さない」

そして不安げな声で、けれども最後は力強く。

そうユーージェンが答えてみせると、団長は。

「充分だ」

勝利を確信したかのように、そう告げるとユーージェンにいくつか指示をして。

団長はユーージェンを見送りました。

その後、ユーージェンの活躍は見事の一言でした。

サナラの力により、強力な地脈の加護を受けたユーージェンの矢は。

団長の指示通り、本陣に真っ先に迫ろうとする盾持ちではなく、その盾持ちを癒すヒーラーを真っ先に狙い。

アーチャー同士の一騎打ちを制し、残された盾持ちを倒すと。もう一つの本陣へ救援に向かい。

前線が崩れる原因となる、後方にいるメイジとアーチャー達を次々と倒していき。

立て直しに成功した団員達による一斉攻撃で、敵を全滅したことで模擬戦は私達、赤

の団の勝利となりました。

そして、その後。

「ダークエルフなど、所詮弓を扱えぬ野蠻人だと思っていたがやるな」

「さすがは影の射手の娘だ」

「凄いでユージェン！お前の弓は物質界一だ！」

「ううああああ……」

エルフとダークエルフの遺恨が消え。

とまではいかないでしょうが、ユージェンはひっきりなしに、妖精郷のエルフ達にその弓の腕前を褒められていました。

それに負けないくらい、アトナテスもユージェンの頭をガシガシと撫でまわしながら、盛大に褒めていました。

褒められすぎて、ユージェンの顔が真っ赤になっていました

「ダークエルフではあるが、お前の活躍は見事だった。母がそうしたように、鍛練を怠るなユージェンよ」

そして、あのエルフの女王も、ユージェンを褒めたことで、お祭り騒ぎとなり。

まるで流れるように、ごく自然と赤の団と妖精郷のエルフ達で、酒宴が開かれました。戦場で戦い、同じ釜の飯を食べ、肩を組み合って酒を飲む。

これ以上に分かりやすい、共存共栄はないでしょう。やはり、すれ違うことなく。皆が協力して平和を築くことが、可能だと私は確信します。

そしてその象徴たる団長は。

周囲の人達がユーージェンを持ちあげ続けるせいで、私もあちこち走り回って、地脈操って頑張ったのにと拗ね。

それを口実に、団長に甘えるサナラの相手をしていました。

そこまで拗ねていないことが、私には分かったので、その間に割って入ります。久方ぶりに私に喰るサナラですが。私だってもっと団長に甘えたいんですよ！

「団長を一人占めにはさせませんよ、サナラ」

「今日の団長はサナラの日です！だから私が一人占めしてもいいんです！」

「何を言ってるんですか!?!ソラスの日なんて一日も来たことないんですよ!!」  
と、そんな感じで、私とサナラで団長の取り合いをしていると。

「随分と、仲の良いことだな」

私達の前にエルフの女王が現れました。

そして、エルフの女王は視線を私とサナラに向けられます。

先ほどの件と、そして今。人とエルフ、それ以外の多種の人々が壁を超え。



皆で楽しそうに酒を飲む光景を見て、考えが変わったのでしよう。

「……………」

しかし、女王は何かを語ることなく。

視線を団長へと動かししました。

動かす前。確かに私を、愚者でも見るかのような冷たい視線を送った後で。

「……………」

思わず、また口を開いてしまいそうでしたが、団長が私の手と、ギユツと握りましたので、瞬時に口を閉じました。

いつものように、暖かに包むような手ではなく。

静かにしてくれ。

そう、命令するかのような強い握り方でした。

「あまり、彼女をからかわないであげてくれませんか？」

「何、老婆心というものだ」

女王の言葉に団長は苦笑いを浮かべ。女王も団長を労る様な笑みを浮かべます。はつきり言って、エルフの女王は好きになれそうにありません。

冷たい態度どうこうもありますが。

まるで、私よりも団長を理解しているかのような、その態度が癪に障ります。

「それで、女王であるあなたは団長に何の用のですか」  
自分でも、刺々しくそう言葉を紡ぎ。

「案ずるな小童。私はもう老いた身。今更男日照りで、若い女から男を盗るような真似はせん」

「何を言っているんですか!？」

手痛い反撃に、続く言葉がなくなりました。

それでもキツと鋭い視線を女王へ向けますが、女王はそんな私に歯牙にもかかけず。

「影の射手よ。そろそろ姿を現したらどうだ?この男は約束を守ったぞ」

団長に向かって、そう言い放ちました。

……: どういう意味ですか。

団長の背に居るのかと思いましたが、影の射手はいません。

まさか、いつの間にか団長に変装してと考えていると、団長の影がするすると伸びていき。

伸びきった影は団長の影から分離し、影から黒い装いをしたエルフ。

影の射手が現れ、私とサナラの口からわつと、声が零れます。

団長は最初から、自らの影に影の射手がいることを見抜いていたようで、驚くことな

スツと立ち上がりました。

「そうですね女王。そして団長」

そして、立ち上がった団長とは対照的に、影の射手は背負う黒い弓を地に置き。

まるで、忠誠を誓う騎士のように、団長に跪きます。

「影より、あなたの行動を見守らせていただきました。見事でした。赤の団団長。あなたは私には出来なかつたことをやってのけました。もはや、一切の迷いもありません」

そして、歳を感じさせない。よく響く凜とした声で影の射手は宣言しました。

「女神アイギスより受け賜わりし我が黒き弓と、我が技と忠誠を赤の団団長に捧げましょう」

宣言を受けた団長は、スツと跪く影の射手に手を伸ばします。

「忠誠は別にいい。だが、影の射手よ。共に手を取り戦おう、この世界に平和を取り戻す為に」

団長の手をジツと見つめた影の射手は、柔らかな笑みを浮かべ。

「そうですね。美味しいお酒を飲み交わした仲ですものね」

団長の手を影の射手は握ると立ち上がり、影の射手は赤の団の仲間に入りました。

そして、影の射手は未だに揉みくちやにされているユーゼンを、集団から引つ張り

あげ。

「娘共々、よろしくお願いします」

「……お願いします」

親子揃って、ペコリと団長に頭を下げました。

こうして、影の射手は英雄王の仲間になりました。

見た目相応の立ち振る舞いをするあの人には、私も色々とお世話になりましたね。

こう美しい所作だったり。曲がりなりにも副官をするなら、身に着けておくべき知識  
だったたり。

……長生きする秘訣でしたり。

本当に、色んな大切なことを、彼女から教わりましたね。

## E 1 1 万慧を砕きし英傑トウアン

影の射手が仲間になり。二月は時が流れました。

加入直後は、あれこれと赤の団と言う組織として、改善しないといけない事が多く。赤の団全体の体勢を整えるのに時間を要しました。

「チーム編成ですか？」

「今までは戦場ごとに私が団員を選抜したり、皆一斉にと戦っていたが。妖精郷のエルフ達を始め、今後共に戦う仲間が増えてくると考えると。適切な戦力を、先遣隊として現地投入するようにしていきたいんだ」

「分かりました。団員達の詳細なプロフィールを集めておきますね」

「ありがとうソラス」

それらが落ち着き。変革した私達赤の団は、拠点設立後。ようやく魔物との戦いに、専念することが出来るようになりました。

独自の情報網を持つ、情報戦の玄人影の射手の手腕によって。

赤の団は情報戦において、各大国に対して遥かに優位に立てるようになりました。

これにより、大国から来ていた誤情報に惑わされず。かつ相手となる魔物の戦力すら

も、把握できるようになり。

赤の団は拠点から各地に適切な戦力を派兵し。団長が率いる本隊が到着するまで、先行部隊が現地で魔物の襲撃を耐える。

そんな戦いの方が可能になりました。

それはいいのですが、また問題が起きました。

私と、アトナテス、サナラ。

それに加え、新参ながら団長と共にいる時間が、すでに並みの団員より遥かに多い。影の射手、ユーージェンがいる。

赤の団の全てを決定する執務室の椅子に座る団長は、影の射手によって齎される情報の数々を見て、険しい顔を浮かべていました。

「この頃、魔物による被害が増えていく一方だ」

「数もそうだが、単純に魔物が強くなって来てやがるな」

「大国ですら容易に、魔物の対処が出来なくなっているみたいです」

団長の言葉にアトナテスが真っ先に反応し、影の射手が補足して。

団長は頷きます。

「中央の強国の王を通して各大国の王に、対魔王に向け共同戦線を張ろうと言っているが……。その魔王の存在を信じない王が多く。状況は芳しくないようだ」

「何か手はないのですか団長？」

サナラの問い掛けに、団長は顎に手を当て。

少しの時間を要した後。

「……私が出た所で、きつと良いことにはならないだろう。この件は中央の王に任せ  
るべきだ」

「そうなのか？ 団長ならエルフの女王様の時のように、上手く話を纏めてくれそうだが」

ユーージェンに団長はふるふると首を振ります。

「政治的な話は、本当はもつと色々なしがらみがあるからね。まあ何より。彼らはエルフの女王と違って、私を嫌っているみたいだから。易々とはいかないだろう」

むうと考え込むユーージェンに、団長は成長を期待するような優しい笑みを浮かべた後。

周囲にいる人物達を見まわし、最後に団長の隣にいる私に視線を合わせ。

「では予定通り行動しますか？」

「そうだねソラス。私達は私達のやれることをやろう。まずは各小国の王達と協定を結んでいこう」

団長はそう言つて、立ち上がり。

拠点から出立します。私達はその後ろを姿を追いかけます。

そして、赤の団の拠点より、数週間かけた遠い地にある密林に到着しました。

暑さと湿度により気が滅入ってしまいそうになる中、目的地に向かって黙々と足を進めます。

赤の団は再び、悩みを抱えています。

強くなる魔物もそうですし。影響力が大きい団長の事象もそうですが。何よりも、日々増えていく団員に対して指揮できる者が、団長とアトナテスくらいしかいなかったのです。

そして、若干戦闘好きの気がある二人が、戦いに集中し始めて、指揮が滞ると。途端に乱れが起き。小さな乱れが、全体の乱れとなり波及します。

一部、巡った小国で勧誘してきた人物の中に。軍を率いることが出来そうな、武闘派な元お姫様も、いるにはいたのですが。

彼女達はあくまでも戦士であって、指揮官ではなかったのです。

その為、指揮できる者を増やすことは急務でした。

そこで白羽の矢が立ったのが、今私達は向かっている密林にあるとされる、国の女王のようです。

「国と聞いたが、やっぱり規模は一部族と変わらねえな」



「けど、侮つてはいけないよアトナテス」

「当然だ。こいつら戦つてみて分かったが兵の装備も練度もいい。補給線もしつかりしてるな。王が噂通りの強者なら、大国でも、魔物共でも容易に落とせねえだろうな」

原始的な、と言えばちよつと悪口に聞こえそうですが。

今まで訪れた国々とは全く違う。

文明から離れた生活模様と、その営みを見て、世界にはこういった暮らしもあるのかと、私は感心しました。

旅行をしている訳ではないので、気楽にははいけないのですが。

「見た事のない果物が生えていますね団長！」

「兵士達皆、似たような模様が太ももにあるが意味があるのだろうか？」

サナラとユージェンはキョロキョロと、興奮しながら忙しなく頭を動かして観察しています。

そして、そんな私達を人々は、警戒心を露にし武器を携えながら見守っています。

理由は、彼らの土地に足を踏み入れた途端。襲われたので反撃した結果です。

彼らの土地に私達は無断で入ったので、気持ちは理解できますが。

仕方ないと、私は思っています。

入国や王への謁見等、度々行動を押さえられると、その逐一かかる時間の内に、魔物

は人々を襲うので。

こういつた時。団長は対話ではなく武力をもって我を通します。

友好を望む者には友好の手を、敵対を望む者には剣を。

我を通すときは勝利を持って。

それが団長の、ひいては赤の団のやり方です。

そして、そのやり方のおかげで私達は、小麦色の肌と亜麻色の髪を持つ王の前に。

おそらく祈りをささげる為の神殿の前にある広場で、各地の大国の王の玉座を知っている為か。

いささか、鮮麗さを欠けると言わざる負えない。ただ石を椅子の形に下だけの玉座に、兵士達に囲まれながら座り。

えつと、その……。

……………。

おそらく側仕えらしき少女を膝上で、さながら愛玩動物を愛でるかのような手つきで可愛がつていました。

「まさに蛮族の女王って感じだな。どっちもイケるってか」

「……アトナテス。もうちょつと言葉を選んでください」

「何でえ」

「教育に悪いからです」

その光景を視界に納めた瞬間、私はサナラの目を手で覆い。

ユージェンの目は、影の射手が覆ってくれました。

何で隠すんですかと、サナラからぶんぶん抗議されましたが。

彼女達には、たぶん目の前にある光景を見せるのは毒です。特にサナラは、あれこれ

と目覚めた途端、団長に果敢に突撃しそうなのでなおさらです。

さて、はつきり言つて直視するのも恥ずかしいので、さつさとUターンしたいのですが。

団長は目の前の光景を見ても、まったく意にせず足を進め。

ザツとひと際大きく、足踏みを鳴らし団長は女王を見つめます。

ですが、女王も女王で目の前にいる団長を気にすることなく、愛撫する手を動かし続けていました。

そして、しばしの沈黙が流れます。

この場合まず、同情すべきは団長に見られながら、女王に可愛がられてる少女でしょうね。

さすがに見られながらは勘弁してほしいのか、女王の膝上で身じろいでいましたが。

女王の力が強いのか、振りほどくことは出来ずがまま……あの、このままエスカ

レートするつもりなのでしょいか。

やっぱり、いったん帰った方がいいんじゃない。

というか団長。もしかして、まさか目の前の光景に見入ってるんじゃない……という懸念は。

女王以外は眼中にない。そう宣告しているような、私の好きな強い意志が灯った、団長の眼がそう訴えていました。

「私は——」

「知っている。赤の団団長」

沈黙は破られました。

今回は団長が痺れを切らしたのでしょいか。名乗ろうとして、遮られました。

あれこれと言えた義理ではありませんが……いくらなんでも。これには私も、アトナテスも攻撃しようとは思いませんが、眉くらいはひそめます。

けど団長は涼しい顔をしたまま、女王何もしなければ、まったく動きがないのか。

ジツつと女王を見続け、そんな団長に、今度は女王の方が痺れを切らしたのか。

膝上の少女を開放すると、ようやくトパーズの色をした女王の目が団長を捉えました。

その瞬間。

団長は何だか嬉しそうで。まさに、目の色が変わったのが分かりました。

「あたしはトウアン。何の用だ？」

トウアン。そう名乗ったこの国の女王に、団長はこれまでの経緯を語り。

トウアンが女王として、民の為に魔物と第一線で戦っていることを讃え。

いずれくるであろう魔王と共に戦おう、人々を魔から助けたいという志は同じだ。

各地を巡ってきた赤の団だからこそ理解できる。魔物の被害は、物質界全ての人々に及ぶ災厄であると、その原因である魔王は確実に存在すると、団長はそうトウアンを説得し。

これらを撃退するため、赤の団と協定を結ぼうと、言葉を締めました。

「……………」

団長の言葉聞いたトウアンはスツと立ち上がると、団長の目の前へ。

きつと、トウアンの説得に成功したのでしよう。

これから固い握手が交わされる。

そんな呑気なことを考えていた私の視界に。

空中をポーンと、トウアンに殴られ、キレイに吹っ飛ぶ団長の姿が目に移りました。

ええええええと困惑に数秒、現状の理解して手をサナラから開放するのに数秒、そして

て天球儀を取り出して、戦闘の準備を終えるのに数秒とされている間に。

一瞬にして、アトナテスが斧槍を引つ提げて飛び出しました。赤の団団長である彼に手を上げた時点で、もはやそれは私達、赤の団戦いです。すでに幾度となく陰湿な手で先制攻撃を受けてきたので、アトナテスはこういった時。特に機敏に動いてくれます。

そして最近では影の射手も、団長の護衛として振る舞うようにしているためか。これ以上の追撃を止めるべく、黒い弓にはすでに飛翔する時を今か今かと待つ、矢をつがえています。

ですが、アトナテスの斧槍が誰かを傷つける前に、影の射手が矢を放つ前に。制止しろ。

吹っ飛ばされた団長は倒れたままなのに、私達に命ずるよう。そう手の平を向けていました。

「何でだよ団長!？」

「まあ待つててくれ」

吠えるアトナテスに、団長はそう言って再びトウアンの前に立ちました。

そこで、私達は気付きました。

殴った張本人であるトウアンの顔が、やってやったみたいなしたり顔ではなく。怒りによって、顔を歪めていることに。

「お前、なんで避けなかった？」

トウアンの言葉に、私は悟ります。

なるほど、団長はあえてトウアンの攻撃を受けたのですね。

でも、どうして。

団長ならば攻撃された瞬間、交渉決裂と断じて反撃するのが常なのに。

「私は君には私と共に戦列に並んでほしいと思つている。だが、そうなる君は、君の国から離れざる得ない。」

そうになると、団長として私は君の国の防衛等々を考えなくてはいけない。君の国に責任を負わなくてはいけない。

そんな男が。女王である君の拳一発も受け止められないのでは、話にならないだろう？」

女王と、女王が支配する国を背負うと言う男が、一発の拳も受け止めれず何とする。なんとも清々しいと思える団長の言葉ですが。

何となく、私にはこれが団長の本心でないように感じました。

そしてそれは、私だけではなく。言われたトウアンもそう感じたようです。

「これだから文明人は……回りくどい事や、奇麗事ばかり並び立てていないで、お前の本心を語れ！」

激昂するトウアン。

まさに猛獸を彷彿させる氣迫に、その怒りの矛先が向けられていないのにも関わらず、私は氣圧されます。

トウアンからは、私のような普通の人間の理から外れたような。

そんな力を感じさせます。例えるならば、祝福。神の加護。

超常的な何かを。

ですが団長はというと、そんなトウアンに恐れることなくさらに一步踏み出し歩み。

「本心か……トウアン。私は君が欲しくなった」

「はあ？」

「えっ……」

今何と？

私の理解が追い付く前に。

「そして……」

団長はじりつと利き足を後ろに下げ。

「殴られたら殴り返すのが私の主義だ」

そう言うや、団長の拳はトウアンを捉え。

先ほどの意表返しのように、トウアンがキレイに吹っ飛びました。



これには私達がそうであつたように、トウアンの兵士達が武器を手に立ち上がり。女王の号令を待ちます。

そして、女王は自らの武器である戦斧を手に取ると。

「お前達っ!!」

その、勇猛なる声に兵士達は行動を開始し。

「赤の団、戦闘開始!!」

その、愛しき凜然とした声に、私達は武器を取り、戦いが始まりました。

今のトウアンは女王ではなくなっています、性格はそんなに変わってないですね。気に食わなかったら英雄王相手でも拳を振りますし、お酒をたくさん飲んで、色々と周囲や私を振り回していましたね。

千年戦争後は色々と……私には合わない事していたせいでゴタゴタしていたので、疎遠だったのですが、変わらず元気で何よりでしたよ。

おや……王子君は何かトウアンについて知ってそうですね。

その隠し事してる顔……英雄王にそっくりですよ。

## E11-2 万慧を砕きし英傑トウアン

赤の団とトウアンの兵士達の戦いは、全体で見ればトウアンの兵達が優勢ではしたが。アトナテス、サナラ、影の射手に、ユージエンといった。件の力が抜け、麻痺するといった事象に影響されていない四人が、主立った活躍をしてくれましたので、最初は押されていたものの、徐々に形勢逆転し。ほとんどの兵士達を無力化していきます。

一方で、戦闘開始時よりも、両者が握り締める力が増したのか。剣と斧のぶつかり合う音が轟音と化して、周囲に鳴り響かせながら。

真正面から、斬って避けて受け止めるを繰り返して戦う団長とトウアン。

間違はなく。トウアンはアトナテスと同等の実力者というのは、近接戦闘の素人である私でも、見て取れました。単純な力だけならば、アトナテスすら凌ぐほどに。

ですが、団長は剣の技や、魔法の腕だけでなく。力だつて強いのです。

剣の刃と、斧の刃をぶつけ合った状態での力比べの末。団長がトウアンを押し返して、怯んで生まれた隙に、団長は瞬時に連撃を叩き込み。

「私達の勝利だ」

倒れるトウアンに剣先を向けながら、団長はそう宣言しました。

それでも、なおトウアンは団長に立ち向かおうとしたみたいですが、周囲の状況を見て敗北を認めたようで、武器を下ろして胡坐を組みました。

「さあ怪我の治療をしよう」

そして間髪入れずに、団長はサツと周囲にいた人達に治療魔法をかけます。味方である私達や、戦ったトウアンの兵士達、そして当然トウアンにも。

「……何のつもりだ？」

「戦いが終わったから、治療しただけだ」

「……………」

怪訝な表情を浮かべるトウアンに、団長はさりと返し。

剣を納めると、トウアンに団長は手を伸ばし。

トウアンも、先ほどの暴れ具合から打って変わって。とても素直に団長の手を握り返して立ち上がりました。

そして、顎をクイツと。

こつちに付いてこいと合図を送り、住居にしているであろう。並び立つ家々よりも少し大きな家へ歩き出しました。

そんなトウアンに団長は、何か言葉を発することなく、黙って後を付いていきます。

団長が行くなら、私も。

というよりも、先ほどのトゥアンを欲しいと言った団長の言葉が気になりと踏み出すと。

「止まれ。トゥアン様はあの男だけを招待なされた」

トゥアンの兵士達によって、歩みを止められました。

「戦いが終わったとはいえ、私達の団長を一人には出来ません。通してください！」  
無理にでも通ろうとして、頭を鷲掴みにされながら待ったをかけられました。

「焦るなよソラス。あの蛮族娘が信用できるかどうかは置いて、卑じやねえのは確かだ。黙って待ってやるのも、団長への信頼って奴だぜ？」

「それでも！もしもがあったらどうするんですか!？」

物質界において、団長という存在の重要さが日々増しています。

他の団員や私とは違って。団長の代えが、いないのです。

そこらにいる暗殺者程度なら、団長は瞬時に撃退できるでしょう。ですが、相手がアトナテスと同等の力を持つとなれば、やはり万が一を考えてしまうと、不安になります。私が行けば、弾除けくらいにはなるでしょう。

アトナテスの手を振り払い、押し通ろうとしたら、今度は影の射手が私を引き留めました。

「アトナテスの言う通りですよソラス。それにもしもの時があっても団長なら……」

「まあ団長なら上手くやるだろ」

「ですわね」

「やるってなんです（だ）？」

疑問符を浮かべるサナラとユージエンを他所に。

問答無用で、私は団長の下へ可及的速やかに向かおうとしましたが、影の射手が私を剥い締めにして、引き留めてきます。

「は、放してください影の射手！ 団長、団長ナニかしらが危ないです！」

「冗談だって」

「冗談じゃなかったらどうするんですかアトナテスウ!?」

「そこはソラス次第ですよ。待つだけが、駆け引きじゃないんですから」

「うう……」

影の射手の言葉を聞き、私は影の射手に不可視の矢に撃たれたかのように、身動きがとれなくなります。

酷いです。そんなこと言われなくても、私なりに頑張つて、日々団長にアプローチしているんですよ。当の団長本人はまったく、私の事を気にかけてくれませんが。

なのに、出会ったばかりのトゥアンを欲しいだなんて。

「団長は……どういふつもりでトゥアンが欲しいって言ったんでしょうか？」

「意味合いとしては、私と同じだと思えますよ?」

暴れるのを止めた私を影の射手は解放して、決してやましい意味合いの物ではないと。そう声をかけてくれましたが。それとは別種の影によって、私の心は未だに晴れませんでした。

だって私は。私はアトナテス、サナラ、影の射手とユーージェン、今回のトウアンと違い。

団長に熱心に誘われた訳でも、見捨てられないという固い意志があつた訳でもありません。

本当にただ助けた人達の中に。たまたま、行動を一緒にしてもいい人の中に、私がいかに過ぎません。

団長の側にいる人達の中で。私だけが団長にとって……本当はいても、いなくても変わらないのではないか。

だから、例の団長の事象に、私も僅かに影響されているのではないか。

団長と共に時間を過ごすことの多いメンバーの中で、私だけが。

嫌な嫉妬が、心中に渦巻きます。

いつそ……一度、団長と関係を持つてしまえば、こんな悩みも消えるのでしょうか。

「とりあえず、突っ立つてるのも何だし、団長が帰ってくるまで部隊の再編制しねえと

な。ほらソラス。しゃんとしろ」

「そうですね……」

浅ましい。そんな自分が嫌になる。

しばらく尾を引きそうになった考えを振り払い。残された私達は、何が起きてもいいように部隊再編します。その間。先ほどの会話が気になったサナラとユーージェンに、アトナテスは質問攻めされていましたが。

「お前達が、俺に教わるのが嫌になるくらい大人になった頃には教えてやるよ」  
そう言つて煙に巻きました。

その手の大人の話は、ユーージェンは母親である影の射手に任せるとして。サナラはサナラで正しい知識を身に付けさせないと、色々と危ういですね。

心にそうメモしておき。

それから時間は。

「トウアン様は私達の女王にして、先祖から私達を見守り続けてくださった守り神だ。トウアン様の為ならば、私達はどんな場所であつても付き従おう。兵である私達はその覚悟をしている」

「なるほど。そんな長い間国を……」

立つて睨み合いを続けるよりも仲良くしましょう。サナラ主導の下そんな交流会が

いつの間にやら起きて、一度戦ってしまえば何かと臆する物が無くなるみたいで、あれこれと会話していました。

そして、小国でありながら魔物を撃退し続けてきた秘訣を。言ってしまうえば、私達と同じ。信じる仲間の為に戦う。彼女達の覚悟を聞き、私は親近感を覚えました。団長が、例え私を必要としていなくても。

私は団長の為なら、魔物溢れる魔境。魔界にだつて付いていくでしょうから。

「皆、帰ってきたよ」

よく通る声に、私達は振り向きます。

いつの間にやら弓矢を背負い、トウアンと共に荷車を押しながら団長が戻ってきました。

そしてその荷車には、様々な野生動物が載っていました。

「どうしたんですかそれ？」

「トウアンと一緒に狩ってきた。一緒に食べよう」

「酒宴だ。お前達酒を用意しろ！」

トウアンの号令に、トウアンの兵達はテキパキと場の用意を始め。

「アトナテス。こつちも酒持ってきただろう。こつちも開けてしまおう」

「おうよ」



こうして、あれよあれよとしている間に赤の団とトゥアンの兵士達とで酒宴が始まりました

団長の隣に、同じく今回の主役であるトゥアンが座りますので、残された一席を巡って熾烈な争いが起き。

紆余曲折を経て、アトナテスがその席を勝ち取りました。

恨めし気にアトナテスを睨んでみましたが、アトナテスが私に遠慮も気にもする訳がなく。

団長、アトナテス、トゥアンの三人は開幕からハイペースで酒を飲み進んでいました。周囲で何度も乾杯という声が響き、それが徐々に少なくなり。

脱落者が続出し。寝ぼけたサナラが、さりげなく団長の膝元へ向かおうとするのを食い止め、影の射手にサナラを任せした後。ようやくペースが落ちてきて、会話をする気になった三人に聞き耳を立てることにします。

「……団長。お前が言った赤の団に入れて話。呑んでやる」  
「本当かい？」

「お前が言う魔王って奴。あたしにも何となく分かる。それでそいつがあたしの民を苦しめてるから、前から気に食わなかったんだ」

おつ。そんな風に私がトゥアンに感心したのは、魔物がゲートを通して。魔界から物

質界に際限なく出現している異常事態だというのに。昔から魔物は物質界に出現する物と考え。異常を異常と認識していない人達が多いからです。

彼らは見えていない以上、魔王はいないと思っっているようですが。

私からすれば、見てもいない神は信じるのに、現実にかけてる異常事態。その原因となり得る存在は信じないのかと、不思議に思うくらいです。

「だから手を貸してやる」

「仲間になるんだな？」

ずいっと、トウアンに顔を近づけながら団長は迫り。

お酒の酔いとは別種でトウアンは少し頬を赤くしながら、団長から距離を取ります。

「勘違いするな！あたしは手を貸すだけだ！」

「貸すだけでは駄目だ。君を私の仲間にする。もし断ったら、仲間になってくれるまで何度でも誘いにいくぞ」

また心にチクリと、棘が刺さる感覚がして。私はお酒を飲んでごまかします。困りましたね。もう少し、強いお酒を貰えばよかったです。

「……お前、結構強引な奴だな」

「諦める蛮族娘。団長はマジでそうするぜ」

「誰が蛮族娘だ」

ケラケラと笑うアトナテスに、トウアンは眉を顰めるものの、決して険悪な雰囲気ではなく。

トウアンは、杯を置き。考え込むように項垂れたあと。

「……お前はあたしに勝った。だから、少しは譲ってやる。……仲間になってやる」  
小さな、とても小さな声でトウアンはそう宣言すると。

聞いたのは団長は、本当に心から嬉しそうな笑みを浮かべます。

それを見たトウアンは、先制するように団長に指差します。

「けど勘違いするなよ？ お前とあたしは対等な関係だ。誰かの従えるなんて虫唾が走る。変な気を起こしたら、その瞬間叩き潰してやるからな！」

トウアンの忠告に、団長はスツと熱が引いたかの真顔をした後。

物腰が柔らかい笑みを浮かべ、仲間になったトウアンに改めて杯を突き出します。

「私はあんまり、上とか下とか気にしてはいなんだけどな」

「……？ お前。食糧を育て、土地持ち。兵も持つてるんだろ？ 王になるんじゃないのか？」

トウアンが杯をぶつけ返しながら。疑問符を浮かべて問い掛ける言葉に、団長は君もかと苦笑いを浮かべ。

「必要だから、あれこれとやってみてるだけで。私は一度も王になりたいとは思って

ないし。私は私を、王に相応しい人物だと、思ったことは一度もないよ」

「王というものは、なりたくてなるばかりではないぞ？」

「……………」

王とは、なるだけでなく。ならざる得ない場合もある。

トウアンの言葉に団長は、困り顔を少しだけ浮かべただけで否定はしませんでした。

団長はきつと、必要だったら王になるということでしょうか。

それは……何の為に、でしょうか。

世界征服してやるぜ。みたいな野心を、団長は一度として見せたことはないのです、私には分かりません。

「無欲か、自信がないのか、赤の団の団長は変な奴だな」

「まあでも好きになれる変な奴だから、俺達は赤の団にいるんだぜトウアンよ」

「そういうものか。魔竜に乗ってた奴」

「ああ。アトナテスな？」

三人はその後も、朝が明けるまで飲み続けたみたいで。酔いを残した、なんとも締まらない顔のまま。

正式にトウアンの赤の団の加入が発表され、それに合わせてトウアンの国の兵士達もそのまま赤の団に加入することになり。兵士が減ったトウアンの国の防衛を、赤の団か

らの戦力供給によって補う。そんな共同戦線を結ぶ事となりました。

そして、トウアンの加入により。当初の目的でもあった、指揮階級不足が解消され。赤の団の戦力はより盤石となりました。

……ただ、団長の例の事象。あれは、何故かトウアンにはまったく影響されず。トウアンの兵士には、影響を与えていました。

トウアンが加入してから、少し後。

……それは起きました。

魔神降臨。

討伐できなかつたその時。

多くの都市国家を滅ぼす、いえ滅ぼした。

まさに、生きる災厄。

もはや大国ですら魔の侵攻を防ぐこと叶わず。

荒廃していく世界で逃げ惑う人々に手を伸ばし、数多の魔物と、強大な魔神に。

一度の敗北も許されぬ戦場で、陣頭に立つ偉大なる英雄王。

そんな英雄王は彼女と、転生を繰り返す。

世界を見守り続ける彼女と出会いました。

そして私はあの頃。私をもっとも恐れていた事態が、私の身に起きてしまいました。  
……なんとも情けない。そんな事態が。

## E 1 2 魔神降臨

魔神降臨。

それは、魔物達と各々の大国が独自で、いくつかの小国達が赤の団と結託しながら戦う物質界にて、前触れもなく。

まさに、唐突に起こり。

降臨から僅か数日にして、今まで魔物の侵攻に耐えていた大国の一つを飲み込みました。

「……機械の大国が」

「こちらに逃げてきた避難民によると。鳥の頭を持つ炎の魔物が、多くの炎を操る魔物の軍勢を引き連れ。機械の大国の首都防衛施設含め。全てを焼き払ったそうです」

「機械、鉄をも溶かす炎と鳥の頭……魔神アモン」

「よくぞ存じで団長」

情報収集の為。数日拠点より離れていた影の射手が、団長の持つ知識の深さをそう褒めますが。それを聞いて団長の顔は晴れることはありません。

「機械の大国の王は？」

「逃げる間もなく。亡くなったそうです」

赤の団の拠点設立を告げに歩いた頃。赤の団に明確な敵対意識を向け、その後も数々の嫌がらせを赤の団にしてきた国の王の一人です。

清々したとまでは言いませんが、ああ亡くなったのか。そんな、他人行儀な雰囲気が少ないから。私達の間にはありません。さすがに、敵対するにしても、陰湿な手をしてきた人物達にまで、涙を流す感受性は、私も団長も持ち合わせていないみたいです。

「そもそも、魔神って何ですか？」

「あたしが知る限りじゃ、魔物。いやデーモンか。そのデーモンの中でも特に強く、いくら斬っても死なないくらいしか分からん」

魔神を見たことないサナラの問い掛けに。

見た目よりも、遥かに長生きしているトウアンがそう答え。

「トウアンの認識で間違っていないよ。デーモンというのは不滅の存在だ。いくら倒しても、その精神を、封じたりしない限りは何度でも蘇る。以前魔神と決闘したことがあるけど、彼女は傷が癒えたらまた戦おうと言っていたね。彼女との戦いは楽しく有意義だったよ」

茶目つ気を感じさせながら、団長がそう肯定しました。

アトナテスと出会う以前。名が売れ始めた団長に挑んでくる者達の中に、自らを魔神



を語る女性は確かにいました。

ですが、彼女は好戦的ではありませんでしたが、理性的で少なくとも人に、物質界に仇なすことをしようとはしませんでした。

知性があるからこそ、魔と一括りは出来ても。私達人が未だに結束できていないよう、一枚岩でなく。考え方が違うという事でしょうか。

「あつ、母様お帰りなさい!」

数日ぶりの影の射手を見て、抱き着きに飛び出すユーージェンと共に。

「団長。模擬戦終わったぜ」

兵達を指揮して模擬戦をしていたアトナテスがやってきます。

「ありがとうアトナテス。そしてさっそくだけど出兵だ」

出兵と口に出した団長に、私は少なからず動揺が走ります。

なにせ、相手は大国を呑んだ魔神。

今までとは比較にできない程の激しい戦いを容易に想像できます。

「……何があつた?」

「魔神降臨」

「本当か?」

ですが、こくりと頷く団長に。アトナテスは、不安を微塵も感じさせない不敵な笑み

を浮かべます。

「そいつは大物だな団長よ」

「ああ大物だ。でもいつも通りだ、皆。魔物から人々を助けよう。それが私達、赤の団なのだから」

そう、団長が言っつてしまえば。私の覚悟は決まります。

相手は魔神。

その強さは白金と団長が謳う、赤の団の精鋭を団長は選出して、出撃します。

団長が最前を歩き、それに私達は付いていきます。

いつも通りに。緊張しすぎない程度に、気楽に。

魔神との戦いは、想像通りに熾烈を極めました。

鉄をも溶かすアモンの炎熱に、団長は戦場全体に治癒魔法を行き渡らせることで対処し。治癒を行いながらも、剣を振るって次々と炎を操るアモンの軍勢を斬り倒します。

無論、回復こそ団長やヒーラー頼りですが、紫竜さんと共にアトナテスが戦場を駆け抜け。トゥアンが兵士達を指揮して前線を支え。前線から零れ、弱まった敵を影の射手が黒弓で止めを刺し。ユーージェンは影の射手のサポートをし。

サナラは土魔法で敵の侵攻を遅延しつつ、地脈を操り。戦場に立つ私達に地脈の力を

与えてくれます。

「ソラス今だ！」

「私の全ての力を今ここに！降り注げ星よ、グランドクルス！」

魔物の出現を。ラッシュの開始を。団長の天賦の才が知覚し、その的確な指示によって放たれる最大火力のグランドクルス。

星の導きにより、定められたその威力を持って、出現する魔物達を魔物の将たるアモンゴと殲滅します。

勝った。

しばらく、私はグランドクルスを放ち続けた後。

ここまでやったら大丈夫だろう。

そんな安堵が、戦場を包みます。

「やりましたね団長！」

天球儀を下げ、団長のその声をかけてみましたが。

団長は険しい顔をしたまま、叫びます。

「まだまだ！皆来るぞ！」

団長のその叫びが正しいかのように。

オオオオとおどろおどろとした声が戦場に鳴り響き。

姿形が変わり。さらに炎熱の勢いが増すアモンが再び現れました。

「デーモンはタフだな」

「角がたくさん生えてきましたね！」

「そして、魔物もおかわりってか」

「アトナテスおじさま。何だか、生き生きしてますね」

「まあな。あとおじさま言うな」

トウアン、サナラ、アトナテス、ユージエンが銘々に感想を述べながらも、まだ続く戦いに気を引き締める表情を浮かべる裏で。

「団長、私達がおとりになったことで、かなりの時間が稼げました。別動隊の活躍により、機械の大国の生き残った住人達。その大半は国からの脱出はできました」

「そうか、分かった。ありがとう影の射手」

「あとはあの魔神を倒すだけですな」

「……………」

影の射手の言葉に、団長は応じることなく。

険しい顔をしたまま。もはや恒例となった事象により。

体の麻痺で戦闘に支障が出始めた人達を撤退させて、本陣から離れて待機していた仲間達で戦力を補充します。

そして、再び赤の団と魔神アモン率いる軍団の戦いが始まりました。多数の魔物を、最大までチャージしたグランドクルスで蹴散らし。

射程外の魔物を皆が各所で対処し。

先ほどよりも激しくなるアモンの猛攻を、団長がブロックして。その隙に戦いの中で、力を増すトウアンの怪力を得て、振り下ろされる戦斧の重い一撃をアモンは受け。

アモンが再び沈黙します。

今度こそ。

戦斧を通して、確かな感触を得た。

そう笑みを浮かべるトウアンの顔を見て、戦いの終わりを私は確信しましたが。

「トウアン！」

「なっ!?!」

団長がトウアンを腕を掴むと、後方へ投げ飛ばし。

その直後、三度目の復活を遂げたアモンが放つ炎に団長は吞まれました。

「そんなんっ団長！」

「団長！」

慌てて駆け寄ろうとした私達に。

「まだ来る！皆、気を抜くな！持ち場に戻れ！」

アモンを剣で吹き飛ばし。

動揺する私達に団長は、喝を入れます。

回復の光で包まれているとはいえ、いまだにアモンの炎で体が焼かれている状態で。「お前馬鹿だろ。あたしは兵で、お前は指揮官だろ。指揮官が兵を庇ってやられたら、どうなるかくらい分かるだろ馬鹿」

「分かつてるよトウアン。説教は後で聞く。まだ戦いは終わっていない」

「本当に無茶をしないでくださいよ！」

「分かったよソラス」

静かに、けれど明確に怒りを浮かべながらトウアンは団長の行動を諫言しますが。

今は団長の言う通り、戦いは終わってません。

そして、それを言いたいのはトウアンだけではありません。

団長は強いと言つても、吸血鬼の方達のように不死者ではありません。

無理をしないでと言つても。止めない人ですが、それで死んだら元も子もありません。

団長が一度直撃を受けたことで、気が引き締まったのはいいですが。

三度目の復活を遂げたアモンを私のグランドクルスで、何度も星を落として倒し、同時に魔物が現れるましたのでそれも巻き込み倒します。

ですが、再びアモンは復活しました。

「いつまで続くんですかこれ！」

サナラの悲鳴にも似た声に、私達は苦々しく頷くしかありません。

アモンの炎熱が、じわじわと私達の体力と気力を削ると同時に、終わりが見えず。また事象により、一部の例外を除いて。戦える人が一人一人と離脱していくので、低下していく戦力に焦燥感が募ります。そして、アトナテスが四度目、団長が五回目の止めを刺した直後始まる。

六度目の復活。

咆哮を上げながら、赤いオーラを纏うアモンが出現した時。いくら怪我を魔法で回復出来たしたとしても、根底となる体力魔力がすでに限界に近い私達は思わず尻込みしませんでした。

「もう一度だ。皆もう一度だけ頑張ってください！」

ですが、団長がそう鼓舞してくれますので私達は頑張ります。

頑張るしかありません。

すでに、機械の大国の生き残った人達の撤退は終わっていますが、アモンの被害の拡大を防ぐためには、アモンをこのまま放置する訳にはいきません。

団長の言うそのもう一度が、アモンの消滅であることを願って。限界を迎えている体

に鞭を打ちます。

すでに戦場に残されているのは、事象により離脱した人と。変身したアモンの炎に被弾して撤退したユーージェンを除いた。

団長、私、アトナテス、サナラ、影の射手、トウアン。

団長と私達、たった六人の魔神戦。

最初から回復魔法で周囲のサポートして、幾度もアモンの攻撃を受けた団長が、真つ先に復活したアモンの前に立ち引き受け。周囲から湧き出す魔物を、私達は対処します。

そして再び、周囲の魔物を一掃し。

私達は各々団長の援護を始め。やがて、団長の剣がアモン体に深々と突き刺さり。アモンの断末魔が鳴り響きました。

ズズンと倒れ、赤いオーラがアモンを包み。虚空へ、おそらく魔界へと消え去ります。

「も、もう限界ですよ！そのまま魔界に帰ってください！」

サナラがそう言い。

「ぶっ続けで六度もやったんだ。もう十分だ」

アトナテスと紫竜さんがやや疲れ気味に。

「いくら魔神でもここまでやれば無傷じゃないだろ」



トウアンは荒い息を吐きながら。

「これで終わり……ですね」

影の射手がほっとしながら。

「お疲れ様です団長」

私は団長にそう声をかけ。

「まだ来るぞー！」

顔を険しくしながら叫ぶ団長の声に、その発した内容に。

アモンが残した周囲の炎の熱さが関係ないとばかりに、サツと血の気が引きました。

そして、団長が言った通りに魔界のゲートが、空間を捻じ曲げて出現し。

赤いオーラを纏ったアモンが再び降臨し。

鳥頭が備える目が幾度も打ち倒した私達を捉えると、怒りに満ちた咆哮が上がりま  
した。

「「……………」」

そのあまりの理不尽に、私達は絶句し。

アモンが降臨すると同時に、周囲に湧きだす魔物の気配を前にして。

私達は動き出すことが出来ませんでした。

「……………」

ザツと、言葉を発することなく。

唯一。アモンに臆することなく、一步を前に足を踏み出す団長を除いて。どうしようもない絶望的な状況下で。

誰もが足踏みする中で、その最初の一步を踏み出すのは、どれだけ勇気がある事でしょう。

縋るように、私は団長の背に視線を向け。

大きく見える、団長の背を見て。

その背に、あまりにも決定的な格の違いのようなものを感じてしまい。

「あっ」

駄目だ。認めてしまったら、手遅れになる。

確信があるにも関わらず。

格が違うんだろう。

私と彼とは。

そんな認識をした途端。

アモンからではなく、目の前にいる。幾度も、幾度も私に安堵と希望を与えてきてくれた団長から、畏敬に近い畏怖を彼から感じ。

それが私の身を包んだと思えば。体が痺れて、膝から崩れ落ち。

ガクガクと震え、思うように体が動かなくなりました。

「ソラスちゃん！」

崩れ落ちた私にサナラが駆け寄ってくれて。

小さな肩を借りて、何とか立ち上がろうとしますが。

未だに麻痺した体では、やはり思うように動いてくれません。

そんな私に。

「ソラス！大丈夫か？」

戦闘の最中でもそう私に、気遣ってくれて。

いつかのように、手を伸ばしてくれる団長の手を。

私は震えたままの体では、掴むことが出来ず。

「…………ソラス？」

私は団長と、目を合わせることが出来ませんでした。

「……………撤退だ。今の私達にはあの魔神には勝ち切れない」

沈黙の後、団長はそう言い。

すでに、人々が脱出を終えていることは確認していたので、反対意見は出る訳がなく。

私達は即座に戦場から撤退を始めました。

追撃に迫る魔物達を団長は、反対意見を押しつけて最後尾で戦い、最後の最後まで一

身で私達を守り続け。

戦場からの撤退は成功しました。

アモンが赤の団の野営地に行っている場所まで来たらと、警戒しましたが。

不思議と、魔神アモンは降臨した機械の大国は燃やしつくしても、そこから離れようとしませんでした。

今でも、あの時を思い出すと情けなくて。悔しくて、昔の私を叩きたくなくなりますよ。

私だけでしたからね。英傑の中であなっただのは。

それも、よりにもよって。物質界で一番大変な時期の始まりに起きましたからね

……。

王子君に追及されたくないの、話を無理やり変えますが。

当時、彼女が赤の団に加わるまで私達が戦っていた魔神という存在は、今とは違ってまさに不死身の存在でした。

そもそも不滅の魔神だからという話ではなく。魔神であっても再生する速度が、当時は異常だったのです。

何らかの力が介入していることを、初見で悟れる程度には。

それを解決するのに、彼女の深い叡智が必要でした。

転生を繰り返し、物質界の歴史と共に歩む彼女に。

## E 13 転生の英傑アンブローズ

アモンから撤退し、拠点に戻り数日経ちました。

戦果としては、アモンが降臨した機械の大国に住む。いえ、住んでいた人々を、赤の団が殿を務めることで助ける事が出来た。故に目的は達成された。のは間違いないのですが。

今回の戦いの原因たるアモンは、未だに機械の大国から動くことなく。ジツとしたまま、自らが奪い取った領地だと主張するように鎮座しているようです。

目的は達成した。それゆえに戦略的勝利である。とは言えますが。

故郷を奪われた人達の前で、堂々と勝利宣言することは出来ませんでした。最後まで残った私達の誰もが、あの戦いを勝ったとは。微塵も思っていないから。

と言う訳で、私達はさっそく魔神に対抗する手段を探さなく、作戦会議を開きます。

私は……先日の戦いから一度も団長と顔を合わせる事が出来ず。だからと言って、会議を欠席する訳にもいかなないので、執務室の隅に椅子を置いて書記を務めます。幾度かそのことをいつもの人達に突っ込まれましたが、曖昧な答えしか出せず。疑問符を浮かべながら、各々の席に腰を下ろし始めました。

団長の隣の席、私の定位置は空席のまま会議は始まりました。

「あれ、何だったんですかね」

「明らかにおかしかったな」

「過去、アモンの撃退に成功したいくつかの話調べてみましたが。どれも一度の復活と変身はすれど、七度も短い時間で復活したという話はありませんでした」

サナラ、トゥアン、影の射手が各々発言して。

「団長よ。あの時言ってた勝ち切れないってのはどういうことだ？」

アトナテスがそう言つて。戦闘後。休む間もなく機械の大国の生き残った人達と、今後の方針についてやりとりし続けていた為か、心なしか元気がないように見える団長は、そのままの意味だよと短く返し、やや大きく息を吐くと言葉を続けます。

「トゥアンの言つたおかしいが、まさに的を得ている。あの魔神はいくら魔神だとしても、再生速度が異常だった。直接倒してみたら分かったけど、倒した瞬間。あの魔神はどこからか、膨大な魔力を受け体の再生をしたみたいだ」

「どこかかってのは？」

「魔界のゲート。そしておそらくは……」

「魔王か」

「そうだね。魔神には治癒魔法を受けることが出来ない。それを可能に出来るとした

ら、魔王しかない」

魔王。

今回の魔神降臨と繋がりがあるとしたら、あの魔神アモンはさしずめ、魔王軍幹部と  
いったところでしょうか。

あんな強力な魔神を従える事が出来ているのは、魔を束ねる王であるからこそできる。  
ということなんでしょう。

「だから魔王からの繋がりを断つためにも、魔界ゲートの破壊方法と、魔神を封印する  
術。この二つを見つけてる事が急務となる。何か情報が手に入ったら、私に知らせてく  
れ。私はなんとかできそうな人を知っているから、影の射手と一緒に、その人を探し出  
す」

団長がやるべきことを明確にしてくれましたので、その場にいた全員が頷きました  
が。

同時に、スツと気を引き締めるよう促すように低い声で。

「そして皆覚悟しておいてほしい。魔神はアモンだけではない。今後は複数体の魔神  
と戦うことも、想定しないといけない」

部屋の温度が数度一気に冷えたような気がして、私は思わず身震いをします。

アモンが一体の魔神が降臨しただけで、機械技術の力で魔物の侵攻を抑えていた機械



の大国を呑みこんだのです。それなのに、複数体と戦うなんて。

……それに私は、団長がいる戦場に立てば。普段通りの力が出せず、挙句体が麻痺して、足手まといになることは分かり切っているのに、一体どうすれば。

「たった一戦でそこまで解決策と先の戦いを予想するとは、さすが噂の赤の団の英雄さんですねえ」

やけに脳にこびりつくような、間が抜けるような。

けれども何か惹かれる声が執務室に、響き。

同時に薔薇をそこら中にまき散らしながら、ピンク色の派手なフリフリドレスを来た妙齢の美女が現れました。

「……………」

唐突の来訪者に啞然とした表情を浮かべる面々を尻目に、妙齢の美女は優雅な足取りで団長の前に立ち。スカート裾を持ちあげ。

「初めましてえ。あたしアンブローズといいますう」

そう挨拶をしました。

はて、アンブローズさんとは。

そう名乗った白髪の後ろ姿を各々は見て。誰かの知り合いだったかどうかと、記憶を探していると。

団長はアンブローズ。アンブローズと、幾度か名前を呟いた後。ガタリと椅子から勢いよく立ち上がり。

「あのアンブローズか!?! 転生の魔導士の!?!」

「はあい。その転生のお魔導士のおアンブローズですう」

につこりと、男女問わず惹かれる笑みを浮かべるアンブローズを団長はジツと、顔を見てたと思えば。ガシツとその細く白い手を両手で握り。

「以前中央の王から話を聞いて、ぜひとも一度会い。君を赤の団に引き入れたいと思っていたんだ」

「あらあらあ。あたし随分と歓迎されてますねえ」

そのまま流れるようにワルツを踊る団長とアンブローズ。

まるで、旧友にでもあったかのような団長のテンションの上り様に、私達は困惑しつつ。

「団長その人誰ですか?」

楽し気な団長にぶくつと頬を膨らませるサナラに、上機嫌な団長は踊りを止めず、笑みを浮かべながら。

「彼女は、はるか以前より物質界の歴史を見て歩み。魔法を極めた偉大なる魔導士だよ」

「そんなに褒められても、団長ちゃんを導くくらいしか出来ませんよお？」

「赤の団に入ってくれるという事かい？」

「そのつもりで来ましたよお」

「……また、団長から誘う人が増えたな。」

心の内に沸き上がる嫉妬心をなんとかして抑えようとする私を他所に。

「そうか！皆、聞いてくれ！」

一通りダンスを終えた団長は。

「アモンを撃退するぞ」

不敵な笑みを浮かべて、そう宣言しました。

数日後。旧、機械の大国。現アモンの根城に私達はいました。

私達を目視するなり、咆哮を上げるアモンを団長は最前線に立ち。その背にある赤いマントを赤の団の団員達に見せつけてくれます。

その隣には、赤の団に加入した直後。見た目の若さからは想像が出来ぬほど長い時、歴史と寄り添ったというアンブローズ。その謳い文句にまったく恥じることない深い魔法知識を、惜しげもなく赤の団面々に教授し。

今の今まで相も変わらず副官等々赤の団では明確に決めていませんでしたが。表向

きは体調不良という事で、副官地位のような所に居座っていた私の代わりに、高い事務処理能力で瞬く間に。副官の座を掴んだアンブローズが、当然のように並び立ちます。

その場所は私の場所だったのになあ。

団長の事象が身に起きたことで、最後まで団長の側で、戦場に立ち続け。彼を支える事が出来なくなつた私は。

身を焦がすような嫉妬と、アンブローズのような、以前より団長が目に向け。様々な方面で優秀で身目麗しい彼女ならば、仕方ないという諦観。

やっぱり団長は、周囲に立つ皆とは違い。私の事なんて最初からどうでもよく。まったく気にかけてはくれないんだという。自分勝手な悲しみ。それらがごちゃ混ぜになつた感情を抱きながら、離れた所で見える事しか出来ませんでした。

「サナラ……」

「ソラスちゃん、無理しないでくださいよ?」

それはそれとして。どんな感情を抱こうとも、占星術師として、赤の団の一団員として。

再度魔神アモンと戦う前に、一人で体調確認していると。サナラがやってきて。本当は件の事象の効果が身に起きて。

私が勝手に、団長の側に立っている資格がないと感じたのが理由なのに。

体調不良と嘘を吐いて、団長の傍から離れた私を心配してくれます。

「大丈夫ですよサナラ。団長の指示があればいつでも戦います」

「本当ですか？それならいいですけど……団長もこの数日元気ないようですから」

「そう、なんですか？」

サナラがそう言っつてはいますが。

遠く離れた所にいる団長を見てみると、まったくそんな気配はなく。

むしろ、魔神との戦いを前にして、一切臆する様子がないその雄々しい背から、痺れるような威光すら感じさせます。元気がないようにには見えないです。

「だから皆で頑張りましょうね！」

明るくにこりと笑うサナラに釣られて、私も笑いはしましたが。

反転して団長の下へ向かうサナラに、思わず私も連れて行つてほしいと手を伸ばしかけ、止まります。

人間、獣人、エルフ、ドワーフ、吸血鬼、魚人。種族も理由も思惑も、様々な人達が集う赤の団の中であつても。まったくその存在感を曇ることなく輝き続け、人々を助け導く。物質界の巨星たる団長の傍に。

団長自ら誘われるだけの価値がない私は、最初から傍にいる資格がなかった。

そう感じたからです。

悔しさと、切なさ。そしてなりよりも、周りにはたくさん団員がいるのに。かつて故郷を魔物に襲われた直後のように、また一人になってしまった。そんな寂しさに押しつぶされそうになりながらも。団長の戦闘開始の命令が聞こえ。

私は星天召喚の儀を始めます。

ですが、予想通り。星は私の求めに想像よりも、はるかに小さな力でしか応じず。

多数の敵を高火力で殲滅することを得意とするグランドクルスは、僅か数体の魔物にしか届かず。その僅かな魔物でさえ、倒すに至らず。

アモンを単騎で抑え込み、なおかつ周辺の魔物も斬り伏せる団長の姿を捉えた時。

人智を超越した偉大なものを見た。

そんな確信により体が痺れ、ぺたんと座り込んでしまい。私は思うように、力を発揮することが出来なくなりました。

……情けない。なんとも、なんとも情けない。

「団長より伝令ですソラス姉さま！アモンの変身で攻勢激化。動けぬ者は至急撤退せよ。です！」

「……分かりました」

撤退命令が出て。前回、変身後にやられ。母であり師でもある影の射手と、保護者が板についてきたアトナテスに。実力不足と釘を射されたユーージェンに支えられながら。

未だに戦いの音が止まない戦場から撤退します。

こうして、撤退するのは私だけではありません。赤の団の中でも選りすぐりの実力者。

団長曰く。白金や黒の如き強さと謳う団員達。

本来ならば、歴史に名を残すだけの実力者である彼ら、彼女達は。何も致命傷になりうる傷を負った訳でも、何か致命的なミスを犯した訳でもないのに。私と同じく事象によつて体が麻痺して、戦えなくなり撤退します。最後まで戦場に立ち続けることが出来ない。そんな歯痒さを表情に浮かべたまま。

思えば、団長の傍にいた時はこうやつて。

訳も分からない事象により、撤退する人の気持ちを理解することはありませんでした。

私がそうであるように。彼らも、最後まで団長が立つ戦場に立てなくて、きっと本当は悔しいのでしょうか。

こうした同じ思いを抱く者達に、私は安堵に似た共感を覚え。

「団長は凄いですね」

ただ、そこに団長程の人物なら自分達がこうなっても仕方ない。

そんな心地よい諦観が渦巻いていると悟った時。

「ッー！」

このままではいけない。

このままでは、この渦に吞まれ私も馴染んでしまう。

彼が、団長がもつと遠ざかってしまう。

そんな嫌な未来が見えてしまい。

撤退する人達の中で。事象とは無縁に、背後で戦い続ける団長達を、尊敬の眼差しで見続けるユーージェンがそうしているように。

私もなんとか振り向き。

背後で、団長と団長の傍で戦う。随分と遠く輝いて見えるようになった。皆の姿を目に焼き付けます。きつとかならず、その場に戻る為に。

野営地に戻り、私は戦場を俯瞰します。

「ローズイラプション！」

アンブローズの、極めて高度に圧縮された魔力により構成された。中央に彼女のトリードマークである薔薇が浮かぶ魔導陣。その一斉点火により。

地中に潜み隠れる厄介なデーモンを含めて、まとめて爆破します。

これは、凄いですね。アンブローズの高度な魔法運用を、私も身に付けることができ



たなら。アストロノヴァとグランドクルス。この二つ技だけではできなかったことが。例えば、星天召喚の儀を遙かに短縮出来るようになるかもしれない。

情景と対抗意識を燃やしながら、アンブローズの戦いを目に焼き付けていると。

以前にも聞いたように、アモンの断末魔が響きました。

今回も倒すことは出来たようです。ですが、問題はその後です。

魔神は不死故に、復活するものだとしても、いくらなんでも早すぎるのです。

アモンの撃退を決めた直後に、団内からいくつも湧いた疑問の声を。団長はアンブローズがいれば問題ない。実戦で証明しようと言っていました。

再び肉体を得て、活動を始めようとするアモンの前にアンブローズは。

「ゲートを通して、魔界からとんでない魔力が送られてきますね。普通の魔物だったらパンクして破裂しちやいますよ。さすがは魔神ですねえ。えいっ！」

杖で何やら唱えたかと思えば、そのままアモンをスルーして。護衛としてアトナテスを引き連れ後方にあつたゲートに近づくと、杖をコツン。

えっ、それだけ？

見ていた人が皆そう思っていたら、ゲートが目に見えてひしやぎ歪み、暴走を始め。物質界と魔力に繋ぐ魔力を維持できなくなったようで、ゲートが瓦解を始めました。

「ゲートから魔力が出てくるなら、ぶっ壊せばいいですよ。まあ周囲の魔物倒さない

といけないですしい、コツもいりますけどねえ」

「こんなあつさりと、なんとかなるものなのか……」

先日散々苦勞した原因の一つがいともたやすく取り除かれたことに、アトナテスが驚き。

「まだまだ世界には、未知で溢れているということだね」

団長は一連の動きにそう感想を述べ、同時にアンブローズのたつた一回の動きだけで、コツを掴んだように手のひらをグツと握りました。……いえ団長ならもう、今後は自力でゲートの破壊が出来るでしょう。そう確信させるだけの才がある人ですから。

「さて、アモンちゃんのを精神を封印しますね」

続いて魔力の供給を止められ、肉体を構成できず苦しむアモンの精神を、アンブローズは再び魔術を唱え。

「肉体より離れた精神を、再構成した肉体に宿す。転生はあたしの専売特許ですよ。まつたく……それえ！」

アモンの精神を地に叩きつけるように杖を振るうと、地面にアモンの姿が刻まれました。

いかにも、封印されています。みたいな感じで。

またもや、こんなにもあつさりと。

「さすがは転生の魔導士だね。感動した」

「そうでしよう。そうでしよう。団長ちゃんに降りかかるどんな難題も、このアンブローズが解決しちやいますよお」

えへんと。慎ましい胸を逸らしながら言うアンブローズに、遥かに長い時を生きたと公言しましたが、それにしても親し気な雰囲気のある彼女に、私も色々と惹かれる物を感じました。

ただ、ほつとした直後。

グオオオオオオと、数日の間にウンザリする程聞いた咆哮が響き渡り。

「あらあ?」

「地脈が!地脈が乱れてますううう!」

慌てふためくサナラの叫びと同時に地が揺れ始め。増援かと身構えている内に、地響きが収まった頃には、アモンの封印はどこかへ消えていました。

一体何が。と混乱している内に、団長とアンブローズはアモンを封印した地面に手を当て。

「無理矢理、アモンの精神の封印を引き剥がしたみたいだね。とてつもなく大きな魔力の痕跡がある。これが魔王の魔力か……」

「封印を剥されるのは予想外でしたねえ……これは、厄介なことになりそうです。」

まあこんな無茶苦茶やったらあ。さすがにアモンちゃんも消耗しちやっっているので、すぐには物質界に降臨することはないでしょうねえ」

何ともいない。不安が赤の団を包む中。

「団長。あたしらは勝ったのか？」

「おそらくアモンは再び物質界に現れる。だが、今度は完全に撃退した。私達の勝利だ」

トウアンの問い掛けに、団長はそう安堵させる笑みを浮かべ。

私達はようやく、ほっと一息つきました。

しかし一人、一人と団員が戦場を離れ。

団長を含めて、数人が残ったところで。

団長が、幾万の人畜が焼き払われ、培われた技術と歴史が焼き払われ、何もかもが魔物達の蹂躪によって消されてしまった。

機械の大国という、そこにあり生きていたはずの大国の跡を眺め。

顔を険しくして呟くのです。

「……これが勝ちなものか」

アンブローズがいなければ、千年前の無限にも思える程の短期復活を遂げる。

特殊な魔神達への対抗手段を持つことができず。消耗したまま英雄王は敗北した事でしょう。彼女の加入は、とてもさりげなく。大きなものでした。

そして、私にとってもアンブローズの加入は大きかったですね。

私に出来ることを、何でも私よりも上回って出来て。

私に出来ないことは、当然のように出来る。

ライバル。って一方的に思っていました。

でも、それ以上にやっぱり……ああんりたいという憧れが、何よりも強かったですね。

本人には言わないでくださいよ？

## E14 少しずつ前へ

アモン討伐から数日後経ち。戦いの傷を癒すべく各々自由に過ごしていました。

といつても、一番の多くの傷を受けたのは団長で、その団長は戦闘終了後すぐさまアンブローズと共に、今後の魔神に対する作戦を立て。生存した機械の大国の人々の処遇等々、休みなく赤の団の為に動いていましたので。

私は私で、占星術師としてさらなる力を身に着けるべく。

まずはアンブローズの下へその技術を吸収しに。

誰もが持っている魔法の才を開花させる。というアンブローズの持論の下、毎日開かれている講習に参加したり。直接占星術を披露して、さらなる改善点はないかと交流したり。ついでに酒飲みにつき合わせられたりしました。

そのおかげか、攻撃には使えても魔法に対する防御。つまりは魔法耐性を持っていなかった私に、僅かながら耐性を身に着けることができ。自らの体力を糧とすることで。星の威力を維持しつつ、短時間ながら攻撃速度を上げる術を発案したりと、ささやかながら収穫がありました。

……そして数日前から変わらず、団長とは幾度かすれ違うことはあっても。直接顔を

見る事が出来ませんでした。

そんな日々を過ごしていたある日。

優秀さやら、愛らしさからか。アンブローズが大いに気に入られたサナラと一緒に、そのアンブローズを探していると。

アンブローズはトウアンと駒を兵として遊ぶ、盤上遊戯をしていました。

「うふふう、トウアンちゃん。降参することをお勧めしますよお？トウアンちゃんも女王なら少しでも兵を残すことの意味が分かりますよねえ？」

余裕のある笑みを浮かべるアンブローズと、セリフを聞く限り。ルールはよく分かってないので、盤上から状況を察することは出来ませんが、アンブローズの優位のようにです。

トウアンは顔を顰めながら頬をプクッと膨らませる。なんとも器用な怒り方をしたと思えば、ガタンと席を立ちどこかへ行ってしまうました。

それに対し、アンブローズは逃げたどうこう非難することなく。

湯気がまだ立つ紅茶を一口啜ると。

「ソラスちゃんも一局いかかですかあ？」

そう誘われ、ルールが分かかっていないのと勝てる気がないので断ります。

ついでにサナラも誘われましたが、おそらく同様の理由で断りました。

アトナテスちゃんでも誘いますかあ。アンブローズがもう一口紅茶を啜り始めた頃。グエエエという潰れた声を上げながら、足音が響きます。

足音の主は、先ほど席を立ったトゥアンでした。そして潰れた声の主は、トゥアンに襟を掴まれたまま引きずられた団長でした。

「あ、団長だ」

「やあソラス、サナラ」

パツ嬉しそうに顔を綻ばせるサナラとは対照的に。

私はいたたまれなくなり、この場を去ってしまいたい衝動に駆られましたが、なんとか足に根を張り堪えていると。

トゥアンは盤上が席を立つ前と一緒にということを確認すると。

「団長。何とかしろ」

そう言つて団長を着席させました。

まったくトゥアンは強引だなあ。と、団長は困り顔を浮かべるだけで、特に怒る様子はなく盤上を見て、少し考えた後。

「……これ詰みだね」

「なんだと?」

「だからああたしは降参を勧めたんです。お相手してくれるなら最初からにします



か団長ちゃん？」

魔法の力で、駒を浮かせて盤上をやり直そうとするアンブローズに、団長は待ったをかけ。

「アンブローズ。この兵を一つだけ置いてやり直していいかな？」

団長が掴んだ駒は、例えるなら戦力となるまでに、時間がかかるが。

時満ちれば、長距離から一方的に、多くの敵を一撃で倒せる攻撃が出来る。そんなとても、癖の強い駒でした

「んー……？いいですけどお、それでも団長とっても不利ですよ？トウアンちゃん無茶苦茶な動かし方してましたから」

「おい」

「まあまあトウアン。大丈夫。詰みじゃなくなれば勝てるさ」

不敵に笑む団長に、アンブローズもまた不敵に笑います。

「どうせなら、賭けをしませんかあ？勝ったら、相手を一日独占！」

「いいね。その方が面白そうだ」

一日独占とはどういう。などと思っているうちに、団長とアンブローズの盤上遊戯が始まりました。

最初は、団長とアンブローズが赤の団はどうだい。みたいな、軽い雑談を行いながら

駒を動かし合い。サナラやトウアン、時折訪れる見物人にもあれこれと戦況を解説したりと、お互い気楽に遊んでいるといった感じでしたが。

アンブローズの紅茶の湯気が立たなくなる頃には。

アンブローズは口を開く時間よりも、思考に費やす時間が長くなり。

一方で団長は思考よりも、駒を動かす時間の方が長いと感じる程、次から次へとアンブローズを追い詰める様に駒を指していき。

「王手だよ、アンブローズ」

「えっ？ちよつと待ってくださいねー」

その宣言に、アンブローズは忙しなく盤上を眺め。団長はふうと、すでに決着を終えているからか息を一つ吐くと、体を伸ばしました。

そして、アンブローズは負けを認めたようにがっくりと項垂れ。

「あーん……あの状況から負けるなんてえ……」

「だから言っただろう？詰みじゃければ勝てるさつてね。トウアン何とかしたよ」

「よくやった酒を奢ってやる」

トウアンにニツと微笑む団長に、スススとさりげなくアンブローズは近づいたと思えば、一瞬にして団長の腕に絡むように身を預け。

「あらあらあ団長ちゃんが勝ったんですからあ、団長ちゃんは一日あたしを独占しな

いといけませんよお」

甘えるとは言つても。団長を兄や父のように甘えるサナラとは違つて、女が男に甘える。そんな色気が感じられる迫り方を、アンブローズは仕掛けました。

長身でスレンダーな妙齡美女に、こんな攻められたら。

殿方なら誰でも、意識しちやいそうです。

団長も珍しく、目を丸くして。空いた片手を、どうするべきかと悩むように動かしていました。その手がどこへ行くか。少し前なら、そんなことさせる前にアンブローズを止め入っていた私は、今の私はただ見守るしか出来ませんでした。

もし、その手がアンブローズの背に回つたら……。この場に居続けられる自信がありませんでした。

「アンブローズさん！団長に近付き過ぎです！離れて！もう！」

ですが、団長があれこれする前に。

赤い顔をしながら怒るサナラは、アンブローズを引き剥がします。

はつきり言つて、私はほっとしました。団長と特に特別な関係でない私に、そんなことと思う資格もないくせに。

「サナラちゃんに怒られちゃいましたあ」

「一日独占はまた今度、考えておくよ」

「はあい。いつでも待つてますよお？」

妨害を受けたのに、アンブローズは怒るようなことはなく、余裕のある笑みを崩そうともしません。

大人の余裕つてこういう感じなのでしょう。

「団長もちゃんと！色々と！はつきり！言わないと駄目ですよ！」

と言いながら、ちゃっかり団長の膝上に収まっているサナラに、団長は分かたよと言いながら、よしよしとその茶髪を撫でます。この二人は相変わらず実の兄妹か、親子のように仲が良いと思っていたら、アンブローズは再度団長に近づくと。

「まあでも、夜のお相手ならいつでもお受けしますよ。団長ちゃん」

さらりと、それでいて引っかかる。蠱惑のように誘うアンブローズ。

それを聞きアンブローズを顔を見た時、サツと血の気が引く感覚がしました。

団長はモテます。何もアンブローズだけでなく、団長を寝室に誘う言葉をかける人は、今まで何人もいるにはいましたが。それでも彼女達はどこか、一歩引いている。本気でないという感じがどことなく伝わりましたが。

アンブローズの、彼女の瞳を見ると本気で、真剣に言っていることが伝わりました。

「……………」

そして、それは団長にも伝わったのでしよう。微かに頬を赤くして、口を開いては閉

じてと、困惑しながら。なんと返事をするべきかと。団長は言い淀んでいました。少なくとも、団長の口から拒絶する単語は出ることはなく。

「どっちもあたしは待つていますよお」

キシヤーと威嚇するサナラから逃げるように。

からかう笑みを浮かべながらアンブローズは、返事をまたずにそのまま優雅に立ち去つていきます。残された団長はガシガシと頭を搔き。

「……困つたなあ」

そうポツリと言葉を零し。

「さあトウアン。酒を飲みに行こう。そうだ、アトナテスも誘おう」

「ああ分かった」

「私も行きます!」

「サナラもか。いいけど、無茶して飲んじやいけないよ」

「分かっています!」

領き酒場へ向かう二人を団長は見送った後。

「ソラスはどうだい?」

「……いえ、私はやることがあるので遠慮します」

「……そうか」

せつかく、団長が誘ってくれたのに。特に用事がないのに何を断っているのだから。自分で自分にそうツツコミ。

団長が寂しそうな顔をしたような気がして。戦場でもないのに、体が麻痺したような気がして罪悪感でますます嫌になる。

おかしいな。

私は、彼の傍で力になりたいと、支えたいと。

好きなのに。こんなにも彼が遠く感じてしまう。

……いえ、だからこそ。少しでも彼に近づく為の努力をしないと。

挫ける場合ではありません。

もつと、もつと頑張らないと。

こればかりは、私の心の問題なのですから。

魔神降臨後。

赤の団の性質はまたも、変化しつつありました。

それはとても単純で、とても重く。

絶対でありました。

赤の団。その名を意味する物とは。

英雄、赤の団団長と彼が率いる仲間達により。物質界で唯一無二。魔神を撃退できる一団。

団長とアンブローズの予想通り、魔神はアモンだけではありませんでした。

鋭き雷撃を操るフルフル。

海の魔を統べる女帝ウエパル。

不死の共鳴者ビフロンス。

他にも様々な魔神が物質界に降臨し、物質界に住まう人々の国を、都市を、村を。徹底的に荒らして回りました。

そしてその魔神達はアモンと同じく。異常なまでの高い再生力を有していました。

赤の団ではなくとも、魔神を一度は倒すことは出来たみたいでしたが。

魔神の撃退とゲート破壊。それを同時に行うだけの戦闘力も、魔神を封印。ゲート破壊できるだけの才ある人も足らず。魔神達の高い再生力と、無限に思える程出現し続ける魔物の軍勢を前に、各国の軍は敗北を繰り返す。

結果。赤の団は、物質界のあちこちに降臨する魔神に対処することになりました。

というよりは、各国の王達はどれだけ。赤の団と過去の諍いがあっても、プライドがあつたとしても、赤の団に縋るしか道はなかったでしょう。

今までの魔物の被害も酷かったのは違いないですが。魔神はそれ以上です。

一度降臨したら、撃退に成功するまで。一定の縄張りに無制限に魔物をゲートを通して生み出し続け。

文字通り。魔神達はそこにあつた人も、技術も、文化も。

一切の慈悲無く更地へと変えてしまいます。復興などという単語が、思い浮かべる事が出来ないまでに。

だからでしょう。

じりじりと、物質界そのものが追い詰められ。大いなる存在が、私達物質界に生きる者達を嘲り笑い。私達人が必死に抵抗しても、意に介されず。首を絞め続けられるかのような感覚。

そんな感覚を、誰もがなんとなく感じていたかもしれません。

その焦燥感故に、この頃物質界のあちこちで略奪等が頻発し、治安が乱れているようです。

そんな物質界の中で、赤の団はというと。

相変わらず天賦の才持つ団長の手腕により、平穩そのものでした。

赤の団の拠点。その中心にある赤の団本部にて。

昨夜最後飲み続けた後、ごろりと床で、大の字になって眠るアトナテス。

そのアトナテスを腹枕にして、よだれを垂らしながら眠るユーージェン。



部屋の片隅で、酒瓶を抱きかかえたまま、猫のように包まりながら眠るトウアン。

何があっても動けるように全体を見渡せる位置で、立ったまま眠る影の射手。

ソファでリラックスしながら眠るアンブローズ。

そしてそのアンブローズに、抱き締められながら眠るサナラ。

そんな彼らの為に、誰よりも早く起きて。酒飲み達の為に胃に優しい朝食を、楽しそうにウキウキしながら用意している団長。

……あなた団長なのですよ。赤の団で誰よりも偉いのですよ。わざわざ手作りまでして、何やつてるのですか。

というかそれ以前に、ここにいる人達。こんなにもだらしない姿をさらけ出していますが、巷では英雄視されているの、知っていますよね？

少しくらいは、それらしい振る舞いをする気はないのでしょうか。

色々と言いたいことは思い浮かべど。

「おはようソラス。悪いけど少し手伝ってくれないかな」

「……分かりました」

団長にそう言われて、私は団長の手伝いをします。

といつても、お皿を芸術点高く、並べることくらいしか出来ませんが。

「それにしても、幸せそうですね皆」

「いいことだと思ふよ私は」

「まあ、暗い顔してるよりはずつといいですけど……」

赤の団の拠点周辺では、治安が良かったため人々の中にまだ余裕のようなものを感じられますが。最近どこの国に出兵しても、全体的に人々の顔が暗い感じが否めません。

そんな中。能天気と思われても、こうして馬鹿みたいに幸せそうに眠っている姿は。

とても、眩しく尊く私にも思えます。

「物質界のことを、魔物の災厄に巻き込まれた人達を思うと。本当はこんなことを言つてはいけない……不謹慎だろうけど、私はこの戦いの日々を本当に楽しく思つてるんだ」

「楽しいだなんて……」

楽しいなんて、言っちゃいけないでしょう。特に、魔物に故郷やら、肉親を奪われ憎しみを抱いてる人には。

彼らを思えば、私も彼らの立場になって、本当は団長に怒るべきなんでしょうけど。団長も団長で、両親を魔物に奪われているのを知っているので、怒れる訳がありませんでした。

というより、今でも団長を私は直視できません。真つすぐ見もしない人の話なんて、聞くに値しないでしょう。

「前にも言ったかも知れないが。こんな時世であつても、私は皆に出会えて良かった。もちろん君にもだ。ソラス」

今、なんと？

聞いて、理解して、理解したからこそ。

恥ずかしさやら、嬉しさやら。

急に湧き始める感情を制御できず、混乱し始める私を他所に、団長は言葉を続け。

「あの時、君を助けることが出来て良かった。赤の団に誘つて良かった。色々と私を手伝つてくれて嬉しかった。私の傍に居ようとしてくれて嬉しかった」

えつ。ちよ。

たじろぎ、逃げに入りそうにな私を、団長は逃がさないとばかりに。

両肩に手を置き、私を真正面に捉えます。

こうなつてしまつては、私も彼を団長の顔を真正面で見ろしかありません。

「君と……ソラスと出会えて良かった」

久しぶりに、といつても二月ぐらいですが。

ちやんと見た団長の顔は。

凜々しく、意志のある目は未来を見据え。

やつぱり、カツコよかった。

「あ、ありがとうございます……」

なんとか出せた私の言葉に、団長は頷くと。パツと私を解放して、そのまま。何事もなかったように、朝食を準備を続けます。

眠っている皆に聞かれるんじゃないのかと、心配になる程バクバクと鳴り続ける心臓の鼓動を抑えつつ。何で唐突に団長はこんなことを言い始めたんだろうと、しばらく寝る前にゴロゴロしないといけなさそうな、難題に頭を抱えそうになりながらも。

ソラスと出会えて良かった。

その甘美な響きに。

「……………ふふふっ」

気分は良かったです。

その朝の出来事以降。

まだ戦場に立つと、事象による麻痺は起こりませんが、起こるまでの時間ははるかに伸び。星も私も少しずつ力を取り戻していききました。

何より大きかったのは、団長を見れるようになった事でしょう。

「なんだ、副官は引退したのかと思っただぜ。ソラス」

「副官に任命された覚えはありませんが、引退した覚えもありませんよ。アトナテス」

少しずつですが、アンブローズが来てから離職状態だった副官業務に復職を始め。

「ふーん……無理しては駄目ですよソラスちゃん」

「無理はしてませんよアンブローズ。これは本来私の仕事です！」

任せっぱなしだったアンブローズから、書類を引ったくり。

執務室の椅子に座る。赤の団団長に私は語り掛けます。

「さあ団長。今日のご指示をお願いします」

私の言葉に、団長はこくりと頷き。

今日も、赤の団の活動が始まります。

この時まではまだ。まだ、なんとか耐えました。

この時に魔物を魔神を、魔王が撃退できたなら。

なんとか。なんとか千年戦争前の技術や歴史、紡がれてきた物語を、断絶させることなく。

復興することも不可能ではない。

そんなギリギリのラインが、その時でした。

しかし、そのギリギリのラインはついに超えられました。

それは魔の手によるものではありませんでした。

天が、人に牙を剥きました。

## E 1 5 神を冠する獣

何事も、悪い事というのはどれだけ対策していようが、いまいが唐突に起こります。魔物の出現もそうでしたし。

赤の団と敵対した人達の戦いもそうでしたし。

最近の魔神降臨もそうでした。

そして、今回もそうでした。

再び物質界に降臨した魔神と戦い。

魔神を封印が解かれること前提で封印することで、その精神に深い傷を与え。

ゲートを破壊することにより、魔物の侵攻を食い止め。

残党を退治すれば、戦いは終わりというタイミングで。

天より、後光に差されながら、それらはやってきました。

手に剣を、杖を、弓を携え。

背には翼を、頭上には輝く光輪を。

無機物めいた美しさを備わった人。

それは、伝承に謳われる天使と呼ばれる者達の似姿そのもので。

「おおついに、ついに天界は我らに人の子に。使いを送り給われたのですか！」  
団員の中でも信仰心の厚い。

神官戦士達やヒーラー達が初めに武器を地に下ろし、天使達に跪き。

その姿を見て続くように。団員達も、魔神に蹂躪された現地の人々も天使達に跪きました。

私も彼らを見て、そうしないといけないのかな。と、思いましたが。

近くにいる団長をチラリと見ると。

団長は天使を見て。

前髪に隠された瞳を驚いたように見開き、閉じ。再び開かれた時には瞳に意志を。敵と戦う。そんな闘志という名の意志を、固く宿していました。

天使達に相手に。

どうして団長は、天使達にそんな敵意を。そんな疑問は、すぐに解消されました。

天使達に跪き頭を垂れる者達に。天使達は攻撃を始めました。

唐突に、当然のように、無機質に。弓から矢を、杖から魔法が放たれました。

「なっ！」

天使達は天界に住まい。物質界を見守ってくれている。

神と天使は試練は与えるが、人の味方である。



それが、私の認識であり。物質界に住まう多くの人々が、共有する認識でもありません。た。

だからその攻撃に、味方であるはずの存在からの攻撃に。無意識に攻撃されるはずがないという思い込み故に、誰も反応することができませんでした。

ただ、一人の人物を除いて。

おそらく、天使達に跪き。

纏る者達は、飛来する天使達の攻撃に。本来は最期まで、その攻撃に気が付いてなかったでしょう。

このまま、無慈悲に死を待つだけだった彼らが。

天使に攻撃されたと、気が付くことが出来たのは。

彼らの前に。象徴である赤いマントをなびかせ、天使達の攻撃を、炎の魔法で撃退し。それどころか天使達に飛ぶ斬撃を浴びせ。

跪き、纏る者達に。雄々しき背を見せつける。団長の後ろ姿を捉えた時でした。

「て、天使様？それに団長一体何を？」

困惑を隠せず、震える声で問い掛ける団員に。団長は剣先を天使へと向けると声を張り上げました。

「武器を手に取り立ち上がれ！あの者達は、天使は私達の敵だ!!」

その声に、すぐさま私はグランドクルスの攻撃対象に、天使達を加え。アトナテスやサナラ達も団長の声に呼応して、各々武器を天使に向けます。

ただ、団長の声にすぐさま反応できたのは、普段から団長の傍に居ることの多い。いつもの、七人だけでした。

天使は敵。団長の言葉を聞いても、団員の多くはその言葉を飲み込むことが出来ず。武器を構えはするものの、混乱が上回っていました。

かくいう私も敵とは認識しても、混乱は残っています。

「天使様が敵だなんて、う……嘘ですよ？団長、天使様？」

震える声で問い掛ける団員に、団長は静かに首を振ります。

天使は天使でその団員に、無機質な視線を一瞥しましたが。

すぐさま、真っ先に天使に武器を向けた団長に視線を注ぎました。

「あなたは罪な人の子ですね。無垢なる少女を、苦痛も絶望もなく。浄化される機会を奪うなど」

浄化？浄化とは先ほどの攻撃のことか。

天界は、神は人に死を求めている？

「その浄化は……誰の命によるものかな」

「決まっています。我ら天使を動かせる者はど唯一無二。神です。この浄化は、神の

意志なのです。さあ人の子よ。我らの浄化を受け入れなさい」

「……要するに死ねって事か」

声を普段よりも一回りは低くしたアトナテスが、天使達の要求をこれ以上なく。分かりやすく説明してくれました。

そして、そのまま突出しかねないアトナテスを、団長は片手で抑え。

「……君に一つだけ聞いてもいいかな」

団長は重い息を吐き。

「浄化は、君の意志でもあるのかな？」

団長はとても悲しそうな表情を浮かべたまま、そう問いかけました。

「……団長は必要とならば、人を殺します。」

ですが、積極的に命を奪うことはよしとしません。

多数の異国出身者、多数の種族が入り乱れる赤の団です。

その過程で、幾度も文化的なあれこれや、政治的。果ては種族的な問題でぶつかり合うことがあります。

そしてその度に、団長は時には対話を、時には戦いをして。

最終的には、和解して彼らを赤の団に迎え入れました。

天使達にも、団長はそれを試みているのでしよう。

ですが、その問い掛けに、天使は無機質な表情を浮かべたまま。機械仕掛けのカラクリ人形のように、不気味に首を傾げました。

疑いを知らぬ、無垢にして清らかな天使には。

残虐にして、無慈悲な言葉を知らない魔物と同じく。

団長の言葉は届いてないみたいです。

「……赤の団。戦闘開始！」

天使達への宣戦布告をし、先陣を切る団長に真つ先に呼応したのは、アトナテスとトウアン。赤の団でも、団長に次ぐ二人の戦士でした。

そして、その後をサナラが地脈の力を束ね。影の射手とユーージェン、アンブローズはそれぞれの判断で、戦士達をサポートできる位置へと移動し、天使達に攻撃を始めました。

私も、彼女達に続くよう、星天召喚の儀を始めます。

ですが、突如グイツと腕を掴まれ、星天召喚の儀を中止してこちらに視線を向けます。「ソラスさんお願いします！団長を止めてください！天使様はきつと、何か理由が！」

先ほど、天使に攻撃を受けかけた団員でした。

手どころか、体全体が震え、目の焦点が定まってません。

彼女は、かつてあった国の高名な神官だったはず……。

切に神を信じてきたからこそ、彼女は今の光景を、認める事が恐らく出来ないのでしょう。

気持ちは、決して分からなくはないのですが……。

「……天使様に、神様に理由があったとしても、戦ってください。今、私達が生き残る為に」

「そんなんっ……!」

彼女は視線を忙しなく、焦点の合わない目を動かし団長と天使を見ます。

最前線で剣を振るいながら、混乱のまま動かないヒーラー達の代わりに。アトナテス達の傷を癒して回り。生き残る為に、天に真っ先に立ち向かうことを選んだ団長。

無機質で、どれだけ味方の天使が蹴散らされても、まるで使い潰すかのような熾烈さで。眉一つ変えずに攻撃を繰り返す天使。

「……分かりました」

やがて、数的有利が逆転されつつある天使達が。伝承では敵対者であるはずの魔物と共に。

赤の団に敵対始める光景見て、ヒーラー達も天使達と戦う覚悟を決めたようです。

その後、私達は天使達を下しました。

多くの天使達は大きな傷を負うと、光の粒子のようになり。天に昇っていきます。昇天したのでしょうか。

「あれえ。たぶん復活するでしょうねえ」

「けっ、天使も魔神も、何度も復活するのは同じってか」

「アトナテスちゃんはいいい皮肉を言いますねえ」

「アンブローズ。天使を魔神達と同じ封印術で、封印することは出来るかな？」

アンブローズは考える姿勢を見せ。

「ご期待に沿えずごめんさない団長ちゃん。あれにはあたしの封印魔法は効きませぬえ」

「誰がやるとかは関係ないですか？アンブローズさん」

サナラの武器である。鎖付き分銅を掲げ首を傾げるサナラの問い掛けに、アンブローズは首を振ります。

「サナラちゃんいい質問しますねえ。あとでたくさんもみもみしてあげますう」

「アンブローズさんは触り方がいやらしいから駄目です！」

「あら残念。おまけにもう一つ残念ですがあ。あたしの封印魔法は魔だけにしか効果がありませんねえ」

「魔には魔、天には天のみ通じるということですかね」

「影の射手は、いやエルフ達には天使達や天界に関して何か情報ないかな？」

団長の問い掛けに、今度は影の射手が考える姿勢を見せ。

「……世界樹は天界に通じると聞いたことはあります。エルフの祖先を迎れば何か情報ができるかもしれませんが……私も長く生きてきましたが、神が天使を使わせ、物質界に仇なすという話を。一度として聞いたことがあります」

「今回の戦い。いやそれ以前から始まつてる魔物の侵攻も。物質界にとって、かつてない異常事態ということでしょうか。母様」

「そうね。ユーージェン。本当に……今までにないことが、今はあまりにも続いています」

「今回のが、最後だとは思わない方がいいみたいだね」

「団長！ それフラグって奴ですよ！」

「おっと、発言には気をつけるんだよアトナテス」

「何で俺に飛び火してんだよ！」

サナラのツツコミに、場が和やかになり。

皆に少しだけ笑みを取り戻し。

「で、どうする団長。あの様子じゃ天使達はまたくるだろ？ここに残って戦うにしろ、撤退するにしろ。早く決めた方がいい。準備が必要だ」

トウアンに団長は、肯定するように頷き返したことで。

先ほどの和やかな雰囲気切り替わり、場が改めて引き締まります。

「本来の目標である魔神は撃退できたことだし、今は撤退しよう。皆が、万全の状態で見えないだろうしね。各国に、今回の襲撃を広める必要もあるね」

周囲を見回すと、死なない為生き残る為とは言え。天使達に反抗したことへの動揺がまだ、団員達に残っているのが分かりました。あんなことがあったのに、まだ跪いて天に許しを請う人もいます。その天がもはや敵であると言うのに。

「……天界に居る神様は、どうして人を浄化せよなんて言ったのでしょうか」

「人が嫌いになったのか、私達人の信仰心が足りないのか……それは分からないな」  
苦笑いをする団長に釣られて、私も笑みを浮かべます。

そうですね。神様の考え何て、神様しか分かりませんよね。

「けど……私は諦めない」

シン……と、静かですが力強い。団長の言葉が、私の心に響きます。  
相手の事は分からないです。ましてや考えを知りたい相手は神様です。  
ですが、この力強い熱さを感じる。彼の言葉は分かれます。

「どれだけ魔が蔓延ろうとも、天が鉄槌を下してきても。

私は絶対に諦めない。私は物質界を、この世界を守る」



堅く拳を握る団長に、希望の灯を感じ高揚感と同時に。

相も変わらず格の違いというべき。痺れるような、そんな圧を私に感じさせます。思わず、気圧されてしまいそうになりましたが。

「そうですね。必ず守り抜きましょう！」

そう、何度も何度も挫けてばかりではいけません。

私もまた、団長に負けないよう力付く強く返すことが出来ました。

そして、撤退を始めようとしたその時。

「……!!皆、戦闘準備!!急げ！」

唐突に声を上げた団長に、私達は跳ね上がるように急いで武器を構えます。

ですが、周囲に魔物も天使も確認できません。

何が来た。という疑問は。

「な、なんですかあの光は!？」

眼前に迫る強烈な光によって視界が阻まれ。

「……………は？」

気が付いたら、戦場から離れた場所にいました。

「おいアンブローズ。何だったんだ今の?」

「……………分かりませんよ。分かりませんが、何か起きたのは確かですねえ」

どうして突然、戦場から離れてしまったのか。

訳が分からない現象で頭が混乱して、まだ整理できていませんが。

周囲を見渡し。アトナテスとアンブローズがいることを確認して。

続いてサナラ、トウアン。全員が混乱を表情に浮かべてたままでしたが。あの時私の周辺にいた人物が全員いることを確認して。

「だ、団長はどこに!？」

最もいなければいけない人物の不在に、私達は気が付き。混乱という酔いから冷め、場に緊張が走りました。

「トウアン！隊の指揮をお願いしますー！」

「お前達密集陣形だ！隊列を組め！」

放っておけば、団長を探しに飛び出しかねない人物を、私は幾人も知っています。だからこそ、今は一度安全の確保のためにも、トウアンにお願いをして。

トウアンの号令によって、混乱が残り続けていた空気が変わり。

ピリツとした戦場の雰囲気になりました。

前衛職、後衛職。各々自らの立つべき場所は、すでに幾度も戦場を経験し。

日々の訓練により、体で理解しているので。

すぐさま隊列を生まれ、武器を構えて敵を待ちます。

……そしてそのまま、緊張状態のまま十分ほど時が経ち。

魔物も天使も、先ほどの不可解な光も来なかったのだ。

不可解な気味の悪さを覚えながらも、一度警戒を解きました。

次に私はアトナテス達に、この場にいる団員達の安否の確認をお願いします。

団長ならば、無暗な行動はせずにきつと、そうしたはずですから。

そして団員達の安否確認をしてる最中に。周辺の状況の確認をお願いした影の射手により。

「ここは魔神と天使達と交戦した場所より、後方にある平原。私達が一度通った場所みたいですね。補給線の維持を担当していた団員が、私達を見かけた時驚いていましたよ。どうして本隊が後ろから現れたんですかって」

そう言われて、私は人ではなく景色を見ることで。

ようやく私達は今、どこに居るのかを理解出来ました。

こんな、気付こうと思えばすぐにでも気が付くことが出来る。基本中の基本のようなことを、忘れてしまったのは悔しいですが。それは一度置いておいて。

なぜこんな所に居るのか。という原因、疑問は考える間でもなく分かります。

あの光以外ないでしょう。

「あたしは以前。神の力の一端に触れたことがあったが。あの光は、その神の力に似

たモノだと思う」

「あの光は神様。パワーが由来つてことですかあ。団長ちゃんが言っていましたか。

この世界にはまだまだ。未知が溢れてますねえ」

おそらく、天使達が何かしただろう。という結論だけは出しておき。対策等々は不十分ですが。

「光のことは後にして、早く団長を探しましょうよ！」

未だに見つかからない団長に、涙ぐむサナラを見て、私達は同時に頷き。

光のことは保留にしました。

サナラに言われるまでもなく、まずは団長探しが優先です。

団長があつての赤の団ですから。

そして、団長の搜索を始めてそんなに時間を経たず。

私達は団長の居場所を知ることが出来ました。

その居場所とは、なんてことはありません。

あの光に身を包まれる前に、私達がいた戦場でした。

ただ、それを知った時。私達は顔を青ざめました。

遠目からでも分かる程の恐ろしく太い爪牙を持つ。

まるで、丘と見間違ふほどの巨躯の獣。

そして、獣に護衛するように取り巻く高位を証明するかのように翼が多き天使達。さらにはどこからか駆けつけてきた魔物の群れ。

それらに、私達全員がどこかへ行ってしまったことで。

全ての敵を、たった一人で相手にして戦っている団長の姿。

誰の合図もなく、私達は団長の下へ急ぎ、駆けだしました。

そして、私達は失敗しました。

到着と同時に、私達に気が付いた団長は、一瞬安堵の表情を浮かべましたが、すぐさま、顔を険しくして叫びます。

「皆！今すぐベヒモスから距離を取るんだ！またあの光が来るぞ！」

ベヒモス、光。

この二つが意味する物はと思ひ至る前に。

またあの光が私達を襲い。

気が付いた時には、先ほどまでいた後方の平原に、私達は立っていました。

事態が飲み込めず、呆然と立ち尽くす私達の代わりに、アンブローズが呟きました。

「これえ……まずいですねえ」

さすがに二度も、同じ失態をする訳にはいきませんので。今度は二手に分け。時間差

をつけた上で、団長と合流するよう計画を立て。私達は戦場に再び突入しました。

ですが、その頃には、団長はあの大きな獣ベヒモスも、天使達も魔物達も。

団長の卓越した剣技と、天賦の魔法の才によりほとんどを撃退していました。

ますます人並外れて強くなっていく団長に、畏怖の戦慄を感じながらも。

決して、団長は不死身の存在ではないと、証明するように。

比類なき戦果の代償に、全身に傷を負い。鎧は血に濡れ。

ぜえぜえと荒い息を団長はしていました。

「神をも恐れぬ人の子よ。何故我らの浄化を拒む？もはや物質界に未来はないというのに」

団長に剣を突き付けられながら、問いかける天使の声も表情も。とうに戦局は決し、追い詰められているはずですが。未だに無機質なものに対して。

「私はとつくに誓っている。この世界を守ると。私が信じ。私を信じてくれる。大切な者達がいるこの世界を」

誓っていると告げる団長の言葉は、天使とは対照的に熱を帯び。

ただただ、一人で大きな獣と天使達の軍勢を相手にして戦い抜き。勝利した団長の戦いぶりに、圧倒されるしかなかった私達に。

その決意が本物で。

改めて赤の団は、例え相手が神であろうとも、抗うことを証明するかのよう。

団長は、最後の天使に剣を振るい。

形を保つことの出来なくなった天使は、光の粒子となって天に昇って行きました。

完全に勝敗がついた戦場に、沈黙が流れ始めると同時に、私達は一斉に頭を下げて謝罪します。

「ごめんなさい……団長を戦場に一人残してしまいました……」

天使の襲撃と、謎の光による。二度もやってしまった戦線離脱。

どちらも想定外の出来事とは言え。

どうして団長だけは、光の影響を受けず。

たった一人だけ、戦場に残ってしまったのかも謎とは言え。

団長をたった一人、戦場に取り残してしまった。

叱られる。なんて甘い表現では許されない失態です。

共に戦場に立つ者としても、恥ずかしい。

どうか罰を。

皆思うことは一緒で、団長の正当なる怒りが振り下ろされるのを。思えば一度として、怒鳴り声すら上げた記憶のない団長の怒りを想像して。怯え顔を浮かべて待っていました。

「……?何をしているんだ皆?」

私達の行動が理解できないかのように、軽い口調で団長はそう言う。

「天使の襲撃とは、とんだ不慮の事故だったね。今回は色々遅れをとってしまったが。勝利は勝利だ。さあ帰ろう皆」

傷だらけの体のまま。私達を不安にさせないようにするためか、力強い足取りで。

いつものように、誰よりも前に歩き出しました。

天にも怯えぬ英雄、ここにあり。

そう、誰かが眩きました。

天使、そして神獣。

本来は人々を守護してくれている。そう思っていた存在が敵対したと言う事実は。

ただ純粋な力を振るう以上の衝撃を、当時の物質界に齎しました。

私達はいわば、まったく痛みに備える暇なく。突然殴られたみたいなのです。

そんな中で、避ける所か、すぐさま殴り返そうなんて人。

私の知る中では英雄王くらいでしたね。

王子君はどうでした?

……ああやっぱり。血は争えないのでしょね。



## E 1 6 終わりの始まり

天界からの、天使と神獣の襲撃。

神が授けた不可思議の武具や、加護を受けた人がいる。

神の存在が、限りなく立証されている物質界で。

古くから味方だと考えられていた。

天界の突然の襲撃に、宗教組織の支配力が強い大国の一つは。組織の土台であったはずの、信仰すべき存在の不信により。組織的な結束が崩れ、脆く崩れ去りました。

当然、被害はその大国だけではありません。

大なり小なり、日々行う。

ささやかな祈りによって。魔物の襲撃に混乱を増すばかりの時代に、ただじつと耐えていた。善良なる人々の心をも、天は引き裂きました。

魔物の襲撃以来、過去の戦いを忘れ。

国も人種を超えて、結束を強くしていこう。

そんな動きが赤の団以外でも、ようやく広まろうとしていた物質界の人々の対応は。

天使達の浄化を受け入れる者。

抗い、生きる為に戦うことを選んだ者。

あろうことか、魔に信仰を見出し。魔の主、魔王を信奉を始めた者。

大まかに、この三通りで、無論赤の団は抗い戦い続けることを選びました。

ただ、間違いなく言えることがあるのならば。

天使達の襲撃を皮切りに、戦火がさらに広がりました。

地域によっては、神と同様の信仰対象となりうる存在達も、人々を襲い始めました。

「東にいる畏れを糧にする妖怪に、ドラゴンと竜神の末裔たる竜人までもか」

影の射手が集めてきた各地の被害報告に、私達は苦々しそうな顔を浮かべるしかありません。とにかく、被害が多すぎます。

人心は惑い続け、敵は増え続け。復興の目途もまるで経たず。

大国さえも、人の営みが出来ない。

人は回復魔法と、挫けぬ心と意志があれば戦うことは出来るでしょうが。

物は破壊されたら、直すには人手がいりません。

それに、もし野畑が焼かれてしまえば、そこから得られるはずの恵みがなくなり。

消費ばかりが増え。赤の団どころか、物質界そのものが。

魔物達との継戦能力が奪われようとしています。

……私達はいつまで、誰にでも手を伸ばし続けられる。赤の団でいられるでしょう

か。

団長は一度、限界を感じて。各国の王達の批難を承知の上で、自分達の力で人の営みを送れる場所。

赤の団の拠点を作りました。

そして、今再び限界が迫っているのを、団長でなくともひしひしと感じています。

私達は、いつまで私達としての在り方を保ったまま、戦えるでしょうか。

その時団長は、どうするのでしょうか……。

「団長は前、魔王を倒したら戦いが終わるって言っていましたよね。その魔王を直接叩くと言うのはどうでしょう？」

会議中にサナラが団長に、そう提案しました。

赤の団の、団長の最終的な目標は魔王討伐です。

団長も以前、魔王を倒せば魔物の侵攻が止まると言っていました。

今では敵が魔物だけではありませんでしたが、サナラが言う事はもつともな気がしません。

魔王を倒せば、きっと平和が。

ですが、サナラの問い掛けに団長はふるふると首を振り。

暗に無理だと伝えます。そうでしょうね。私も不可能と思います。

「どうしてですか？」

「同じ土俵に立ってないからだろう」

トウアンが分かったか。とでもいいかげんに口を閉ざしましたが。

サナラは納得してないようで、首を傾げました。

あー、とトウアンは続く言葉を探している内に、代わりにアトナテスが口を開きました。

「サナラよ。ゴブリン一匹相手に、俺達赤の団全員が出張って倒しに行くか？」

「しませんね……ああ」

「今まで通り。魔物を物質界に送っていけば勝てる戦に、わざわざ魔王が物質界に出張るまでもないってことだ。そういうことだよな、トウアン」

「ん、そういうことだ」

今の物質界は、そこに生きる人々は、わざわざ魔王が直接出向くまでもなく勝てる。

……なんとも気分が沈みそうになる表現です。

魔王の勝利が意味するところはきつと、物質界の崩壊。

人の滅亡を意味しているのしょうから。

「でも、サナラの言う通りかもしれない。相手が同じ土俵に来るまで、じつと待つだけが戦いではない」

団長の声に、私達は注視して。

「必要なら、私が一人魔界に乗り込み魔王を……」

「団長！」

それを聞いた時。

私は、私達は全員声を張り上げ。団長に詰め寄ります。

ふざけるな。と。

魔界に単身乗り込み魔王を討つという、団長の言葉が本気に。

必要ならば、本当にやる気に聞こえたからです。

私達には、全くの未開の場所である魔界。

入ってしまったら、二度と戻ってこられる保証がない場所に。

勝てるかどうか、そもそも生きて帰ってこられるかどうか分からない。

そんな、戦いに団長だけを向かわせる。

そんな無謀を、仲間である私達が許していいはずがありません。

「二度と、そんなことを言わないで下さい」

「……すまない」

私達の抗議に、団長はそう謝罪しました。

ですが、私が欲しかった言葉は謝罪ではありません。

冗談だ。そういった誤魔化しの言葉の方を、聞きたかったです。

「……一先ず。今私達が優先して戦うべき相手は天使と神獣達だろう。神の威光。神獣達が持つあの光は厄介だ」

無理矢理に話を変えられたのは気がかりですが。

単身魔王に挑むなんて話を、続けるよりはるかにマシです。

先日の戦いをまとめた書類を引っ張り出して、私達は振り返ります。神の威光。

それは、天に仇名す者を遠ざける拒絶の光。

団長が一人取り残された後。天使から光の能力を聞いたみたいです。

トウアンのように神の加護がある訳ではないのに。

なぜ、効かないのかという。驚愕の顔を浮かべられながら。

なぜ効かないのかは、保留になりました。

誰も分からないですし、団長もその辺りに心当たりがないみたいでしたし。

さて、改めて神の威光の力ですが。

敵を遠ざける光には有効範囲があり。神獣から離れていれば効果がない。

また、その転移魔法に似た力は。例え神を冠する獣であっても、そう何度も何度も短時間で使える力ではないので、一度神の威光を発動させてしまえば。しばらくの間は発

動できない。

以上に二点が、神獣との初戦で得た収穫であり。

その情報を元に、対処方法が考案されました。

単純に一波、二波と神の威光の発動タイミングに合わせ。

次々に兵を出撃させるといふ戦い方です。

……今の団長が戦場に立つことで起きる現象の対処と、あんまり変わってないです。

現象が発生した人を順次撤退させ、穴埋めに出撃するのが、一斉になつたくらいです。

ただ、本来なら現象が起きるまで。戦うことが出来た人まで、強制的に撤退させることになるので。兵の人数に限りがある以上、誰かがその人の負担を担うことになりま

す。

神の威光の影響を受けず。

現象が起きない誰か。

……団長が負担を担うことになりました。

他に戦法はないのか。

団長に負担が集中することは、戦う前から分かり切っていたので。会議後団長抜きで、何度も私達は議論しましたが。今後神獣を相手にするには、これしか方法がなく。

せめて、現象の影響をまったく受けたくない者達が、分散して配置するしかないのが実情でした。

こうして、団長の唯一性と負担が増えていく。

ですが、戦場を白紙にする。軍そのものをどこかへ飛ばしてしまう。

神の威光の本当の恐ろしさを、私達はまだ知りませんでした。

神獣との戦いから一月程経った頃。

その凶報に、団長は酷であると分かっている。

その報を知らせたエルフに、団長はもう一度、尋ねざるおえませんでした。

「間違いなく。妖精郷が落ちたんだね。影の射手よ」

「……はい。そして女王も戦の中で、その命を散らしました」

「そうか……」

黙祷する団長の傍らで、私は口をポカンと開けていました。

弓と魔法を得意とするエルフに、赤の団で幾度も魔物と戦った屈強な団員達の混成部隊が。同盟相手である妖精郷を守っていたのです。魔神相手に防衛に成功した。という知らせも、聞いた事があります。

それなのに、あまりにもあつさりど、妖精郷が陥落してしまったからです。



頭がまだ誤情報じゃないのかと疑っています。

けれど、普段はもつと余裕のある表情を浮かべて、周囲を見守ってくれている影の射手が。

皺のある顔に、必死で無表情を張り付けて、団長と同じく黙祷し。

その隣には、まだ年若いエルフの戦士が人目に憚ることなく。

涙を流しながら、妖精郷に起きたあらましを伝えてくれました。

妖精郷に神獣が現れた。

団長は天使達に襲われたことを、信じてもらえない事。知らせた後には必ず混乱が起きる事。どちらも承知した上で、それでも尚。

神獣の神の威光の力を危険視し、その対処方法を広める為に物質界中に伝えました。

団長の一報と同時に、物質界各地に天使達が現れ、魔物と同様人々を襲い始める報を聞き。

混乱ばかりしていた各国の王達とは違い。

エルフの女王は団長の言を信じ。

すぐさま軍を再編成して、神獣の対策をしたみたいですが。

神獣を相手にするべく待ち構えるエルフ達の前に、魔神が降臨しました。

……してしまいました。

神の威光により、どれだけ戦場を有利に整えても戦場そのものを白紙にされ。

魔神という、アトナテスやアンブローズといった個々の能力が、どれだけ優れた人達であつても、周囲の協力無くして戦えない相手が、白紙にされた戦場に降臨して蹂躪する。

悪夢としか表現できない、凶悪なコンビです。

どれだけ侵攻を止めようとしても。

神の威光により。思うように戦うことが出来ず。

強制的に分断された戦力では、魔神相手に抑え込むなど不可能。

そのまま神獣は妖精郷の首都へ直進し、そこで神の威光を発動。

神の威光の前には、幾重に張った陣も強固な城も意味をなさず。

どこかへ飛ばされた女王達の前に、魔神とその配下の魔物が現れ。

最後は……。

聞けば聞くほどに、どうしようもない。

絶望的な戦いであつたと、伝わってきます。

はつきりいつて。私よりも、団長を理解しているかのような態度をしていた。エルフ

の女王は好きではありませんでした。

ですが、最期まで魔神と神獣を前に、エルフの女王として毅然と指揮を執り続けたと聞き。

私も女王に、遅れて黙禱を捧げます。

「妖精郷にいた団員達は？」

「全員女王が亡くなった後も、一人でも多くの同胞を、赤の団の拠点に送り届けるべく。最後まで私達と共に戦ってくれました」

団長は悲痛な表情を浮かべ、そのまま天を睨み。

「よく生き残ってくれたね。今はゆっくりと休むといい」

ふっと安堵させる笑みを一つ浮かべた後。生き残った妖精郷のエルフ達や団員達を労わるように、そう告げました。

そして、妖精郷の生き残った人達が去った後。

「影の射手よ。君も今日は休むんだ」

普段にも増して静かだった影の射手にそう言い。

「……私は大丈夫ですよ団長」

「女王は、君の友だったのだろう。休むんだ」

断りをいれる影の射手に、団長は無言を言わせない。

断固した口調で影の射手に命じると。

「一日、時間をいただきます」

そう言い残し、影の射手は音もなく執務室を出ていきました。

「ユーージェン」

「はい」

「影の……君の母親と一緒にいてあげなさい」

そして、狼狽えているユーージェンに団長は優しく勧めます。

「私が一緒にいても慰める事なんて……あんなに思い詰めた母様を見たのは初めてです」

「だったら、なおさら一緒にいてあげるべきだ」

「団長の言う通りですよ。ユーージェンちゃん。傍に誰かが一緒にいてくれるだけでも、ずっと楽になる事もあるんですよ」

赤の団に入ったばかりの頃を私は思い出しながら。私もユーージェンに勧め。

ユーージェンは迷う表情を浮かべましたが、やがて意を決したように表情を固めると、執務室を出ていきました。

影の射手は、ユーージェンに任せましょう。

影の射手も強い人です。きつと、明日には普段通り戦ってくれるでしょう。

「これからどうしますか団長？」

「一先ず、各地に出兵している団員達や、各国の戦況を知らないといけないね」  
そう言つて各地の混乱を書き続けられた報告書に、目を通し始めた団長に。  
薔薇の香りを漂わせながら、正面に立つ妙齡の美女が一人。  
アンブローズ。

彼女も普段とは違つて、やけに神妙な顔をしていました。

「どうしたんだい。アンブローズ」

「団長ちゃん。以前から申し上げようと思つていましたが」

問いかける団長に、アンブローズは焦らすように一拍置いた後。

「英雄王に、なりませんか？」

その問い掛けに、しんと場が静まりました。

アンブローズの誘いは、団長を知る者であるならば。

きっと、幾度も考えたことがある誘いでした。

私も考えたことがないと言えば嘘になります。

人望も、才能も満ち溢れた彼が王になれば。きっと、物質界を受け止める王にだつてなれると確信しています。

彼に、その気さえあればですが。

「それは、中央の王からの受け売りかな」

団長は団員からも、共同戦線の同盟を組んだ者達からも、中央の強国の王様からも、王を名乗って見ないかと。すでに言われてきました。そしてその度に団長はのらりくらりと回避してきました。

そういった場面を何度も見ていると。

本人が嫌だとは言ってませんが、団長は王にはなりたくないのだろうな。てことは何となく察することは出来ます。

どこか冷たく感じる団長の物言いは、王への誘いへの拒絶に私は思えました。

「いえ、転生の魔導士。アンブローズがあなたを見て。英雄王になるべきだと思ったから、こうして問いかけています」

普段の間延びした口調ではなく。きっぱりとした口調でアンブローズは言い放ちます。

そして、その会話の内容が内容なだけに。団員達が、気が気でない様子のまま、団長とアンブローズの話に耳を集中させます。

「私は、由緒ある家柄でなければ、血筋も持ち合わせていないよ」

「高貴な血筋を持つ者が、王になるではありません。

民が求め、その求めに応じて立ち上がり。民がその者を認めることで王が生まれるのです」

「私が王を名乗れば。魔物に国を奪われ、いずれ復興を願う者達から。その立場を篡奪し、願いを打ち壊すことになるのではないか？ そんなことは出来ない」

「自らの力で国を取り戻せないのならば、そのまま滅びてしまえばいいのですよ。王が亡くなっても人がいれば、国は世界は再興できるのですから」

あんまりなアンブローズの発言に、場の空気が冷え。

さすがの団長も目を見開き、非難の視線をアンブローズに向け。

「……アンブローズ」

自制を促すように、普段の温かみのある声音が捨てアンブローズを団長は呼びます。

「民を守れない王に、国に価値はありません。特に今のような、物質界規模での未曾有の災厄に必要なとされる王は。由緒正しき力無き王ではなく。戦士達を束ねる力のある王です」

しかし、アンブローズは止まりません。止まる気はないように見えます。

「王達と交わした復興の約束？ 不意にしちやえばいいんですよそんなもの。約束というのは対等であるからこそ、効果を発揮するのですから。団長ちゃんも真面目で誠実なのは美德ですが。王になるからには、ある程度の狡猾さを身に着けてほしいですね」

鋭さを増していく団長の視線を意にも返さず。

アンブローズはスラスラと語り、このまま一騒動起きそうな気配を漂わせましたが。

ふと、団長に耳打ちするような小さな声で。

「それとも、怖いですか？物質界を背負うのが」

そうアンブローズが言うと、団長が放っていた気配が萎縮し始め。

団長はアンブローズから視線を外しました。

「団長ちゃん。あなたは英雄王になるでしょう。あなたがそれを望まなくてもきつ

と」

「……………」

「もう、悩む時間もないかもしれません。だからこそ……覚悟だけはしてください

ねえ団長ちゃん」

言うことは言った。そんな風にアンブローズは立ち去りました。

深刻な表情を浮かべた団長に、なんと声をかけるべきでしょうか。

私も、団長が王になるべき。そんな考えが、物質界中から出てくる敗戦の報告や、戦

に巻き込まれた難民達を見ていると、日に日に増していきます。

アンブローズが嫌われ役を買って出ても、団長を王にしようとする気持ちは、痛い

ほど分かります。

ですが、団長本人の意思を無視して王にさせるなんて、私にはとても……。

「…………アンブローズが言っていたことは分かる。お前が王になった方が戦況は間違いな



く。よくなるだろうな」

あれこれと考えている内に、トゥアンが口を開きました。

そして、治めている故郷から離れているとはいえ、女王であるトゥアンの口からも。

団長は王になった方がいいと、告げられ。団長は顔を顰めます。

ですが、トゥアンはそんな団長の頭の上に手を置き。

「けど、お前が団長だろうが、王になろうが。お前は、お前の戦う理由の為に戦え団長。その戦場では、お前が指揮して。あたしらと一緒に暴れる。そこは変わらない。そう  
だろ？」

ガシガシと団長の頭を、乱暴に撫でるトゥアン。

不器用でも、気持ちは伝わる。

トゥアンらしいその励ましは、団長に微笑みを取り戻すには十分な効果を持っています。  
した。

「そうだねトゥアン。私達は苦楽も幸福も分かち合い、共に戦う仲間だ。そこは何か  
あつても変わらない」

「分かっているならそれでいい」

うむうむと頷きながらトゥアンは執務室の定位置に戻り。

団長は私をじっと見つめ。

「ソラス、相談したいことが——」

「団長伝令だ！中央の強国の首都に魔神と神獣が出現した！」

「伝令です！北方の大国から魔神と神獣の同時出現が報告されてます！」

団長の言葉を遮り、執務室に飛び込んできたアトナテスとサナラが叫び。

その内容に、団長がまさかと言葉を零し、頬から冷や汗を一つ流します。

「団長伝令です！」

「団長！」

次々と、赤の団の拠点を除いた物質界各地に、魔神と神獣の出現の報告があがりました。

まるで狙っていたかのように、今ここで全てを終わらせるかのように同時に。

破壊の後に再生があるように。

再生の前に破壊があるように。

世界の終わりが訪れようとしていました。

破壊される者達の気持ちなんて知らずに。

千年戦争の前と後。

物質界の歴史が、そこで明確に区切られているには、当然理由があります。

…英雄王が、英雄王になる前。  
物質界は一度、終わったのです。

## E17 滅びゆく物質界

後世の歴史家達は、この物質界存続を賭けた戦い。その敗因をどう評するでしょう。相手が悪かった。

なるほど、言い得て妙です。

そも人の力で、魔神などと呼ばれる存在や。神が遣わせた神獣と相対すること自体が、間違っていたかもしれません。相手が強大過ぎました。

闘いから逃げ出した当時の王達が悪い。

それも事実でしょう。

滅びるにしても、人や資源といった物を多少でも残せた国と、そうでない国には決定的な違いがありました。

それは団長が率いる赤の団の救援を信じ。どれだけ絶望的な状況下であつても、徹底的な抗戦を選んだか否かです。

城は落ち、都市は焼かれ、国の滅亡は必定。あと残るは王族と僅かな軍勢と、彼らに守られる民達のみという状況で。

なんとか救援に間に合い、魔神と神獣を一時的に撃退する事もあれば。

到着した時には、国を捨てて逃げ出した王や貴族は、神獣と天使達に討たれ。王無き国を魔神と魔物達により、とつくに蹂躪され。目を瞑りたくなるほどの凄惨な情景にされた後だったりした事もありました。

当時まだ、王でなかった赤の団団長が。

物質界随一と呼べる武力を用いて、早急に物質界を統一し。

物質界の唯一王、『英雄王』として君臨し、魔と神の軍勢に抗わなかったせいである。

……否定はできません。

この連日特にそう思えてしまう。

各国へ救援に向かつては、その度に傷付いた人々を赤の団の拠点へと護送し。

怪我や、戦死。神の威光による戦闘中行方不明。救援ついでになし崩しとはいえずも、次々と団に加入する団員達に、案の定例起きてしまう。団長が戦場に立つことによる事象。などなど様々な理由で、戦線を離脱する団員達の代わりとばかりに奮戦し。

戦闘開始後最前線にいつも真っ先に飛び出して戦うから、誰よりも魔物達とぶつかり、傷を負っては癒してを繰り返し。

それでも、決して魔と神の軍勢を相手に膝を屈することなく。

次の救うべき者達の元へ、その手を伸ばす為には駆ける団長。

その、あまりにも大きい背を見ていると、否応にもその説を否定できなくなってしまう

う。

団長がもつと早く王になっていれば。

今日の前に広がる凄惨な光景が広がり続ける物質界とは、もつと違う結果になったかもしれない。

被害を。失われていく生命をもつと減らせたかも。

いいえ、きつと団長なら減らせたはずです。

そんな考えが、自然と私の脳裏に過ります。

きつと団長と普段過ごすことが多い彼ら彼女らも、そうでない団員も。きつと、赤の団の名声を聞いた物質界の人々だって。

ですが、団長に近しい私達は、なおの事そんな事を容易くは口にはしません。

言つた所で、ただ団長を追い込むだけなのは、目に見えていましたし。

……そもそも団長には王にならないといけない。

そんな責任も義務もない。

団長はあくまでも、赤の団の団長であつて、それ以上でもそれ以下でもない。

ただ人より力があつて、その力を物質界に住まう人々を無差別に襲う敵から、助ける為に使っているだけ。

国取だとか、支配だとか。そんな野心らしい野心を見せたことは、団長は今まで一度

もありませんでした。

もし誰かが。

力があるなら、責任もある。そう言うのならば。

今まさに滅ぶ数刻前といった物質界を、どうぞ背負ってください。

物質界が滅びに至った責任を、ただ力があるのからという理由だけで、団長に何もかも押し付けるのは。一個人としても、仲間としてあつてはならないのです。

「……………」

重たい溜息がこぼれ出る。

団長の事象による体の麻痺、時折訪れる矢や魔法を幾度も身に受け。

その度撤退し、後方で休んで回復してはいますが。

回復魔法ではカバーできない。体力や精神の消耗による疲労はどうにもならない。

ベットに身を預け、そのまま二日くらい眠りこけたい気持ちに鞭を打ち。

団長から離れないよう。歯を食いしばりながら。私は団長の背を追っていく。

普通なら、静止されるような。結構な無茶をしている自覚はありますが。

私を静止する声はありませんでした。

たぶん、皆分かっていました。

目の前を歩き続ける団長の足が止まったその時、それは私達の終わりも意味をしてい

ると。

いくら赤の団が戦っても。

物質界中に同時多発して起こる。魔物や天使達の襲来による被害があまりにも大きすぎた。

人や物は魔物達に。知識、文化はまるで、物質界に人がいたという証拠を消すかのよう。天使達が徹底的に。いつそ感心する程に丁寧に破壊していきました。

復興。そんな単語はもう思い浮かぶことは出来ない程に。

そして何より問題なのは、相手の数に際限がないことでしょう。

どれだけ倒しても、魔物と天使はどこからか出現するゲートを通して物質界にやってくる。

今までは小休止のように、ぱたりと出現が止まりましたが、今回にはそれがありません。

一時は倒して撃退したとしても、再び敵はゲートを通してやってくる。

挟み撃ちを避ける為にも、定期的に足を止めては追い返しをやってはいますが。

おそらく、別の国を攻め滅ぼした軍勢が、どこからともなく現れ。敵を殲滅したとしても、再び追いかけてこが始まる。

この繰り返しは何日も何日も続きました。



進むも戻るも、留まっても敵は来る。

それならば進み続けるしかない道はありません。

……ですがいくら、団長率いる赤の団が強い強いと言っても。

それは、戦う準備が万全であつてこそです。

無限を彷彿とさせる軍勢を、限りがある団で相手をするにも限界はありました。

「残つたのは中央の強国だけか」

「さすがは中央の強国……ですね！」

サナラがアトナテスの言葉に呼応して、無理に笑顔を浮かべ。

アトナテスは明るくでもなく、馬鹿にするでもない。かといつてただ冷たいといった

イメージでもない。

ただ無表情に無言で深く頷いて返し。サナラはハハハと乾いた声を上げ顔を沈める。

普段明るいサナラも、今はその明るさが少し空回りしている。

無理ありません。つい数年前までは多くあつたはずの国の大半は地図より消え。

もう魔と神の軍勢に抗える国が、中央の強国しかなくなつてしまつたのですから。

「大丈夫ユーージェン？」

「はい、母様」

影の射手が、怪我をしたユーージェンを背負っている。

これは今までのことを思えば、異例な光景でした。

団長の事象によつて、体の麻痺が起きた事のないユーージェンが戦線離脱するといったら、単純に攻撃を受けて怪我した時しかありません。どれだけユーージェンが戦えると主張しても。影の射手は断固として、継戦を認めたことがなく。

時には力技でユーージェンを野営地まで送り返してきました。

ですが、今は背負っている。まるで、最期の迎える時傍にいる為のように。

「……………」

トウアンは歯痒さを表情を浮かべたまま、無言でした。

戦いが始まった直後は。国を、民を見捨て逃げ出した王の胸倉を掴み。クソ野郎と怒鳴り、鉄拳を浴びせる元気はありましたが。

魔神と神獣を前に逃げ出す者達があまりにも多すぎて。

失望で、殴る気力すらなくなったように思えました。

普段はお喋りなアンブローズも、今日は無言でした。

先の一件もあり。今の物質界の現状を見て。だから早く英雄王になるべきだったと、団長を責め立てることなく。

戦場に立てば、変わらず力を振るつてくれます。

ですが、どこことなくその立ち振る舞いの根底には、諦観が滲み出ているように思えました。

と言ってしまったら、アンブローズには悪いですね。

その諦観は今や誰もが共有しており。

言葉にして、誰かが。特に団長が、その諦観を肯定でもしてしまっただらと思うと。

……とても、怖くて言えなくて。

でも、表情には隠せなくて。誰もが浮かべるそんな表情を見たら、自然と空気がどんよりと重くなって。

この世界は終わった。

そんな認識を、否応にもしてしまおう。

……………。

けれどもどこか。

まあいいか。

そんな考えを持っている私もいました。

魔物に蹂躪された国を見て、戦死する仲間を見て。目の前から零れ落ちていく命を見て。

苦しくもあり、悲しくもなることがたくさんあった。

でも、それらを差し引いても、  
今までの日々は、楽しかった。

戦場の高揚と勝利も、同じ釜の飯を食べて、酒を飲む戦友達。助ける事が出来た者達から向けられる感謝。

何者にも成れず、何も成すこともなく。

ただただ一方的に魔物に殺されて終わる。

あの日、そんな終わりにならなかったからこそ。

楽しいと感じる事が出来た。

それに何より。

好きな人の隣にいと、自然と高鳴る。

星が教えてくれることのない、素敵な鼓動の温かさを知ることが出来た。

……それが成就することはなかったが。

あの日、私に訪れるはずだった死が、数年延びただけでしたが。

この数年は、夜空に浮かぶ星々にも勝る、愛おしい輝き。

赤の団の占星術師ソラスとして。

背を預けられる戦友と、愛しい人の傍で朽ち果てる事が出来るなら。

この素晴らしい日々が終わってもいい。

……やっぱり、最期が一人なんて寂しいですからね。

そんなことを思っていると、団長の足が止めた。

ついに、団長の足が止まってしまった。

それについていく私達の足も止まる。

ああ、この周囲を見渡す限り何も無い平原が私達の終わりの地か。

ただそれに補足するなら、全方位敵に囲まれているというのを加えるべきでしょう。

この状況は必然でした。

魔と天の連合軍にとって、もはや敵と呼べるのは中央の強国と私達赤の団くらいです。

物質界中の国々を飲み込んでいった彼らが、残った敵に集まるとなれば、どう足掻いた所で囲まれるのは自然です。

補給も救援も期待できない状況での包囲戦。

逃走の為の突破も不可。

降伏を聞き入れてくれない相手である以上、全滅するのは必然でしょう。

団長が足を止め、周囲から聞こえる地鳴り。

見渡す限りの魔物達に私達は覚悟を決め、  
各々武器を持ち上げ構える。

その心意気は全員共通していた。

ただ一方的にやられるのは、ここまで何度も戦ってきた私達らしくない、最後に一花くらい咲かせて見せましょう、だ。

そして最後に相応しく。団長が声高々に、突撃の命令を下すのを、今か今かと私達は待っていました。

「みんな聞いてくれ」

そう言い、最後まで離脱することなく付いてきた団員達一人一人に団長は一瞥しました。

たったそれだけの動作でしたが、私達は改めて団長という存在に、畏怖と畏敬を抱かずにいられません。

こんな状況でも、こんな目をする事が出来る彼こそが、物質界の王に相応しいと、思わずにいられません。

「——まだ、諦めるわけにはいかない」

物質界は終わった。

あらゆる国々が蹂躪され、家々が焼かれ。

戦える者達も、今やほとんどいない。

それどころか、今まさに全滅必至という状況まで追い詰められている。それでも、彼は諦めない。

彼の目は諦めを拒絶していた。

「団長……でも、もう全方位囲まれて打つ手が」

私の言葉に、団長は力強くふるふるすると首を振って否定する。

「打つ手はある。たった一つだけ」

こんな状況を打破する手段がまだあるとは。

目を見開く私達に、団長はその手を打ち明けた。

「皆、私をここに残し。全戦力を持って包囲を突破してくれ。

ここに来る敵は私一人で殲滅する」

私達の総大将が、たった一人で敵を迎え撃つ。

以前にもあった正気を疑うような手でした。

ただし今回は逃げることを前提とした殿ではない。全員が逃げる為ではなく、一人で迎え撃つと団長は言うのだ。

「てめえ、ふざけてんのか!？」

「大真面目だよ」

アトナテスが怒声を上げながら団長に詰め寄り。帰ってきた返答に、すかさずトウアンの鉄拳が団長へと飛んだ。

団長なら、かわすなり受け止めぬなり出来たはずなのに、トウアンの拳を団長は甘んじて受け止めました。

だからでしょう、その悪いことをしてるから叱られて当然みたいな態度が、なおさらトウアンには気にいらぬのか、追撃が飛んできそうだったので。

「トウアン！」

私は思わず、団長とアトナテス、トウアンの間に割って入ります。

ですが、肩をグイッと団長に後ろに引かれ、団長は再び二人の前に立ちます。

「分かってくれ二人とも。これしかこの状況を突破できる方法はないんだ」

「だからって、あたしらにお前を置いて逃げると？」

「そうだ」

短く、すっぱりと言い放つ団長に。

今度はアトナテスが我慢できず、拳を上げようとしたが。

その拳を制するように薔薇意匠の、アンブローズの杖が置かれます。

「団長ちゃん。そこまで言うからにはあ、ちゃんと理由はあるのでしょねえ」

理性的に問いかけているように見えるアンブローズですが。



団長の足元には、いつの間にもやらアンブローズの魔導陣。

ブルームペタルが配置されています。

理由の内容次第では、力づくで止めるといふことでしょうか。

思わずごくりと喉が鳴る。

そんな私とは対照的に、威圧されているはずの団長は、冷静に理由を語り始めました。

魔神と魔物の魔王軍。神獣と天使の天界軍。

この両者は最終的な目的。物質界の人を滅ぼす。という目的こそ同じでも。

やはりというべきか、指揮系統は根本的に違う。

だから、彼らの戦場での細かな目標は異なっている。

そう団長は言い、さらに補足します。

魔王軍の基本方針は、無差別の襲撃。

身分や、非戦闘員関係なく襲う。

いくつか救援が間に合わず、滅んでしまった国に残った敵のほとんどが、魔物だったのはその為だ。

一方で天界軍はというと、真つ先に狙っているのは決まって王族。

どれだけ戦力が城や砦に残っていても、神獣や天使達は王達が国から逃げ出したら、

そちらを追うことを優先している。

国だとか、組織とかの指導者を彼らは真つ先に狙う。

つまりは……。

そこまで聞き。自ずと団長が一人で残ると言った理由を、私は理解出来ました。

「天界に住まう者達も、どうやら私を王にしたいようだ」

自嘲気味な笑みを浮かべながら団長はそう言い。

「しかし、今は都合だ。そうだろう皆？」

同意を求める団長の声に、私達は沈黙する。

理には適っていたからです。

確かに、確かに今の私達の戦力ならば。

例え団長がいなかったとしても。

魔神だけなら、なんとかなる。

神獣だけなら、なんとかなる。

なんとかなるのです。これらが単体だけ相手にするのならば。

しかし、それらが合わさると、私達が例え万全でも敗北する。包囲は突破できません。

何故なら、戦っている最中に神の威光を受けて、少ない戦力が分断されて。

続いて最初の神獣とは、別の神獣の神の威光によってさらに分断され。

ごくわずかな戦力で、待機していた魔神や神獣と戦わざる負えない戦況にされる。

神獣の神の威光の強制的な戦力分散を繰り返され、ついには軍としての機能不全を起  
こされ。

そこに魔神と言う強力な個の力で、各個撃破する。

それが、多くの国々が敗北した魔と神の軍勢の策です。

しかし、魔と神の軍勢を一時でも分断することが出来たのならば。

この単純にして強力な策は、無力化されます。

神の威光の影響を受けないので、一か所に留まることが出来て。

天界の勢力に狙われている団長が一人で、主に神獣と天使の相手をして。

神の威光の影響を受けるが。

天界の勢力から狙われていない私達が、主に魔神と魔物の相手をする。

簡単に言ってしまうえば、それが団長の作戦でした。

改めて、これは正気で導き出した作戦にはとても思えなかった。

狙い通りに神獣と天使は団長に向かってくれるかもしれませんが、それでも多かれ少  
なかれ魔神とも相手にするはず。

残される一人の生存を考慮していない。としか思えなかった。

けれども、団長の策よりも良い策を考えている時間も残されていない。

神獸の神の威光の効果範囲内に、もう遠くないほど接近されている。

団長を除いて、皆苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

……当然です。誰も団長には死んでほしくない。生きていてほしい。

一緒に戦って散るなら、まだ許容できます。

でもこれは……無謀が過ぎる戦いに団長だけ残すなんて嫌です。

刻一刻と少ない時間が無くなっていく。

打開策はないかと焦る私達と比べて、団長は穏やかな表情を浮かべて私達を見ていました。

ほとんどここで死ぬと言っているようなものなのに。どうして団長はその前にして、穏やかでいられるのか。本当に不思議でたまらなかつた。

「相手は千体倒しても無限に出てくるんだぞ団長、一人残ったって無意味だ……」

「確かに相手は無限を彷彿させるね。ユージェン。けれど、いかに魔王でも神であっても。無限の軍隊なんてもの存在しない。必ず、戦力が尽きるときがくる。それまで、千体倒して尚尽きないのなら、私は万體倒してみせるさ」

「その自信があるのですか？」

「やらかなきゃ死んじやうからね。やってみせるよ影の射手」

団長はそう言い笑みを浮かべる。

「お前は馬鹿だ」

「そうかな？」

「ああ大馬鹿だ。そして、馬鹿は殴って躓けないと分からない。けど、今は殴らないでやる。だから……必ず戻ってこい」

「勿論だトウアン。けど、殴られるのは困るな。君の拳は痛いから」

団長はそう言い笑みを浮かべる。

「団長ちゃん」

「アンブローズ……すまない」

「どうして頭を下げるんですかあ？」

「この期に及んで。私はまだ王になれと言われても、素直に頷くことは出来ない。覚悟も……出来てない。失望したかい？」

「まあ言いたいことは分かりますよお？ぶっちゃけ色々詰んでますからねえ」

二人は困った顔を浮かべながらクスリと笑い声を上げ。

アンブローズが団長に手を差し出し、団長はその手を握り返す。

別れの挨拶よりも、先日の子の仲直りの握手と、私は思うことにした。

「何にせよ団長ちゃんが生きて帰ってくれないとどうしようもありません。だから

……」

「必ず生きて帰るよ」

団長はそう言い笑みを浮かべる。

「俺は納得してないからな」

「ああ」

不満を隠すことなく。アトナテスは口をへの字に曲げながらそう言い、団長はそんなアトナテスに拳を突き付け。

「皆を頼む」

団長はただ、それだけ言う。

アトナテスも数秒の沈黙の後、団長の拳に合わせるように拳を突き合わせた。

「まあ、どいつもこいつも守られてばかり、なんて奴はいないけどな」

「そうだね。頼もしい仲間達だよ」

団長はそう言い笑みを浮かべる。

「団長本当に一人で……えぐっ」

泣いてるサナラに気が付いた、団長はサナラに目線を合わせるように腰を屈め。

橙色の髪に団長は手を置き、優しく撫で髪を梳かす。

「サナラ。私達が出会った頃にした約束を覚えているかい？」

俺が君と一緒にいよう。

団長とサナラが会って間もない頃、団長がサナラにそう言った。

その後、今に至るまで。まるで本当の兄か父親のように、団長を慕うサナラが忘れて  
いる訳がない。

泣いたまま頷くサナラに、団長は真剣な表情を浮かべ。

「それを一度でも私が破った頃があったかい？」

そう、サナラに問いかけ。サナラは首を振る。

「これからも私は約束は守る。サナラを一人にはしない。だから戻ってきた時には、  
笑顔で迎えてくれ。私はサナラの実顔を見るのが好きなんだ」

「うぐっ……うえ……絶対に……絶対に」

「ああ絶対に戻る」

団長はそう言い笑みを浮かべる。

時間はもうない。他の団員達にも、二三言葉を交わしていき。

間違いでなければ、最後の話し相手として。団長は私の前に立ってくれました。

「ソラス……」

彼が私を呼び、私を見つめる。

そんな彼を私も見つめる。

相変わらず。優しい目をした人だ。

同時に、誰よりも強い意志を灯す目をしている人でもある。

これと決めたことを、やり通すことが出来る強い人だ。

敵わないと思う。彼という存在の前には、私や他の皆を含めても、隔絶した。どうしようもない壁があるように思える。

だから私に言える事はせいぜい。

「どうか」無事で……」

そんなありきたりな言葉だった。

「……………」

沈黙が私達に流れる。

もつと言いたいことはたくさんあるのに、言葉にできない。

時間がない。あれこれ言う資格も、はつきり言つて私にあるかどうか。

色々と考えていると。

視界に映る彼が当然大きくなったと認識出来たのを最後に。

私はしばらく思考を取り戻すことが出来なくなった。

端的に何が起きかと言うと、私は彼に抱き締められていた。

何が起きたか理解できなくて呆然とし。

うわあああああ！と思ひながら。手に触れる事は多々あったけど、背中越しに感じ



る彼の腕やら、彼の鎧の感觸やら。鼻いっばいに広がる彼の匂いに興奮して。

一瞬にして熱くなる頭に、理性的なソラスさんはどこかへと消え去り。

これ幸いにと、私も彼の背に腕を回したりして。

彼から伝わる振動に、ハツとして冷静さを取り戻す。

「団長……」

少し背を伸ばせば、唇に届きそうな距離にいる彼を見ると。

彼は他の人達にそうしてたように、笑みを浮かべている。

けど、全身に彼を感じることで分かることがあった。

……彼は震えていた。

恐怖を押し殺して、不安を悟られないように。

誰にでも安堵をさせてしまう笑みの裏側で。

彼は確かに、恐怖で体を震わせていた。

考えるまでもなく当然の事だった。

言い出しつぺだとしても、いくら強い強いと周囲が認めたって。

たった一人で戦場に残って、魔神や神獣と戦わないといけないのだから。怖いに決

まっているんだ。

けれど、彼は誰一人として、その恐怖を打ち明けようとしなかった。

誰にも心配かけさせまいと、笑みを浮かべていた。  
ああ……なんだ。

魔神降臨して以降。彼とはやれ格だとか、壁だとかを感じて、一線引いていましたが、そんなことをしていた自分がなんだか馬鹿馬鹿しく思えてきた。

彼は確かに凄い。彼以上の才覚を持った人間を、今まで見たことがない。

赤の団团长、人道の英雄。誰にでも手を差し伸べるお人好し。その他様々な、彼を讃える肩書きがあるが。それ以前に彼は人だ。

人並みに喜ぶし、人並みに恐怖する。

そこは、私と何も変わらない。変わるわけではない。

まったく……私は今まで何を勘違いしてきたのやら。

「ソラス。私が戻らなかつたら。君が、次の赤の団团长として皆を導いてくれ」

普段よりもずつと、近くに聞こえる彼の声に。頬が高揚で赤くなっているのを、私は自覚しながら。今一度、浮ついた気持ちではなく。

心を落ち着かせ。

赤の団の占星術師。

团长を星と共に導く占星術師ソラスとして、彼を強くギュツと抱き締める。

「嫌ですよ」

「えっ?」

シヨックを受けたような顔を浮かべる彼に、私はおかしいやら嬉しいやら。自然に笑みを浮かべて見せ。

「団長は相手を全部ぶちのめすのでしよう? だったら、次の団長何て、気にする必要ないじゃないですか。でも安心してください! こっちはこっちで包囲を突破して、戦局が落ち着いたら、すぐに団長を助けに向かいますよ!」

そう、彼に宣言してやった。

「……………ふっ」

彼は沈黙の後に笑みを。たぶん私と同じく、おかしくて嬉して。そんな、とても自然な笑みを浮かべ。彼は私の背に回していた腕を放す。

ああん。もうちよつとそのまま、抱き締めあつたままでも良かったのに。

「ああぜひとも私を助けてくれ。けど、うっかり全部倒してしまつたら、無駄足になるかもしれないね」

本当にそうなるかどうかは……星に尋ねるまでもない。

団長ならやつてのける。そうになるに決まつている。

「そうなつたら……………ふふっ、皆でお酒を飲みましょう!」

「それはいいアイデアだね。なら、ここで皆を待つとするよ」

最後に、私と彼は視線を躲す。

出会った時から変わらない。前髪に隠されているけれど。

優しい、そして強い意志を宿す目だ。

私が信頼する、大好きな目だ。

団長が剣を引き抜き、数歩歩いて剣を構える。

眼前には先行部隊であろう魔物達の姿が見えた。

その背後には、ロープを身に纏い、鋭い爪を生やした右手を伸ばす。そんな悪しき巨大な敵の存在がいる。

「戦闘開始！皆、必ず生きて再会を！」

引き留めなくなる足が、彼の号令で止まり。

尾を引くのを感じながらも、私達は団長を置いて、包囲網を突破を開始した。

破滅の力を巡って、魔王軍幹部達と物質界中で戦ったあの時。

私……羨ましいなあとか思っちゃったりしました。

まだ千年戦争とすら名付けられていない。

物質界の命運を、一度は決定的に決した私達の戦いとは違って。

あの時は、魔王と戦うことを決めた皆が。

王子君と王国軍が絶対に来ると、信じて戦って来ていましたからね。

ふと、私達もああいう風に戦えてたらなあと思ったりしました。

……あの人が、英雄王がどういう気持ちで、滅びゆく物質界を見ていたのかは。私には分かりませんが。

きつと、あの時の決戦を英雄王が見ていたのなら。

私と同じように、羨ましく思ったかもしれません。

## E18 断絶する世界

「エターナルスター!!」

今まで感じていた団長への壁が消えた事によるものか。

ただ単にやけくそか。

何にせよ、私の中で一つ壁を打ち破った気がする。

星天召喚の儀を解いた後、徐々に星の力が落ちていく私の弱点を解消する。

以前から考えだけは頭に浮かべていた技を、土壇場で実践してみせる。

理由は一刻でも早く包囲網を突破して、団長と合流する為です。

一回の戦闘ごとにいちいち星天召喚の儀をする間も惜しい。

「弾けろ!」

立ちふさがる魔神や魔物達へ、威力を落とすことなく。

短時間に何度も星をぶつけて叩きつけて差し上げ。

「包囲が薄くなっています。まもなく突破できるでしょう!」

「本当ですか影の射手!? だったら、アトナテスやっちゃいなさい! アンブローズも出

し惜しみ無しで！」

「おうよー！」

「はあいー！」

「私も援護しますよー！」

サナラの地脈の力を受けた。アトナテスの魔竜から放たれたダークブレスと、アンブローズのブルームペタルが周辺敵を一掃し。

「はあああつ!!」

焼け焦げたフードを脱ぎ捨てた姿はさながら二足歩行する猿。

魔神グシオンの猛攻を寸で回避し続けたトゥアンの戦斧が、魔神の肉体に食らいつく。グシオンはトゥアンの一撃に断末魔を上げますが、例のごとく。ゲートを通して得た魔力で。グシオンは即座に復活しようとする。

「封印もお手慣れてきましたねえ！」

そこをアンブローズが杖を魔神ごと地面に叩きつけながら封印を施し、復活の遅延をした後。

団長と別れて半日。ようやく、私達は包囲網を突破に成功しました。

そして生き残っていた別動隊と連絡を取り合い、拠点へ現状報告。そして駐屯地を設立してとドタバタと動き回り。

「よし団長の所へ急ぐぞ！」

「んっ……！」

「私も行きます！」

「おじさま私も！私も！」

そして、気持ちは痛いほど分かりますが、逸る気持ちそのままに。

飛び出そうとする人達を。アンブローズや影の射手と協力して、無理矢理休息を取らせる。回復魔法で怪我を治せても、体力や魔力はそう容易くはいかない。万全にするべきでしょう。

「見殺しにする気か!？」

「ソラスちゃん酷いです!!」

「する訳がないでしょう!!私達が助けに行つて全滅したら、何のために団長が残ったんですか!？」

そんな口論が発生しながらも。

私自身、行けるならすぐにでも行きたかったですが。

半日。

といつても、生存している別動隊への連絡やら駐屯地の設立。治療と団長を助けに行ぐための準備をしなければならぬので。それよりもっと短い休息を取った後。



私達は救援隊を編成し、団長の搜索を始めました。

団長と別れて、丸一日。

万が一は、責任は負うつもりではありませんが。

最悪は考えないようしておきました。

「……これは、なんという」

ヒュオオオオウと、風が吹く。

まるで、もうそれしかこの場には残されていないと、伝えるかのように。

「周辺に注意しつつ、団長を探しましょう」

再度包围されても一点突破できるよう、散らばらず団体行動をします。

けれども一時間、二時間と歩き続けてもまったく敵の姿が見当たらない。

「本当に無限の軍隊はいない……ってことかな」

「その無限みたいな軍隊ぶつ倒せたなら、そういうことだろうよユーージェン」

アトナテスがユーージェンの頭をポンポンとしながら、アトナテスは少し寂し気に遠い

目をしました。

それにして団長が言った通り。

無限を彷彿させる軍はいても、無限そのものな軍はいないということでしょう。

でも、だとしても……。

「一体どんな戦い方をしたらあこうなるんでしょうねえ……」

アンブローズが紫色の土を拾いあげ、ぽつりと眩き。

アンブローズが分からなかったら、もう誰にも分かりませんよ。私がそう返すと。

「あらあ、ソラスちゃんに褒められちゃいましたあ」

「そんなつもりはありません」

唇を尖らせてながら、どうやったらこうなるのやらと改めて周囲を見渡す。

私達が戦っている背で時折。轟音が鳴り響いていたことから、相当の激戦を繰り広げられていることは、想像に難くなかったのですが。

地を抉り取ったような跡や、おそらく神獣のものであろう、牙やら羽根やら鱗といった残骸があちこちに散乱し。魔神も手当たり次第に止めを刺しては、緊急時ゆえに雑に封印を施したせいも、明確に魔神の魔力の影響を受け。土が紫色に変色した土地も箇所もあつた。

一切の遠慮なく、団長が全力出した結果でしょうか。

本当に、凄まじいとしか表現することの出来ない。元々は青々としていた平原だったはずの荒野が広がっていた。

そしてさらに奇怪なことに、道中魔物や天使達を見かけることがありましたが。

残虐な性格を持つ魔物や、神にしか従わず。意思や心を持たないとされる天使達。

それどころか、私達よりも遙かに巨軀な体を持つ神獣までもが。

私達というよりも。例えるならば人という存在を見て。

体をぶるぶると振る舞わせ、歯をガチガチと鳴らしながら。

四肢を動かすには不十分なボロボロの体を無理やり動かしてでも、少しでも逃げ出そうというする姿がありました。

こいつらは、団長を追い詰めた敵！

そんな考えは、なくはなかった。

けれど……追撃して止めを刺そうと思えなくなる有様に、私達は彼らを無視して団長探しを続けます。

そして、先ほどから私達の足音と、風の音しか聞こえなくて。

最悪なイメージがますます色濃くなっていく。

これほどの戦いの跡を残しておきながら、嫌でも戦っていると言う轟音を散々鳴らしておきながら。さつきから戦闘音がまるでない。

つまり、私達が包囲を突破して。

こうやって戻ってまでの間に、決着がついたということですが。殲滅か、死によって。

「団長どこですかあ!？」

周囲の戦場痕から考えるに。

おそらく、最後まで団長が戦っていたであろう場所に私達はたどり着く。

そして私達は声を張り上げて団長を探します。

けれど……返事がない。

「手分けして、探しましょう」

遭遇戦になり。再び包囲されようものなら、各個撃破され今度こそ全滅するかもしれない。そんなリスクを承知してでも、私達は分散して搜索にあたる。

団長が見つかるなら、見つかったもいい。

けれども、団長は見つからない。

まさかまさかと絶望が私達に這い寄ってくる。

「団長は？団長はいましたか？」

分散した人達が帰ってきては問いかけ。

その度、ふるふると首を振って返ってくる返事に心が冷えていく。

それが二度三度と繰り返し。

「……………」

影の射手が首を振る。

影の射手ですら見つけれられないとなると、いよいよ込み上げてくるものが抑えられな

なくなってくる。

「……………」

皆から私に視線が降り注ぐ。

もっと早く救助に駆けつけるべきだ。みたいな非難する視線ではありません。むしろ、縫るような視線です。

……分かっていきます。私のするべきことが。

ただ、確かめるのが怖かったです。

「星よ……」

天球儀を掲げ。空よりも高くにある星の位置、動きから尋ねる。

団長、かの巨星はいったい何処に。

「……………」

星が何も囁かない。

今までなら団長という存在の大きさ故に、目を瞑っても星が囁き、すぐにでも団長の居場所を星は導いてくれた。

けれど、星は囁かない。

焦りで何かを見落とした。それとも何か別の原因が。

占星術師の基礎の基礎、星をよく見て観察する。

……そこまで遡っても分からない。  
巨星は見つからない。

「あつ……ああ……」

膝からすとんと、力が抜け落ちる。

両肩に一緒にいてあげるべきだったという後悔と、彼を失ったという絶望が重くのしかかり。そして、彼と過ごした日々が蘇る。

何も実績のない私の言葉を信じてくれたあの瞬間。

子供のようにはいしゃいで笑い、誰よりも大人びた顔つきで戦う後ろ姿。

二人でじつと、夜天に浮かぶ星々を眺めた時間を。

そして私はふと思い出す。

思えば彼は、占星術師としてよりも。

一私くソラス>が何を思い、考えて発した言の葉の方を重視する人だったな。

そう思い至ったその時、崩れ落ちそうになった寸前の膝に力が戻り。

「アトナテス！ トウアンでもアンブローズでもいいです！ 酒！ お酒はありますか!？」

私の発言に、一同目を丸くする。

さっきの反応から一転して、何言っただこいつ。みたいな目です。

何も事情が分からなかったら私もそうしていたでしょう。

「あ？酒なら、どうせアンブローズが隠し持つてるだろ」

「こいつは千年モノを体のどこかにしまい込んでるはずだ」

「何で知ってるんですかあ!？」

アトナテスとトウアンの証言を聞き。

両腕を抱えながら後ずさるアンブローズを捕まえ。

上中下。パンパンパンと探し求める物を手探りし、女体に相応しくないビンの感触を

捉えそのままひったくる。

「あーん。あたしの秘蔵のお酒があ……」

後ろから嘆く声が聞こえましたが、知った事か。

私が知っている彼なら。

間違はなくそこにいて、待っているはずだから。

タツタツタツと駆ける。鼓動がどんどん高鳴る。

不安と期待がごちゃまぜになった感情が、吐息と共に零れ落ちる。

記憶に間違いなければこの辺りのはず。

きよろきよろと視線を動かし。

魔物でも魔神でも、天使でも神獣でもない。

長年愛用していた形見の剣は歪に折れ曲がり。鎧は修復不可の領域まで破損し。

回復魔法はかけたのだろうけど、一度は開いたのだろう風穴から飛び出した血で、肌と服が赤く染まった。

弱い。けれども……確かに呼吸により体を上下させながら、岩壁に背を預け座り込む。たった一人の、人の存在を見つけ。視界がにじみ出し、頬が高揚した。

結局の所、彼は宣言通りうっかり全部の敵を倒しきって。

皆を待つと言った。私達は別れた直後の場所まで戻ってきたようだ。

「団長！」

私の声に反応してくれた団長が、ゆっくりと顔を上げてふつと笑みを浮かべる。

生きていた。生きていた！

よし、いの一歩に団長に抱き着いてやると決め。

全力で足を動かして彼の胸に飛び込む。

「……おっと」

「ああ団長！生きて……」

昨日嗅いだ団長の香りが鼻孔をくすぐる。彼の胸元から感じる温もりが、彼の生を改めて伝えてくれる。

……ああ生きていた。

安堵と喜びが溢れ出す。本当に、今度こそはもう駄目だと思つたばかりだったから。



しばらくこうして抱き着いていようと思つていたが。

「「団長！」」

「皆も、無事だったか……よかった」

やれふにっとした感触やら、むちっとした感触。鎧の堅い感触まである。

私の背中から追加で団長に抱き着く者達によつて押しつぶされる。

ついでに、私と団長の間にあつた感動的な雰囲気まで押し流される。

「ちよつと！どうしてこんなに迫いつくのが早いですか!?!」

抗議の声に、背に乗つかかっている者達は首を傾げて。

その代表として、サナラが答える。

「だって、ソラスちゃんが意味ありげに走り出したんですから。団長がいると思いま

すよ」

ああ、そういう。ゆ、優秀過ぎるのも考え物ですね。

さて。

「団長。お待たせしました。お酒です」

団長はズタボロの怪我人だけど、一口だけならいいでしょう。

団長立つてのお願いなのだから。

手渡したお酒を団長は受け取ると、ぐいっつと瓶を傾け滴り落ちるお酒を大口を広げて

迎え。

「美味しい。けど、こんな美味しい酒は皆で飲まないと勿体ないね」

いつも通り、人を安堵させる魔法がかけられている笑みを浮かべた。

その後、駐屯地に戻った私達は。その知らせを受けて安堵と困惑を浮かべる。

「いきなり魔物達と天使達が各々のゲートを通って撤退した。ですか？」

「はい、他の場所を守っていた団員達も同じ報告をしています」

「一体どういう……」

あの尽きぬと思わせるような軍勢は、誰もが物質界に止めを刺すべく投入した物だと思っていたのに。唐突に帰ったと聞けば、それはそれで不安にもなる。

「団長に恐れをなしたんですよ！」

サナラがそう調子のいいことを言う。と言いたいところですが。

魔神と神獣相手に一人獅子奮迅の活躍をして、それらに畏怖させた姿を見た後とあつてはそう思いたくもなる。そして、そういう英雄的な話は、誰が発信源だとか関係なく。例え言うなど命令を出したところで、伝え広がり。

あつという間に。

回復魔法をかけられながら、担架で運びこまれている重傷人の団長を見て。

普通は怪我して大丈夫かと声をかけるような所を。

「団長！」

「団長！」

「団長！」

赤の団の団員のみならず。この災厄の被害者までもが団長と掛け声をしている。

最後の最期まで抵抗を続け、赤の団の救援に間に合ったものの国が滅びた者達。

王に、国に、あげくは神に裏切られ、命からがら助け出された者。

何もかも分からずに、ただ恐怖から逃げ出した者。

それらすべてが、物質界の未曾有の災厄に絶望し。

その災厄をたった一人で払いのけてしまった。目で見る事が出来ない神や国でもない。目に見える形で、確かにそこにいる。団長に希望を見ている。

いいえ、希望を渴望しているのでしょうか。

周囲の熱気に、どこか薄ら寒くなる物を感じる。この熱気、いわばエネルギーが団長に向けられているうちは、まだいい方かもしれない。もし他の人に敵意という形で向いたとしたら……。

周囲から目を背ける様に、担架で運ばれている団長に目を向け。かの両軍団はなぜ引いたのかと問いかける。

「赤の団と、中央の強国を殲滅出来るまでの戦力を出し尽くしてしまった。だいたい  
が……他に意図があるかもしれない」

ああ……良かった。

団長は熱気にあてられるようなこともなければ。大怪我しても冷静です。  
その冷たさは今は心地が良い。

「他の意図というと、別の攻撃目標が出来たとかですかね」

「……………」

「団長？」

「……………もし私の考え通りなら。天使達を指揮していた神様か、魔物を指揮する魔王は  
………そうとう性格の悪い為人をしているのだろうね」

話し終えるとクツクツクツと団長があまり見せる事のない類の笑み。

嘲笑を団長は浮かべる。

自分の考え通りなら、神か魔王は性格が悪い、ですか。

……この人はどこまで見えているのだろう。

魔王軍と天界軍が一度各々のゲートへ撤退したこともあり、団長が大怪我しているこ  
ともあり。

駐屯地からすぐさま赤の団の拠点へと、団長を運び込みます。

そして――。

「絶対安静です!!」

目立つのを避ける為か、普段は声量が小さい影の射手が大きく声を張り上げ。

団長はビクリと肩を震わせませす。

そんな大声で言わなくてもいいじゃないかと、団長は目で影の射手に訴えますが、それ以上にキツと目を鋭くする影の射手に団長は項垂れます。

こう牽制しないと、団長は仕事を始めてしまいそうでしたので、仕方ありませんね。今もベッドにはいるものの、上半身は起き上がっており、団長はすぐにも立ち上がりそうです。

「団長あなた少しは、死にかけのボロ雑巾だった自覚を持ってください! いいですわね!」

影の射手の物言いに……きつと団長に母親がいた頃もそうしてのだろうか。叱られてシヨボンとした顔を浮かべる。まあ無茶した代償なので、諦めてください。

「団長が動けるようになるまでに、物質界中が落ち着いている今一度。各地の情報をかき集めてきますので静養なさるように」

こうして、影の射手が寢室から退出していきました。

「何を言ってるんだ団長!!」

「安静にしろって言われたの知ってるんですよ団長!? このこの!」

「あいたたた」

ユーージェンとサナラに団長が叩かれている。

叩かれていると言っても、その可愛らしいお手でポカポカと殴ると評するに相応しい物だが。サナラはもちろん。ユーージェンも団長には、母である影の射手の盟友として敬意を払っている。アトナテスとは違って、団長にこうして反抗するのは珍しい。けど理由が理由がだけに仕方ない。

影の射手とアンブローズが出て行った直後。

サナラとユーージェンを団長は呼ぶと、二人に向かつて。

「二人で執務室にある書類を取ってきてくれないかな?」

そうお使いを頼んだ。

お使いそのものは頼まれた所で、二人が団長に怒るようなことはないが。お使いの内容が仕事がしたいから書類取ってきてととなったら、こうなるのは仕方ない。

二人とも団長が心配で、ゆっくり休んでいて欲しいのです。

「ごめんごめん。すまなかつた」

「反省して休んでくださいね! おやすみなさい団長!」

「同じようなことでまた呼び出したら母様に言いつけるからな！失礼しました！」  
てててと早足で去っていく二人に。

「サナラとユージエンに振られたよ……」

割と本気で悲しそうな表情を浮かべながら言うから、この人は本当に面白い。  
次に来たのはあの二人組です。

「おおアトナテス、それにトウアン。二人に頼みガハア!？」

怪我人相手に拳骨を喰らわすとはさすがはトウアン容赦なし。

ですが、今の団長にはいい薬でしょう。

団長は理由をつけてベットから抜け出そうとしていましたが、もう二人に行動を予想  
されていると悟り。諦めて、もそもそとベットに潜りこむようにしたようです。

「サナラとユージエンから話を聞いた。あたしらが聞くと思ったか？」

「ま、今回は味方できねえって事だ団長よ」

ふんつと鼻を鳴らすトウアンと、からからと笑うアトナテスに。

やっぱり駄目か、と声を団長は漏らす。

……団長がこうも仕事をしたがるのは、やっぱり落ち着かないからでしょう。  
耳を外の喧騒に意識すると、聞こえてくる。

「出てきてください団長様あー！」

「お助けくださいいいい！」

「団長お！」

そんな救いを求める声だ。

もし影の射手が、担架から抜け出した団長を見つけて捕まえなければ。団長はその声に応え。トレードマークでもある裏地が白の派手な赤いマントを、傷を隠すように纏いながら、避難民の前に出ようとしていた。

影の射手の言葉を借りれば、少し前まで死にかけのボロ雑巾であったにも関わらずにです。

こういう性質がから、団長は英雄だなんだと囃し立てられる原因なのでしょう。それに本人が気が付いていないみたいですが。

「心配なのは分かるが。外の連中は俺達でなんとかするから。お前は休め団長」

「それともあたしただけじゃ不安か団長？」

「……分かった。任せたよ二人とも。けど何か起きる前には。必ず私に相談してくれ」

頷く二人に、団長もまたこくりと頷き返す。

今度こそ休む。とはいかなかった。

「団長ちゃん。剣持ってきましたよお」



ガチャガチャと音を鳴らしながらアンブローズがやってきた。

魔法で浮かべている箱の中には、各地の滅びた国々から名目は保管という形で集めていた。神々が加護を与えたという武器がこれでもかと収納されていた。

もはや一種の宝物庫です。宝の持ち主が、いつかは手放す気満々で使う気も見せびらかす気もまるでない欠点を除けば。

「こらアンブローズ。団長は安静が必要ですよ」

「いや、武器がないのは死活問題だ。手に持つくらいなら皆も許してくれるさ」

「そうですそうです」

「むう。そう言われた反論できない。」

武器がないと不安になるのは、剣士としては当然でしょう。納得はしましょう。

けれど、それはそれとして。さりげなく団長にボディタッチしようと接近しているアンブローズを引き剥がす。させませんよ？

「それにしても……代わりの剣か」

「……団長」

机の上に置いてある、折れ曲がった剣を団長は見つめる。その視線はやはり悲しげだ。

今回の戦いで壊れた団長の武具は鎧と剣。

鎧自体は団長がまだまだ背丈が伸びる年頃というのもあって、何度も新しい物を用意していましたが。

剣。団長が使っていた剣は、魔剣だとか神剣とか言われるような特別な物ではありません。

ごく普通に鍛造された。探せばほとんどそっくりな物が見つかりそうな、ありふれた剣ではありますが、団長にとって折れた剣はただの剣ではありません。

その剣は、団長のお父様が使っていた剣です。そして団長が赤の団団長を名乗る以前から。今の今までずっと使ってきた大切な剣だったのです。

その想いを継ぐにふさわしい剣となると。

やはり相応の等級を持つ武器が相応しいでしょう。

「これとかどうですか？あたし一番のおすすめ神剣エクスカリバー！」

「うーん……私が使うには仰々しいのでは？」

「団長がそれ言ったら誰も使えませんよ……ではこれ魔剣テイルフィング」

「……合わないな」

「いつそのこと武器を変えますか名槍ロン！」

「扱えない訳ではないが、やっぱり剣が良いな」

武器を手にとってはいこれじゃないと団長は首を振るう。

普通。王家でもない人間が魔剣だ神剣だとか、神々から加護を受けた武具というものを握る機会はない。剣士なら目にするだけでも垂涎もの、自らの物に出来るなら喜んで罪を犯すなんて話もあるだとか。

けれども、団長はそもそもそういった特別な武具の類に興味がないように見える。武器が必要で、質のいい武具がたまたまそこにあるからという理由だけで、こうして手に取っているだけで。うん。乗り気じゃないというのが一番しつくりきます。

まあでもそれは困るので、ふと以前団長が珍しく興味を示した魔剣の存在を、記憶の書庫から思い出す。

確か答えを知るだとか、応えるだとか言う意味持つ剣だったはず。

「団長、あの剣はどうですか？北方の姫様が持っていた」

「……魔剣フラガラツハか」

そうそうそんな名前でしたね。

名前と同時に剣の姿を思い出し、箱の中身を見てみますが。箱の中にはフラガラツハはありませんでした。

「あれは正当な保持者が持っている剣だからね。貸せと言って貸してくれるものじゃないだろう」

「でもあの姫様は、今の今ままで魔剣を使っていないじゃないですか」

「どうせ使わないのならあ貸せて言ってみたらどうですか団長ちゃん？」

「……それは最後の手段にしたいな」

そんなやりとりをしつつ。最終的に団長の傍に置かれたのは、アンブローズが団長が根負けするまで推し続けた神剣エクスカリバーでした。

一応は剣を選び終えて。団長はようやく、枕に頭を預ける気になったようで今は小さな寝息を立てています。それを私はベットの傍に置いた椅子に座って、特等席で眺めます。

私が何をしているのかと聞かれた答えは単純で、彼が脱走しないようお目付け役です。こういったの役は、普段なら取り合いになるのが常ですが、何故か今回は誰が何と言うことなく。私とその役になりました。珍しいこともあるものだ。

「ふ、ふ、ふ……」

さりげなく、彼の頭を撫でてみる。私やサナラの髪とは違って、少しごわごわした感触は星が教えてくれない未知の感覚です。

彼の髪先を指でクルクルと弄ってみたり、頬を突いてみたりと好き勝手やっているとさすがに彼が身じろぎしたので、止めて。

おつといけないと、あやす様に私は再び彼の頭を撫で。

「ゆっくり……休んでくださいね団長」

そう私は声をかけた。

外の喧噪からも察することが出来ませんが。

……物質界は今度こそ、終わりました。

今回の物質界中に起きた大規模な侵略による被害は、今まで大概でしたがあまりにも大きすぎました。

文化や歴史、物語。そして人が今まで蓄えてきた知識……文明そのものがこの侵略により破壊されつくされ。

もう、魔王軍と天界軍に抵抗できるだけの国は、中央の強国しかない。

物質界にはかつて、中央の強国以外にもいくつも大国があり。国力に差はあれども多くの国があった。あったのです。

ですがもう一国しか。たった一国しか、戦える国がないのです。

赤の団の共同戦線という同盟を結んでいるトウアンが支配する国みたいな、まだ無事な国はあるにはありますが。それらの国には中央の強国のように、継続的に戦えるだけの力はありません。

ましてや……物質界中からどんどん集まってくる。避難民達を抱え養う力はない。

中央の強国ですらないでしょう。

赤の団も……当然ありません。

そして、時期も悪い。収穫は終え、これから寒さに震え耐え忍ぶ季節が来ます。生産することも難しく、物質界中が似たような状況です。どれだけ金銀財宝を積み上げた所で、売る人がいなければ補給することも難しいでしょう。

今拠点にある食糧庫を全て解放して節制したところで、一週間も持つかどうか。

そして一週間経ったら……？

……考えるだけで恐ろしい。

けど、もう目を背けることが出来ない所まで問題は差し迫っている。

彼がこの問題にどう対処するかは分からない。

分からないが、どんな対処を彼が選ぶとしても、私は彼の決断を信じることに決めている。

だから、今だけは外の喧噪なんて気にせず、彼がゆっくり休める様に願っている。

英雄だって人です。休息が必要なからです。

「団長……悪い知らせです」

……もつとも、彼がゆっくりと休むことが出来たのはたった一日だけでした。

翌日の早朝、影の射手が荘厳な箱を運ぶ中央の強国の將軍と、中央の強国の王の血筋を引くまだ男の子。私が団長と出会った頃の、団長と同じぐらいの年の子を引き連れ、

団長の寝室にやってきました。

「我が国の首都は魔王軍および天界軍により陥落。我が王は……魔神及び神獣相手に引くことなく、勇猛に指揮し、民を守り。戦場にて命数使い果てました」

団長の目が見開き、一瞬黒い頭髮が白く染まったように見えた。

この日、物質界に戦える国が消え失せた。

どれだけ英雄王が華々しい戦果を挙げても、どれだけ英雄王が英雄譚の一節を増したとしても、物質界は一度滅びた。

それは消すことの出来ない事実。

その証左のように、千年戦争前後で人の歴史は分断されました。

徹底的な破壊により。

当時を生き延びることに必死だった私達には、千年戦争前の知識を残すことが出来なかつたのです。

そして、本当ならこの命までもが、想像しうる混乱の果て失うはずでした。

……あの人が立ち上がることを選ばなかつたら。そうなっていたでしょう。

## E19 星の下で密会を

王は亡くなる直前。鎧を、物質界の守護者。英雄足り得る力と、人々を束ね導く王の力を併せ持つ。『英雄王』の下へ、何を賭してでも届けよと、おっしゃっていました。僕には……それを名乗る資格がありません。赤の団団長あなたこそ、この鎧を継ぐに相応しいです。

中央の強国。その最後の一粒種。

故郷を襲われ、尊敬する王も、愛してくれていた両親も奪われ。

魔物への恐怖で立ち上がることなく、芽生え開花することを拒み。

自ら種のまま閉じこもった。

「……………」

ですが、団長はただこくりと頷き返し。

アイギスの鎧は団長の寝室に残された。

どうかお姿おお！



団長様あああ！

私達を見捨てないでえ！

影の射手が早急に。団長の住まい件本部に人の波を押し返す警備隊を編成して、寢室に団長に近い者しか入らないよう配慮してくれましたが。それでもやつぱり声が聞こえる。昨日より声が大きくなったからでしょう。

早朝の来訪者に引き寄せられるかのように、中央の強国の人々。そして、私達がかつてかの国に保護をお願いしていた避難民達が、続々と赤の団の拠点にやってくる。

拠点はとつくに定員を超えています。超えています。それでも人はやってくる。主権領域と思われないよう外壁を作つてなかつたので、際は限りありません。

「アトナテス、トウアン。引き続き避難民達が暴徒化しないよう慎重に対処してくれ」アトナテス、トウアンは昨日に引き続き避難民達が爆発する前に、鎮圧に当たり。

「サナラ、ユージエン。協力者を集い、拠点周辺にバリケードを設置。この人の波に誘われ魔物達が襲撃して来ても不思議じゃない。出来る限り時間稼ぎ出来るよう準備してくれ」

サナラ、ユージエンは戦えないが協力したい。そんな人達とせつせと周辺からバリケードの材料をかき集めて、形を整えて設置していく。これを一時的な外壁にするみたいですが。外壁が出来ても、そこからまた人が溢れ出しそうになり、外壁がどんどん広

がっているみたいです。

「アンブローズ。避難民達を可能な限り同じ地域、種族でまとめておいてくれ。今ここで余計な火種を産む可能性は減らしておきたい」

アンブローズは避難民達を確認して回り、拠点内に仮の区を設け。団長の指示通り北やら南やらの生まれ、獣人、エルフと種族と分けていく。

全員が全員。赤の団のようにすんなりと他国家や他種族受け入れるものではないからです。

「……………」

そして、ある程度指示を終えた彼は寝室の窓から見える喧噪をボーと見ていた。

まあそれは傍から見たらと言う奴で、実際は色んな事を考えているのでしょう。この人はそういう人です。

「……………」

私は私で、書類仕事くらいはしました。ただ素晴らしく有能な占星術師たる私は、あつという間に終わらせてしまい。手持ち無沙汰になってしまったので。そういうえば読み終えてなかった魔術本を引っ張りだして読書に勤しみます。

いやあ、先日から激戦続きだったからでしょう。

生きていけると言うのは素晴らしい。こうして文字を通して新しい知識や。何を考え、

何を思い書いたのか考える事が出来るのだから。

ペラペラと私が本を捲る音だけが、寝室に鳴り響く。

外の喧噪なんて気にしな—い。

好きな人と同じ部屋に居るだけで、五感の全てはその人に意識が傾く物です。

強いて言うなら、独りでに輝くアイギスの鎧が気になるくらいでしょう。

あれ、神が生み出した神器と言う貴重な品みたいですからね。

「そ—うい—え—ば—……」

「はい？」

声をかけられ、返事を返す。

いつの間にやら彼は私を見ていた。

喧噪を見るのも飽きてきたのでしょうか。というか鬼気迫った表情を浮かべる人々よ

りも。ここに居る可愛らしい占星術師を見つめる方が、彼にとっても有意義だとは思

いませんか？

いいえ、有意義なのです。

せっかくなので、にこりととびっきりの笑顔を彼に見せる。

「……ふっ」

すると、お返しとばかりに、彼も笑みを一つ。

口角の動き、頬の動き。揺れる眼差し。どれ一つとつても、彼の所作には惹かれる。出会った頃から変わらない。人の鼓動を勝手に早くする笑みです。

ずるいです。顔が赤くなってしまふじやないですか。

ですが、今日は負けじと照れずに、視線を外さず笑みを保ち続けることにした。外何か気にせず、どうぞ私を見てください。

「こういうのは怪我の功名と言うのかな。久しぶりにゆつくりしているなって」

「団長は普段から無茶しすぎなんですよ。二日前のなんて本当に……」

「……ソラスや皆に悪かったと思ってるよ」

「それで反省してくれたら助かるんですけどね」

「いやあー」

「褒めてないですよ!」

言つて、また私達は笑う。

たぶんこう言つた所で彼は無茶する悪癖は治さないだろう。

彼は何でもできる。そう人に思わせ、信頼させるほどの才覚を持っている。

けどやつぱり見てて、放っておけない人でもあります。

「でも、ソラスが私を見つけてくれて嬉しかったよ。ありがとう」

そしてこういうことをしれつと言つてくる人だ。赤の団団長の肩書が、物質界におい

てどれだけ重たくなっても。この人は軽々と、人に向けてぺこりと頭を下げる。

ちよつとドギマギしつつ。彼の服の袖口を捕まえる。

「私は団長を追いかけて捕まえるのは得意ですからね」

彼は袖口を掴む私の手を払うことはせず。

寧ろ空いて手を私の手に重ね。

「……そうだったねソラス」

彼は顔を赤くしながら、そういった気がした。

外の喧噪は時間が経つにつれ、大きくなっていく。

誰もが昨日を悲しみ、明日を不安に思い、今を絶望していた。

冷静に考えるまでもなく。終わりはそこかしこにあり、そこにあそこに、ここにもあった。そんな中で、絶望だらけの物質界の、とある建物の一室で私と彼は。

「戦っていて思ったが、天使達にもやっぱ感情はあると思うよ」

「神の意にしか従わない。意志無き兵器ではないと？」

「うん。私は天使達が、その姿を人と大差なく生み出されたのには、人との共存する道があるからだ。そう思いたいな」

「……まあ少なくとも、恐怖する感情はあると思いますよ」

議論をしたり。

「この前団長の伝記を書くんだって人がいましたよ」

「ええ……」

「何でそんなにドン引きしてるんですか？」

「いやあ……私の伝記だろう？ 散々なこと書かれて終わる気がするよ」

「どう考えてもそうはならないでしょうけど……あんならいつそサナラに頼んでみたらどうですか？ あの子なら、団長の話を面白おかしく盛りに入れてくれるでしょうし」

「そうか。サナラにならお願いしようかな」

雑談をしたり。

「……………」

「……………」

「二人で一つの本を読むのって結構難しいですね」

「だね」

身を寄せ合いながら本を読んだり。

外がどんな状況になっているか分かっているのに。なんとも穏やかな時間が流れていく。

昨日からそうでしたが、いつもなら何かと理由をつけて団長の下へやってくる人達が

まったく来ない。

私と彼が二人きりになるよう気を使ってる。とは思わえないです。彼と彼女らにそんな性格を持ち合わせていません。ただ忙しいだけでしよう。

ではなんで私がここにおいて文句を言いに来ないのか。と言われたら、きつと真面目な私ならまーたすぐ無茶し始める彼を、寝室に押し留める事が出来ると思っっているのでしょう。

やれやれ。そうだとしたら、あの子達は大きな勘違いをしていると言わざる負えません。

日が落ちて、夜が来る。

彼は再び窓から外を眺めていました。

けれど、ふとポツリとこう言います。

「ソラス、星を見に行かないか？」

彼は安静をしないとイケない身。出歩くなんて論外です。

せめて、今日一日最後まで寝室で休むべきでしょう。

ですが、その誘いに私は迷うことなく。

「ええ、行きましょう团长」

本をぱたんと閉じて、立ち上がる。

私だって、たまには馬鹿をしたいんです。

赤の団の本部の裏口から私と彼は外へ出る。けれど、出てすぐ巡回する団員もいて彼を求める避難民達が本部を囲んでいる。

一旦引いた方がと思つたが、ずんずんと意にも返さず歩を進める彼を信じて、私もその後ろに付いていく。すると不思議なことに、団員も避難民達も団長がすぐそばを通つたと言うのにまったく気が付かず、そのまま素通りできた。

「何かしたんですか？」

「うん。影の射手直伝の隠密化の魔法だよ」

「わっ」

彼が指をサツと動かす合図とともに、今まさに目の前にいた彼の姿が消え。

すぐに姿を現す。

「団長以前からいつの間にかいなくなることありましたが、それも今のですか？」

「いいや、影の射手と出会う前はそういう技術を使っていたんだ。ほら」

言うのと彼は足を激しく上下させるが、タタタみたいな足踏みする音はまるでしない。

はえーと感心したが、その使い道が外で遊ぶ為なのだからこの人はどうしようもない

な。なんだか笑ってしまう。



「隠密と一言で言っても、多種多様さ。技術によって体得する者もいれば、魔法で実現する者。そういう在り方という者もいる。求める結果は一つでも、それに至るまでの過程は無数であつてもいいはずさ」

けどそれに飽き足らず、別の方法もあっさりと身に付けてしまう。この人凄いなあと素直に何度も思う。たぶん、先日私が占星術を使つても彼を見つける事が出来なかつたのは、複数の隠密技術を併用した結果なのでしょう。

それなら……この人は、きつと本気で逃げ隠れようとしたら、誰にも見つける事が出来ないでしょう。

今の立場も団員も避難民達も、全てを捨てて逃げ出し。この人の力なら、魔神が来ても神獣が来ても、その力と知識を持つて、例え一人でも生き延びる事は難なくできるのでしょう。

「……寒いだろうな」

「そうでしょうね……」

けれど、悲し気な眼で夜風に震える避難民達を眺めながら歩く彼には、きつと逃げ出すことは出来ない。

きのみきのまま逃げ出した避難民達は、もう肌寒く感じる夜空の下。

屋根もない、藁すらない。冷たい地べたに横になり、目尻から涙を流しながら震えて

いる。

問題は住処だけでなく食糧もです。

避難民達に彼は食事を出す様に指示を出しました。けれど、それは一食とすら呼べない程にごく少量です。今の赤の団の備蓄では、物質界中から集まってくる避難民達全員に食事を提供しつつ、数日持たせようとしてもその程度の食事が限度でした。それでも彼は全員に食事を提供することを徹底しました。不平不満を抱いた避難民達が暴徒にならないように。

助けて。助けて。そんな声が絶えず聞こえる人の森を抜け、小高い丘を目指す。

何度が団長と星を見に行った事がある所です。

やっぱり星を見るなら高く、阻害する建築物がなく静かな所が良いです。

「団長知っていますか？」

道中、私は占星術の知識を彼に披露する。

せっかく二人きりなんです。彼はどうかは知りませんが。

これはデート。なんです！

気が滅入るしか選択肢のない暗い話題を続けるよりは、やっぱり楽しいお話をしたいじゃないですか。

「星に偶然というものがほとんどないなら、人と人の出会いは全て星の導きの下ほと

んど必然なのかな」

「そういう説もありますね」

「私は皆との出会いは必然であつてほしいんだけどなあ」

「ならそれでいいんじゃないですか？」

「……………」

「なつ何ですか何ですか？まるで詐欺師を見るみたいな目をして!？」

「ふつ……………」

「笑いましたね団長！いいですか。占星術というのは星を見て解釈する者の意志にこそ極意があるのですよ！」

それにしても、今日は本当に彼とよく話が出来た日だ。

とつても、幸せで楽しいです。

だから、もっと幸せになれるよう……手を繋げないかな。

もつと前から、さりげなく手を掴めないかと機会を疑つていましたが。彼には隙という隙がない。どうせなら、彼から握つてくれないかなと、少し期待はしていましたが。彼は触れてこない。ならばその気にさせよう。

えいつ。

彼の腕にそこそこあると自負してる胸を押し当ててみたり、いつまでも握つてこない

悪い手に自慢のお尻や太ももをかすめさせる。

こんなことをしてたら、さすがの彼も少しは狼さんになることでしょう。なつてくれないと、さすがに凹む。

何度か繰り返していると。

「ソラス」

真剣なトーンの声に、さすがに調子に乗り過ぎたかと離れようとしたが。

「……………あ」

彼が手を握ってくれた。

……温かいな。彼の手は。

丘までたどり着き、星を見るに絶好の場所に腰を下ろす。

手は繋いだまま。

「今日は星が良く見える」

「そうですねえ……」

私は彼と、星をただ何も考えず眺める。

彼は望んだ。私と星を見に行くことを。

占星術の知識も技も、今は彼は求めてない。

だからただ夜空に浮かぶ星々の輝きと、このロマンティックな雰囲気は私の底から楽しむことにした。

何となく五芒星を探してみたり。

星々を繋げて夜空に絵を描いてみたり。

スツと線を描く流れ星を見て、何気ない願いを心の内に願ってみたりする。

ええ分かってますとも。

……こんな幸せなことをしてる時ではありません。

彼にはやらないといけないことがあります。

私が彼を独占する訳にはいかない。

けど、いいじゃないですか。

私は幸せ。きっと彼も幸せ。それで物質界全部丸ごと幸せ。

それでいいじゃないですか。

「ソラス。私は……王になるよ」

いいじゃないですか、もう少しだけ……もう少しだけ。

ねだる様に、彼の手を強く握る。

けれど、それだけで振り向いて立ち止まってくれような彼じゃない。

「もう、打開策は考えておいた」

この人は、本当に凄い。

私が彼の立場だったら、自らをこんな状況まで追い込んだ環境を恨み。周囲を拒絶し、きつと閉じこもっていたはず。

それでも彼は策があると言う。

今日と明日を生き残る計画を立てていると言う。

ああやっぱり彼が、彼こそが物質界を束ねる。『英雄王』と呼ばれるに相応しい人物と、そう思わせる。

「けど」

そう言い、彼は空いてる手で自らの顔を握り潰しかねない力で掴む。

咄嗟に止めさせようとしたが、彼から発せられる気迫に押され動けない。

「それをしたら私は、私の理想を壊してしまう。それが分かっているながら、それしか生き残る術がないんだ……」

彼の理想は魔物という脅威に対して、ありとあらゆる人達に区別なく手を差し伸べ、救済する事。最近では魔物だけでなく、魔神やら天使やらその他諸々たくさんついでいますが。彼はその理想を守り続ける為に、何度も何度も無茶をしてきた。

それがついに壊れる。壊れてしまう。

私もその理想の為の戦いを彼と共にしてきました。それを取り消さないといけない

ことに、寂しさは感じます。けれど、続く団長の言葉に少し戸惑います。

「……私はねソラス。常々思っている。魔王を倒して物質界に平和を取り戻し。10年、20年経った頃。ふと当時戦った仲間達が何となく集まって。バカ騒ぎして……酒を飲みながら当時は振り返って話すんだ。

……辛いことがたくさんあった、悲しいこともたくさんあった……」

彼は未来を語る。ずっとずっと大切にしてきた思いを始めて吐露するように。

一言一言に、彼の願いを私は感じた。

「それでも楽しかった……」

それは実にいい未来です。そして、そんな光景をすんなりと思い浮かべることが出来る。それぞれの事情によって姿がほとんど変わらない人がちらほらいますが。10年20年経ったらユーージェンちゃんも、ダークエルフラしくシユつと背が伸びてることでしょう。順当に成長したサナラも、すっかり大人の女性になってることでしょう。

私は……ふふっ子供がいたりなんてして。そして私の愛しい未来の旦那様は……。まったくどうなってることでしょう。今でも凄すぎるくらいなのに。

「私は皆には、この戦いの日々はそういうものであつてほしい……後ろめたい暗いものなんかいらぬ。あつてはいけない」

妄想をそこそこに、下がっていく彼の頭を見つめる。

「けど今のまま私が王になったら、きつと……」

彼の言う策は、生き残るといふ大義の為に、きつと皆の笑顔を奪うのでしよう。

ですが彼の事だ。その策を実行した上で王になっても、その大いなる才をもつて物質界を支え。魔王を討伐する偉大なる王。『英雄王』になるに違いない。

ただ、その王の道の入り口には、避けようがない血だまりがあり。彼が血だまりを超えて先を進んでも、血は点々と彼の歩いた道の跡を赤く染めるのでしよう。

それが分かつていながら、彼は歩かざる負えない。

この世界を守る為に。

……今まで彼は頑張ってきた。

今でも計り知れないほど苦悩している。

そして、後悔すると分かっている、本心ではきつと嫌だとしても王になろうとしている。

それでは……あんまりじゃないですか。

私は彼の手を放し、彼の真正面に立ち。

そして――。

「空を見よー！」

ズビシッと指先を空に指します。



うんうん。自信が多少ついてきた為か、以前よりは格好よく言える様になったと思います。

「……………」

それにしても、どうしてこの人はこんなにすんなり私の言う通りにしちゃうんですしよ  
うか。

クスリと笑いながら、その無防備な頭に腕を回して。

彼をぎゅつと抱き寄せる。

普段見上げてばかりな頭がすぐ下にあると言うのは、不思議であり心地もよくもあり。何とも言えない温かさを感じ。鼓動が高鳴り体が火照っていく。

「……………それなら逃げてもいいじゃないですか。団長なら誰にも見つけれられないように逃げられそうですし」

本心から私はそう思う。私の占星術でも居場所を掴めない。影の射手ですら彼を探し出すことが出来なかった。全力で逃げ隠れることを彼が選んだなら、たぶんそれが出来るし、その後も彼の事だ。文字通り一人でも生きていける。そんな確信があります。

「周囲は『英雄王』になれなれと言うかもしれないかもしれませんが。今の物質界で最も強大な勢力の長だからという理由で、団長がそれにならないといけない。そんな義務は私はないと思います」

「けど、私がやらないと皆が！」

抱き締めながら本心ついでに、考えを告げてみると、彼が私の両肩を掴んで、離れてしまった。

残念、もう少し抱き締めていたかったんですけどね。

「……………」

ああ本当に強い目をした人だ。人に敵わないと思わせる目だ。でも私はしっかりと彼を見つめ返す。

目を逸らして自信なさげに言う言の葉に、一体誰が聞き届けるでしょう。堂々として、胸を張りなさい。

クールでミステリアス。それでいてちよつとお茶目。

そんな私が私である為に、両手を胸の前で組んで言葉を紡ぐ。

「だったら、やるとしても、ちゃんとやるつて。皆を背負つてやる。平和な世界をお前達に見せてやる！そう言つてくれる人が『英雄王』になつてくれるなら、私もこの身全て使つて。貴方を支えたい。助けてあげたいのです……団長」

「……………」

こういった言葉が、こういった期待が、彼をどこまでも追い詰め伸し掛かる負担となり。彼を苦しめ続けるのでしょうか。

しかし、勘違いしないで貰いたい。

逃げてもいいじゃないかというのは真剣です。ただそれに付け加えるなら。胸の前で組んでいた手をほどき、彼の胸元にぴよんと飛びつく。

見下ろすのもいいですが、見上げて。真剣な顔をしている彼を、視界一杯に映すのもいいものです。彼もちゃんと、手を私の背に回してくれているのが尚グツドです。

「ああでも、もし逃げるなら私も連れてってくださいよ。どこまでもお供しますから」  
「……………！」

彼は目を丸くして。

そして今までの決心とは違う類の決心を、内に秘めたような気がしました。

ええ分かってますよ。実質告白みたいなものですよ、ええ。

顔を赤くしてもいいじゃないですか。そしてあんまり見ないでください。

「……………ありがとう。ソラス」

彼も照れているのか顔を赤くしている。もっと、私に見せてください。

「……………！」

彼が顔が近いなあと思ったのは、私が近づいているからなのか。彼が近づいて来ているからだろうか。

私は瞼を閉じる。誰に教わったかそういうものだと思ったからです。

そして、そのまま唇に訪れるだろう甘美な感觸を待ち。

「団長お！どこですか!!？」

私と団長の間を引き裂くような声に、閉じた瞼を上げた。

「……………」

ああ……目と鼻の先に団長の顔がある。

もう少し近付けば触れるだろうという距離のまま私と団長は。

「ふっ……………」

「ふふふ……………」

何だかおかしくなって、同時に吹き出すように笑ってしまった。

まったくどこの名も無き警備兵さんですか。私と団長のロマンティックでコケティッシュな雰囲気を邪魔した人は。

まあ悪いのは、寢室から抜け出した団長と、止めなかった私なんですけどね。

「行こうソラス。皆が待つてる」

「はいっ」

笑うのもそこそこに、私は団長の手を取り立ち上がり。本部へと戻ることにした。

そして、案の定私と団長はこっぴどく怒られ。

とぼとぼと自室に戻り、ベットに身を投げる。

「……………」

なんとなく指先を唇に当て。つい先ほど、すぐ近くにあった団長の顔を思い出す。あれ、私にキスしようとしたんですよね？

キスと言うのは恋人同士がするものであつて。

キスしようとしたということは、私と恋人になりたい。

つまり、好きつてことですよね？

そういうこと、ですよね？

「うああああわあああああー！」

勿体ないことをしたあああああああ！

もうあれこれ全部無視して最後までやっちゃつても良かったじゃないか！

明日から今まで以上に忙しくなるのだから、しばらくはこんな展開訪れないのでは!?

顔を目一杯枕に押し付けて、足をバタつかせる。こうでもしないと感情の整理がとてもじやないが追い付けない。

けど、最後は幸せいっぱいな気持ちで私は眠りに落ちた。

その日、物質界の人々は皆同じ夢を見ました。

とある変哲もない。ただ身寄りのない人達が集まっている広場に、不似合いなまでに

神々しい輝きを放つ水色の結晶が現れ。そこに、これまた絢爛華麗な白い剣が突き刺さっている。

ただそれだけの夢。

ですが、人々は誰もが確信しました。

この剣は然るべき人物に引き抜かれることを望んでいる。と。

ですが、私にはそれが……。

神ですら、あの人を王にせんが為に、圧をかけるのか。

そう、思ってしまったね。

## E 2 0 私達の千年戦争

目が覚めて、夢の内容に神託を受けたような感覚を覚え、それを薄ら寒いと感じながらも。

内容が内容なだけに急いで身支度をして、団長の寝室へ向かう。

ただの夢と切り捨てるには、あまりにも今の物質界の状況が出来過ぎていたからです。

……それにしても。今日は外が静かです。つい二日三日前は、昼夜問わず絶えず喧噪が聞こえていたというのに。

「これは……?」

団長の寝室まで通じる廊下は、すでに幾人もの団員によって埋められていました。

その中で、見慣れた亜麻色の頭を見つける。

「トウアンこの人だかりは? 外の見回りしてるはずの人もいますが?」

「知らん。それよりソラスも見たかあの剣が刺さった夢?」

「まさかトウアンも?」

「あたし含めて、ここに居る奴らは全員同じ夢を見たみたいだ」

全員が同じ夢を見た。

あの結晶に突き刺さった剣の夢を。

偶然の一致。などという言葉じゃ片づけられるはずがありません。もつと超越的な力が働いていると、そう思ってしまう。

「ソラス、トウアンおはようございます」

後ろから落ち着いた声をかけられ振り返ると、影の射手とユージエンがいました。

私とトウアンは二人に挨拶を返し、今朝見た夢に付いて話すと。

「私とユージエンも同じ夢を見ました。そして、例の広場。赤の団こここの広場に向かいました。……ありましたよ。結晶に突き刺さった剣が、夢の通りに」

私は言葉を失う。

こんなことが本当にあるのか。こんな神話のような出来事が今を生きる私達の目の前に。

「二先ず団長の所へ行くか」

トウアンが歩き出したのを見て、慌てて私もその後ろを追う。トウアンと一緒だったからか廊下にはいた団員達は道を譲ってくれたので、大したトラブルもなく寝室の前へたどり着きますが。アンブローズとサナラがその扉の前で立ち塞がっていました。

「団長からアトナテス以外入るなって言っていました！」



私達を見つけると同時に、サナラが先手打つようにそう言い。

「お着換え中なので待つてくださいいねえ」

アンブローズが理由を添えました。

お着換え、そして団長の寝室に置かれてある物は……。

私達は誰かにそう言われた訳でもないのに、団員達に毅然とした態度で整列するよう指示を飛ばしその時を待つ。この時も、大してトラブルもありませんでしたし、亡国の王族達も赤の団には多く所属していましたので、それらしい隊列になるよう細かな指示も滞りなくできました。

そして、ドアからノック音が鳴る。

ガチャリと開かれた扉から出た、その存在に私達は戦慄するかのようにはさまれた。

それは千年前。名も残されていない男に、女神アイギスが送ったはずの贈り物。

けれど、それを身に纏う男の姿を見て。この白と青を基調とした鎧は、今この時の為に用意されていたのだと確信させるほど、身に纏う主を引き立て。

白い鎧とは対となるの黒髪の、長い前髪から覗かせる強い力の瞳は、男を尋常ならざる存在であると、人々に認めさせる。

瞳が動き、私達を一瞥する。

私達はそれが当然であるように男に跪く。

そうした人の中には亡国の王族の人もいて、エルフや獣人、果てには不死者もいました。

身分も種族も関係はなく、男を跪くに足る人間であると認識していた。

男は歩を運ぶ。向かう先は決まっている。

白い鎧にいつも男が身に着けている、裏地が白の赤いマントが靡く。

その後ろを……視線を感じる。

男の後から部屋から出てきたアトナテスが、早く行けと視線を送っています。

いいんですか？ 視線で問い返すと、視線の数が増えて慌てて立ち上がり後ろを追いかける。

いいんだ。舞い上がりそうになる自信を自制しながら歩き。

男は広場にたどり着く。

すでに広場にいた人々は、誰もが男の姿を目にいれようとはしましたが、徹底して音を出そうとしなかった。鎧が掠れる音と男の足から鳴る音に、稀代の音楽家が奏でる演奏を聴き心酔するかのようになり、人々は黙り込み。そして、男を直に視界にとらえると同時に、人々は何と恐れ多いことをしたのかと思っただのか、ささつと平伏し手を祈る様に組み、男に道を譲る。

人の海を割って出来た道の先

そして、男は剣の元へたどり着く。

「……………」

男は剣の柄を掴み。

「……………」

一瞬、驚いたように目を見開いた後。少し微笑むと。  
するりと剣を引き抜いた。

その瞬間、空から強烈な光が差し込み。

光と共に一人の女性が空より舞い降りる。

その存在もまた、男とは別種の意味で圧される存在でした。

長い金色に輝く髪と、全てを受け入れるかのようなふくよかな四肢。

そして何よりも目立つ背から生えた、六枚の白い翼。

天使や神獣とは比較するまでもない超越的な存在。

はるか昔より、人々が神と呼ぶに相応しい存在が男の前に現れた。

「初めまして人の子達よ、私はアイギス」

音楽的なまでの流麗な声に、天使や神獣達による被害を目にして、神は敵だという考えが霧散していく。いえ一目見た時から、女神アイギスを人の敵とすら認識させなかつた。

「魔王による魔物の襲撃。そして我が姉、女神ケラウノスによる神獣の襲撃。これにより物質界と人の子達が深く傷ついているにも関わらず。女神ケラウノスの結界により、今ままで手を差し伸べる事が出来なかったことを、天界より人の子達を見守る神々に代わり謝罪します」

神が人に謝罪する。なんとも珍妙な響きです。

ですが、ここで少しばかり思う。

今更謝罪を受けても何もかも遅すぎる。

深く傷ついた。たしかにそうです。

ですが、より正確に言うなら、もう物質界そのものが死に体が正しい。ここから復興し繁栄する術が今の私達にはないのです。

「そして人の子の王よ。これを」

それを察してか、アイギス様は……何ですかアレ。

例えるとしてたら、魔力とか気力だとかさういった次元ではない。

純粹な力そのもののような物を三つ、空に浮かべました。

「これは我々神々でしか生み出すことの出来ない。あらゆる奇跡を實現させる力。古来より我々は神の楔と呼んでいる物です。これを人の子の王、あなたに授けましょう」

神の楔。

奇跡を実現させる為の神でしか生み出せない力の塊、触媒とでも言うべきでしょうか。

あらゆる奇跡を起こせると、神が太鼓判を押すような物を男は手に入れた。

男は神の楔を見つめた後、アイギス様を瞳に捉え口を開く。

「ではさつそく、これを二つ使いますがよろしいでしょうか」

「ええ構いませんよ」

あらゆる奇跡。魔王とケラウノス様を消す……はさすがに出来ないでしょう。魔王はどうかは知りませんが、ケラウノス様はアイギス様でも容易に対処できる存在でないことは、今の今まで手を差し伸べる事が出来なかつたという言葉から想像できます。

ならば、男は何に使うのでしょうか。その神の力を……。

男は引き抜いた剣を両手に握り、アイギス様に宣誓するように額に剣を当てました。

「物質界は、そこで生きる人々は今まさに滅びを目の前にしています。根本は魔物達による物質界の侵略が原因ではありませんが、人がその最後の命を絶つとしたら、それは魔物の手ではなく。人と人が、限られた物資の奪い合いの果て、共倒れによつて滅び絶たれることでしょうか」

男は何度も危惧していた。そして幾度もその才をもつて回避しようと抗い続けていた。

人と人が争う。

その理由に正義や信念、怒りや憎しみといった物ではなく。

ただただ単純に、生きていく為に必要な食糧の奪い合いによる争いを。

男は一度、奪い合いを封殺するための策を考えていた。

奪い合いが起きる条件。奪おうとする相手<sup>人</sup>を、この世から消し去ることによって、残

された人で一先ず生き延びようと。

「私はその滅びを拒絶します」

ただ男はあまりにも優しい。

切り捨てるべきを切り捨てられない。

その手に掴める全てを、男は救おうと願う。

「女神アイギスよ。私は願う」

男は一呼吸し、女神に祈る。

「我ら人の子に、一時の飢えを凌げるだけの食糧をお与えください」

アイギス様は沈黙する。

「我ら人の子に、夜風の寒さを凌ぐ家と、外敵から身を守る壁をお与えください」

アイギス様は沈黙し続ける。

「この二つを人が手にした時。我ら人の子は今度こそ、自らの力で立つて歩き。この

手で未来を切り拓きましょう」

劍を下ろし、男はアイギス様を強く射貫くように見つめ。

アイギス様は男に微笑みながら頷いた。

そして、アイギス様は両手に神の楔を掲げ、パリンと砕いた。

その瞬間光が。物質界全てを包むかのように強烈な光が放たれる。

「……凄い」

目を開き、たった一瞬で様変わりした周囲を見て私はそう言葉を零す。

私達を囲うように立派な城壁が、ここにいる全ての人が優に住めることが出来そうな兵舎と家が、穀倉らしき建物からは香りのよい麦の匂いがする。

そしてなにより、背に聳え立つ城はなんと雄大か。

「これでよろしいですか？人の子の王よ」

アイギス様に男は頷き。

最後にこれをと、アイギス様は男に差し出す。

「これは我が名を冠する盾です。劍、盾、鎧。この三種の神器が貴方を主と認め、魔を打ち払う加護を与える事でしょう」

男は盾を右手で受け取ると、劍と鎧の輝きがより一層増す。

アイギスの神器。三位一体の神器。

「人の子の王よ。来るべき時が訪れるまで、私は貴方の中で待ちましよう。そして人の子達よ諦めてはなりません。あなたがたの力を合わせて、魔物を打ち破つてゆくのです」

アイギス様は光の粒子となり、男と一つになるかのように重なる。

神と一体、文字通り神聖不可侵なる存在に男はなった。

「……………」

人々は言葉を発さない。

男の言葉を待っているのでしょうか。

始まりを告げる言葉を。

男は剣を天高く掲げた。

「私の名は、アルトリウス」

静かで力強い、言霊となつてその名は響き渡り人々は記憶する。

「古来。千年も前から物質界は魔物から侵略を受けてきた、だが今はその侵略は物質界全土に及び。数多あつたはずの国々を滅ぼしつくすまで苛烈となった。天界からの刺客達も、物質界に住まう人という歴史そのものを滅せんとしている。それにも関わらず、私達人は。ただ一度として物質界に生きる者達として結束することなく。かの者達に敗北した」



敗北した。物質界は人の歴史は終わってしまった。神の手により終わりは加速されたが、同時に神の手によって復活することがなければ、本当ならば終わっていた。

その事実は、誰にも取り消すことは出来ない。

「だがそれでも私達は今だ滅びず。女神アイギスの御業により、再び立ち上がる力を手に入れた。故に私達は、物質界を生きる者達は。今度こそ、魔と天に抗う為にも結束しなければならぬ。二度とかの者達に敗北しないように。故郷を取り戻す為に。大切な存在を守る為に。絶望と諦観を未来ある子供達に与えない為に」

そして、神の手により再び戦う力を手にしました。

戦う意志は、まだ私達の心の中にある。

「私はここに……私の国。王国の建国の宣言する！」

男は宣言する、男の国の建国を。

「そして王国はありとあらゆる。人に仇なす存在に宣戦布告をする！」

男は宣言する、王となり魔と天の存在に抗うことを。

「さあ……皆。私達の『千年戦争』を始めよう」

男は宣言する。

『千年戦争』

その始まりを。

「我らが王国！我らが王！英雄王万歳！」

誰かがそう吠える。

そして、その呼び名が男には相応しいと、同調した者達が次々と叫ぶ。

「我らが王国！英雄王！」

「我らが王！英雄王！」

「英雄王万歳！」

声が怒濤のように広まっていく。人々は認めたと、男を英雄王足りえる存在であると。

男はその声に領き承認した。英雄王となることを。

英雄王アルトリウス。私達は神話の中に生きていた。

未だに声が響いていますが、声出しだけでなくやることはやらなければいけない。

目の前を歩く団長……いえ、英雄王はただ無言で城内を歩き回り構造を把握している。

そうこの人は英雄王。

正真正銘、謙遜なくこの人は物質界で一番偉い人になってしまった。

こと武力においても、今王国にいる誰もが臣下や国民となることを願うカリスマも、

神と一体となったので宗教的な立ち位置でも、英雄王の権力を切り崩すのは不可能でしょう。

どう、英雄王に声をかけたらいいのでしょうか。

……今まで通りではやっぱりいけないですよ。

普段傍にいる私達が、つい昨日あんなにたくさん話をしていた私が。

英雄王にどうやって声をかけたらいいのかと悩んでいると。

英雄王はふと立ち止まり。

「アトナテスよ」

どこか芝居がかったように、アトナテスに声をかける。

「な、なんだ？」

突然名前を呼ばれ。

らしくなく緊張で身構えているアトナテスに英雄王は……嗚呼知っている。いつも見ている。たくさん見てきた。普段通りの優しい、温かみのある笑みを浮かべると。

「私は六文字」

アトナテスを指差し。

「お前は五文字」

そして指をグッと立て英雄王は自身に向け。

「勝った！」

この人は……本当にまったくこの人は……。

「ふふっ」

「ははっ」

たぶん意味が分かっているのは私とアトナテスぐらいですよ、英雄王。

見てください。皆顔をほかんとしているじゃないですか。

「負けたままってのは気に入らねえな。こいつで勝負するか」

「ああ、せっかくの新しい武器だ。試してみたくて仕方ない」

そのやり取りで、皆が悟ります。

団長から、英雄王になった。

名が変わり、立場も権力も、そして責任も今までの比ではないでしょう。

けれど、彼は彼だ。

それは何も変わらない。

変わらない。それがとても嬉しいのです、英雄王。

「あたしも混ぜろ」

指を鳴らしながらトウアンがそう言い。

「英雄王ちゃんが王様になったことですし、あたしも一層頑張らないといけません」

ねえ」

そうアンブローズが呟き。

「英雄王、よろしければ後でアイギス様とお話しできるか試してもよいですか？」  
影の射手は安堵したかのように微笑み。

「英雄王！アトナテスおじさま！トウアン姉さま！さつき見た訓練場に行きましよう」

ユージェンは興奮して。

「なんか、ほっとしましたねソラスちゃん」

サナラが目のふちにあつた雫を拭い。

「ええ……」

私はそう、サナラに返し。英雄王の後ろ姿を追いかけた。

何故英雄王は名を変えたのか。

と言われたら、王になる以上のドスの効いた名前の方がいいとか、ある程度長い方が箔が付きそうだと言う考えもあったのでしようけど。

あの人、そんなに悪くないのに。物質界が滅んだことに責任を感じていたでしようから。

やっぱり、一番の理由は王になるにあたっての……ケジメだと思えますよ。そして名前と言えば、千年戦争。

その意味はただ千年前からあつた戦いが今も続いているから。ではなく。

千年ものあつた戦いを今、私達によって勝敗を決し終結させる。

英雄王はそんな願いを込め、名付けたのだと思います。

## E 2 1 英傑

英雄王の下、王国が始まりました。

城と家と食料はある。だけどそれしかない。

なら、作るしかない。

城下町開発、農地開拓に加え。それらを適切に運用、管理する者達の抜擢。

またしばらくは現物でのやりとりが必要ですが、いずれは貨幣が必要になります。貨幣に意味を持たせる為にも流通等々の整備も必要。

また国としての秩序を維持する為にも法が必要。

宗教もアイギス様による奇跡により、生き延びることが出来たことを忘れないよう。王国の国教として定め、神殿作りも必要。

外敵を討つための軍の再編成も急務です。

他にも……他にも……ああああああ!!!

今までに比べたら豪勢になった執務室に、一時的に増設した机の上にある書類の山を見て、私は思わず気が狂いそうになる。

「ソラスちゃん。占星術師止めてえ、英雄王専属の政務官になりますかあ？」

「冗談に口を動かす前に、手を動かしてくださいよアンブローズ」

「はあい怖い怖い」

「……英雄王は、無理せず休んでくださいよ？」

「……………うん」

建国宣言してからの一週間。ほぼ休むことなく王としての務めを果たす為に、目の下に隈を浮かべながら英雄王は頷きます。そんな英雄王を見て、とりあえず休めと無理矢理。寢室のベットに投げ込んで抱き枕サナラを添えてみたりはしていましたが。気が付いたら英雄王は執務椅子に戻り、抱き枕は執務室に備え付けられたソファアの上でグウグウ。

英雄王が休まないと、こつちまで休めないんだぞ理論を掲げて休ませようとしても、結局英雄王は執務椅子に座る。なんなら縛ってみても、するりと抜け出して仕事する。

相変わらず、無茶する人です。

ですが、その無茶により。赤の団の運営をしていた経験があるとはいえ、それが国。いえ国Ⅱ物質界と言って差し支えがない現状。世界規模の労働に変わっても、英雄王はすんなりと国造りを進めていく。

本人はアンブローズという偉大な教師がいるからと謙遜していますが、そのアンブローズさえもあつと驚くような改善策を次々と上げていく。



既存の国家達にはなかった。他種族までまるごと含めて公平公正な税制と裁判の導入。そしてそれらを民衆に納得までさせる形まで昇華させるのは、他種族と軍として抱え込み、今まで何度も関わってきた英雄王でしか不可能でしょう。

また王国にいる子供達を国家の子として扱い、一定の年齢まで教育を施す。そんな長期的な計画まで打ち立てているようです。

「私達が生き残るには結束し、繁栄するしかない」

勿論ただ賛同された訳ではなく、英雄王の考えが理解できない人達がいるにはいましたが。英雄王は大概そう言い彼らを諭し。

それどころか、物質界の絶対君主である英雄王に意見具申してきた人達の中から、概と実力があると認め、臣下として抜擢するような器量も見せたりもしました。

「英雄王。北方の外壁より魔物と魔神を確認しました」

「ありがとう影の射手。ソラス、出兵の準備を」

「分かりました」

そしてどれだけ私達が今だ窮していても、敵はやってくる。アイギスの神器の身に纏う英雄王は王となっても陣頭に立ち、私達はその後が続く。

しかし英雄王になったことで、その権力を行使することで、戦場に変化がありました。

魔力を込められた斬撃が、デーモンを斬り裂く。まるで敵を討つという主の求めに、応えるかのように。

「……………」

北方の姫様が初めて振るった。魔剣フラガラツハの威力を目にして、驚きの表情を浮かべています。

かねてから神々が生み出した武具は、あつたが使つてこなかった。

歴史的な価値がある貴重品であり、国の象徴としての側面を持つから安直に使つてはいけないという風潮があつたからです。

ですが英雄王は、それらをもはや悪しき風潮として断じ。

「二度だけ命ずる。二度目はない」

武具の正当な保持者達を集め、釘を射す様に言つた後。

武具を持つ者達に、武具を戦場にて扱うよう命じました。

反応としてはやはり、反対する人達が多かったです。そうおいそれとしきたりを変えられる物かと、かつての王族達は英雄王に申し上げましたが。英雄王はこの件に関しては一切譲らず。そして容赦をしなかつた。

英雄王はいつか復興した時の為と、彼らに預けると言つてきた武具を、使わぬのならばと接收しました。二度目はないと言う宣言通り、訂正を聞かず時には力づくでも。

そして、改めて王国。英雄王の管理下に置かれた武具達は英雄王の宝物庫へ。ということはなく。剣が上手い。それだけの理由で英雄王は宝剣を授け。銃が上手い。それだけの理由で、元海賊であっても英雄王は魔銃を授け。武具を戦士達にばらまきました。

そして先の事もあり、武具を授けた者に危害を与えよう者がいたら。

英雄王の影。

影の射手は事前に証拠を握り英雄王に報告すると、英雄王は相応の罰を与えた。

権力を持ったらさつそく横暴になった。そう捉えられない行動でしたが。

英雄王は全員に一度は機会を与えた。ということもあり、それが私腹を肥やす意図もないということもあり。何より勝利という結果の前には消し去られます。

『英雄王の威光』

いつの間にもやら、英雄王が戦場に立つことによる事象はそう呼ばれるようになり。

英雄王曰く、実力は黒の輝きを持つという実力者たちが、強力な武具を扱うことによつて。

英雄王の威光は受けてしまうが。英雄王が立たない戦場では、武具を授けられるに相応しい戦果を挙げられるようになり。神獣や魔神の侵攻に、英雄王抜きでは多くの死傷者を出して、耐えるのがやつとだったと言うのに。神器を持つ者達の協力で、ごく少数

で撃退に成功できたという報告すら出てきました。

「もつと早く。この剣を私が振るっていたら、国も皆も失わずに済んだのかな……」

北方の姫が望郷の念に駆られ。

エメラルドグリーンの瞳を故郷があつた方へ向けながら、英雄王にそう問いかけます。

さすがにここは励まして上げる所では？私ですらそう思ったのに、英雄王はというと。

「至高の武具と、至高の臣下を持ったとしても。必要な時。立ち上がるべき者が立ち上がらなければ。何も変わりはない」

そう姫に言い捨て、英雄王はその場を後にしました。

フラガラツハの柄を強く握り、肩を震わせる姫に対して。

私もかける言葉が見つからず、静かに立ち去りました。

そして建国から一か月。瞬く間に王国は国としての基盤を固め。

英雄王率いる王国軍の反撃により、魔物達により陥落した地域を。人の生存圏を奪還していきます。先日の神々の武具を解禁したことにより、別動隊の戦力が大幅に増したこともあります。こちらにも大きな理由の一つでしょう。

英雄王のアイギス神器が光を纏い、神獣を斬り裂く。そして神獣はその巨軀の形を保つことが出来なくなり。神獣の中核、キラキラと輝く光の玉のような物となり、天界へと還ろうとしますが。英雄王はそのタイミングで魔術を発動させます。

空中に幾つもの魔導陣が現れ、そこから鎖が飛び出て光の玉を拘束します。

「封印完了だ」

今まで神獣と天使達は、封印できる魔神や魔物と違って、根本的に戦力を削る術が今までありませんでした。ですが、英雄王はアイギス様と一体化したことにより、神獣と天使を使役できる神の権能英雄王は体得したのか。神獣と天使達を封印する術を見つけて出しました。

「神獣達もこうして大人しくすれば可愛いもんだな」

「可愛くないですよアトナテスおじさま」

怪我をしたユーージェンを背負ったアトナテスが、斧槍で鎖で雁字搦めにされている神獣にツンツンしています。

「そんな風にツンツンしていいものじゃないでしょうアトナテス」

思わずそうツツコミをしました。

「アイギスの力の一端を使ってるから。そう容易く封印は解けないよソラス」

「アイギス様の力を……」

なら、大丈夫なんですかね？

「それよりこいつはどうする英雄王？」

トウアンが女の子を抱えながらやってくる。

傍から見たら女の子にしか見えない。

「……………」

ジツと英雄王はその子を見ると、女の子はヒツと小さな悲鳴を上げて身を震わせています。

やっぱり普通の、怯えた女の子にしか見えません。ですが何を隠そう、その子はい先ほどまで私達と敵対していた高位の天使です。英雄王の封印術により、天使としての力を封印され、封印直後。ここはどこですかと私達に問いかけるなど、記憶の混乱が見れましたが。物質界を侵略するためにやってきた天界軍の一人です。

……英雄王に、王国に、物質界にとっての敵です。

例えその本質が神の意志の代行者。神が使用する兵器だとしても、その実行者には恨みや罪があつても不思議ではありません。

そして罪には、しかるべき対処があります。

英雄王はどうするでしょう。

視線が集う中英雄王は溜息一つ出すと。

「……もう敵対はしないだろう。王国に受け入れよう」

「本気ですかあ英雄王ちゃん？」

「私には彼女がもう天使ではなく、普通の女の子にしか見えなくてね。そんな子を手にかけると言われても私は嫌だよアンブローズ」

「そう言われたらあ、あたし悪役になっちゃうじゃないですかあもうっ」

「サナラ、王国に戻ったらこの子の面倒を見てあげてくれ。今の難民区なら今更一人二人増えても変わらないだろうからね」

「はいっ！」

英雄王は敵だったとしても、無害であり窮しているなら平然と受け入れる。

甘いと言われるでしょう。けれどその誰であつても受け入れられる甘さが、何か問題があつても、英雄王がそう言うならと、誰でも矛を下ろす理由にもなつたりします。何故なら彼らも元を辿れば、英雄王により受け入れられた存在であつたからです。

建国から半年後、そろそろ芽吹きの時期に差し迫り。

アイギス様からの食糧も底が見えつつある。

けれど、日々を不安に思う人はなく、むしろ希望に満ちた表情で日々の務めをしています。

今や物質界唯一の大国である王国。

国外から出ると、今だ魔物達に蹂躪された大地が広がっています。

ですが裏を返せば、その大地全てが支配する者のいない白い地図なのです。

半年で、国としての体を整え未来へ続く道を拓き続ける。英雄王の才覚をもつてすれば、その白を英雄王の色で染め上げることも不可能ではない。誰もがそう信じていました。

だからこそ人々は奮戦し今日も今日とて、生存圏の奪還。

敵襲に備え。各地に砦の建設を。

そして砦や孤立した村、街などの危機に一早く駆けつけられるよう、王国の首都含め各地を繋ぐ街道の敷設と保守。物質界存続をかけた千年戦争を勝利するための布陣。文化圏を着実に作り上げていく。

しかし、ある日私達普段から英雄王の傍にいる者達は、臣下の人にこう言われるようになってきました。

「それは越権行為では？」

その言葉に、失念と同時に相応のショックを受ける。

王国は赤の団ではありません。かつてはなあなあでも良かったことが、今は通用しなくなる。特に王国の臣下として、英雄王より役割を与えられた人に。例えば私が英雄王の



為、王国の為と心から思ったとしても、ずけずけと自分の領分に。まったく立場も何も明確にされてない人が割り込んできて。好き放題しようとしてきたら、そりや面白くないに決まっています。

そして彼らは何も、保身から出た言葉ではなく。英雄王に託された役割を果たそうという使命感や誇りがあるからこそ出たのでしょう。だから反論できない。

「まあ王になるってことはこういうことなんだろうよ」

遠回りに執務室から出ていくよう催促され、手持ち無沙汰に物思いにふけていると。

アトナテス、ユージエン、サナラ、トウアンの四名がやってくる。アトナテスとトウアン兩名はこと戦時においては指揮官をしていますが、戦闘時でなければ、理由なく英雄王に会うには……という状況に今はなっており。

情報戦においては他の追従を許さない影の射手と、魔導だけでない幅広い知識を持ち。助言役であるアンブローズは例外で、私達は締め出しを受けていた。

「寂しくなりますね……」

サナラがそう呟き、私達は頷く。

もつとも、締め出しをくらった日から数日経たず。私達ユージエンを除いたいつもの六人が武器を持って、謁見の間へ来るよう英雄王に命令を受け。何だろうと思いつながら謁見の間の扉を開くと。整列した臣下達。それと玉座にはアイギスの神器を纏った英

雄王が座つていた。

「皆前へ」

英雄王の声音から厳かな雰囲気を悟り、緊張した面持ちで英雄王の前まで歩み跪く。英雄王は何をする気なのでしょう。謁見の間に来てくれと、とても軽い調子で言われ。簡単な事だろうと思ひ込み、事前説明をまったく受けていないままだったので混乱していました。

「面を上げよ」

そして、そう言われ顔を上げてみると。英雄王は玉座から立ち上がり、わざわざ階段から降りて私達の目の前に立っていました。王が公の場で玉座から動くというのは、褒められていないと言うのに。臣下達も少し騒めています。

「武器を」

その言葉に私達は自らの武具を英雄王に差し出し。英雄王は頷くと武具に手をかざします。

すると英雄王の背からアイギス様が現れる。

おお。そんな感嘆とした声が謁見の間に零れました。実に半年ぶりに顕現でした。そして、アイギス様の手と英雄の手が重なり合い、武具に光が包まれていきます。

「この光は女神アイギスより賜りし加護の光」

何度か見かける機会があった、神々が送った武器と同じような力が。私が愛用している武器、天球儀に明確な力が宿るのを感じました。突然のことで驚きましたが、これは報酬という事でしょうか。

「アイギスの加護を受けし武器を持つ者達。かの者達を私は『英傑』と呼ぶ」  
そして、英傑という称号を。

「今この瞬間をもつて、英傑の称号を持つ者は。私の王国において、私に次ぐ位を持つ者と心得よ」

……は？

私達。英傑と呼ばれることになった六名と、臣下達は皆ほかんと口をしていました。

案の定、意見具申を。せめて同じ臣下として扱うべきだという声もありましたが。

英雄王は決めた事だ。の一点張り。そのまま英傑以外は退出するよう命じる始末。

「あんなことを一方的に決めて良かったのですか英雄王!？」

優秀な英雄王とはいえども、王国の運営は臣下もいてこそです。その臣下達に聾瘡を買っうしかない人事に抗議しますが。

公の場でなくなつたとしてもいいだけに、玉座から立ち上がって。やれやれのびのびとストレッチしています。

「散々君達に特に支えてきてもらったのに以前から、立場だなんだのを明確にしな

かったのは私の落ち度だからね。いい機会だと思っただよ

「だからっていくら何でも急すぎますよ!？」

「だろうね。人事は慎重にするべきだ」

「分かっているなら何ですか!？」

私の問い掛けに英雄王は。

「まあ……その……」

言いにくそうに、頬をポリポリとかきながら。

「えっひいき?」

そう言うと、英雄王は顔を赤くする。

もうっ、そんな顔をされたら何も言い返すことが出来なくなるじゃないですか。

「英傑! いいですよ英雄王!」

「そうか! 気に入ってくれたか。ありがとう」

笑顔を浮かべるサナラに、英雄王も笑みを浮かべる。

「今までと変わらないってことか。ならそれがいいな」

「英雄王もちよつと皆さんと会えなくなっただけで、寂しそうにしましたからね」

トウアンと影の射手がそう言い。

「それにしても神の加護に、王の次に偉い地位か。相棒に乗って武器振ってただけだ

が、俺も偉くなったもんだな」

「まあアトナテスちゃんがるういことしなければあ自ずと、英雄王の判断が正しいと臣下の皆も分かってくれますよお」

「なんで俺だけ悪い事する前提何だよ!？」

アトナテスとアンブローズもそう言う。

「英傑」

私はそう言い、胸に刻む。

今までの功績が英雄王にとって大きい物だったんだという喜びと、その称号に相応しい働きをしようと決意を改める。少なくともアンブローズが言った通り。英雄王が私達をえこひいき。

英傑と定めたことを間違いでないと証明する程の活躍を。

「改めて、よろしく頼む英傑達よ」

私達は英傑となりました。

王国における立場が明確になり、権力も持ちました。

だからといって、英雄王がそうであったように私達も特に変わることなく。

強いて言うなら。私達は堂々と英雄王がいる執務室に、入り浸るようになったくらいです。

王国の基盤が盤石に整い。各地で開拓が進んでいく。

そして王国では戦場に立てない者達の為に、各地の開拓地へ疎開。移住計画が始まっています。

王城から離れたら、危険ではないか？いいえ、そうではありません。

むしろ、魔神や神獣達は積極的に英雄王を狙い。ゲートから現れたら一直線に、王城へ進軍を始めますので。王城付近は物質界の中枢にして最前線。物質界でもっとも戦火が激しい激戦区なのです。

ですので、やってくるとしても大半は雑多な魔物であり。救援を出したら王国軍が即座に駆けつけられる街道が繋がっている。所謂穀倉地帯だとか、産業都市。

戦場で戦えない者達が、戦場とは違う戦いをする居場所が必要でした。

そして、さっそく移住の募集をかけてみたら私達を想定を軽く上回る人数が集まりました。

「やっぱり、人間以外の他種族の方が多いですね」

「仕方ないさ。半年もよく我慢してくれたよ」

一般的な市民から元王族、エルフドワーフ獣人などなど種族を問わず集団での移住を望んでいます。名前の中には、種族で地区ごとに分けているのにわざわざ干渉に向か

い。差別や迫害を扇動するような言動をし、何度も諍いを起こした人物の名もありません。

「同じ国の一員として、同じ脅威に身を晒し、同じ食事をとっても全員が協調することはできないのですかね」

「いくら説得しても譲渡したとしても……どうやっても、折り合いがつかない。そういうこともある」

……英雄王の言葉に、亡くなったエルフの女王の言葉を思い出します。

「ほう、それは楽しみだ。同じ時を歩む人同士ですら、団結を維持し続けるなど不可能だと言うのにな」

今になって。もうちよつとエルフの女王とお話が出来たら、英雄王をもつと支えられるような多くの事を学べたかもしれないと後悔します。

けれど悲観ばかりしている訳ではありません。

少なくとも、王国に残って戦うことを選んでくれた人達は、種族の垣根を越えて共に戦ってくれるということなのですから。

移住計画が進んでいきます。

そろそろエルフ達の番といった所で、ちよつとした問題が起きました。

……ユーージェンは賢い子です。

自分ではどうしようもない相手を敵対するときに、誰を頼ればいいのかということを知っています。

「いやだ……」

影の射手とアトナテスが険しい表情をしながら、英雄王は背にしがみついているユーージェンに視線を送りながら、二人と向かい合っています。

「何度も説明しましたよユーージェン。今のあなたでは実力不足です」

影の射手の実力不足という言葉にユーージェンは唇を噛みしめます。ユーージェンは日々の鍛練を怠りませんですし、戦場に立てば英雄王の威光を受けないことにより、最後まで戦場に立ち続ける事もできます。

「……この前の魔神降臨でも危うい所があった。いつも俺達が助け出せるとは限らねえ」

ただ今のユーージェンの矢は魔神に届かない。そして影の射手曰く完全な影に至っていない為か被弾してしまい。そのたった一撃の被弾が即死にも繋がるのが魔神との戦いです。

だからこそ、母である影の射手も、アトナテスも機会があったらユーージェンを戦場から遠ざけるつもりだったようです。

そしてその機会が今。



エルフとダークエルフは古くから遺恨があるとされていますが、今回の移住する妖精郷のエルフ達は。英傑影の射手の娘だからではなく。幾度も人々を救う為、戦場で矢を放ってきたユーージェンならばと、ダークエルフであるユーージェン共に、移住してくれることを快諾してくれたようです。

「いやだと言ったらいやだ！そんなことを言う母様もアトナテスおじさまも嫌いだ！」

ですが、そのユーージェンが嫌だ嫌だと言って引こうとしません。

影の射手とアトナテスが目を合わせ、どうしようかのため息を吐き。英雄王を非難するような眼で訴えます。

普段の二人なら問答無用でユーージェンをエルフ達の元へ送り出しそうですが、ここでユーージェンを庇ったのが英雄王でした。そして、英雄王の立場はというとユーージェンの移住を反対する訳ではなく。かといって、二人に命じてユーージェンの移住を止めるようなこともしません。

まったくの中立。

ただ二人には実力行使ではなく、言葉によってユーージェンを納得させなくてはいけないとユーージェンの前に立ちました。

「平行線になりそうですね」

「そうだな」

状況を私と一緒に見守っていたトウアンが領きます。

私とトウアンも、ユージェンの移住には賛成しています。理由も影の射手とアトナテスと同じです。ただ、やっぱりユージェンと離れるとなると……寂しいという気持ちは当然あります。

それが母親である影の射手も、影の射手を除けばもつともユージェンと親交があったアトナテスがそう思わないことはないでしょう。英雄王もきつと……。

「ただ今のユージェンは王国の民で。我儘で英雄王を巻き込んでいる。国の民同士が言い争いしてるのに、英雄王がいつまでも動くつもりがないなら。そろそろあたしはあいつをぶん殴る」

「……あの、殴るって英雄王を？」

「あいつは殴らんと分かんからな」

でも、殴ったら駄目でしょうという顔を浮かべつつ。

トウアンと話をしていると、空気が張り付き始めているのがひしひしと感じ始め。ユージェンもさつきから泣きだしてしまってます。

「英雄王そろそろ……」

これ以上親子の問題で英雄王を束縛し、王国の政務に差し支えさせてはいけない。そ

んな考えをしたのか、折檻の一つでも飛びそうな所で。

英雄王は影の射手に手の平を前に出して、静止させます。

そして、ふうと一息吐き。ユーージェンの方へ振り替えると。英雄王は膝を曲げてユーージェンに視線を合わせ、ポケットからハンカチを取り出し、涙に濡れたユーージェンの顔を丁寧に拭いています。

「ユーージェン。二人の言う通り君は移住して、戦場から離れるべきだ」

「ど、どうしてですか英雄王!?!わ、私が英傑じゃないからですか!?!」

「違うよ」

ユーージェンの問い掛けに、英雄王は即座に違うと言います。

私達を英傑と定めた時。確かにユーージェンはいませんでした、それが英雄王がユーージェンだけをのけ者に行っているということではありません。

「ユーージェンは私達にとって、まだ守るべき存在だからだよ」

「それはっ英雄王も、母様と同じで私が実力不足だと言いたいんですか!?!」

「そうだ」

短く冷淡にも思える程に、英雄王はユーージェンに頷きます。

「今の君ではこの戦いを生き抜くことはできない。誰かを守ることもだ」

そして、ただただ事実をユーージェン突き付ける。

ですがそれは、心を突き刺す冷たいナイフ。ユーージェンの顔がくしゃりと歪みます。しかし、英雄王がそんなことが分からない程の情のない人ではありません。

さつとユーージェンを英雄王は抱き締め、頭をぼんぼんと撫でてあげ。ユーージェンが落ち着き言葉が届くと確信できるまで、しばらくそうしてから英雄王は言葉を紡ぎます。

「だからユーージェンがいつか、戦いに生き抜く力を身に着け。誰かを守る力を身に着けるまでの間。私達はその時間稼ぎを。君がこれからも生きていく物質界を守つてみせる」

そして、ユーージェンの小さな両肩に英雄王は手を置くと。

「ユーージェン。強くなるんだ」

ユーージェンの紫水晶をじつと捉えたままそう告げ。

こくりと僅かに動いたユーージェンを見て、英雄王は小指を差し出し。

「それを約束してくれるなら、私も君と約束をしよう。私達は負けない。必ず物質界を魔王から守り抜き、そして君の母。影の射手を君の元へ必ず帰すと」

物質界を守り、母を返す。そうユーージェンに宣言しました。

「……………」

涙ぐみながらもユーージェンもまた、英雄王はじつと捉えます。

きつと考えているのでしょうか。

ユーージェンを快く受け入れてくれましたが、エルフ達との暮らしとの不安。

母と英雄王、そして英傑達という居心地の良い居場所。

破滅まで一步手前までいった物質界。

何度も戦場で起きた危うい場面。

離れたくないという気持ち。

様々なことを、ユーージェンなりに考えていたのでしょう。

沈黙の長さが私達にそのことを告げ、やがてユーージェンは大粒の涙を流しながらも、

英雄王の小指に、自らの小指を絡めました。

「本当……ですか英雄王？約束破りませんか？」

「勿論」

不安げに尋ねるユーージェンに、英雄王はさっきのように即座に返します。

それは英雄王の自信の表れであり、決して破らないと言う英雄王の決意に感じます。

そして人を信じさせる力がありました。

「ううっ……」

小指が解かれ、ユーージェンは英雄王に飛びつきます。

例え周囲がそれがいいと思い、ユーージェン自身が決めたとはいえ、これでユーージェンの離脱が決まりました。これは英雄王とユーージェンの別れを告げる抱擁です。

またしばらく、英雄王はユーージェンを背中を撫でていましたが。

「さあユーージェン。影の射手とアトナテスに言うことがあるだろう？それとも君は本当に二人が嫌いかな？」

惜しむように別れたあと、背にいる二人に手のひらを向けてユーージェンを勧めます。

ユーージェンは賢い子です。

それで、何をするべきかを理解してユーージェンは影の射手に飛びつきます。

「違います！大好きです母様！アトナテスおじさま！わああああん！」

影の射手は泣きじやくるユーージェンを抱き締めます。慣れたように、あの英雄王よりも様になって見えるような抱擁に。

影の射手とユーージェンには血の繋がりはないけれど。そこにはたしかに、母と子という物を感じさせます。

私も昔はああしてお母様に抱き締め、抱き締められたのでしょうか。

ちらりと、英雄王を見てみると英雄王は私の傍に……。

ではなくアトナテスの肩を組みました。そっちじやないでしょ英雄王。

「何だよっ！」

じとつとした目で英雄王を見るアトナテスに、英雄王はカラツと笑みを浮かべ。

「ん？寂しそうに見えたからだが？」

「よせやい」

とはいうアトナテスですが、英雄王を突き放すことなく。抱擁する影の射手とユーージェンを見守っていました。

その後、ユーージェンがエルフ達と移住するまでの三日ほど間。英雄王は影の射手に休みを与えて、親子の時間を過ごした後。最終日は私達はささやかな送別会を開き。

いつかのようなバカ騒ぎをした後。

「ソラスお姉さまもお元気で」

「ええ！ユーージェンちゃんも」

二日酔いで頭を抱えなくなるのを、ぐつと堪えながら。正門より旅立つユーージェンに別れを告げます。

「英雄王。私達の王様。どうかご武運を」

差し出されたユーージェンの手に。

こくりと力強く英雄王は頷くと、その手を握り返します。

再びの再開を願って、そしてその時は平和であることを願って……。

余談ですが、ユーージェンロスによってしばらくアトナテスはやけ酒していたので、英雄王とトウアン、アンブローズ。それに影の射手まで巻き込んだの二日酔いの日々が続

いたようです。

英傑。それは英雄王が定めた王国において、王の次に位を持つ者達。

ふふふ……つまり、私達英傑が束になれば王子君の意見すら無視して、王国内で暴挙を出来たり……なーんて。出来ませんよ。

確かに英傑は王国においてナンバー2……あれ？英傑人数の考えれば、ナンバー3がたくさんいるって言うんですかねこれ？

何にせよ。権力はあるんですね。それらしい書物をひっくり返せばおそらく出てきますよ。

あの人、そういう所きつちり残す人でしたから。

そして、その書物を見ればきつところも書かれていますはずですよ。

王族は英傑より、政治や軍指揮権を剥奪する権利を持つ、と。

……何を隠そう、その英雄王により政治発言を剥奪された。たった二人しかない英傑。

その一号が私であり、二号がサナラなのです。まあずっと先の話なんですけどね。

おや、私が嬉しそうな顔してる？

うーん……気のせいですよ♪





## E22 銀腕の英傑トラムと銀騎士の英傑アージエ

「我が名はトラム！そして、今ここに宣言するわ。銀なる腕は人類と共に」  
無機物めいた冷たさを感じる銀の騎士を供とし。

柔和な笑みを浮かべ。宣言せし言葉の高潔なる精神はその右腕にある白銀の如く。  
あれが、神様。いえ、亜神様ですか。

女神アイギス様の妹神。女神アダマス様とは違い。

女神ケラウノス様が天界に張ったという、結界を打ち破る代償として。自ら神の位を下げることになったとしても。人類を守る為に、亜神達が物質界にやってきたのは、大規模な移民が終え。兵舎の空き部屋をどうすべきか頭を悩ましている時でした。

「そして彼女の名はアージエ。私の娘よ」

「娘？銀腕の神話には確か君は……」

「えっ？あつ違うの！アージエ！挨拶を」

「はい、トラム。我が名はアージエ。機械により創造神の被造物、人間の魂を再現した唯一の個体です」

「機械……ああなるほど」

機械？あの姿で!?

英雄王はすんなりと受け入れていますが、亜神と名乗る者達の中に、どう見ても人しか見えない者達と同様の衝撃を受けつつ。

「神と亜神って何が違うのでしょうか？」

英雄王が女神アダマス様と亜神達と、色々と今後の方針を決める会談してる隙にアンブローズに問いかけてみると。

「あたしの知ってる範囲だとお神の楔を生み出せるか、生み出せないかの違いですかねえ」

「神の楔。それだけですか？」

「ええ。でもでもお神の楔を生み出せるってことは、自前でとんでも奇跡を起こせるって訳ですからあ。やっぱり明確に分けられるだけの格の差ってあると思いますよお」

「うーむ……」

アンブローズの話の聞いたうえで、執務室にやってきた亜神達の中でまとめ役なのか、すこし目立っていた彼女。銀腕の亜神トラムを改めて観察してみる。煌びやかな亜麻色の髪。銀にも負けぬ瑞々しい白肌。無駄なく均整のとれた四肢。穏やかな笑みに

は、何人であれ受けいれそのような母性を感じせ。

そして銀の腕。何よりも……目立つ銀の腕。なんですかあれ義手ですか？

とにかく、銀の腕を除けばどこを見ても、神様だと言われても、やっぱり普通の女の子にしか見えません。

彼女に比べたら。後ろに控えている人間の魂を再現した機械であり、トラムの娘と紹介された。銀の騎士アージェエの方が、人と比較したら特異な存在であると、納得できるほごです。

「君達の事情は理解した。これからは王国の盟友として、私達と共に魔王と戦おう」  
そうこうしている内に、話が纏まったようです。

英雄王は亜神達と握手を交わしていくと最後に。

「トラム。そしてアージェエ」

「何かしら？」

「何でしよう代理マスター？」

トラムとアージェエを英雄王は呼び止め。

「今これより、英傑を名乗れ」

えっ。

英傑とはと、首をかしげるトラムとアージェエに、英傑の称号を英雄王より与えられま

した。

そして、トラムが英傑を意味するところを英雄王に聞くと。

それはそれは面白い反応が返ってきました。

「わ、私達何か変なことしたかしらアージェ!？」

「トラムの言動に不可思議な所はなかったと、アージェは推測します。ですが、しばらくは代理マスターの思考を理解できるよう。アージェは予定通り。代理マスターの傍に控えようと思います」

英傑の称号とはとどのつまり、王国ナンバー2の立場を与えられたという事です。

何もしていないはずだと、慌てふためく亜神様と。それを宥める機械騎士という珍妙な光景に。英雄王は笑みを浮かべながら見守っていました。

「英傑とはいったい……」

二人の困惑が強かったように、はつきりいつて私も何で彼女達だけが?という気持ちが強かったです。

英雄王は英傑を定める時に言っていました。

えこひいきだと。

つまりは、英雄王はこの二人を格別に優遇したいということ。

亜神達全員まとめてならともかく、幾人もやってきた中トラムたっただけが。

それに加え亜神ではないアージエだけが。この一神と一体だけが英傑の称号を英雄王より授けられたのです。

……一体何が基準なのでしょう。

私は混乱はしながらも話は続いていき、亜神達は王国軍の、英雄王の傘下に加わりました。

数日後、英雄王とトラムは少し似ている所があると分かりました。

例えば、甘味処に行きたいのに亜神として、英傑として。気にしなくてもいいのにしつかりしなきやと、自分を律しているトラムはそれならばと、自分で菓子を作る。

英雄王も英雄王で、王国の心臓である英雄王が迂闊に甘味処に散歩。いざという時、然るべき場所に行かないと皆が困ると思っっているのか、たまにはベットで休めと言う周囲の意見を無視して、それならばと自分で菓子を作る。

生真面目で、自分出来る事は自分でやろうとして。

そして、菓子を食べたいと思った二人が厨房で出会った時。

「一緒に作ろうかトラム」

「えーと……いいのかしら？色々と」

「それなら、英雄王として命令した方がいいのかな？それなら君も堂々とお菓子が作

れる」

「……ふふつ。お菓子作りを神様に命令する為政者がいてら、面白そうね」

「なら命令しよう。英傑トラムよ、私とお菓子を作ろう」

「ええ分かったわ」

物質界の王である英雄王と、物質界に神話を残す銀腕の巫神が一緒に菓子作りを始める。

後世の詩人が、新たな神話として残しそうな出来事が厨房で起きていますが。英雄王は時折厨房に訪れることもあつてか、案の定誰もそれを気に留めることなく。二人とも手際よく準備を始め、お互いに幾度も菓子作りをしてきた経験か、本人達の気質が合っているのか、以心伝心で菓子作りを始め。

そして、どちらも何も言わなくても。親しい人達に作った菓子を食べてもらいたいか、二人で食べるには多い量を作る。

「物質界のお菓子は甘さは控えめなのかしら？」

「いやあ、情けないことに砂糖含めて、まだ色んな物質が足りてないからね。無い知恵を絞って甘みを出しているんだ」

「……ごめんなさい私達がもつと早く」

「トラムが気にすることはないさ。これから共に戦う仲間なのだから」

「ええ……ええ！」

デート。と表現するには、この二人の和やかな雰囲気は合っていないように思えます。

親しき友人と菓子作りをして過ごしている。ありのまま、そう表現するのが正しく。それを補強するかのように、もしデートだったらお邪魔虫になつてゐる所だった。匂いに釣られたサナラやトウアンが。そして英雄王の傍に控えていたアージエが、英雄王とトラム合作。東方の菓子をねだりに、和気あいあいとしています。

「ソラスもどうかかな？」

「食べます食べます！」

こんな感じで、トラムは英雄王と似ているということもあつてか、巫神という立場をあつさりを超えて私達に馴染みました。

一方で人の魂を再現した機械とトラムより紹介された、魔導機兵アージエの方はとうと。

必要かどうかはさておき。英雄王の護衛を兼ねて、アージエはこれといった命令がない限りは英雄王の傍に控えるようになりました。無感情のまま、ずっと立ち続ける姿は護衛としては文句の付け所がないほど様になつてはいますが。

英雄王を代理マスターと呼び、食事も睡眠もアージエは必要ではないからと取らず。



なんなら英雄王のベットの隣で、直立不動のままでもいいようにしていたため。

巫神でありながら、普通の少女のように振る舞えるトラムという存在もあってか。

その異質さ故か、少しどうやって接しようかと私達は二の足を踏んでいました。

ただそういうった時。やっぱりと言うべきか、英雄王はあっさり私達の一步先を行きます。

執務室の扉を開き、この数日で見慣れたアージェの姿がないなと思いつつ。執務室に備えられたソファアに座る英雄王の姿を捉え。

まーたサナラが英雄王に甘えて、膝枕してもらっていますね羨ましい。

英雄王がソファアにいる時は、仮眠をしているか。甘えたりなサナラを膝枕をしているか大体どちらかです。

そして、私を見るなり英雄王は人差し指を口の前にしているので、後者に違いありません。

なので、そう思いながらソファアを覗き込むと、想像とは違い。

数頭身はサナラより高く。本人の性格がそのまま反映されたかのように、規則正しい寝息を立てて眠る。すらりとした女性の姿を見て、思わずギョツとします。

英雄王に膝枕をして貰っていたのは、サナラではなくアージェでした。

「な、何があつたんですか英雄王？」

起こしたらなんだか悪い気がして、小声で英雄王に話しかけると。執務する手を止め。英雄王は小声で返します。

「アージエはよくトラムに膝枕をしてあげているみたいだけど、されたことはないみたいだから。なら試してみるかいという話になつてね」

ト、トラム……あの子たしかアージエの紹介をするとき、私の娘だとか言つてたはず。結構甘えんぼだなあの子と思ひながら、改めてアージエを観察してみます。

サナラのようなだらしのない顔こそしていませんが。本物の人形とは違い。穏やかな表情をしながら眠る姿は機械という無機物ではなく。

どこにでもいる、心を持った人と何も変わらないように思えました。

……おや、そもそも。

「アージエは眠る必要がないと聞きましたが」

「その辺りの欲求を、彼女は封印していたみたいだね」

「どうしてそんな封印を？」

「機械でありながら、人の形をした存在を見て、人が恐れるだろうからと。トラムが封印しておいたみたいだ」

……うーむ。封印と言われたらなんだか仰々しく聞こえますが。成程たしかに、人の姿をしていながら機械と紹介され、アージエにどう接するのがよいのかと、私も考えて

いたのでトラムの考えも理解は出来ず。

「それでその封印は？」

「アージェに聞いたら、自分で解除できるみたいだから、解除して貰うことにしたよ。今後はアージェも食事を取るだろうし、睡眠を取るようになるだろう。あとで食堂や、改めて部屋の案内をしないとね」

「なるほど、それでアージェは今寝ているのですね……英雄王を膝枕にして」

毒を混ぜながらいったはずが、英雄王は私の気持ちを知らずに、私と同じ銀でも。重い銀の髪を優しく撫でながら、スツと目を細めながら眠るアージェを見つめ。

「人の魂が宿ったから、人の心が持ってたのか。人の心を持ってたから、魂が宿ったのか。機械と彼女は言ったが興味深いな……おっと」

以前サナラが地脈を操る力を始めて英雄王に見せた時のような、真剣な雰囲気思わず私も吞まれていると、小声でもさすがに人が増えた気配を感じ取ったのか、アージェの瞼がゆっくりと開かれました。

「おはようアージェ」

「おはようございます。マスター」

あれ？アージェは英雄王を代理マスターと呼んでいたはずでは？と疑問に思いながら。

今の今まで無表情だったクールな女性が、寝起き特有のどろんとした顔を浮かべながら、起き上がる姿を見ると。なんだかこう……胸にグツとくるものがあります。

「まさか、アージエが甘やかされる日がくるとは思いませんでした」

「どうだったかな？」

「……マスター。アージエはやはり。膝枕をされるよりも、する方が好みのようです」  
「そうか。迷惑だったかな？」

英雄王の問い掛けに、アージエは数瞬考えた素振りを見せた後。

ふるふると小さく首を振り、初めてアージエは微笑みました。

「否定、アージエはまた、マスターの膝をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「私のでよければ」

私の前で、随分な約束をしてくれますねまったく。

「ほら、英雄王！アージエが起きた事ですし、ちゃんと椅子に座ってください！」  
英雄王を無理やりアージエから引き離して椅子に座らせる。

これくらいはいいですよ。二人とも意図はしてないでしょうが、好きな人が目の前で他の女の子とイチャイチャしているのをじつと見るのも、そろそろ限界ですよ。まったく。

そして、二人ともきよとんとした顔をしますので、余計に腹が立ちます。

この日は、とことん執務している英雄王をからかって遊んでやりました。

そしてその日以降……いつか、サナラのように英雄王に無邪気に甘える人が増えるだろうな。という予感がありました。

ですが、サナラ二号ともいえるべき人はサナラとは違い。どこからどう見て妙齡の女性です。

そんな人が。

「サナラ様。貴方はもう30分もマスターの膝上に座っています。そろそろアージェと交代する時間です」

「まだ30分しかですよ！嫌です英雄王助けてえー！」

「仲がいい二人とも」

英雄王にしがみつくサナラを、引き剥がそうとするアージェ。

両手に花と言うんでしょうか。ぎやいぎやいと英雄王を取り合う英傑が増えて、私の悩みも増えていく……。

ですが英傑が増えれば、普段の日々にも変化が訪れるという事でしょうね。慣れるしかないでしょう。

「私よりも英雄王と接している時のアージェの方が、娘らしくなっていないかしら？」  
ついでに言えばひそかに、敗北感を味わっている亜神もいたのかなんとか。

さて、そんなこともあり。

唐突に英傑が増えた。しかも、まったくの新参者が!!

みたいな感じで、英傑が増えたことを困惑はしながらも。陰湿な嫌がらせするような人は英傑達はおらず。元より特権階級なんて気にもしていなかったので、あつさりと受け入れ。

近寄りがたいと思っていたアージエは、封印解除の影響もあり。皆と同じように食事をとり、睡眠をとり。人らしく振る舞うついでに、サナラと同じように英雄王に甘えがちな英傑の仲間入りを果たし。

一方で亜神として、また英傑としてらしく振る舞わないと。そう意気込む生真面目なトラムはもつぱら、英雄王と亜神達をつなぐ架け橋として、英雄王によく貢献してくれました。

どうしてトラムが亜神と英雄王の架け橋になったのかというと。

その……亜神がやってきた頃から王国内で風紀が乱れ始めたのです。

どうにも亜神達は戦友同士でエツチなことをするのが当然というか、そういう文化があるようで。戦場後の昂りを抑える為にと、どこで誰がヤツただの、しただの話がちらほら湧き。そんな亜神達に中てられた、普通の人間達やら亜人達もお盛になりました。

……いやあ、まあいいんですよ？物質界が魔と神の軍勢により蹂躪され。失われた命の代わりに、新たな命を物質界に満たすには、そういうことをしないとイケないのは。ええ分かっています。分かっていますが。

それで、俺の女に手を出したなあ！とか、あの夜の約束はなんだったのよお！みたいな。男女間のいざこざを、軍内で。しかも武器を持って引き起こさないで欲しいです。

幸いというべきか、個人的には膝の一つでもつきたくありませんが。

英雄王と英傑達はその手のいざこざは一度として、起きませんでした。

アトナテスはそれなりに女性の気配は感じつつも、結構ストイックな所がありますし。

影の射手はユーージェンがいるからというよりは、そもそももうそんな歳ではないと言

い。  
その二人以外の私達英傑はその……周囲からは英雄王の女と見られている節があり。私の知っている範囲では、誰が誰と一夜を共にしたという話は一切なく。ある意味、英雄王と私達英傑は周囲からは壁があるみたいで。その壁を壊してでも英傑達に手を出そうと言う人も、どうやらいかなかったようです。まあこれもまた個人的な事ですが、はつきりいつていちいち相手をする気がない人に。断りを入れる必要がなかったので、助かりました。

一方で、まったくその手の話を聞かない英雄王は英雄王で、王としてある意味欠陥を抱えていました。……唐突に英雄王が漁色に目覚めたと聞いたなら、それはそれでシヨツクを受けたでしょうけど。

なににせよ身近な所では起きてない問題が起きた時には、人の主張を英雄王が聞き入れ。

トラムは亜神達の主張を聞き入れる。そうすることで、この二人が人と亜神達の価値の違いによる。摩擦を抑える緩衝材となってくれました。

そして場合によっては。

「英雄王の剣技は凄まじいな。あれは単身で我ら神をも討つ力を秘めている」

主張を通したいならば、剣で勝ち取れと開かれた模擬戦に。

英傑や人、亜神達が入り混じった戦いを観戦していた。髭の代わりのように、鼻下からにゆるにゆるした触手を撫でる亜神クラールフがそう零し、目を細め。

「しかし神々すらも戦慄させるとは、不可思議な力を持つ男だ。英雄王は」

……英雄王の威光は人を亜人を、魔物や天使、亜神ですら戦慄させる。

唯一無二の例外は、そう私達英傑のみ。

「アージェ！拡散打撃機構ミアハ、点火！」

「了解ですマスター」



「私も仕掛けるわ英雄王！」

「ああ、共に行こうトラム！」

鬱憤晴らしもかねた模擬戦の中。英雄王と肩を並べて戦うトラムとアージェは、どれだけ英雄王と共に戦場に立っただけでも、他の英傑達と同じく英雄王の威光の影響を、受ける事がなく戦えることを証明し。それは彼女達の英傑入りを、周囲に納得させるだけの物でもありました。

かくして、英雄王は無事に亜神達を王国に迎え入れました。

英傑トラム、そして英傑アージェの存在が王国内にて認知されました。

亜神達とはかく癖がある人が多かったですね。

トラムやクラールフは生真面目な方でしたが、それ以外の大体は各々の好き勝手にやるとして亜神が多かったので、英雄王も結構力技で立場を理解させることも多かったですね。

だから、トラムの英傑入りはある意味必然だったかもしれない。あの子、まとめ役とかするには最適でしたし。

アージェは……今と比べたらもつと甘えんぼさんでしたと言ったら王子君信じますか？

ですがええ、今と同じように非常に頼りになる子でしたよ。これからもどんどん頼りに、そしてたまには、アージエを甘やかしてあげてください。きつと喜んでくれますから。

ん……英雄王の英傑入りの基準。ですか？

あー……ごめんなさい。実は私もそれは分かりません。

ただ仲良く出来そうだったからとか。

当時、呼ばれていた英雄王の威光が効いていないからとか。

考えられる要素はあるにはあるのですが。

英雄王にはもつと強い。

何か、英傑とそれ以外を決めるような、大きな。そして深いこだわりがあった。

それだけは確信出来ます。

## E 2 3 王の義務

亜神達が物質界に、王国に参入してから約半年。

そろそろ、王国建国してから一年が経とうとしています。

各地の開拓もそれなりに進み。

穏やかな時間が流れる開拓地を見ると。

人が人らしく生きていく為の営みを、魔物達から取り戻していると、私達に実感させ。人や戦士も亜神も。全てを束ね支配する英雄王の、民衆からの支持はより一層高まり。

そして、英雄王の腹心。

英傑という名も。英雄王ほどではないですが各地に残していきます。

ですが何より嬉しいのは、やっぱり。英雄王の傍に英傑がいる。

そのことに、不思議に思われなくなったということが、私達もしつかりと認められて  
いるんだなと思ひ。嬉しかったです。

ですが英雄王のように慢心せず、日々の仕事もしつかりこなさいといけません。

「あー……やっぱり、早めに英雄王に知らせておくべきですね」

ふと、先日の遠征に関する報告書に、気になる個所を見つけ。夜分遅くもあり、明日にすべきかと思いましたが。

緊急性が高いと判断して、英雄王の下へ尋ねることにしました。

執務室はアトナテスと一緒に、英雄王を抑え込みながら無理矢理消灯させ。書類等政務に関わりそうなことは全て没収しましたので、この時間ならさすがに寝室で休んでいいでしょう。

髪を梳かして……薄く化粧をして……香水をつけて。

きちんと身だしなみを整えて。

そんな展開起きないだろうなあと思いつつも、殿方が喜びそうな、ちよつとエツちな下着を身に着け。英雄王の下へ向かいます。

微かな蠟の灯りと月明かりを頼りに、書類を確認しながら歩き。

英雄王の寝室へ繋がる。まっすぐな廊下へ差し掛かった所で。

「……………?!」

目の前に飛び込んできた人物に、というよりも、その人物が身に纏っていた衣装に思わず言葉を無くしてしまった。

「あつ……………つ!!」

そして、その人も私を姿を見るなり。顔を赤くしながら走り去る。

頬から流れ落ちた涙をその場に残しながら。

「あの人は確か……」

銀の髪を持つ人は英傑含め王国には数多くいるけれども、そこに輝くエメラルドグリーン色の瞳を持つ女性と叫びました。私の知る限りは北方の姫で間違いなかった。

「……………」

別に、北方の姫が英雄王と会うのは何も問題ありません。

英傑達と比べたら、回数こそ少ないですが。英雄王と二人で王国の今後について話し合うこともある程度には親交がありました。

ですが、つい先ほどすれ違った時に、身に纏っていた彼女の衣装を見たら。

話はまったく別問題になります。

彼女はバスローブを羽織っていました……。

ですが、一度は解いたのであろう、乱れた紐で結んだバスローブの下には。

その身に付けていたのは。所謂ベビードールと呼ばれる女性が殿方を誘う下着の類。

私のとは違い、本格的に誘う時に身に着けるような淫猥な下着でした。

そんな衣装を身に着けた彼女が、英雄王の寝室の方からやって……きた……。

「……………」

ドクンドクンと動機が早くなるのを感じる。

沸き立つ汗の熱さが、急速に冷えていく体にぬるりと流れ落ちていく。  
まさか……まさか……。

一步、一步。英雄王の寢室に近づくとつれて、視界が歪みと体の震えが増していく。  
もし、想像通りだった所で何が問題がある？

心の中で、冷静な私が私に告げる。

彼は英雄王。

王である彼は、国を治める義務と同時に、その血筋を残す義務が存在する。

いつか、そうなることなんて分かり切っていたじゃないか。

彼がいつから、性に無関係な人物だと思っていた？

彼に男として焦がれ、求めていたのはどこの占星術師だ？

それを非難する資格や、非難できるような。

英雄王にとって仲間でも、英傑でもない。

唯一無二の『特別』な存在であったか？

冷静な考えが過れば過る程、沸き立つ感情。

身勝手な、自分勝手な、我儘な怒りの矛盾を指摘していく。

彼の女性関係を知ってどうする？

先日どこかで聞いたように、英雄王に怒りをぶつけるのか？

それとも、嫉妬に狂い女を害するののか？

……立ってられない。

吐き気や眩暈でふらつき、壁に頭をぶつけてしまいそうになる直前。

「大丈夫ですか。ソラス？」

そう問いかけながら私を支えてくれたのは。

いつの間にかやら、私の傍に来ていた影の射手でした。

「影の……射手……」

影の射手は老いを感じさせない翡翠の眼で、私の姿をじろじろと見ると。

すべてが合点いったかのように、ああと頷くと。

「英雄王に用事があるのでしよう？どうぞお入りなさい。貴方が考えているようなことにはなっていないですよ」

「あつ……ああ……」

……例えば王国で生きる者として、その考えは間違っているとしても。

良かった。なんて、思ってしまった。

「でもその前に。ソラス。深呼吸をなさい。そんな酷い顔で英雄王に会うつもりですか？」

「あつ……はい。そうですね、ありがとうございます」

スーハーと深呼吸をして……影の射手が言う酷い顔から普段の私を取り戻し。改めて、寝室の扉を叩いて寝室に入ると。

「……ソラスか」

英雄王は英雄王で、椅子の上にグデーと疲れ切ったように座り込み。普段の執務室の激務を熟した後でも、戦場で戦い抜いた後とも違う。

もつと別方面で疲れたような顔をしていました。

「どうしたんですか英雄王？」

「いや、まあその……」

英雄王は言い淀み、そして私と一緒に入室した影の射手を見て。

全てを悟ったかのように溜息を吐くと。

「彼女は……どうしていた？」

たぶんタイミングから、つい先ほど英雄王の寝室から飛び出したであろう。北方の姫の事を聞いているのでしょうか。

英雄王が北方の姫に興味を持ったらどうする。という暗い考えを抑え込み。

それとは別に、ごまかした方がいいような気はしましたが……。この人には隠した所であつさり看破されるのが目に見えているので、正直に英雄王に伝えると。

「そうか、彼女は泣いていたか……」



より一層、重い溜息を吐くと。英雄王はやつれたような顔をしてしまいました。なんとというべきか。

英雄王も疲れた顔位はしますが。いつもやりきったような、爽やかな顔を浮かべているのが常でしたので。その陰気に感じさせる姿は、とても珍しい光景が見れた気がします。

……お疲れみたいですし、早く要件を伝えてしまおうと思っていたら。

「どうせ泣かせるなら、ベットの所で鳴かせて差し上げればよかったのに」

「ちよー影の射手！」

口端を少し上げて、冗談めかした口調で影の射手は言いましたが。

その言葉の内容に英雄王はこれもまた珍しく。影の射手を敵を見つめる時のような、ギロツとした。息を呑むような怖い目で影の射手を見て。

「……………」

そして自己嫌悪するかのように、ばつの悪い顔を浮かべました。

「英雄王」

名を呼ぶ声の重さに。影の射手が先ほどの、冗談交じりの態度から変わり。

真面目に、臣下として。或いは戦友として、それとも英傑として。

英雄王を正すかのような、強く迷いない口調で言葉を紡ぎます。

それが英雄王にも分かっているためか、英雄王も影の射手の目を真正面から受け止めます。

「貴方には義務があります。一つは王国の統治」

……今更、誰かに指摘されるまでもない。

統治において、英雄王以外誰が滅びかけた物質界まとめて立て直し、安定させ。

反撃に至るまで王国を作り上げる事が出来るでしょう。

完璧なる王を英雄王はやって見せました。

「もう一つは英雄王。貴方という血統の保存……世継ぎを作っていたかどうかです」

「……………」

英雄王も……そして私も。

言葉の意味することを理解していますので、口を閉ざしてしまいました。

その代わりのように、影の射手は言葉を続けます。

「英雄王の政治能力も戦争の才も至高です。英雄王以外。例えばアイギス様の贈物があつたとしても、無から人々を束ね。物質界を立て直すのは不可能だったでしょう。

今世において必要なのは、散らばった力を繋ぐ手ではなく、散らばった力を束ねる手だったでしょうから」

すでにある力を繋ぎ合わせ、力と力を繋ぐ手ではなく。

無から力を生み出し、一つに束ねる手。

似ているようで、決定的に違う。

英雄王だけが持つ力。

「ですから今。万が一にでも英雄王が亡くなれば、貴方という土台を失った物質界は今度こそ滅びるでしょう」

「影の射手！その万が一が起こさない為に、私達英傑がいるのではないのですか?!」  
万が一にでも、彼が死ぬ？

そんなことあつてはいけない。

もし、そんなことが起きるなら。いえ起きる前に身を挺してでも英雄王を私は守つて見せます。

英雄王の会話の横割りする無礼を承知で、影の射手に食いかかります。

「ええ、勿論そうですよ。ソラス」

ですが、影の射手は怒らず。

ただ普段通りに、穏やかな笑みを浮かべたまま。

「——え？」

影の射手が、アイギス様の加護を受けた黒弓に矢をつがえ、私に向けて射出した。それが理解できたのは。すでに、ヒュンと矢が空を切る音が鳴り。

その矢をいつの間にもやら椅子から立ち。私と影の射手の間に割って入り、素手で矢を掴み取った英雄王を見た時でした。

「……………」

どうして、影の射手は唐突に私に矢を？

理解できない理解できない理解できない。

同じ英傑として、戦場を駆けまわった戦友として影の射手は仲間だったのでは。どうして——。

「……………お見事です、英雄王」

「あまり、この冗談も好きじゃないよ影の射手」

矢を炎魔法で消しながら、英雄王は悲し気な表情を浮かべて影の射手を見て。

そして一連にへたり込んでしまった私に、英雄王は手を伸ばしました。

彼の手のひらから伝わる温度に、ようやく影の射手は冗談であることは理解しました。

でも、でも冗談にしてもこれはいくらなんでも……………！

「影の射手！」

「ソラス、どうして貴方は英雄王に庇われているのですか？」

「……………！」

その一言で、影の射手が言いたいことが分かってしまい。

先ほどの、身を挺して守る等という意志に。

私自身の行動が、それに伴っていないことへの恥が先に来てしまい。

彼女への怒りが霧散してしまった。

「そして英雄王。あなたはソラスを庇ってはいけません」

「……………」

英雄王も、こくりと頷きはしませんが。影の射手に口を閉ざします。

「英雄王の仲間を想う気持ちは素晴らしいですが……それが強すぎて。英雄王は、自身の命を大切にしていけない気が前からあります。忘れないでください英雄王。貴方の命は、英傑全員の命を引き換えにしたとしても、失う訳にはいないのです」

「だが、私は仲間を失うのは嫌だ」

「ならばこそ」

影の射手は弓を下ろして、英雄王に跪き。

「英雄王。世継ぎをお作りになりなさい。世継ぎがいれば。物質界は万が一。英雄王という土台を失っても。英雄王の血筋を引く者と、王国を拠り所にして生きていくことが出来ます」

改めて、影の射手は英雄王にそう進言しました。

ただでさえ、今の物質界には英雄王という存在が必要不可欠。

そんな英雄王が、万が一にでも英雄王が殺されてしまったら。

今まで幾度もやったみたいに。英傑の為、仲間の為。自らの生命を厭わない無茶をやつて、その命を失うことになったら。

支配者を失い、そして正当な後継者もない王国は間違いなく瓦解するでしょう。

魔王と戦わないといけないのに。王国発足前のように。今度はいくつものは派閥による内戦が起きるでしょうし。そして人々は、内戦を行う纏まりのない王国に見限り。また自分達の生活を保障してくれる国がない以上。人々は今まで以上に離散して散りとなり。

幾度もあつたように、少数になった集団に、大勢の魔物や天使達がやってきて……。

あとは、一度物質界が減んだ時の状況が、規模が小さくなつての繰り返し。

そして今度は英雄王という。人々にとって、理想の王が現れるなんてことなんて。都合よく二度も起きる事はないでしょう。

そして英傑たる私が、そんな状況に追いやられたと仮定した時……。

果たして英雄王無き王国の為に、彼のいない王国に残り続ける事が出来るのか。

……はつきりとした答えを思い浮かべない。

「分かつているよ。影の射手」

絞り出すような、ゆつくりと硬く言葉を英雄王は言い。影の射手は、軽くふうと息を吐きながら立ち上がると。

「相手にお困りなら、そのソラスなんていかがですか英雄王？」

「っ!？」

さりげなく放たれた矢に、私と英雄王は同時にお互いの顔を見て。

「……………あ」

私の鼓動がトクンと跳ね上がった。

今までの話の流れが流れだけに、一瞬彼の視線が上から下へ。

私の胸や、腰、尻。男女で明確に違いが出やすい箇所に移ろい。

再び私の顔に視線が戻ると、少しずつ彼の頬が赤く染まり。

その辺りの頬の視線は気に留めないか、冷めた感情を抱いてはずが。

他にもない。彼に見られた為か。

今まで気配がなかったけれど、私も彼にそういう風に見て貰えるのかと、桃色な喜びに体全身に熱が宿り始め。身に着けていた下着を思い出して、恥ずかしさに内股になり。

今更ながら、先ほど立ち上がる時に彼の手を握り、そして今も握ったままであることを思い出して。私と彼の、互いに熱くなっているはずなのに、感じとれる熱の違いに。

思わず頭がクラッと来てしまう。

長い数瞬の時間が過ぎ。

もし……もし、ですよ。

どうぞ。

なんて言ったら、彼はどうなるでしょう。

そんな考えが過り始めた時。英雄王は繋いでいた私の手を放すと。

「そういつた冗談も好きじゃない！」

顔を赤くしながら、英雄王にしては珍しく口調を荒くして言い放つと。

「……………」

……何故かまた、自己嫌悪のような顔を浮かべ。

一方で影の射手は微笑ましいとでも言いたげな笑みを浮かべ。

「ソラスから英雄王に言う事ないのですか？」

完璧に……からかってますね。人の気も知らないで……！！

「し、知りませんよ！」

反射的にそう答えてしまい。

「その報告書の話ですよ？」

うわあああああ！



影の射手に、書類アタックの一つでも決めないと治まりそうにない怒りに身を任せ、影の射手を追い回しますが。

忘れてるわけではないですが、彼女は隠密の使い手。するりと影と同化するように消えては現れてを繰り返す。先に私の方が折れてやることにしましたよ。

この後、報告書の話をするにしましたが……。

先ほどの件の件もあり、気恥ずかし過ぎて、ともに英雄王の顔を見れません。

そして英雄王も英雄王で普段のように、はきはきとした返事ではなく。

ああとか、うんとか、ちよつと上の空。

……上の空になるくらい意識してるのかな。なんて、喜んでる私がいって。報告どころじゃなかったですが、報告を終え。

英雄王は窓際に立ち、夜空に浮かぶ。

様々な報せを届けてくれる星々を眺めながら。

退室しようとする私と影の射手に告げる様に。

「……近々答えを出すよ」

そう言葉を紡ぎました。

そんなやりとりがあったからか、煙のない所にとりながら奴なのか。

この頃、こんな噂が王国中に駆け巡りました。

英雄王は英傑の中から、妃に迎えるつもりだ。と。

まあ英傑と言つても、影の射手は高齢を理由に。

アトナテス是一部の界限から惜しまれながらも、対象外となり。

私、サナラ、トゥアン、アンブローズ、アージエ、トラム。

その六名の中からさあ誰だ!?みたいなことになってました。

賭け事の対象みたいなことに、しかも個人の感情に障る話なのでなんだかなあと思いつながら。各々に探りもとい、話を聞いてみると。

どうやら周囲が思う妃候補第一、第二はトラムとトゥアンでした。

理由としてトラムは、今王国にいる亜神達との繋がりを強くするためという思案もあり、亜神ならば英雄王とも釣り合いが取れるだろうと認識されていて。

トゥアンはトゥアンで、あの子は規模は小さいながらも今も残っている数少ない国の女王であり。亜神と比較したら釣り合いが。という考えがあるみたいですが、彼女はトラムとは違って英雄王との付き合いの長さで優ると認識されていました。

そして当の二人の反応はというと。

亜神トラムさんは噂を聞くと、大層顔を赤くされ。

「だ、駄目よ！確かに神様と人が夫婦になったという神話はいくつもあるけれど！そ

の……だ、駄目よ！私そんなつもりで物質界に來た訳じゃないからあ！」

駄目駄目言う割には、英雄王と夫婦になることに關して、彼女は嫌と言わない辺り。まったく意識してない男性と、週に何度も菓子作りなんかしないはずですし。

トラムも天界のある都市を納める王として、英雄王の王としてのありかたに、憧れを抱いているのか。どこか英雄王を見つめる視線に熱があるのを感じました。

英雄王が本気で求婚したらトラムは、ひと悶着こそありそうですが承諾しそうです。トウアンは噂を聞くと平然と。

「なるようになるだろ」

そう言い普段と変わらない態度をしていましたが……この噂を聞いた以降。いかにトウアンでも意識してしまったのか。トウアンが執務室を訪ねる頻度が一時的に減り。たまたま二人が執務室にいる場面に出くわした所。英雄王は別段近づいた訳でもないのに、頬を赤くしながら近いと叫び。それなら離れたら離れたで、不機嫌そうにむすつとした顔を浮かべたりと。普段の彼女らしくない。女の子らしいというべきか、あれが素のトウアンの振る舞いなのか。

そういった行動が増えました。

トウアン様も色恋を思い出す時が來たのですねと、トウアンの国の頃からの付き合ひの兵士もひそかに喜んでいる様子でした。

第一、第二候補の二人もなんだかんだで。

英雄王を男性として意識してるんだなあっと思っていると。

「私は花嫁修業とかばつちりですからからねえ、超優良物件ですよ」

ない胸を張りながら、普段とあんまり変わらないアンブローズがいて。

「アージエがもし王妃になったら。一先ず世継ぎに困りますね。トラムの相談が必要になるとアージエは考えます」

心配の方向性がまず先を行ってるアージエもいる。

「私が英雄王の花嫁ですか？……わあ……」

花嫁姿の自身の姿を思い浮かべたのか、英雄王との結婚生活を思い浮かべたのか。

サナラが、キヤーと両手で赤くなった頬を隠し。

そんなサナラを私はギュッと抱き寄せる。

ああサナラ……純粹過ぎるのも考えものだなと思っていましたが。どうかこれからも、純粹な貴方でいてほしい。そんな風に考えていると、サナラは私に問い返します。

「ソラスちゃんが英雄王に妃になってと言われたらどうしますか？」

「……さあどうでしょう？」

サナラの問い掛けに、私はより一層サナラをギュッと抱き締めました。

……恥ずかしくて赤くなった顔なんてあの人以外には、見られなくなかったからで

す。

サナラの問い掛けにはそうですね。

……花束を持った彼が、情熱的とか演劇的とかそういうものがなく。ただ一言。強く大切に心を込めて。

「私の妃になつてくれ」

そう、言つてくれたなら。私は喜んで受け入れるでしょう。

なーんて！……まあはつきり言うとは。

英傑の中でと括るなら、私が選ばれるだろうと思つてました。

なんなら全員恋敵とすら見ていません。

だつて、あの日。英雄王私にキスしようとしたじゃないですか！

あれもう実質好きつて言つてるようなものでしょう!?

ああいった雰囲気やシチュエーションが他の子にもなつたとは、普段の彼女達と英雄王のやりとりを見てると、思えないですし、たぶんないでしょう。きつと。

だから私は、英雄王が二人きりになる時を。

彼のお嫁さんになつたらどうイチャイチャしてやろうかと考えながら。

今か今かと待つていました。

そして噂から数日後。

.....あれ？

「彼女を私の妃として迎えることにした。皆よろしく頼む」  
英雄王に呼びされ、集まった謁見の間にて、私達英傑達は。

その言葉を聞き、目が点になりました。

「は、初めまして英傑の皆さん！」

ドレスに着慣れていない為か、ぎこちない所作で挨拶をする。

まったく、一度として英雄王と二人でいた場面を見た事のない。

明るい茶髪の女性が、英雄王の妃。王妃なる女性と紹介されました。

「か、彼女は一体？」

震える声で問い掛ける影の射手。

情報戦の玄人である彼女ですら、認知していなかった存在を。

「ああそいつが例の……」

唯一アトナテスだけは、王妃となる女性の存在を予め知っていたようです。

英雄王の妃。王妃様。

物質界中。それどころか魔界、天界にまでその名を千年先にまで語り継がれる英雄王。

その妃。

あまりにも大きな肩書きであるはずなのに。

どうして王妃の話が、まったく語り継がれていないか。

不思議に思ったことはありませんか、王子君？

うんうん。気になりますよね。

と言っても話は単純で。

……王妃様が、英雄王の王妃であられた時間は。

二年。あつたかどうか……。

……………。

でも、王妃様はたしかにいました。

例え英雄王のように、英雄譚が残されていなくなつて、確かにいたのです。

だつて……。

王子君が、今ここにいます。

これ以上、王妃様がいたという証拠はないでしょう？





## E 2 4 生れ落ちる希望の子

王妃様がどんな人物であるか。

そう問われたら、多くの臣下達が返答に困りました。

王妃は、英雄王を超える程の剣術を持っている訳でも。

天才的な弓術の使い手でもありませんでした。

なにせ今まで一度として、戦場に立ったことがない人でしたから。

ならばアンブローズのように、秀でた魔術的才を持っているのかと問われても、そういった力もなく。

トラムのように純粋な戦士だけでなく、為政者として、一目置かれるような政治センスを持ち合わせてる訳でもなく。

地脈を操るサナラのように、本人しか使えないような特別な才を持っている訳でもありませんでした。

ならば、英雄王に見初められるほどの、物質界一の美女である。

という訳でもありませんでした。

うら若き乙女ではありませんが。所謂砂漠の薔薇だとか、東の至宝だとか。美を讃え

るような女性達が持つ様な、桁外れな美貌やカリスマを。王妃は持ち合わせていませんでした。

本当に普通。

ごくごく普通の平民が王妃でした。

そんな王妃を、英雄王は妃に迎えました。

私達英傑達ですら。アトナテス以外まったく把握してなかった女性が。王国。ひいては誇張なく物質界のナンバー2になる予定の女性だと、英雄王より紹介された時。王国の臣下達も豆鉄砲を喰らったような顔をしましたが。すぐさま冷静さを取り戻し。二人が正式に婚姻し。物質界中に知れ渡る前に。

英雄王から始まる。新しい物質界の歴史に相応しい女性を。

とどのつまり平民の娘はいくらなんでも駄目だ。

英雄王に再考してもらい。英雄王に別の女性をという意見が、あるにはありましたが。

……ただでさえ英雄王は物質界を背負う身。

そんな英雄王に、自由恋愛すら許す気はないのかと。

アトナテスや影の射手、アンブローズといった英傑含め。意外なことに、北方の姫を含めた高貴な出も多い女性陣達までもが反対する者達に激怒し。

英雄王自身も一切、反対意見には耳を貸す気はなかったのだ。

豪勢を好まない傾向にある英雄王らしい。完成したばかりのアイギス神殿にて、英傑達だけで参加者が過半数になるような。物質界の王という肩書に似つかない。

本場にささやかな式を挙げ、英雄王は妃を迎え入れたことを、物質界に向け宣言しました。

それからというもの。英雄王と英傑達の関係は……あんまり変わりませんでした。

さすがの英傑達も、英雄王と王妃と過ごす時間を邪魔しない。程度の遠慮くらいはまあ覚えましたが。

相も変わらず。王妃の前であろうと、サナラとアージエは英雄王を取り合いを始めてしまう。旗から見たら夫が若い女に言い寄られてるような、私だつたら文句の一つや二つ言いたくなるような光景でしたが、王妃はそんな光景を楽しそうに微笑み。

アトナテスやトウアンが英雄王に夜通しで酒を飲もうと誘つても、王妃は止める所か快く英雄王を見送り。

英雄王を過度なボディタッチをしながらからかうアンブローズを見ても、眉一つ動かさず。

トラムと一緒に菓子作りをしている英雄王を、離れた場所で見守り。

影の射手が齎した情報を整理し、玉座から臣下達へ勅命を下す英雄王を。ただ隣で

じつとしていました。

王妃はこれといった才はない。だから王妃は何もしない。

英雄王の補助をしなければ、かといって英雄王に逆らうこともしない。

王妃を知る多くの者は、心中そんな風に思っていたかもしれない。

立場を笠に着て、英雄王という圧倒的な才を邪魔をしないというのは、ある意味では好意的に受け止められたものの、英雄王の妃という肩書の大きき故に。臣下の中には、王妃は何もしないのかという。相反する感情の渦に、王妃は常にいました。

ですが王妃は終始徹底して、自分から何もしようとはしませんでした。

一方で……私かというと。

……怒りなのか、嫉妬なのか、憎しみなのか、悲しみなのか。

英雄王に対して溢れ出る感情の奔流に、思考が完全に停止してしまい。

現実味のないまま式を見守り、なすがままを受け入れ。

そして、以前とあんまり変わらない英雄王を見て。

王妃とは英雄王にとって、どういう存在なのか。

あの夜、私にキスしようとしたのはなんだったのか。

英雄王が私が好きだと思つたのは、私のただの思い上がりか。

それだけが私の頭の中でぐるぐるしていました。

「ようやくソラスさんとお話す機会が出来ましたね」

「そうですね王妃様」

庭園にて用意された椅子に座る私に、王妃は紅茶をカップに注ぎ差し出してくれました。

そんな王妃に、自分の事ながらぎこちない返事をして。誤魔化す様に私は紅茶を啜る。

彼女が王妃となって一月。

諸々の出来事が落ち着いた頃、私は王妃にお茶に誘われました。

誘われた瞬間。……何が目的？穿ったような考え方を持ちそうになりましたが。

一月もあれば、それとなく王妃の為人が見えてきます。

王妃は本当に普通の人です。

変わらず英傑達と過ごすことが多い英雄王に対して過度な干渉もしなければ、英雄王の知らぬところで暴君をしたりもしていない。

穏やかで静かな人。

私の個人的な感情面を抜きにしたら。特別嫌いになるような要素を王妃は持ち合わせていなかった。

そしてどうにも、王妃は英傑の中でも私に対する好感度が、最初からやけに高かった。それに関して私は私も少し気になってました。

「実は以前。ソラスさんと一度お話したことがあるのですが、憶えていますか？」  
「そう、なのですか？」

おや、これは意外な接点が。

記憶の中から王妃の姿を思い出そうとしますが……。  
うーむ分かりません。

悩んでいると、その時の事を王妃は教えてくれました。

……なんとまあ、その以前というのは。

英雄王がまだ、团长と呼ばれていた時期。

そして、私が実質的な王国の前身、赤の団に加入したばかりの時。

私にとって、私という存在が始まったような大切な日。

今は英雄王と呼ばれる彼に、星の導きを示し。

英雄王が私を信じ、救う事の出来た村。その村の生き残りが王妃だという。

そして、その後の酒宴の場で何度か言葉を交わしていたみたいです。

それで、あああの時の、と思い出せればよかったです。

当時の私は自分の事でいっぱいでしたし、他に意識を向けることが出来たの

はせいぜい英雄王くらい。

そして……言つては何ですが、今まで助けてきた人が多すぎて。似たようなことが何度かあったように、助けられた側が覚えていても、助けた側が覚えていませんでした。

不敬を承知で、素直に覚えていないことを王妃に伝えると。

王妃はくすりと小さく笑うと。

「アルトさんと、同じことを仰いますね」

「……………」

王妃は良くも悪くも何もしない人でした。

ですが、そんな王妃にも一つだけこだわりがありました。

しかし、そのこだわりは私的な場でも、公の場であつても関係なかつた為。

人によつては悪癖だと断じ、幾度か矯正するよう王妃に直接進言しましたが。

ほとんどのことは何でも聞き入れる王妃でしたが。

この、ただ一点のこだわりだけは決して、変えようとしませんでした。

それは……英雄王をアルト。と名で呼ぶ事。

数千という臣下。数万という民。それを超える無数の敵。

私達英傑でさえも。彼を英雄王と呼び讃え、或いは恐れすら抱く中で。

王妃ただ一人だけが、英雄王をアルトと呼び続けました。

いつだかのように、私は英雄王へ報告しに向かう。

至急に知らせるような内容ではなかったのですが、どちらかといえば。ふと、英雄王の顔が見たいなあなんて。軽い気持ちのまま英雄王の寝室へと向かいます。

その道中。

「おやトラム」

「あらソラス」

夜遅くにこっそりと甘味を作り。

それを英雄王にお裾分けしようとしたらしい、トラムに会いました。

ついなので私もトラムの甘味をご賞味しようと思いい、二人で寝室の前に来ました  
が。

「お二人とも、夜遅くに何をしているのですか？」

扉の前で影の射手が、私達を遮るように立っていました。

「影の射手も英雄王に用事が？」

「英雄王には用事はありませんが……」

問いかける私に、ちらりと影の射手は私達の様子を見ると。

「率直に申し上げるなら。二人とも今すぐにお引き取りを」



一方的に、帰れと言ってきました。

何ですか藪から棒にまったく。

不満でむっと頬を膨らませていると、代わりにトラムが影の射手に聞く。

「英雄王は多忙なのかしら？」

「そうですね。今取り込み中です」

取り込み中と聞き、私の頭の中でピンと結びつく。

……ああ、英雄王はまた寢室にまで書類を持ち込んで仕事しているのですね。

私達が無理するなど怒るから、英雄王は影の射手に頼んで。私達を寢室に入れさせないようになっているのでしょうか。

「取り込むほど政務が忙しいなら、私達も手伝いますよ」

「そうですね。ちょうど甘味を作ってきたから、英雄王も休憩をさせましょう」

思わぬ所で仕事が出来てしまいました。

英雄王が頑張っているなら、私達英傑も頑張らない訳にはいかない。

いやはや、人をやる気にさせてしまう英雄王の人徳は恐ろしいですね。そう思いながらトラムと寢室に入ろうとしましたが。

「お引き取りください」

影の射手は、今度は有無言わさないといい雰囲気を漂わせながら。

私達の前に立ち塞がります。

「今日の影の射手は意地悪ですね」

「変よ変」

その言い様に、私とトラムは眉を顰めます。

普段なら手伝つてやれと、喜んで通してくれているので猶更。

なんですか急に。冷たいですねと、思つてしまいまうじやないですか。

すると、影の射手は言葉を選ぶように押し黙った後。

「……ただいま英雄王は王妃と共に。王国の最重要国事を執り行つている所です。貴方達。特に英傑を寢室に入れる訳にはいきませんので、どうかお引き取りを」

そう言い、改めて私達に帰れと促します。

ああ王妃もいるんですね。と思いはしましたが。

「影の射手が王国の最重要国事と言うくらい重要なことなら、猶更私達英傑も一丸となつて解決すべきじやないですか！」

「そうよ、私達仲間じやない！」

本当に、今日の影の射手はらしくないです。

影の射手なら重要だと分かっているなら、寧ろ英傑達を集めてきそなものではないに。

それなのに、特に英傑を入れる訳にはいかないとは、どういうことですか。

トラムの仲間だと言う発言に、殊更同調するように首を縦に振るうと。

「はぁーーーーー……」

今まで、私達を庄するかのような、重い雰囲気を漂わせていた影の射手が。急にゆるるとし始め。私達をまるで、聞き分けのない子供を見るかのように、いえそのままの目で見ると。

「散散お引き取りするよう言いましたからね」

急に変わった影の射手の態度に、頭に疑問符を浮かべたままの私とトラムに。

影の射手はためらいがちに、指をサツと動かすような合図をしました。

それは以前、英雄王も披露した隠密の魔法に酷似した所作。

隠密。一言でそう言い現わすことができても、多種多様と英雄王は言っていました。

そして今回の隠密は、音を無くすという魔法でした。

「……………」

その音を聞いた時、トラムは顔を赤く。

そして……私は血の気が引いたようにきつと青くなつた。

英雄王の寝室、扉で隔たれたその先で鳴る音は。

どういふ訳か。

例え経験がなくとも。何をしているのかというのを、女として嫌という程理解させる。

そういう音でした。

「……………」

ああなるほど、これは確かに王国の最重要国事ですな。

そんな、考えを思い浮かべる中、私は一步、一步と英雄王の寝室へと足を動かす。きつと、直視する勇氣もない現実を消し飛ばす為に。

「ソラス、トラム。飲みに行きましょう。いかに英雄王と言えども、私達が傍にいと気が散る事でしょうし」

アイギス様の加護を受けた黒弓を引く。力強い手で影の射手は私の手首を掴むと。そう言い。問答無用とばかりに、私達を引きずりながら歩き始めました。

酒場に付くなり私とトラムはカウンターに座らせられ、影の射手が注文してきたお酒を私達の前に出すと。

「さあ飲みなさい」

そう促し、私とトラムは言われるがままにそのお酒に呷る。

口の中が爆発したみたいに、カッと熱くなる。

戻してしまいたくなる酒の苦みに堪えながら、なんとか飲み込んで。

お酒は私の喉を燃やしながら、体の奥へ奥へと入っていく。

やがてそれも収まると。じわじわと熱が体の中心から広がり始め、熱が頭まで届いた

頃。私とトラムは同時にほうと、酒交じりの息を吐く。

普段なら絶対に飲まないような、強いお酒。

でも今は……これが飲みたい。全部忘れてしまいたい。

「そ、そうよね。夫婦ですものね！そういうこともするわよね！」

トラムが、あの部屋で行われていたことを端的に表すと。

「夫婦かあ……」

そう言い、トラムはカウンターに突っ伏しました。

「おや。トラムはアージェもいることですし。神話にもある通り、永劫夫を持つ気は

ないかと思いましたが」

「そんなことないわよ影の射手。私だっていつか……」

「それなら、英雄王はいかがですか？」

「えっ。だ、駄目よ！英雄王の事は嫌いではないけれど、私そういう目的で物質界に來

た訳じゃないから！」

駄目駄目言う割には、嫌とは言っていない辺り……。

いえ。でもトラムの反応からして、私程先ほどのことを深刻に思っていないように見え  
ました。それは英雄王への思いの差というよりは、単純に英雄王と王妃が夫婦であると  
いう認識を、トラムはちゃんとしていたからでしょう。

夫婦ならばして何とも不思議でない行為を、あの二人がしていると微塵に思ってい  
なかつた……私とは違って。

「この先どうなるかは分かりませんが。もし英雄王のお相手をする時は、そうですね。  
覚悟してくださいね」

「覚悟って何かしら？」

意味が分かつているのに、頬を赤くしてごくりと唾を飲みながら、若干興奮気味に問  
い掛けるトラムに影の射手は意地の悪そうな笑みを浮かべると。

「英雄王は夜も英雄王ということですよ」

「わあ……」

一体トラムは英雄王の何を想像したのか。

トラムはお酒の酔いとは別種の赤みを増した顔をしたまま、再び突つ伏す。  
けれども、すぐにその姿勢のまま理性的に告げる。

「まあでもいかに英雄王であっても。新婚の男女の間に、すぐに他の女の子が入るわ  
けにはいかないわ」

「そうですね。時期が時期なので新たに妃を迎えるにしても、もう少し落ち着いてからしてほしいです」

「新たに妃と言いますが……王妃は嫌がらないのでしょうか」

思わず零してしまつた言葉に、聞かなきやよかつたと後悔する。

逆の立場だつたらと考えると、嫌に決まっている。

この一月、思考を止める事で無視できていた。

英雄王が王妃を迎えたからといって、普段と大して変わらなかつたから。

どこか心の隅に、なんだ結局変わらないじゃないかと高を括つていた。

でも、英雄王の寝室で行われていることを考えて。

改めて、英雄王と王妃は夫婦であると言う事実を突きつけられ、私は……嫉妬した。

嫌だ。と思つてしまった。

何もかも壊して、消してしまいたいと思う程に。

影の射手や、トラムがいなくなつたら……私は取り返しのつかないことを、しようとしたのではないか。

もう一度今度は戒める様に、お酒を呷る。巡る熱に頭が少しふわふわしてくる。

「おや、ソラスは後宮建築の話聞いてなかつたのですか？」

「後宮」

なんとというか王様が美女を侍らせているイメージしか沸かない単語。英雄王にはあまり直結しない、無縁そうな単語でしたが。

そうですか。英雄王も男の子ですからね。そういうものを作っても何も……。

「英雄王の子は一人でも多い方がいいと王妃が提案して、少しずつですが計画を立てているのですよ。ですので英雄王の方が寧ろ困惑しているのですよ」

「……………」

……なんだ。王妃の方が、自身が妬んでいることすら気が付かず。周囲の評価そのままに。何もしないお飾りの王妃と決めつけていた私よりも、ずっと王妃に相応しいではないですか。

どうしようもない敗北感とぐっさりと傷が入る心。私はこの時初めて、英雄王は王妃と結婚したのだと認識できたような気がした。

その後も、トラムの作った甘味をつまみに、三人で飲み続けていましたが。

飲み慣れない強いお酒にトラムが先に酔い潰れました。

影の射手は、深く酔わないようにする為にか私とトラムとは違い、弱めのお酒を飲んでいたのでほんのり頬が赤いだけ。

一方で私は暗い感情のままにちびちびと飲んでいると。



「何にせよ、私も肩の荷が下りた気分ですよ」

「どういうことですか？」

「ソラスは以前、英雄王の寝室前で北方の姫に会ったでしょう」

「ああありましたね」

そういうええそんなこともあったなと思いつつ、それと影の射手の肩の荷と何の関係が思っている。

「北方の姫を英雄王の寝室に差し向けたの私なんですよ」

「……………」

とんでもないことを言うなこの人。

と思いつつ、影の射手の彼女なりの苦勞話に耳を傾ける事にしました。

「あの人、英雄王になる前から女っ気がなかったでしょう？」

「そう……ですわね」

英雄王は王になる前から。性別問わず人にその存在を惹き付けるカリスマを持ち合わせていましたが。一方で男女間の仲になったという話は、聞いたことがなかった。私達英傑も二名を除けば恋愛対象になりうるはずなのに。男と女という間柄よりも。仲間と言いまわした方が相応しいと言われたら、否定できない。

そう、私達は仲間であって、恋人のような甘い関係ではなかった。

はあ……悲しい。

「ですので英雄王となり。王国も少し落ち着いた辺りから、臣下達と策を講じつつ。高貴な生まれの方を英雄王の下へと差し向けてみたのですが……人によつては英雄王に簀巻きにされていましたね」

「簀巻き」

殺しはしてないんですけどね。と影の射手は言うものの。

殿方に迫つて、拒絶された挙句縛られて放置とは、なかなかの仕打ちである。

結構なトラウマものになりそうです。

「北方の姫は差し向けた娘達の中では、英雄王と一番いい所までいったんですけどねえ。それでも、周囲の反発が少ないよう生まれも考慮しつつ。英雄王をちゃんと愛してくれそうな人で、英雄王の好みの方を……英雄王に私達の企てに気付かれて嫌がられながらも、それでも選出してきたんですよ。結局英雄王がちゃんと決めたので全部杞憂に終わりましたが」

影の射手はグラスのお酒を一息に飲み。

「何にせよ、英雄王の動向に気がつけないようでは、影はそろそろ引退ですかね」

「それは……困りますよ」

「分かっていますよ。ちゃんと引継ぎはしてから引退しますよ」

くすりと顔の皺の増やししながら、影の射手は笑う。

その雰囲気は、普段真面目で張り詰めた表情をしている姿とは異なり。縁側で日向ぼっこして過ごす。穏やかな初老の女性特有の温かさでした。

「それでソラスはどうしますこれから？」

「これからとは？」

「決まってるじゃないですか。次の妃候補に立候補するか、別の男性を追うかですよ」  
影の射手の問い掛けに、私もまた一息でお酒を飲み干しながら。

さて、なんと言葉を紡ごうとか思案する。

……酒に酔いに酔って吐くもの吐いて、失恋だあなんて喚いて泣いて。

さあ、あの男を忘れて次の恋だ。

そんな風に簡単に割り切れるような出会いを、私は彼としていない。

今でも私ははつきりと思い出せる。

絶体絶命。ただ震えて。

死そのものが形にしたデーモンを、私とはそう変わらぬ背丈でありながら。

伝説が残されているような神剣や聖剣の類ではなく、ただの無骨な剣で斬り裂く

彼。

周囲が誰も私の占星術を信じようとしないうちで、ただ一人だけ信じてくれた彼。

人々を助ける為に、戦場以外の場でも目の下に隈を作りながらも苦労を重ねる彼。  
……少しずつ近づく唇。

そして王となり。常に最前に立ち巨星の輝きを放ち続ける彼。

私はずっと彼を見てきた。

だから運命だつて、思った。

いつかは、彼となんて思った。

時が経つにつれその気持ちは大きくなり。彼と過ごす時間の中で、彼もきつとそう思っていると思い込んでいた。

王妃を決める。そんな話が出てきた時に選ばれるなら、私だと思っていた。

だから裏切られたと思ひ至るよりも先に、どうしてという困惑の方が私の中で強かった。

ですのやっぱり……。

「……そう簡単に、諦めれませんよ」

「そうですか」

やつのこと出した言葉に、影の射手はさりと返す。

「でも、しばらくはその気持ち抑えて貰いますよ」

「……………」

どうしてと、問い返す前に影の射手は拳を上げ。

「英雄王は秀でた才を持つといえども、まだまだ生まれたばかりの王国」  
ピンと指を一本立てる。

「滅亡したとはいえ王家。いつ不満が爆発するかも分からない。多民族からなる連合軍。それに加え一癖も二癖もある亜神達」

二。

「精強連勝の軍とはいえ、未だやまぬ魔物と天使達の襲撃」

三。

「姿を現さず、未だ沈黙を保ち続ける『魔王』という存在」

四。

「これに複数の王妃、複数の王位継承者。」

例え当人らに争う気がなくとも、どちらに与するかで分裂する臣下達。そして始まる王国内での派閥争い。なんて起きた日には……分かりますよね」

「……………」

「何も、気持ち捨てなさいと、言ってる訳ではありません。ただしばらくは抑えておいて欲しいだけです。理解できますねソラス」

それでも英雄王ならなんとかしそうですとは思いますが。

起きないに越したことはないのは確かであり。影の射手の心配はもつともでありま  
す。

それに、私が追い縋る真似をして英雄王に、負担をかけたくはない。

……王妃と過ごす時に見せる。私達英傑達はまた違った穏やかな笑みを浮かべる英  
雄王を、曇らせたくはない。

影の射手に頷き返すと、影の射手はまあと言葉を続ける。

「英雄王が魔王を討伐された後。物質界に平和が戻り、始まる再生の日々の中で。余  
裕が生まれてきたら、英雄王も。せっかくある後宮を見て、もう一人妃が欲しくなる。  
そんな時も来るでしょう。その時は……相手から動くのを待つのではなく、自分から動  
いてみたらどうですかソラス？」

「……………」

ああ、これは待つばかりで。

自分から彼に迫ろうとしなかった私への説教も兼ねてるんですね。

「……………そうしてみます」

「ええ、そうしてください」

この夜、私と影の射手は珍しく朝日が差し込むまで飲み続け。  
酔いつぶれたトラムをアージェに託して、自室に転がり込む。

そう、いつか。

いつか、魔王を討伐し、平和を取り戻したその時に。

あの夜の続きを、今度は私から……いいですよね英雄王？

誰も返してくれない問。

けれど、それを支えに私は今を受け入れた。

失恋じゃあない。

ただ他の女性が、私より一歩先に進んだだけ。

あとでいくらでも追い返してやる、そう気持ちを切り替えた。

やることをやれば、授かるものである。

結婚から三か月余り。王妃の懐妊に王国は歓声に包まれ。

そして日が経ち、生まれた赤子。

魔物が復活して以降、奪われ壊され。一度は絶望の淵にまで追い込まれた物質界。

神の奇跡と、絶望の中で立ち上がった英雄王によって再生し。

そこに生まれた、希望の子。

男児の名を、英雄王は大げさかなという笑みを零しつつ。

古い物語に出てくる英雄の名を借りて、モルドレッドと名付けた。

その子にとって、英雄王という親は幸福であつたか不幸であつたか。それは誰にも分からない。

私達英傑達は代わりばんこに、英雄王の息子を抱き上げ、生まれればかりの温もりを肌で感じとる。

脂汗を流す王妃を優しく労わる英雄王、穏やかで幸せそうな表情。

そしてこの男女の幸せの象徴する赤子。

どうしようもなく、私の中で黒い感情は沸き上がる。

けれども私は、笑みを浮かべながら抑えてみせて。

この赤子が、これから進むであろう旅路と紡ぐ物語に、あらん限りの星の祝福を祈つた。

王国には様々な予知者がいますね。

風水師、幻獣使いそして……占星術師。

彼女達の予知は時に頼もしく、そして時には恐ろしくなる時もあるでしょう。

ですが、忘れないでください。

決してそれらは、万能の存在ではありません。

……悲劇は唐突に訪れます。



今日挨拶を交わした人が、明日も挨拶を交わせるとは限りません。

千年続いた封印が、明日も絶対破られないと誰が保証するのです？

千年続いた王国が、明日も平穏であると誰が約束しましたか？

悲劇は唐突に訪れます。

あの人<sup>あ</sup>が愛した女性<sup>あ</sup>が奪われたのも、そうでした。

誰も予想していなかった、出来なかった……。

王子君、後悔しないよう憶えておいてください。

決して同じ今日<sup>あ</sup>が来ない事。

今日という、今という瞬間がどれだけ愛おしく、尊いものであるかということ。

悲劇とは、いつその幕を開こうかとほくそ笑む。意志を持つ狡知そのものなのだから。

## E25 妃は血に沈む

複数の僻地に現れた魔神と神獣の報を聞き、出兵し討伐を終えて、帰還する夜。怪しく光る、不吉な星が見えた。

「……………」

普段は例え予知していたとしても、それらを優に上回る結果を導き出す。英雄王の完璧な采配が曇らせる事のないよう。英雄王に頼まなければ、私は星の導きを積極的に告げるようなことはしない。

けれど、数日に渡ってまるで私達を監視するように輝く凶星を見ると、どうにも心中のざわつきが抑える事が出来なかつた。

「…………英雄王。また凶星が見えました。何か…………嫌な予感がします」

「ソラスが言うところ洒落に聞こえないな」

「そうだそうだ」

余計な茶々を入れたアトナテスを睨みつけて撃退し。

そのまま視線を馬上の英雄王へ向ける。

「……………」

英雄王は私が見ていた凶星を見て。そして、思い耽る様に沈黙しました。きつと数日前のことを思い出しているのでしょうか。

魔神や神獣達が現れた。

かつては出現しただけで本来なら国家存亡の危機だなんなの、あれこれと騒がれていたのに、今ではいつものことになったので。日常の光景となりました。

けれど出兵前。

王国内に幾人かはいる。所謂予知能力を持つ者達が、口を揃えて言いました。

何か嫌な予感がする。

とてもあいまいで、不明瞭な表現。

普通ならそんなことを言っても、出兵に何も影響を及ぼすことはありません。

戦場において、不慮な出来事なんて物はいくらでもあり。

嫌な予感で、いちいち足踏みしているようでは戦えない。

そして英雄王は、そんな不吉な予感なんてものを幾度も乗り越えてきた。

けれどその嫌な予感と言った人物が多数で。尚且つ大した時間差なく一斉に言い始めたから。不安を呷ると同時に、気味が悪いと。

大多数の人は否応にも感じてしまうでしょう。

「それでも敵を放置する訳にはいかない。僻地にも私達の助けを待っている人がい

る。私達は彼らの身を守らなければいけない。さあ出兵だ」

多少のざわつきが起きた兵達を英雄王はそうして宥めて、次々とチーム編成して魔神達の出現地へ送り。英雄王もまた魔神達が待つ激戦地へと出兵しました。

すぐに帰る。

王妃と、また乳飲み子である息子にそう告げて。

先のこともあり、普段より警戒しながら始まった戦闘でしたが、結局の所戦闘自体は単調でした。

英雄王という物質界最強の戦力と、私達英傑が力を合わせれば。

今やどんな敵が来てもあつという間に撃退できる。

ばっさばっさと敵をなぎ倒し、周辺人物の安全を確認して、必要ならば復興の手伝いをしてそして王国へ帰る。

いつも通りでした。

「……………」

ああどうしていつも通りなのに、こんなにも心中がざわついてやまないのか。

星は凶兆を囁くのに。

こういう時に限って、どんな災いを引き起こすのかまで。

正確に星は教えてくれない。

けれども結局は心中の不安をよそに、英雄王と私達は無事に王国に帰還しました。魔神と神獣達を討伐して勝利した私達に。夜だと言うのに、王国の人々は手を振って迎え入れる。

達成感と誇らしさに、私は高揚しながらも。

英雄王や英傑達がそうしているように、手を振ったり視線を送ったりと人々に対応しつつ。王城まで目と鼻の先になった。

その時です。

「……ッ！」

何かを察知したかのように、英雄王は馬から降りると駆け出し始めました。

数瞬、私達は英傑はポカンと英雄王を見ました。

急に何だろう、たぶんそんなことを考えていました。

ですが、尋常ではない。切羽詰まった表情を浮かべて走り出した英雄王の表情を見て。私達英傑は言葉を交わすことなく理解した。

「敵襲だ！あたしが指揮する！」

トウアンが叫ぶ。

「アージェ急いで王城内の非戦闘員の避難を！」

「肯定」

トラムもアージェも。

「念のためアイギス神殿までの道を確保しておきますう」  
アンブローズも。

「敵を逃さないよう王城内の門を封鎖して回ります」  
影の射手も。

それぞれが自分達の出来ることを行う。

そして私は。

「英雄王を追うぞソラス！」

「はい！」

「私も行きます！」

紫竜に騎乗したアトナテスに相乗りして、サナラ含めた三人で、私達は英雄王を追いかける。

何が起きているんだとでも言いたげな顔を浮かべる兵達を尻目に、私達は王城の一室に向けて急ぐ。

英雄王が切羽詰まった表情を浮かべながら走り出す場所と言えば、あそこしかありません。

それは、頬に冷や汗を流しながら。紫竜を操るアトナテスも分かっていました。

ドツシドツシと紫竜が走る。

王城内では普段は迷惑をかけないように、のっそりと歩く紫竜に乗って走る、走る。

けれども、英雄王の背が見えない。

たった数瞬の遅れが、こうも致命的な距離を生んでしまうとは。

「……………」

英雄王は、昔から一人で突っ走ることがある人でしたが。

それでも自分を追いかける者達の、最後尾の人が置いていかれそうになると、英雄王は必ず止る。前だけを見るように周囲もちゃんと見てる。そういう人でした。

だけど今日は、追いかける私達に英雄王は止まってくれない。

まったく背を見せてくれない。

彼が一切の気をかけることなく。たった一人で走ることになった時。

一体どれだけ先を走ることが出来るのでしょうか。

何もかもを置いて、たった一人で……。

嫌な予感が、おぞましい程の寒気が止まらない。

走っていないのに、バクバクと心臓が早鐘を打つ。

先ほどとは違う。冷たい高揚が身を包む。

「ッ！」

ギリイッとアトナテスから齒軋りの音を鳴らす。

サナラはもはや確信するしかない、悲惨な光景を思い浮かべて顔を青くした。もうあと少しで目的地という所で。

英雄王と王妃といった王族を守護する近衛兵も、魔物相手だとしても戦えるはずのメイド達の死体が転がっていた。

全員、真正面から大振りな剣で斬り裂かれたかのような傷跡を残し。通路を血で染めていた。

「……………」

英雄王の寝室。この頃王妃と、御子が住まう部屋。

少し開いた扉が見えたその時、私達は武具を構え。

ドンと、紫竜が扉を突き破りました。

寝室に突入すると同時に、赤子の鳴き声私達を出迎える。

……そして漂う血の香りに、予感が当たってしまったことを悟り。

言葉を失った。

部屋の状況は惨状というしかなかった。



あちこちに飛び散った血まみれの部屋の中心で。

一度や二度ではない、ゆったりとした寝衣の下、数多の裂傷を背を晒しながら抱えた大切な存在を守るように、丸まったままの姿勢で固まる王妃。

その王妃の下から、悲し気な絶叫にも似た泣き声を上げ続ける赤子。

そして……。

アイギスの神器の一つである剣を握ったまま呆然と立ち尽くす英雄王。

悲劇としか言い表すしかない光景が、私達の前で広がっていた。

「……羽虫が来たか」

背筋を凍るような冷たい男の声に、私達は弾かれたように武器を構え直す。

不遜にも、英雄王と王妃のベッドに腰を下ろし、四つの黒い翼を持つ。英雄王と同じく黒い髪を持つ男がそこにはいた。

「っー」

認識したと同時に、空気が数倍重くなったような感覚が途端に襲い掛かる。

立っているだけで息苦しくなるような、そんな感覚だった。

「亜神共を束ねる人の子の王と聞いたが、存外その精神は人のままのようだな」

ちらりと、暗い暗い目で男は英雄王を見ると。

ゆったりと、見ようによってはアイギス様のような超越した存在が持つ、ある種の気

品を感じさせる所作で立ち上がり。

「予は『魔王』ガリウス」

私達の最終討伐目標魔王。

魔王ガリウスは名乗りを上げた。

「予の依り代を手にした吉日だ。貴様ら人の子らが言う、希望の子とやらを摘み取り。愚物共にその思い上がり知らしめようと思つたが」

またちらりと、ガリウスは丸まったままの王妃を見て。

「……その女が思いの外粘るのでな」

そう呟き。嘲るように笑う訳でも、目的を妨害されて怒る訳でもない。

ただ何事にも無関心とでも言いたげな、虚無的な表情を浮かべたまま私達に、英雄王に宣言する。

「気が変わった。予が貴様らを葬り。物質界を破壊し魔に染め上げた暁には。予の手ずからその赤子を育てあげ。魔の御子として、貴様ら人の子を支配させよう。永遠なる絶望の象徴としてな」

余りにも身勝手な宣戦布告を終え、くるりとガリウスは背を向けると同時に。

魔界へ通じるゲートが出現した。

今までも幾度かゲートを見てきたことがありましたが、開かれたゲートの狭間から溢

れ出る魔の瘴気の感覚。

それはその今まで味わったどのゲートをも圧倒する。

深淵の瘴気を、私達に浴びせませす。

だけど！

「逃がさない！」

王妃を英雄王から奪った魔王を討つべく。攻撃をしようとしたその瞬間。

「きゃっ！」

まったく予備動作なく放たれた黒い衝撃波に、私と考えが同じだったアトナテス、サナラ共々壁際まで弾き飛ばされる。

「思い上がるなど言った。予に届きうるのは、その人の子のみ」

叩きつけられた影響で霞む視界の中。

英雄王をガリウスは冷めた視線を送り続ける。

けれども、英雄王は……英雄王は未だガリウスの存在を無視して、王妃と御子を呆然と眺めていた。

「近々再び相見えるだろう。その時はこの『千年戦争』に雌雄を決すと知れ」

ガリウスがゲートの向こうへ消えていく。

私達はただそれを眺めるしかなかった。

……。

ガリウスは去った。けれども、ある意味で一番の問題はこれからでした。

「エレナ……」

魔王という脅威を前にして。辛うじて英雄王に残されていた自衛本能は、王妃の名を呼ぶ声と同時に、神器アイギスの剣と共に床に落ち。

英雄王はよろよろとした覚束ない足取りで二人に近づくと。

片手で未だに泣き続ける御子を抱きかかえ。

もう片方の手で……激痛と確実なる死が迫っているであろう中で。きつと息子に心配させないする為に、微笑みを浮かべたまま。亡くなった王妃を抱きかかえ。

英雄王は二人を静かに抱き寄せる。

「……………」

……いつそ。

激しく取り乱して泣き出してくれたら、どれだけ安堵できたことか。

私達に怒りをぶつけるくらいに感情の発露をしてくれたら、どれだけ安堵したか。

英雄王はしばらく、二人を抱き寄せ続けました。

その間私達は、呼吸することも控え。ただこの悲劇を見て己の無力感を、身に受けるしかなかった。

しかし、時は残酷に過ぎてゆく。

外がガヤガヤと騒ぎになっている。

切羽詰まった表情で走る英雄王を見た人物はたくさんいて、その後トウアン達の報せで、物質界の中核である王城内に、誰も悟られることなく敵が入ったと聞けば、混乱になるのは当然のことでした。

「英雄王ちゃ……っ！」

各々の役目を果たしたアンブローズを始めとした英傑達も、次々と寝室にやつてきて、一人飛び出した英雄王の安否を確認して。安堵すると同時に、そこで起きた悲劇を見て悟り。言葉を無くす。

英雄王と英傑達が沈黙をし続ける中。おぎやあ、おぎやあと御子だけが言葉を発することが許されていた。

嗚呼しかし、それでも時は過ぎていくのです。

ドタドタと走る音がしたと思えば、扉が開かれる。

名も知らない一般兵が、場の重さに一瞬言葉を詰まらせるが、それでも尚重要なことだったのか、伝令と声を張り上げる。

「魔王ガリウスに、兄の体を乗っ取られたと主張する少女を王城に来ましたが！ いか  
が——」

「駄目です早く——!!」

……アンブローズが言い終える前に、ひっ!とアンブローズから悲鳴が上がる。数多の戦場を超えて。実力や名声も伴った称号である。

英傑である私達が揃いも揃って、情けなく背筋を凍らせ。その圧を前にしてごくりと一斉に唾を飲む。

足もガクガク震えていた。

「連れてこい」

初めて、英雄王が心底恐ろしく感じてしまうような冷たい声で。

「私の前に連れてこい」

英雄王はそう命じた。

謁見の間に、英傑や臣下達は緊急招集される。

魔王が王城に侵入し、寝室にいる王妃を殺し、あわや御子までもという重大な事態が起きたことを、今さつき聞いた臣下達は寝耳に水でしたでしょう。

理解を放棄したような顔をしたものの、すぐさま顔が青くしながら謁見の間へ集まる。おそらく、王国始まって以来の速さで全員が集まり。

そして、誰もが口を閉ざして。緊張で体を固くし。

怒れる雷霆と化した英雄王から、万が一でも不興を買わないよう視線を逸らし。

代わりとばかりに、近衛兵に連行される形で謁見の間に現れた桃色の髪の少女を同情の眼差しで見ている。

少女もまた、謁見の間に連れてこられる前に事の経緯を聞いてしまったのか。遠めでも分かつてしまう程顔を青くして。首を処刑人に委ねるように垂れるがまま、視線を床にしてガタガタと震えていた。

形式など特に気にしない英雄王は、臣下達が集まる前にすでに玉座に座っており。

最後の一人が、蒼白な顔をしながら列に加わった音を聞くと。

英雄王の瞳が開かれる。

「……名は？」

英雄王が言葉を発したその瞬間、地震が起きた。そんな錯覚を受けた。

きつと、今までにない威圧的な英雄王の声に、全員が恐怖故の動揺で床を揺らしたからでしょう。

「シャ……シャディアと言います。英雄王」

ただそのことを言い終えるだけでも。

長い沈黙と幾度の吃音のやり直しを含めて数分を要しました。

雷雲の真つただ中のように、雷と共に緊張が走り続ける謁見の間において、そのシャディアという少女は。

……英雄王の怒りを鎮める、哀れな贄の子羊。

誰もがそう捉えざる負えなかった。

でも誰もが分かっていた。

シャディアがただの被害者でしかないことは。

「何故、王城に来た。シャディアよ」

英雄王のやっていることは、ただ問いかけているだけ。けれども、シャディアの脂汗は止まらず。ガタガタと体を震わせ続ける。

けれど、シャディアは言葉を紡ぐことは止めようとはしなかった。

それだけでも彼女は十分立派に思えた。

「あ、兄が魔王信奉者に捕まり、その降臨の為の……依り代にされました」  
依り代という言葉聞いてアンブローズに聞いた話を思い出す。

依り代とは人の身でありながら。

神をその身に宿しても、死することない希少な存在。神が神としての力を残したまま、物質界に干渉する為にも必須となる存在。

ただ、人の身で神を宿すと言う業は人に対して罰を下す。



依り代となる人間は神に成り代わる。

依り代となる人間は、その容姿を神の姿へと変えさせられる。

男だった依り代が女神をその身に宿せば、その体は女の体に。

翼を持たぬ依り代が神をその身に宿せば、その体から翼を生やす。

そしてそれは……不可逆。

一度神を身に宿した者は、人としての姿を取り戻すことは出来ない。

依り代の死以外では。

「……それで君は私に何を望み、王城へ来た」

英雄王からの問い掛けに、シャディアは幾度も深呼吸をしてから。

意を決したように顔を上げた。

「英雄王。お願いします。兄を……魔王より解放してください。未だに私の耳に鳴り

続けます。私と同じ桃の髪が黒に染まり、体から魔の血を流しながら歪に大きくなり続

ける最中。ずっと。ずっと声を上げ続ける兄の悲鳴が……」

「……………」

「お願いします英雄王。私はどうなつても構いません。どうか。どうか兄を……魔王

から解放してください」

シャディアの悲痛な求めが謁見の間に響き渡る。

その自らの死を厭わない願いに英雄王は、静かに瞼を閉じる。普段の英雄王なら、迷うことなく引き受けていたでしょう。

ですが、つい先ほど魔王の手により王妃が殺された。

英雄王は魔王に一撃を加えたりはしなかったですが、その後確かに怒っていた。私達の前で一度として見せたことのない。義憤以外の怒りを見せていた。

臣下達の前だから、畏まった場だからか。今英雄王玉座に座っていますが。本当ならもつと暴れて怒りを私達にぶつけても、おかしくなかった。

でも、英雄王はそうはしませんでした。

だから……きつと彼は……。

「英雄王」

声を上げると、英雄王の瞼がゆっくりと上がり、視線が交わる。

長い前髪の向こう、背がひりつくような威圧感を受け。

言葉を失いそうになる。

けれども、その視線を放つ瞳の奥底に。彼の後悔と迷いを感じ取り。

改めて言の葉を紡ぐ。

他の誰でもない、彼の為に。

「……どうか。どうかシャディアに慈悲を。彼女もまた奪われた人ですから」

「……………」

英雄王は私の言葉を聞くと、再び瞼を閉じる。

余計なことを言ったのではないか。

英雄王の意に背くような間違いをしてしまったのではないか。

英雄王の沈黙に息を呑み、しばらくの間が空いた後。

「……………シャディアよ」

開かれた英雄王の瞼。

シャディアを捉えるその目は、普段と変わらない優しさに満ちたものへと変わっていった。

「その願い引き受けた」

力強く英雄王は頷き。

「そして兄を失った君に必要なものは……………温かい湯と食事と寝床。そして、亡き者を想い。悼む時間だ」

英雄王は兄を失ったシャディアを気遣い。

「シャディアに危害を与えてはならない。彼女の血縁から魔王の依り代となる者が生まれたとて、彼女に罪はありはしない。シャディアに危害を加えた者は私の意に背くと知れ。以上だ……………皆此度の出兵。そして夜遅くにご苦労だった」

それに加え、シャディアに危害を加えることを大々的に宣言しました。

その対応にシャディアは何度も何度も感謝と共に、その目から大粒の涙を零し。

臣下達は、普段と変わらない優しい英雄王に安堵したというよりは、雷霆が落ちる事がなかった事に安堵の息を零した。

「英雄王……あの……」

玉座から立ち上がり去ろうとする英雄王に、私はすぐに追いかけて声をかける。

何はともあれ、英雄王の精神面が心配だった。

けれども。

「すまないソラス……エレナが待っているから」

先んじて制するように、英雄王は儂げな笑みを浮かべ。

赤いマントを翻して英雄王は去って行った。

その背は普段よりも小さく私には思えた。

謁見の間の後、私達英傑は誰に言われるまでもなく執務室に集まっていた。

あんなことがあったあつたです。

一人で部屋に籠るといふのは、私含めて皆嫌だったのでしよう。

ただ、普段ならいるはずの執務室の主がいらないことに、今は心を痛めるしかなかった。

「よかったのかよ、あれで」

そして、集まったはいいものの。

主導者を欠いた空間で沈黙するしかなかった中で。アトナテスが私達全員に問いかける様に声を上げる。

あれとは、と思いがたることが多すぎて考えている内に、察しが良い者が代わりに返事をする。

「じゃあアトナテスちゃんは英雄王ちゃんに。血縁かどうかも怪しい罪もないシャディアちゃんを処刑すべきだって言いたいんですか？」

「……………」

その沈黙は、積極的な肯定ではないけれど。それでも肯定を意味していた。

十人十色と言えども、私達はいつも英雄王と共に同じ方向へ向いていた。

馬鹿にしていたわけではないけれど、アトナテスがそんなことを考えていたのか。

意外というのもありますが、王国の建国以前から。今まで苦難を共にしてきた仲間であり、最古参でもあるはずのアトナテスと。ここにきて意見が、食い違う事が起きるなんて。

そういった類のショックを私は受けた。

「…………怒りつてのは理屈じゃねえだろ。あいつは怒ってたんだ。本当だったら俺達に

怒りをぶつけても。文句は言えねえ。言える訳がねえ」

「でも、英雄王はそうしなかったわ。シャディアにも」

トラムが暗に終わった話を蒸し返すべきではない。

アトナテスを窘めるような口調で言葉を返しましたが、今度は別の口が開かれる。

「それはそれで、一国の王としての沽券に関わるな」

胡坐をかいたままトウアンはトラムにそう告げ。

一瞬、バチンと視線が火花が散った気がした。

物質界そのものを治めている王国とは規模がまるで違うとしても。

国を治める女王と、天界の一都市を治める巫神。

同じ支配する者である二人がいる執務室に、緊張が走ったのは言うまでもない。

「……ただ体を魔王に乗っ取られた血縁がいるというだけで、罪もない民を罰を与え

るのが正しいと言うの?」

「あたしなら殺した」

アトナテスですら、気遣い濁した言葉をトウアンははっきりと言つてのけ。

いくつかの口がOの字を描く。

「それでは暴君よ!物質界を破壊する。魔王と何も変わらないじゃない!」

「暗君よりマシだ」

ぐぬぬとトラムが唸る。

暗君と暴君どっちがマシなのかと言えば、実際後者であり。

暴君どうこういふのならば英雄王はすでに。千年戦争前の旧来の様式を破壊しているので、一部の人物からはすでに暴君と捉えられている。

その上で、英雄王が今現在名君と持て囃されているのは。英雄王は魔王軍に蹂躪された物質界を再生し、統治しているから。

もし英雄王が暗君ならとつくに王国は滅んでいる。トラムもそんなことは分かっています。

けれども、心情としてはやはり、罪のない者を罰を与えることはあつてはならないというの、トラムの考えであり。

……英雄王もそう考えている。その、はずです。

「正しいというのは、とても心地良いです。優しいというのは、紛れもない美点です。英雄王ちゃんはいつも正しい、そして優しい」

その声音は、物語を伝える詩人のよう。

普段にはない真面目さで語る声の主はアンブローズでした。

「ですが、ただ正しいだけが。優しいだけが人ではないと、あたしは思います。

だから、あたしがシャディアちゃんの話、兵士ちゃんから聞いた時。すぐに逃がそ

うとしました。英雄王にシャディアちゃんが殺されるって思ったからです」  
そういうばアンブローズは、すぐに声を出していましたね。

……凄いなあ。

私は……怒る英雄王の前に、浅い呼吸をすることくらいしか出来なかった。

「でも結果的に英雄王ちゃんはシャディアちゃん殺さなかつたですし、それどころか湯と食事と寝床を与えました。本人ではなく。ましてや血縁と呼ぶべきかの是非は置いておいて。自らの妻を奪い、あわや子までという血縁相手にですよ？」

魔王に体に乗っ取られた兄というのが血縁かどうかは別として。

怒る人間が、何をしてても許される絶対的な権力者が。

兄を魔王信奉者に囚われるような家族が悪いと。そんな話で押し通せる相手に対して、手を差し伸べる。

他の人でもこんなこと出来るのでしょうか。

トウアンは殺すと、はつきりと言いました。

他の、千年戦争以前の支配する者達は？

もし私だったら……？

父と母の敵を前にして、自らの手でその命を絶つてよいとしたら？

……。



想像して、頭を振るう。

手が血の色に染まったから。

そして、背に冷たい物が走った。

自分だったらそんなことをしてしまうのに。

英雄王に私は余計なことをしたのではないか。

結果としてはシャディアを助けたというのに、そんな気持ちがあひひしと湧いてしま

う。  
決定的になったかは分かりませんが、英雄王にシャディアの助命を乞う行為を私はしてしまっただけだから。

「殺さないと聞いた時には、ああやっぱり何だかんだで英雄王ちゃんだなあと思いましたし。同時に……」

そう考えるとやはり。

「キレイすぎて、あたしは不安になりました」

アンブローズの言葉がすとんと胸に入る。

キレイ。

ああなるほど、英雄王は……キレイです。

「たぶん皆が思っているのは、そういう不安だと思えます」

アンブローズの英雄王がキレイという表現に、英傑達面々はわざわざ主なき執務室に集まってまで確認したかった。英雄王のシャディアに対する言動への言い表せない不安の正体を確認する。

「でも今更私達が英雄王にかけあう訳にはいかないわ。かけあつた所で一人の女の子を殺しちゃうだけだし……」

「シャディアの生死は別として、王国はあいつの国だ。そしてあいつが王だ。あいつが臣下達の前で決めたことを、今更あたし達の判断で覆す訳にはいかない」  
トラムとシャディアは手打ちのように頷き。

最初の発言者であるアトナテスは、あーと言いながら頬をかく。

全部腑に落ちたとまではいかないが、これ以上言うべきではないという顔でした。

「不安どうこう言うなら、私の方も問題ですね。今から遺書でもしたためておきましようか」

影の射手はらしくもない嘲笑的な笑み浮かべ。本当にそのまま消えてしまいそうな雰囲気をしていた。

「何でそんなことを言うんですか!」

私と同じ印象を受けたらしいサナラが、影の射手に問い詰める。

「王妃様の付近にいた衛兵は勿論。傍に仕えるメイド達も万が一の時戦える者を選出

しておいたのですよ私が。まあ結果は……」

「それはっ！魔王が相手だったから仕方ないじゃないですか！」

サナラは影の射手を庇うつもりの発言だったのでしょうか。

ですが……私でも分かってしまう程の失言でした。

「……サナラ。それを英雄王の前でも言えますか？」

「っ!!」

相手が強大だったから仕方ない。で要人を守れないのでは、近衛兵もメイド達も存在する意味がない。

これに関しては表か裏。守れたか守れきれなかった。という話でしかない。

サナラも失言だと気が付いて。

涙ぐみながらも、これ以上言葉紡ぐのを止めました。

これ以上、例えばサナラが影の射手を庇う意図だとしても。

影の射手の誇りを傷つけるのみならず。実際はそうであったとしても。英雄王が無事ならそれでいいと、王妃を軽視していたと思われかねない。

物質界に多くの人の視点から見たら、それは事実だとしても。

言っている事と、悪い事があるのです。

「アージェは影の射手が、遺書をしたためる必要はないと思います。シャディアを許

したマスターが、影の射手を処罰するとは思えません」

サナラの代わりにアージエが影の射手に言葉を紡ぎますが。

アージエの言葉に、影の射手は小さく首を振るうと。

「それはそれで、結構こたえるんですよ。アージエ」

「……………」

責任感の強さゆえに、罰を求めている人にとつては。

何もされないことが何よりの苦痛である。

影の射手はアージエにそう論し、二人は口を閉ざしました。

それからもぼつぼつと話は続きました。

魔王の侵入経路だったり、今後の対応策だったり。

あれやこれやと英傑達が話をしていく中で。

私は沈黙し続け。

やがて、再び会話が少なくなってきた頃。

ポツリと、零した私の言葉に英傑達の視線が集中した。

「……………英雄王に何をしてあげられるのでしょうか」

「……………」

集中して、そして視線は散り散りになった。

それこそが、最も難しい問題であることに違いなかったからです。

帰還してから僅かの時間に色々あり過ぎた。

最も難しい問題への答えが出ることなく。

私達は重くのしかかる疲労感を引きずりながら執務室から解散した。

諸々の後始末を終えて自室へと戻る最中。

「ソラスちゃん……今日は一緒に寝ませんか？」

「いいですよ」

寝巻に着替え、枕を抱えたサナラが自室の前にいたので、私は快諾する。

安全なはずの城内に魔王が現れた。そんな不安や、英雄王のこともあったりと。

はつきり言って、私も人肌が恋しかった。

……一人でいるのが嫌だった。

いつもなら、眠気がやってくるまで話をするなりカードをしたりと時間を潰していた  
かもしれませんが。

今日ばかりは、サナラはベットに入るなり。

私を抱き枕代わりに抱き締めてくる。

「英雄王……」

そして本当なら、私よりも傍にいて欲しい人呼び。  
その頬に涙がスツと伝う。

英雄王の代わりには到底なれないでしょうが。

サナラの背を優しく叩いていると。寝息が聞こえてきてことに安堵して。  
サナラの体温で、私も一人ではないと言う安心を感じていると、思う。

英雄王はどうしているだろうか。

今も王妃の近くで死を悼んでいるのだろうか……。

こうして、サナラの体温を感じている私と違って。  
たった一人で。

王妃は……よりもよって魔王の手によりその短い生を終えました。

言った所で、歴史にもしという物が無いのは分かっています。

分かっています、思ってはしまいます。

……もつと私が星詠みとしての力が強く。

正確であつたならばと……。

あの日を境に、英雄王は笑うことが少なくなりましたから。

後悔なんて、してもしても。しきれないのですよ。



## E26 悪夢の知らせ、ズレる心

現実感のないふわふわとした感覚。

「……………」

どこだろうここはと、きよろきよろと頭を回すと。

周囲の風景は何かの力の影響を受けたのか、暗い紫に染まり。

肌身を感じる重苦しい空気は、魔界のゲートから零れだす瘴気とまったく同じであることを私に理解させた。

そんなところに唐突に一人放りだされたという状況に、否応にも私の心に不安と、寂しさを齎す。

しかし、気が付くと、私は一人ではなかった。

一人、一人と虚空から、見覚えのある武器を携えた戦士達が現れ。

一点に向けて武器を向ける。まるで、強大な敵を待ち構える様に。

「……………誰？」

何となく、仲間なのだろう。そんな気がして私も、彼、彼女らと同じように武器を構えようとして、ふと武器を持つ者達の顔を見ると。



ハッと気が付く。

見覚えのある武器を持つ者達は、私が知っているようで、知らない顔をしていた。少なくとも、面影のある別人だった。

「……………」

普通なら、人に化ける魔物の類と警戒するはずなのに。どうにも、敵対する気にはなれない。信頼と自信に満ちた表情浮かべるこの者達を見て。英雄王率いる王国軍で戦列を並べる者達の顔を思い出し。私の仲間だという。何かの確信が、私がこの者達に武器を向けるのを妨げた。

なんでだろう？

あれこれ考えていると、ザツザツと歩く音が聞こえ。聞き間違えることのない、彼の足リズム。

パツと顔が明るくなったのが、自分の事ながら分かった。

敵ではないにしろ、よく分からない人達に囲まれて不安を感じていた私の心に。差し込まれた陽光のように、影を取り払う。

「英雄——」

呼びかけて、止めた。

違う。

雰囲気は似ているけど違う。

黒ではなく茶の髪色が理由だったのか、白裏地の赤マントではなく。赤裏地の白マントを羽織っていたからか。

何かが、英雄王とは決定的に違った。

だけど、頼もしい。

英雄王に似た雰囲気の人物を見て、そんな印象を抱く。

この人とならどんな敵にでも勝てる。そんな希望を抱ける。

英雄王に似た人物が、これまたどういふ訳か、アイギスの神剣を天高く掲げ、合図のように振り下ろすと。

虚空から重苦しい深淵の瘴気を撒きながら、ゲートが現れ開かれた。

一体どんな敵が来るのだろうか。

気が付けば私は、この英雄王に似た人の仲間の一人であるかのように。

ゲートから現れるだろう魔神の類に、星天召喚の儀を行い。

天球儀を構えて、今か今かとその時を待つ。

そして、その敵を見た時。

天球儀が私の手から零れ落ちた。

「え……英雄王？」

黒い髪に、黒い翼、黒い剣。

ゲートから現れた敵より放たれる威圧感を前に、私はガリウスが現れたのだと思っ  
た。

ですが、顔も体つきも、一挙手一投足を直に見て私が見間違えるはずがない。

紛れもなく、ゲートから現れたのは英雄王だった。

「ッ!!」

威勢のいい誰かが、一番槍をと突撃する。

「だめえ!!」

無意識に私はそう叫ぶ。

それが英雄王を傷つけてほしくない一心の声か、誰かに待ち受ける末路が分かり切っ  
ていたのか。

分からない……。けれど、非情なる現実がすぐさま訪れる。

「……………」

英雄王の剣が放つ一閃により、一番槍の胴が二つに斬り裂かれる。

どさりと、聞き慣れてしまっている。人一人分の重さが地に落ちる音が鳴り響く。

もう手遅れ……。もう物になってしまったことを私は、どこか冷めた目で見ていたけれ  
ど、本当の仲間ならああそうですかと、放置する訳がない。

治癒魔法をかけようと、ヒーラーらしき子やヒーラーを守る為に、重装の子が英雄王の足止めをしようとして。

手に魔力を、火の魔法を発動させた英雄王はまとめて焼き払う。

熱い熱いと言う悲鳴が、ジタバタと全身を焼かれる苦痛に悶える音が聞こえる。

そして、そんな彼らを助けようとして、再び英雄王が放つ剣により次々と動かぬ物へと姿を変えていく。

「あ……ああ……」

英雄王がこんなことをする訳がない。

これは、夢。そうに違いない。

覚めろ、嫌。覚めてお願い。

そう思っているのに、目はありのまま起きていることを写し、耳は音を拾う。

「……………ッ！」

撤退を促そうとしている仲間の静止を振り払い、英雄王に似た人が英雄王へと斬りかかる。

似たような顔をした両者の剣が、ぶつかり合い。英雄王の剣が止まる。

一瞬、この人なら。そんな感情が沸き上がったが。

英雄王の剣は瞬く間もなく押し返すと、体勢を崩したその人の……。

首がはねた。

「いやああああああ!!」

大きくて、深い喪失感。

絶望そのものを見て、くらりと視界が暗くなる。

それは私だけではなかったでしょう。

仇討の為か、無作為に飛び出した者は剣で殺され。

恐れをなし逃げ出した者は、魔法で殺された。

気が付けば、仲間は全員英雄王の手により殺されていた。

仲間の地で出来る上がる血の池に、現実感がないまま。

ぺたりと坐りこむ私の前に近づくと足音。

分かっている。彼です。

「……………」

私は、どんな顔をしていたのでしょうか。

よもや彼が私を殺す訳がないという、媚びへつらうような顔か。

絶対者を前にして、ただ死を待つだけのありしの日の私の顔か。

分からない、顔はただ強張っていた。

「……………」

彼の剣が高く振り上がる。

ああこの人の剣で死ぬんだ。もはや他人事のような感想を抱きながら。せめて殺すなら、最期に私の名を呼んでほしい。

そんな身勝手な願いを抱いていると、彼の目と視線が交わる。

「英雄王……」

いつだって前を見つめる真つすぐな瞳はそこにはなく。

暗い暗い諦観を宿した虚無的な瞳をしていた。

振り下ろされる剣が、私に迫る直前まで。

（悲しい……）

死への恐怖よりも。

私の、私達の希望である彼がそんな目をしていることに。

私はひどい悲しみを抱いた。

ハッ意識が覚めて、起き上がり。

無意識に両手が胴と首が繋がっているのを確認していた。

「夢……」

周囲を見て、見知った天井に見知った壁。

というか自室であることに気が付き。

ああ夢か。そう思い、ホツと息を零す。

けれども、夢で片づけるにはあまりにも現実味があったせいか。

それとも内容が内容だけに、嫌な汗でぐっしよりと体が湿っていた。

「英雄王……」

あの日。

魔王が王城を襲撃した日より、一月程は時が流れた。

あの日以降英雄王は……いい事なのか、悪い事なのかあまり変わらなかった。

王妃が亡くなったことで、英傑達と過ごす時間が増えた。

アトナテス達とお酒を飲みに行ったり、トラム達と模擬戦をしたりと、ある意味では以前の生活に戻ったと言うべきだろうか。

そんな感じだからだろうか。心無い人達は英雄王は王妃に対する愛情はなかったと、私が現場にいたら引っ叩いていただろう流言の類が出たり。空けた王妃の座を狙ったのか、これ幸いにと美姫を差し出す輩もいました。

以前なら積極的に寝室に通じていたはずの影の射手が、全員叩き返し。

英雄王も、そんな美姫達と交流をしようとはしなかった。

王妃の座は今も空席のままだ。

ただ英雄王に変わったことは二点ある。

一つは、英雄王と王妃の間に生まれた御子を、英雄王は戦場と政務どちらか一方でも、一切の手抜かず全うする合間。

王妃の分まで愛情を注ぐように、子守をする時間が増えた。

そしてもう一つは、ネックレスを身に着けるようになった。

……王妃と交換した結婚指輪を通したネックレスを。

片時も離れる事がないように。

水浴びでもしますか。

まだ夜中、このまま眠ってもよかったけれど、寝汗の気味の悪さと一緒に、先ほどの悪夢もキレイさっぱりと流してしまいましたかった。

ささっと浴場へ赴き、冷水を浴びて体を拭う。

不思議と誰ともすれ違う事なかったなーと思いつながら。

「今日はよく星が見えますね」

見上げた夜空に瞬く星々が良く見える。

せつかく目覚めたのだから占星術師として、星を眺めようと庭園へと足へ向け。

見間違はずのない、赤いマントを羽織る彼を見かけて足が止まる。

庭園に咲き誇る物質界から、彼の為にと集められた花々。



神が作り、人の手で整えられた精巧な彫像。

二度同じ景色を見せる事のない、輝きを放つ夜空の背景。

そしてどれもが主役足りえるそれらが、一心に盛り立てる。

彼という芸術品。

これを一つの劇場として見た時。

いつたい、先も後世も含めた物質界の芸術家達の中で何人が、これに匹敵する物を用意することが出来るのか。

この劇場のただ一人の観客となれた身に余る幸運に、冷水で冷えたはずの体に熱が回り。

美しい。

私にはそんな感想を零すしかできない。

そして、見ることでさえこの上ない喜びだというのに。

「ソラスか」

息を呑むような絶対の存在。劇場の主が私を呼びかける。

どうしようもなく、胸がきゆうと締め付けられる。

英雄王はキレイすぎる。

ただ美醜を意味する言葉ではないと分かっているのに、夢で見た彼が重なってしま

い。猶更今日の前にいる彼という存在が、私達とはかけ離れた存在ではないとか感じてしまう。

あまりにも美しいから。

「座るかい？」

薦めなければ、私は立ち尽くしていたかもしれない。

庭園の備え付けられた椅子に座り、ようやく私は言葉を発することが出来た。

「こんなに夜遅くにどうしたのですか？」

問いかける私に、彼はああうんと返すと。

目を細めながら右手小指を見つめ。

「モルドレット息子がなかなか、離してくれなかったからね」

握られていたのか、それともくわえられていたのか。

穏やかな表情をしながら彼は言う。

「父親していますね」

「そうかな」

「そうですよ」

父親という単語に、彼が嬉しそうに微笑む。

何でもできる彼であっても、父親が出来ているのか。

そんな些細なことでも、不安に思っていたのだろうか。

そんなところもまた愛おしく思う。気が付けば私は笑みを浮かべていた。

「ところでソラスはこそ、こんな時間にどうしたんだい？」

「えっ？あー……そのー……」

あなたに殺される悪夢を見た、なんて言えず。言い淀んでいると。

「怖い夢でも見たのかい？」

「……………」

私の事なら本当になんでもお見通しだなこの人、と思いながら頷く。

すると、彼はよつと掛け声を出しながら椅子を私の隣に運び座り直すと。

「あ……………」

彼は私の手を取ってくれた。

繋がり感じる体温に、とくと鼓動が早くなる。

「大丈夫だよソラス」

明日を見続ける真つ直ぐな瞳に、私が映る。

「悪夢はもうじき終わる」

力強い、人を安心させる魔法の言葉で私に聞かせ。

「『私』が終わらせる。必ず」

力強く手を握る。

いつもの彼、いつもの英雄王。

私達がもつとも信頼する、私の王。

……けれど。

どうして……。

どうして、致命的な。

取り返しのつかないズレを、彼から感じずにいられないのか。

「もう夜も遅い。送ろうか？」

「いえ、大丈夫です」

庭園から去っていく彼の背を見送りながら考える。

あんなことがあったのに。

王妃が亡くなって以降も、私も。誰もが英雄王は変わってない。

そう、思っている。

けれども本当は、英傑である私ですら気が付かない所が、何か変わっていて。

その違いに、私はズレを感じているのだろうか。

それとも……。

それとも……彼は。

それ以前から、何も変わっていないのでは？

ぞわりと、身の毛がよだつ。

夜風の、寒さのせいではない。

気がついては、知ってはいけない英雄王の本質に。

私は感付こうとしてしまったのではないのか？

……決戦は近い。

今にして思えば、あの人。

英雄王を本当の意味で理解していたと言える人は。

王妃と、女神アイギス様……たぶん魔王ガリウスくらいではなかったのかと。

私にはそう思えます。

ガリウスの名が意外に思えますか？そうでしょうね。

けれども、私は確信して言えます。

あの方は……出会いが違えば、ガリウスと手を組んでいたと。

ですがまあ現実はそのはずならず、決戦の時は訪れます。

そこで私は……あの人を……。

……。

いえ、大丈夫です。大丈夫ですよ、王子君。  
全部話すと言う約束ですからね。

けど……泣いてしまうかもしれませ  
私。

## E 2 7 千年戦争の終結

決戦の時は近い。そう英傑達に英雄王が私に告げた。

その日を境に魔神と天使達の侵攻がびたりと止まり。代わりにように、物質界全体に魔界の瘴気に似た。重く暗い空気が物質界に漂う。

その空気を感じた誰もが英雄王の下へ。

これから、何が起きるのかと尋ねにやってきた。

「アイギス様からの神託だ。魔王と決着をつける時が来た。皆その時が来るまで体を休ませるように」

それに対して英雄王は包み隠さず、決戦が近いと宣言した。

建国以前の物質界ならば、恐慌状態になったに違いない。

けれども、希望に満ちた表情を浮かべる人々は寧ろ奮い立ち。

人から人へと、魔王との決戦が近いという。英雄王の宣言があつという間に物質界中に広まった。

隠して混乱を招くよりは良い。

というのが英雄王の考えであり、また魔王との決戦を前にして。全員が全員奮い立て

るといふ訳でもない為。不安を感じた民達の為にも、王城への扉を開き。匿おうというのも、英雄王の考えだった。

やがて、避難する人の流れが落ち着き。

戦場へと挑むある者は、戦意を高揚させ。ある者は悔いはないかと振り返り。

そう多くはない時が流れ。

時は来た。

北方と南方、ほぼ同時に魔界の深淵の瘴気を纏うゲートの出現。その報を聞き、英雄王は出兵を決意しました。

魔王との決戦とならば、ぜひにと、戦士達ほぼ全員が英雄王に出陣を申し出て。

英雄王はそれを受諾しましたが。

戦闘を前にして、その大胆な采配には皆口をぼかんと開いて驚きます。

英雄王は王国軍を二分させました。と言葉にしてしまえば簡単ですが、問題は人数です。

北へ向かうのは、英雄王率いる私達英傑と多少の人員からなる少隊。

南へ向かうのは、英傑の中からトラムを総司令官、補佐にアージェをつけた。その他全ての人員からなる総軍。

人数だけで言えば、差は圧倒的。



最強の剣士たる英雄王と、欠員がいるとはいえ。英傑と呼ばれる者達からなる少数精銳。と聞こえはいいかもしれませんが。

北か南。どちらかから魔王が出現することを思えば、普通なら半数きつちり分けるべきでしょう。

しかし、元より英雄王が戦場に立てば、『英雄王の威光』の前に、英傑以外の人達はそう長い時間戦場に立つことなく。戦闘離脱を余儀なくされてしまいます。

英傑以外はこの英雄王の威光を克服できなかつた以上。この采配は致し方ない所もあつたのかもしれない。

「トラム、君に勝利を」

「英雄王に、銀腕の加護を」

出立前、互いに鼓舞するトラムに英雄王。

決戦前の極めて真剣な場だと言うのに、堅苦しいのを好まない男がいる。

「大隊率いることになつたからつて、緊張するなよ。甘味処の巫神よ」

「もう！一回くらい食べて見たかつたからいいじゃない！」

先日悔いが残らないよう。お忍びで甘味処に向かい。あんみつを堪能していたトラム。しかし運悪く、目撃者がいたようで。アトナテスに押搦され。トラムは顔を赤くしながら怒り、話を聞いたサナラやアンブローズが、今度は一緒に食べに行こうと騒ぐ。

いつも通りの賑やかさに、場が和む。

「マスター」

その一方で、アージエは英雄王の前に立ち。

「叶う事なら。アージエはマスターとこの決戦を挑みたかったです」

「すまないアージエ。私の代わりにトラムを支えてあげてほしい」

「了解です」

そして、アージエは高い頭を少し下げ。

英雄王はそつとアージエの頭を撫でる。

ごく自然に、まるで親子のように二人は振る舞い。

幾人かが、その光景を羨ましそうに眺めていたもの。引き締めた表情を浮かべる決戦の前に、さすがに自重をしたようだ。

「さあ行こう皆。行つて、帰つてこよう」

英雄王の言葉に、英傑達は頷き。出立する英雄王の背を追い始める。

(皆、ですか……)

仲間を大切に思うが故に、英雄王はそうを言つたはず。

なのに、私はどこか一抹の不安を感じた。

英雄王にとって、皆とは。一体誰までを含めているのかと。

……いけない。この頃ずっとこんな調子だ。

迷いを振り払うように頭を振り、私は英雄王の傍まで走り寄る。せめて、何があっても傍にいられるように。

北の地へ進むにつれて増していく、瘴気による重苦しい空気。

間違えるはずもない。これは魔王が放っていた瘴気。

その場にいたアトナテスとサナラに目配せすると、二人も私と同じ意見だったらしく視線で頷き返す。

そして、英雄王が……間違えるはずもなかった。

「……………」

英雄王が静止の合図一つで進軍が止まり。

そのまま各々手筈通りの配置に付くと同時に。

待っていたかのように。私達を囲うようにゲートが一斉に現れる。

囲まれた。

ですがこうなることは、英雄王の予想通り。

この戦いは英雄王か魔王か。

どちらが千年戦争を勝利するかという戦いである以上。英雄王は最初から撤退する

気はなかった。

「やはり来たか、人の子の王よ」

数体の魔神と無数の魔物を引き連れ、四つの黒い翼を羽ばたかせながら、魔王ガリウスが決戦の地に降臨し。まるで全てが興味ないとも言いたげな、何も通さないガラスの冷たき目で私達を一瞥し。

唯一、英雄王のみをその瞳に映す。

「人の子でありながら。予の配下と神獣共を退き。予を戦場に引き出した褒美にお前に、一つ問う」

今更なにを。 そんな思いを抱きながらも、全員がガリウスの言葉待つ。

「予の配下にならぬか？」

今更なにを!!

衝動のまま突き動かしそうになる体を、私は必死に引き留める。

今言葉に対して、真っ先に一太刀を加えてもよいはずの人物が。

長い前髪の奥にある瞳を閉じたまま、動いていなかったから。

「……………」

もしか、ガリウスの言葉に揺れている。なんてことはない。

英雄王の手は、アイギスの神剣を握られたまま。静かに闘志を燃やしている。

けれど、ガリウスはその沈黙を英雄王の迷いと捉えた。

「その才覚があれば分かるはずだ。人がどれ程愚かであるか。幾度も過ちを繰り返して、悪戯に世を乱し、都合の良い希望に縋り付く……」

「……………」

「人の子の王よ。お前は自らが望んで希望に。『英雄王』になったのか？」

私がいやらないと皆が！

一瞬、英雄王になる前に彼が言った言葉が過る。

「予の配下となれば。お前とお前の信じる者達の、永遠の平穩を約束しよう」

「……………」

けれど大丈夫。英雄王は引き抜いた剣先を。

「ガリウス。確かに人は過ちを繰り返す。過ちの果て……王国が生まれる前。一度人は滅びかけた。今を生きる私達が全員が背負うべき罪だ」

そのままガリウスへと向ける。

「けれど間違いを認め、正す力もまた人にはある。お前の理屈は、数多の悲劇を生み出し。私の仲間を傷つけていい理由にはならない！全軍！戦闘開始！」

号令と共に駆け出し始めた英雄王を契機に、戦闘が始まった。

「なるほど。だが……英雄王。お前の言う間違いを正す力とやらは……人ではなくお

前にのみあるのだぞ」

ガリウスの言葉は英雄王が放つ火球により、掻き消された。

雪が降り積もる大地に、爆炎を巻き上げる。

アトナテスと紫竜が放つウルティメイトフレア。

魔神達が持つ、強固な四肢を引き裂く。

トウアンの剛腕の衝撃。

星々の囁きを紡ぎ、持ちうる全てを放つ。

私のアストロバースト。

サナラの地脈を束ねる力による、地の星の加護を受け。

威力を引き上げられた技をもつても。

「……………」

涼やかな顔をし、ギロリと睨むガリウスの凍れる視線を受け。否応にも。私達の背中に嫌な汗が流れる。

まさか、まったく効いていないなんて……………！。

回避されたとか、防御したとかならばともかく。ガリウスは私達の攻撃を全て受け、尚且つ無傷だった。

ダメージを受ける直前に、何らかの力で障壁を張って。私達の攻撃を拒絶していた。私達の実力では、魔王の敵にすら値しないとも言いたげに。

「……………」

しかし、英雄王だけは違った。

アンブローズの魔導陣ブルームペタル。ローズイラプションの爆撃で、動きを止めた魔神と眷属達の合間を潜り抜け。

道を阻む雑多な魔物達を影の射手が放つ、ペインショットで道を切り開き。

女神アイギスより授けられし、アイギスの神剣を持つて放つ。

物質界最強の剣士たる英雄王が放つ斬撃。

その斬撃のみが唯一、あらゆる攻撃を拒絶するガリウスの障壁を。文字通り空間を引き裂くほどの力より引き裂き、ガリウスの体に届いた。

シャディアの兄の依り代にしたガリウスの体から、魔の血が流れる。

ガリウスは一瞬目を丸くして、体から流れる物を見て。

鉄仮面さながらの無表情の、その口端が少しだけ上がった。

英雄王が追撃で放つ炎の魔法を、ガリウスは障壁で弾くと。

虚空より、黒い大剣を取り出し。英雄王に剣先を向けた。

「魔王にして神たる予に匹敵するか！英雄王！」

そして英雄王とガリウス、一対一の戦いが始まった。

英雄王が剣を振るうたびに、その衝撃波がトラム達が住まう天界まで届くのかと心配してしまう程、空を裂いた。

ガリウスが剣を振るうたびに、自らの領地である魔界を破壊してしまうのかと疑うまでに、地を裂いた。

互いの剣がぶつかりあうたびに、物質界の空間がゲートとはまた違う類の空間のひび割れを出現させていた。

それはさながら神話の再現。

神と神が一度争いを始めたら、互いの命どころか、周囲全てを破壊するまで終わらないと、いくつかの叙事詩は語ったっていましたが。

それが事実であると、幾分か認めなければいけないでしょう。

ですが……。

「英雄王」

思わず、そう心の中で反芻する。

いくら強いとか、アイギス様の加護を受けたとか、隔絶した存在だと思っただけれど。それでも英雄王は人。

人なのだ。決して神ではない。



それにも関わらず、どうして英雄王はガリウスに届く。

どうして英雄王だけはガリウスと戦える。

英雄王の邪魔にならないように、また邪魔をされないようにと。魔神と魔物達に戦っている私達と、英雄王との間にある距離は。ただの距離以上の物を、今一度突き付けられているようにも思えた。

そんな歯痒さを私以外も感じているのか、魔神達の戦いが半ば決した頃。英傑達も英雄王と魔王の激戦を、苦虫を噛んだ顔をしながら視線を送っていた。

加勢するべきだと、思いはするが。二人の戦いに、一切つけ入る余地がなかったのです。

そして決着の時は来た。

「ッ!!」

幾重の剣戟の末。迫りくるガリウスの衝撃波の嵐を英雄王は耐え。

ガリウスの剣を英雄王が弾き。

英雄王の一撃が、ガリウスの首を刎ねた。

「オオ……」

切り離されたガリウスの頭からも、驚嘆の声が上がり。

魔王の体が膝につき、そして地に伏す。

その姿を見て。

「やった！」

自然と私の口からそんな声が上がります。

激戦の疲労から、剣で体を支え。荒い呼吸を繰り返す英雄王と合流する。

「倒したんだよね？」

ほとんど同じタイミングで合流したアトナテスは、まだ実感がなさそう。訝し気にガリウスの体を眺めています。

ガリウスの体から、急速に力が失われていくのを感じる。

そして、死という形とはいえ。魔王の依り代と解放された。シャディアの兄らしき人物の人相に戻っていく。

「勝ったんですよね？英雄王？」

「あたしも一発くらいは殴りたかった」

「長くない寿命が縮むかと思いましたがよ」

「あらあ影の射手ちゃん。それならあたしと一緒に転生しますか？」

「遠慮しておきます」

めいめいが、戦いの終わりの雰囲気を感じ取り。張り詰めていた緊張がゆるんでいくにつれ。周囲の兵達のみならず英傑達も、どきりと尻もちをついて体を休める。

「ッ!!」

けれど、シャディアの兄の体へ向けて英雄王は剣を振るう。

「英雄王何を!？」

死体が英雄王の剣を受けようものなら、肉塊になるのが自明の理。

それなのに英雄王は続けざまに、炎の魔法まで放ち。

火炎が肉塊を包む。

英雄王の行動の意味することが、私達には理解できなかつた。

しかし、ああしかし。

この人の行動に無意味などないと、すぐに私は悟る。

ギヤツギヤツ……ギヤギヤー!?

炎の魔法により、焼かれるゴブリンの、素つ頓狂な鳴き声がやけに耳に響く。

「皆、あの肉塊に攻撃を叩きこむんだ!」

英雄王の声に、呼応するように私達は再び立ち上がり武器を振るう。

けれど。肉塊に傷は与えてもすぐさま再生が始まり。

ギヤツギヤツ。

グオオオオオオ。

ウオオオオオ。

魔物の声が、魔物の産声が一向に収まらない。

「どうなってるんですか。これえ!？」

血の気が引いた顔で、サナラが声を張り上げる。

……無理はない。

私達は攻撃をしている。

魔物を殲滅しようとしている。

けれど、それを上回る速さで魔物が。

あの、肉塊と化したはずの体から生まれてくる。

「英雄王ちゃん！魔王は倒したことですし、一度撤退を！」

「駄目だ！あれは無限に魔物を生み続ける。そういう物だ！ここで殲滅しなければす

ぐに物質界を覆いつくす！」

「とは言ってもこのままじゃ……」

僅かな間にも魔物は増えていく。視界の端まで魔物の海で満たされたのを見た時。

空中で魔力の歪みが生じて、固まり。それが形を成すと、黒緑色の幽体のような姿へ

と変わる。

「人の子の王。英雄王よ」

そして、心の底が冷えるような声が空より聞こえた。

「そんな……」

思わず言葉を零す。間違いなくその声は、つい先ほど英雄王が首を刎ねたガリウスの声。斃したはずの魔王の声だったのだから。

「人の身でありながら、予の首を刎ねたその力。称賛に値する。だが……予を依り代とした肉体に宿った、魔を生む権能を打ち消す術はあるまい」

「……………」

魔物は倒せる、その発生源である肉塊にも、私達でもダメージは与えられる。

けれども、倒しきれない。死によって終わつたはずの肉塊が、生と死という枠組みから離れ。ただただ魔物を生み出す災厄を化してしまった。

「予の死により。支配から離れたアレは、無尽蔵に魔を生み出し続け。そして、本意ではあるが、物質界は魔の重圧に耐えきれず崩壊するであろう……英雄王よ。最初からお前がどう足掻こうとも、人の子の破滅の未来は変わらなかつたのだ」  
そして災厄を止めるすべはなく。

ガリウスの言う通り。このままだと魔物達が物質界中に満ち、焦土と化するのさそう遠くない。

「所詮人の子など、神々の掌で踊る矮小なる存在に過ぎぬ」

私達に待つのは破滅だけ……そんなこと……。

「諦めよ、英雄王」

ガリウスの言葉に、英雄王はキツとガリウスを睨みつけるものの。

これ以上手が……そう、思ったその時。

「いいえ諦めてはなりません。英雄王よ、そして人の子らよ」

暖かな声、女神アイギス様の声が聞こえ。英雄王の体が光ったかと思えば、分離するようにアイギス様が降臨する。

そして、アイギス様から光が放たれると、ガリウスの幽体は拡散し。神々しき光に魔物達は飲まれ、その発生源だった物も、消滅していく。まるで最初からそこにいなかったかのよう。

「私の肉体と力を使い。この穢れを封印します。しかし、それに私の全ての力を使うことになりません。魔王の消滅はなりません」

「神で不死たる魔王は復活すると」

「……………」

アイギス様は頷いて肯定し。英雄王の剣を握る力が強まった。

そして英雄王とアイギス様の視線が交差し、少しの沈黙が流れる。

しかし、私はどういう訳か。

アイギス様の視線が意味する物が、英雄王に未来を後を託すといった暖かなものでは

なく。

まるで、英雄王をたしなめるような厳しいもののように、私は感じた。

「英雄王……貴方なら、私の剣を引き抜いた貴方ならば分かるはずですよ」

どういう……？などという疑問は、最期のように私達を一瞥するアイギス様により妨げられる。

「短い間ですが、貴方の中で過ごした時を私は忘れないでしょう。さようなら、人の子らよ。魔の無き時代、人の子らの再びの繁栄を願っています」

そして、再びアイギス様は光となり消えた。

暗雲が去り、青い空が広がり、重苦しい瘴気から解放される。

ああ……ああ！今度こそ千年戦争が終わった！

さつきにはなかった解放感が、改めて実感させた。

だと言うのに……。

「よもや、予がこうもしてやられるとはな……」

「なっ?! ガリウス!! しつこいですよ!」

「いい加減見飽きたぞ」

驚嘆の声を上げるサナラ。武器を構え直すトウアン。

私達もまた武器を構えたものの、アイギス様の光を受けた影響か。先ほどよりもガリ

ウスを形成する幽体の姿が、どこか弱弱しい。

いえ、弱っているのです。ガリウスがゲートを開きました。空間を引き裂き現れるゲート。

その向こうにあるのは魔界の風景と、零れ落ちるこの重苦しい感じは。

「魔界の深層行きゲートですねえあれは」

アンブローズがそう言うなら、間違いないでしょう。

弱った敵が逃げ道を作ったという事は。

「此度の千年戦争。認めよう。貴様の勝利だ英雄王。だが……予は再び物質界に再臨する。その時にこそ、予が勝利する」

「てめえ！物質界を散々ぶっ壊しておきながら逃げる気か!？」

まったくです！

アトナテスの声にさすがのガリウスも、素直に敗北を認めているためか、鼻笑い一つだけ挙げるものの。そのままゲートの向こう、魔界の深淵へと去っていく。

「さらばだ英雄王。もう二度と会うことはないだろう」

そしてどこまでも、ガリウスには英雄王しか眼中にはなかった。

ですが、これで魔王の、魔物の脅威は去った。

やった、勝った！



もう何度目になるか、ですが今度こそはって奴です！

「ガリウスウウウウウウ!!!」

ですが、そんな和やかになっていく雰囲気を引き裂くように、声が響く。

怒りと、怨嗟に満ちた声。魔王ガリウスでさえ、驚愕の表情を浮かべた声。

もしその声の主が、魔王を名を呼んでいなければ。

私はきつと。新たな魔王の産声と勘違いしていたかもしれませぬ。

## E28 戦いの果てに失った友

英雄王はいつも、一人で駆け出し始める人だった。

魔物がいるなら、誰かが困っているなら。

誰にも相談することなく、一人で駆け出し始める。そんな人だった。

きつとの英雄王の持つ才が。そうやって飛び出しても、最後には一人でなんとかするという、絶対的自身を齎していたのかもしれない。

実際、今までなんとかしてきました。

けれども英雄王は、誰もが自分のように何でも出来る訳ではない。というごく普通の当然を理解し、そんな人達に寄り添える人柄もありました。

勝手に飛び出しておきながら。最後尾に追いかける人達を気にかけて、英雄王はいつも、そんな人達が追いつけるギリギリの速さで走る。そんな人でした。

ガリウス。最初は、きつと心の内で。

ガリウス。二度目は、すぐ近くにいた私が辛うじて聞き取れるような声で。

ガリウス。三度目は、誰もが聞いた。

「ガリウスウウウウウ!!!」

激しい怒号と共に、英雄王は魔王ガリウスが去っていく深淵のゲートに追った。その先がどうなっているか、分からない。

行って、帰ってこれるかも分からない深淵の先へ。

英雄王は、行ってしまった。

瞬間、私には分かった。

彼は、帰ってくる気はない。

「英雄王!!」

私も後先考えずに追った。

誰もが怒号の声の主を探すかのように、呆けた表情を浮かべる中、私は追えた。

別に他の英傑達が鈍感という訳ではない。別に私が、誰よりも英雄王の傍にいたからという訳でもない。

ただ、私には確信があった。

英雄王がガリウスを消滅できなかつた時。

英雄王なら、やる。

そんな確信がどこにあった。

人類の救世主、英雄王という称号。

唯一国。王国の王という立場。

英傑をそして、私を。

すべて捨ててでも、彼はガリウスを討ちに飛び出すだろうと。

「ガリウス！貴様は！貴様だけは私があ!!」

「ハハッ。ハハハハハハッ！良い憎悪だ英雄王！予を追ってくるがいい！お前の憎悪のままに!!」

逃げるガリウスは今までの冷たい態度はどこへやら。英雄王から放つ殺気を受け、寧ろ歓喜するような声を上げ。

追う英雄王はガリウスへ向け、鈍足を齎す氷の魔法を放つも。

キン！という音と共に、ガリウスの障壁の前に霧散する。

すでに肉体を失ってはいても、魔王ガリウスとして持つ障壁そのものは健在。

それに対する攻撃手は、一つ。

英雄王は神剣を振るい、斬撃を飛ばす、しかし。

「魔王様!!」

魔界とは魔王ガリウスの本拠地。魔王にして神であるガリウスを信奉する者が。ガリウスには致命傷になるうる斬撃を、我が身を盾にしても防ぎ止める。

これでは……ガリウスにダメージを与える事はできない。

英雄王が神の障壁をも拒絶する。

強力で尚且つ一度に五体もの魔物を引き裂く。

天才ゆえの、理外の剣術を持っていたとしても。

その攻撃は、一度に五体しか当たらない。

飛翔するガリウスの足元から、次から次へと肉盾となる魔物達が、地上から五体以上現れたのなら。その斬撃を全て防がれてしまう。

いけない……。今のガリウスが真つ当に英雄王戦う気がないのは明白。

それなのに、こんなことを永延と繰り返していたら、どんどん魔界の深淵へ。

ゲートが閉じてしまったら。本当に、帰ってこれなくなってしまうかもしれない！

「英雄王待って！待ってください！」

私は声を上げ、あらん限りの体力を搾り走る。

それでもしないと、とてもじゃないが追えない。

そして例えそうまでしても、英雄王は私の元からどんどん離れていく。

英雄王が残す魔物達の血の道を、私はひたすらに走る。

「英雄王よ！その怒りと憎しみのまま、予を討つがいい！ともすれば……次なる魔王は、お前かも知れぬな!!」

「黙れえ!!」

ああ最後尾を気に掛けることのできるいつもの優しさが、今の英雄王にはない。

離れて行ってしまおう。

暗い暗い魔界の深淵のさらに奥へ……。

「ソラス！」

「ア、アトナテス！」

走ってる最中に、私の体が宙に浮く。

相棒さんに騎乗したアトナテスが、私を掴み乗せてくれた。

「サナラとトウアン。トウアンの国の兵士達が退路を確保してる。ゲートはアンブローズが持たせる。閉じる前に英雄王を回収するぞ！」

「ええ……！」

「にしても、速いな英雄王は……相棒が全力で走ってるってのに」

苦々し気にアトナテスは声を落とす。相棒さんは私よりもずっと速く走れる。

それでも英雄王には追い付けない。少しは見えたと思った背がまた、離れていく。どうしたら……。

「おいソラス」

「……何ですか？」

「お前の星、英雄王に当てられるか？」

「なっ!? 英雄王に攻撃しろと言うんですか？」

「そうでもしないと、英雄王は止まらねえ。それに……お前がやって駄目だったらもう、誰にも英雄王を止められねえよ」

アトナテスの提案に、私は頷き構える。

確かに、もうどうこう言ってる間は、確かにありません。

不思議なことに今は影響はありませんが。漂う瘴気により、いつ体に異常をきたすか。

魔王の気まぐれでゲートが閉じて、帰還不可になるかもしれない。

時は刻一刻を争う。

「……………」

英雄王に攻撃する。それに対する忌避感はある。

けれども。

もし。私がここで何もしなければ彼は、あのまま魔界の深淵に向かい、消える。

そんな確信が……。

いいえ違う。理屈がどうこうじゃない。

彼が私の元から消えるのが、嫌だった。

彼の望みが、自らの滅びを厭わない魔王の消滅だとしても、私が嫌だった。

天球儀に私の祈りを込めて。放つ。

どうか、どうか戻ってきて……!!

「お願い、アストロバースト!」

私の魔力で招来した星が英雄王の背に向かう。

「……っ!」

飛来する星を英雄王は、見るまでもなく振り返ると同時に、星を両断し。

英雄王と視線が交差する。

攻撃を加えた人物を見た時、英雄王は一瞬驚愕で目を丸くしたが。

すぐに……ああなんて、なんて目をしているのですか。

あなたの目はいつだって、未来を見据えた優しい目をしていたのに。

魔王のような、そんな冷たい目をしないでください。

「何のつもりだ!?! ソラス、アトナテス! 返答次第では君達であっても許さない!!」

私達には今まで浴びせる事のなかった類の怒号を聞き、全身に痺れが走り、竦みそうになる。ですが、これで英雄王の足が止まった。

追い付いて説得……とはいかない。

英雄王の気が逸れた。その隙を好機とばかりに、魔力の刃を振るうガリウス。

いくつも放たれた刃の一つ一つ。どれもが、私とアトナテスを葬るには十分すぎる威力を持っていることは、見ただけで分かった。



無駄と分かっている、本能的に腕を交差して身を守る。

「ぐっ……」

衝撃はこない。

すぐさま目を開け状況を確認すると、英雄王が。神器アイギスの盾で、私達を守ってくれていることが分かった。

加勢なんて甘い考えは、ガリウスが畳みかける様に魔力の刃を放ち続け、私達を盾で守り続けてくれていた英雄王もろとも、私達は衝撃波に飛ばされた。

「ハ」の……」

「畜生……！」

魔王の攻撃の余波か。まるで言う事を聞かない体を起き上がらせようともかく私。相棒さんを支えに、なんとか立ち上がろうとするアトナテス。

それに比べて。

「ガリウスウ……!!」

その根底にある感情は、怒りと憎しみか。

傷口から夥しい血を流す体で、英雄王はすでに立ち上がり。

震える腕でガリウスに剣を向け、立ち塞がる魔物を斬り伏せ歩き続ける。

悲しく思えてしまうほど、真っ直ぐに。

「…………ふん」

ガリウスはそんな英雄王から視線を逸らし……。

一瞬、今まで一度として合わなかったガリウスと目が合った。

——まずい。直感がそう告げる。

ガリウスは手のひらを私達に向けると同時に、膨大な魔力の塊が集束していく。

ああ当たったら死ぬ奴だ、これ。

周囲の空間が悲鳴を上げながら、力が徐々に膨れ上がる光景を、私はただ見るしか出来ない。

蛇に睨まれた蛙。無様にペタリと座り込む、今の私を表現するなら他にない。

慈悲もなく、力がガリウスから射出される。

空間を引き裂き、地を抉り、死体となった魔物達の血肉を喰らい。

ゆったりと、今からお前はこれで死ぬんだぞ？

私にそう伝えるように、私の感じる時が遅くなる。

「ソラス！」

だが、視界の隅からバツと飛び出す人影。

誰かなんて分かり切っている。

当たろうものなら死ぬような力を前にして、誰かを守る為に飛び込む人なんて、一人

しかない。

英雄王がガリウスから踵を返し、力の前に座り込む私の前に。

そして身を盾にして英雄王は力を受け止めた。

凄まじい爆音が鳴り響き、黒煙が巻き上がる。

そして、ドサリと倒れ——！

「英雄王！英雄王！」

「嘘だろ!? おい！」

倒れる英雄王に近付き、そして。

そして私とアトナテスも背筋に悪寒が走り、ゾツとした。

傷だらけで、精魂は使い果たし。

限界もとつくに超えているはず。

そんな状態で、私のせいで、ガリウスの一撃をまともに受けた。

それでも英雄王は。

「ガリ……ウウスウウウ！」

剣を固く握りしめ、空いた手で地面を抉り。

這いずりながらも前へ。

ガリウスの元へと向かおうとしている。

なんという……なんという執念。

もはやかける言葉を無くした私達の代わりのように。

ただでさえ薄い幽体のような体を、さらに薄くさせた。

消えかけのガリウスは口を開く。

目に見えて先ほどの高揚は消え、鋭利な氷を思わせる冷たさを持つて。

「所詮。それがお前の底だ英雄王よ」

英雄王はガリウスに応えない。

地を這いガリウスの元へ。

「興が冷めた」

しかし、ガリウスはそう呟くと

深淵よりもさらに深い場所へと向かう為か、ゲートを開く。

「魔と神の軍勢を押し返し、混乱の物質界を束ね。予の肉体を滅ぼした。千年戦争の

勝者。人の子の王、英雄王よ。予はお前は決して忘れぬ……もつとも、もう会うことは

ないだろう……」

そう言い終えると、ガリウスはゲートの向こうへ消えた。

同時に、ぱたりと英雄王の手が地に落ちる。

ようやく、英雄王はその歩みを止めた。

ガリウスは魔界のどこかへと去った。

けれど、まだここは魔物達の本拠地魔界。

襲ってくる魔物達の迎撃をアトナテスに任せ。英雄王に肩を貸して、入ってきたゲートに向かっていると。

「え、英雄王!」

「無事か!」

私達を追ってきたらしいサナラとトゥアン。そして退路を確保し続けてくれたトゥアンの国の兵士達と合流できた。

「お前ら急げ! 長くはもたない!」

「何があつた?」

問いかけるアトナテスに、トゥアンはチラリと兵の一人を見る。

その視線に気が付いた兵の子は質問に答える。

見るからに顔を青ざめ、玉のような汗を噴き出し。荒い息を零しながら。

「さつ、さすがは英傑の皆さんですね。私達は魔界に入ってからというものどうにも体の調子が……ははっ……」

「もういい……分かった。急いで撤退するぞ」

そういえば、英雄王を追うことに必死になっていて、気が付いていなかった。

魔界に適応できていない者の力を奪うという、魔界に漂う瘴気。

それも、その瘴気がより濃いとされる深淵。

私は今の今まで問題なく動けていたので、文献に記載されてるだけで、無い物だと思っていました。

見る限り、その瘴気を受けているのは英傑以外の全員……。

神の加護を受けた武具のおかげだろうか……？

何故、という疑問あるけれど今は撤退が優先。

「私も支えますー！」

少しバランスが悪くなるけれど、サナラも英雄王に肩を貸して二人で運ぶ。

ただ、そう易々撤退とはいかない。

「英雄王と人間共を逃がすなー！」

ガリウスが撤退しても、土気は未だ高い高位のデーモン達が追撃にやってくる。咄嗟が生じた追撃隊にしては連携が取れている。魔王を討伐した英雄王への恨み故か。

「うわあああー！」

魔界の瘴気で、万全ではない体で戦う兵士達。

一人、また一人と魔物達の軍勢に追い付かれ吞まれていく。

「トウアン様！ここは私達がしんがりを引き受けます！英雄王を連れて早く物質界へ！」

「お前達っ！」

「堪えろトウアン！あいつらの覚悟を無駄にするな！」

「……っ！」

「お優しい我らの女王。どうか行ってください……」

満足に回復も出来ない戦況。片腕がすでに使い物にならない体で、どうやって追撃を防ぐというのか。

それでも兵士達は物質界へ向かう足を反転させ、魔物達へ突撃する。

一步でも時間を稼ぐために。

「うっ……うっうう」

隣で涙を流すサナラを見て思う。

私達は勝った。

魔王ガリウスも敗北を認めていた。

……それなのに、どうしてこうなった。

行きも帰りも、血に濡れた道を私は歩け続け。

物質界の風景が広がるゲートが見えてきた。

「奴らを逃がすな！」

同時に、追撃の手はさらに過激さを増した。

「英雄王！ガリウス様に代わり、その命頂くぞ！」

あつと思つた時には遅かった。大砲を持ったフライデーモンの大群が私達に迫る。

ボンという発射音と共に、大量の砲弾が飛来する。

しかし、その砲弾の雨を覆い隠す程の大きな火球により消し飛ばされた。

「英雄王！」

「……………」

サナラの声に、英雄王の反応がまだ鈍い。

はつきりしていない意識のまま、私達を守る為に魔法を放つたのでしょ。

「……は……………」

問いかける英雄王の声が聞こえたという訳ではないでしょうが、代わりにゲートの向

こう側にいるアンブローズの声が響く。

「早くこっちに来てください！長くは持ちませんん！」

地鳴りのような声を上げながら、今にも閉じようとしているゲートを。幾重にも重ね

た魔法陣でこじ開けているアンブローズ。

言葉通り、魔法陣はすでにひび割れ、今にも砕けてしまいそうだった。



「さあ英雄王帰りましょう」

先ほどの涙を隠す様に、無理にでも笑顔を浮かべるサナラに、英雄王はポンと手を置くと。肩の英雄王の重みが消え。

「すまないサナラ。私はガリウスを消滅させる」

え。と言ったまま固まるサナラを脇目も振らず。神剣片手に、歩き出そうとする英雄王に、トウアンとアトナテスが立ち塞がり。

「今、何て言った？」

「ガリウスを消滅——ぐっ！」

アトナテスは容赦なく英雄王のみぞおちに拳を放った。

「……おい」

「悪いなトウアン。けど、今はこの一発で許してやってくれ。ソラス以外の俺達英傑の誰もが、英雄王はここまではしないだろうって、高を括って。こいつの気持ちも分かってやれなかった。恨んで当然だよな。親と故郷、嫁さんまでガリウスに奪われたんだから」

口をへの字に曲げながらも、トウアンは矛先を治めると。

アトナテスはいつだか、英雄王がアトナテスにそうしていたように。英雄王の頭を不慣れな手つきで撫で。

相棒さんと共に前へ出て、斧槍を担ぐ。

その姿に、否応にも私達にも私達に覚悟を感じさせる。

「ま、まさかアトナテス？」

サナラも私と同じように感じ取ったらしい。

アトナテスはここで……。

「俺はここであいつらの侵攻を食い止める。だから、お前らはさっさと帰れ」

「駄目ですよアトナテス！皆で一緒に！」

「ゲートだとか、瘴気だとかは詳しいことは俺には分からねえが。狭い出口にあの大勢が押し寄せたらどうなるかくらい……分かるだろ？サナラ」

でもおでもおと、アトナテスを引き留めようとするサナラ。けれどサナラだって分かっているはず。物質界と魔界は断絶されているとはいえ、近い。

ゲートによって繋がった空間が。もしこじ開けられようものなら、その空間は未来永劫、魔界と繋がったままになるかもしれない。

しかも繋がった先は魔界の深層。物質界にどんな影響を及ぼすか、それどころか魔界の深層に住まう。ゲートを開く力がないだけで、力だけはある魔物が。壊れたゲートを利用して、物質界に侵略する足掛かりになりかねない。

せつかく、魔物達にゲートを開く力を与える。

そんな権能を持つ魔王を討伐したというのに。これではまた物質界は魔物に怯えなくてはいけなくなる。

「トウアン、サナラ連れて行ってくれ」

酒場に紛れたサナラを摘まみ出せ。そんな軽さでアトナテスは言い放つと。トウアンはアトナテスをジツと、その顔を強く刻むように見ているから、アトナテス。アトナテスと、幾度も叫ぶサナラを連れて行く。

「何だ、俺意外とあいつに好かれてたんだな」

「死んでほしくない程度には、私も思ってますよ」  
そうか。とアトナテスは適当な返事をする。

私を真剣な面持ちで見。

「ソラス。英雄王アールトを頼んだ」

「……言われなくても」

ニツと笑い、背を向けるアトナテス。

英雄王の次に付き合いが長く濃い。英雄王の隣で、涼やかに笑みを浮かべる姿が好きだった人物の背を目に焼き付け。

私は英雄王を支え直して歩き出す。

これが、千年前のアトナテスを見た最後だった。

結果的に、英雄王は友を魔界に残してしまった。

あの日。

私達の千年戦争が終わった日を、英雄王は生涯後悔し続けていました。

そして私はあの人を……あの人々が最も大切にしている事を知っている私が。

彼を傷つけた。